
衛宮さん家のちびサーヴァント騒動

茶虎亜樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

衛宮さん家のちびサーヴァント騒動

【Nコード】

N11390

【作者名】

茶虎亜樹

【あらすじ】

在り得るはずがなかった始まりの聖女の目覚め、世界の悪を背負った人間との邂逅。

進み始めた物語は誰もが予想しなかったカタチへと変化していく。

蒼く冴え渡る月明かりの下で、少年は彼女たちに出逢う。

第一話 邂逅（前書き）

作者の妄想や好き勝手な解釈がふんだんに反映されています。

原作とは違う、かなり独自の展開していく予定なので読む場合は注意してください。

第一話 邂逅

Interlude of the past

かつて ヒトとして生まれ、ヒトの限界と世界の摂理を超えた奇蹟を行い、生物としての終着点である死すら乗り越えて、その後の歴史に『神』として名を刻んだ一人の男が居た。多くの人を癒し、導き、心の闇を照らし続けた彼は その果てに、ゴルゴタの丘で後に『ロンギヌス』と呼ばれる一本の槍に貫かれ、その生涯を終える。流れ出した聖なる血液を受け止めた杯は、あらゆる願いや祈りを叶える力を得たとされている。

長い歴史の中で失われ、それでもなお人々が求めて止まぬ奇跡の杯。いつしか『聖杯』と呼ばれるようになった万能の願望機。時代を象徴する強大な力を持った王は、無尽の富と永遠の時を得るために。矮小な力しか持たぬ無名の少年は、自らを取り巻く残酷な世界を滅ぼす力を得るために。しかし、数え切れぬ人々の探索も実を結ぶことは無く、いつしか語り継がれるだけの伝説として時の流れに埋もれていった。

だが、ある時代、血に宿した魔の術を脈々と継承する三つの家系が現れる。歴史を重ね、名家と呼ばれるまでに魔術の研鑽を重ねたアインツベルン、遠坂、マキリ。彼らは失われた聖杯を探すのではなく、創り出そうと考えた。本来は決して交わるはずの無い三つの家系。それぞれが持ち得る知識、業を駆使した果てに 彼らは聖杯降臨の儀を完成させた。

『聖杯』の名に惹き付けられ、それを手にする権利を奪い取るために、歴史に名を刻んだ英雄の霊である七騎のサーヴァントと七人の

魔術師が殺し合う。この時から 『聖杯戦争』 が始まりを告げたのだ。

Interlude of the past out

プロローグ 十年前

深遠の闇から浮かび上がり、最初に見た光景は『煉獄』と呼ぶにふさわしい紅黒と灼熱の世界だった。虚空に浮かぶ禍々しい巨大な黒点から漆黒の『泥』が溢れ堕ち、真下に広がる街を容赦なく焼き尽くしている。大気は死にゆく者たちの阿鼻叫喚と死者が発する無言の怨嗟に満ち、呼吸をするだけで死に至るだろう。

「こ、れは

」

言葉を失った。信じることなど、できるはずが無かった。かつて、それぞれが求めるモノを手に入れるべく作り上げたものが、眼前の地獄を生み出しているなど信じたくなかった。

「あつ、あの子！まだ、生きてっ！？」

生きながら焼かれ、人々が絶命していく凄惨な光景に耐えられず、目を背けた時……まるで幽鬼のように煉獄の世界を歩く子供の姿を見つける。だが、一目でその命が風前の灯であることを悟ってしまった。滲み始めた視界を目蓋で閉じようとして

「目を逸らすんじゃねえよ、冬の聖女さま。あれは、アンタ達と、そしてオレが作った地獄なんだからさ。『地獄』なんざ、世

界のどこにだつて転がっているが……少なくとも『これ』は、アンタ達のもんだ。クソみてえな目的と理想を追つた果てに起こつた、起こる必要なざカケラも無かつた終末だよ」

声が私の耳に滑り込んできた。斜に構え、皮肉と嘲笑に歪み切つた声だった。闇の中から響いてくる声の主を探して周囲に意識を張り巡らせる。

「おっと。姿も見せないままに失礼したね。よつ　と、これならちよつど良いか」

滲み出るように現れてきたのは年端もいかない少年の姿。否、少年の姿をした別の『何か』だった。無造作に立てられた黒髪、額と腰に巻いた紅の布。むき出しになつたままの褐色の肌には、顔も身体も関係なく、びっしりと幾何学模様の刺青が入っている。それらがよく見れば、一つの例外もなく、呪詛の意味を持っていると気付いて酷い吐き気に襲われた。

「くくつ　俺の姿が気に入つたみたいだな。聖女サマのお眼鏡に留まるとは、マコトに恐悦至極つてやつだ」

幼い少年の顔でニヤニヤと嫌な笑みを浮かべる『何か』が不快すぎて、思わず目を逸らしてしまふ。私の仕草が気に入つたのだから、喉を鳴らすような笑い声が聞こえてきた。それが癪に障つて、目線を上げ、ありつたけの怒りを込めて睨む。

「アナタは……『何』なの？ どうして、私のことを……」

「オレ？ そうさなあ……オレは、自らの悪性を受け入れられなかつた哀れで弱い人間たちの救世主だよ。小さな、小さな、箱庭みてえ

な世界に満ちていた全ての悪を背負わされて死んだ人間の男。その惨めな最期がお気に召したらしくてな……気が付きや英雄扱いさ。まあ、要するに……『この世全ての悪』なんて大層な極悪神の成り損ないってやつ」

見る者の神経を逆撫でするような笑みを浮かべ、『彼』は嗤う。だけど、私には堪え切れない涙と寂しさを隠すための泣き笑いに見えて、それが……無性に悲しかった。

現在

不思議な 夢を見る。

きらきらと輝く大きなステンドグラスの下で、純白と黄金で彩られたドレスを纏う銀髪赤眼の美しい女性と 額に巻いた赤い布で黒髪を逆立て、全身に刺青を入れた悲しい瞳の少年が何か 大切なことを、俺に、頼んで

「 また、この夢か」

夢を見ること自体それほど多くない俺が、ここ一週間ほど同じ夢を見続けている。同じ光景、同じ登場人物、そして 同じ、終わり方。

「何か起こる前兆だったりして……まあ、気のせいだよな。さて、と……そろそろ動き出さなきゃ……うぐっ、あ、いたた……」

立ち上がるうとして身体の節々が悲鳴を上げる。そういえば、土蔵で眠り込んでしまったことを忘れていた。今日は、不自然な体勢で寝ていた悪影響が一際大きいらしい。

「くう……っ！はぁ……昨日は、回路形成に失敗したんだっけ。それで、何とか持ち直したは良いけど気絶したって感じか……。我ながら進歩しないヤツだよな」

妙に固まったり、凝ってしまった筋肉や腱を伸ばしながら呟く。命の恩人にして養父だった衛宮切嗣が死んでから五年、切嗣の理想を受け継いだはずが、未だにこんなレベルで足踏みしていることに僅かな焦燥感を抱いた。

「けど、こればかりは誰かから気軽に習えるもんでもないし……今は諦めずに鍛錬するしかないか……。さて、桜と藤ねえが来る前に用意を済ませてしまわないと」

土蔵の外に出て、冷たい空気を吸い込む。僅かに残っていた眠気の退散も完了し、ゆっくりと屋敷側の方へ向けて歩き出す。いつもならずすぐに消えてしまう夢の記憶が、今日はやけに残る。少しだけ違和感を残しながら、衛宮士郎の一日が始まった。

プロローグエンド

「それでは先輩、戸締りには気を付けてくださいね？最近は何騒ですから、男性とは言っても用心するに越したことはありませんよ」
真剣な表情で桜が言う。だが、瞳には多分に笑みが含まれているので十中八九、冗談として言っているんだろう。普段は大人しすぎて心配になることも多いのに、ふとした時にやたらと悪戯っ子な一面も見せる。そんな桜に最近は何鼓動を高鳴らせてしまうことが多い。

「ああ、ちゃんと分かっている。まったく…何だか子供扱いられてるみたいだ」

大切な後輩で、可愛い妹分でもある桜にそんなことを知られたらと思うと……あまり想像したくないので思考停止。切り替え、切り替えと。

「ふふつ、先輩は子供みたいですよ？もちろん、良い意味です」

「『子供みたい』に良い意味があるとは思えないけど……って、結構時間が経っているな……。本当に送っていかなくて良いのか？せめて途中まででも」

眩しいものを見るような、慈しむような瞳で桜は微笑み、切り替えたばかりの頭が簡単に温度を上げてしまう。ごまかすように拗ねた言葉を吐き、話題を変えようと

「大丈夫ですよ。こう見えて結構強いんですから。真つ直ぐ帰るだけですから、心配は要りません。先輩こそ、今日は土蔵の方で寝ちゃダメですよ？明日、もしも土蔵で寝たら朝ご飯抜きです。それでは先輩、おやすみなさい。また、明日」

本格的に話題を変える前に、桜は踵を返して走り去ってしまった。俺が反論する暇を与えないつもりだったのか、有無を言わせない勢いで言葉を紡ぐ姿が…少しだけ、気になった。何か心配事でもあるのかと問いかけたくても、当の本人が居ないので話にならない。

「何か……あつたのかな……。明日、改めて聞いてみるか　　っと、そろそろ時間だ」

いつまでも立ち尽くしているわけにもいかないの、扉を閉めて鍵をかけた。藤ねえと桜が帰ったことで先ほどまで賑やかだった室内は静まり返り、すでに時計が零時近くを示していることに初めて気付く。『学生』としてではない衛宮士郎の時間がすぐそこまで迫っていた。僅かに胸をかすめる寂しさを振り払い、密かな日課である『鍛錬』を行うために土蔵へと向かう。

「今日は、やけに月が綺麗だな。まるで……『杯』みたいだ」

ふと目を奪われた真円の満月。星の瞬きさえも消し去るほど煌々と輝きを放ち、わけもなく背筋をざわめかせる。見慣れたはずの月を、なぜ今夜は『杯』と思ったのか……深く考えることもなく、歩みを再開した。

ゆっくりと息を吸い、身体の隅々まで行き渡らせる。イメージするのは肉体を『路』として大気から力を取り込む構図。深く、長く呼吸を繰り返して雑念を取り払い、その心像を鮮明にしていく。引き絞る弓のように高めた集中力、ついに、衛宮士郎に宿る『力』の波長が最大に達する刻限がきた。

「ふう 同調、開始」

自己に訴えかけ、変格させる『言霊』を紡ぐ。切嗣が生きていた頃に教わったやり方、今まで数え切れないほど繰り返してきた『魔術師』としての力を振るうための工程。背骨を貫くように、魔術回路を形成していく。慣れることがない骨肉を割っていく灼熱感、脳に響く激痛に耐え、ぎちぎちと数ミリ単位で工程を続ける。

「つぐ、ふつ、は、あ」

熱を持ち、淀み切った肺の空気を吐き出す。魔力を行使して神秘を成す魔術師に不可欠であり、その本数によって力の強弱が決まる魔術回路の形成に成功した。

「よし……始めるか。構成材質、解明 基本骨子、変更
補強、開始」

魔術の初歩、物質の強度や能力を補強する『強化魔術』を開始。飛び抜けた才能も力もなく、それでも『父』から受け継いだ遠い理想に近づくため、今夜もたった一人で鍛錬を続ける。

「っ、うわ!？」

流し過ぎた魔力に耐え切れず、手に持っていた鉄パイプが弾け飛んだ。ため息を吐きながら周囲に目を向けると『強化』に失敗した木切れや鉄片、ガラクタが散らばってひどい光景になっている。

「はあ……そろそろ、魔力の残りも少ないな……。ん？」

ふと、右手から血が流れていることに気付いた。鉄パイプの破片に裂かれたのか、溢れる鮮血は紅玉となり、床に向けて零れ落ちる。

「結構、深いな。えっと……確か、こちら辺に包帯が……痛ッ!？」

怪我をした時のために用意しておいた包帯を探そうと、視線を巡らせ始めた時 両腕全体に走る痛み。激痛には遠いものの、無視できるような痛みでもない。別の怪我をしているのか確認のために袖をまくると、左腕に四つ、右腕に四つ、複雑な紋様を描く痣が浮かんでいる。左右の手の甲に一つ、前腕部に二つ、上腕の関節に近い部分に一つ、全部で八個。

「何だ……これ？ うわっ!？」

突然、蒼と白が混じり合った光に視界が閉ざされた。薄暗い土蔵は光に満たされ、急激に高まった魔力によって暴風が吹き荒れる。床に零れ落ちた俺の血が意志を持っているように動き出し、床に刻まれている消えかけの『陣』を紅く、浮かび上がらせた。

「これは、召喚陣……か？なんで、土蔵の中にこんなものが っ
て、くっ うっ!？」

身体の中に残っていた魔力が一気に外部へ向けて流れ出していく。パニックに陥りそうな頭を必死に落ち着かせ、自分でも驚くほどの集中力で枯渇してしまわないように調整する。

「はっ、はあ、ふう……驚いた……。何が起きてるっていうんだよ……」

生命維持も難しい量が流れ出したかと錯覚するほどの勢いだつたが、落ち着いて身体の状態を確認すると、俺の少ない魔力でもぎりぎり賄いきれる程度の量しか流れていなかった。

最後に一際大きな閃光が走り、視界を閉ざしていた光が徐々に収束していく。残光のせいで未だに完全な機能を取り戻していない両目の代わりに、聴覚を総動員して周囲の状況を探るが、置いてあったガラクタに躓いて尻もちをついてしまう。

そこに　凜とした、清冽な声が、聞こえてきた。

「　問おう。貴方が、私のマスターか？」

「サーヴァント・ライダー、召喚の呼び声に応じて参上しました」
怖気を感じるほどに冷たく、甘い色気に満ちた声が続く。

「キャスターのサーヴァントよ。マスターは貴方のようですね。よろしく」

聞く者の脳髓を溶かすような、成熟した妖艶さの音が響く。

「我が全身と全霊は貴殿のために。クラスはバーサーカーとなります、我が主」

叡智、意志、力に満ち溢れた深く美しい声。それだけで、最高の旋律に彩られた天上の調べにすら匹敵する。

それぞれ個性に溢れる四人分の女性の声が響き、さらに二人分、今

度は男性の声が続いた。

「おっ？マスターは坊主みてえだな……ふん、なかなか良い面構えしてるじゃねえか。俺はランサーだ、よろしくな」

「ほう、こうして再び身体を得るとは……いやはや、世の中面白いこともあるものよ。アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎と言う。

」

声は聞こえても、姿は見えず。光は完全に収まっており、俺の両目も正しく機能しているのだから、透明でもない限り見えないはずはない。

「えーつと？どこに居るんだ？」

尻もちをついたまま上下左右に視線を送っていると、土蔵の小窓から月光が射し込んできた。清浄な蒼い光が、薄暗さを取り戻していた土蔵を照らし出す。置かれた箱の上に、小さな影が七つ、いや、八つ？

しっとりとした艶のある金髪と深い翡翠色の瞳、頭頂部で揺れる一房のクセ毛が可愛い。白銀の装甲と手甲、瑠璃色のドレスを纏い、くつきりとした顔立ちの凛々しい美少女。

足元にまで届こうかという美しく長い董色の髪。白く、滑らかな肌と桃色の唇。細く通った鼻梁にかけ、顔の上半分を覆う無骨なマスクで素顔の全てをすることはできないが、絶世の美女であると想像するに容易い。

強力な魔力を付与された装飾品、同じく強い魔力を感じさせる漆黒のローブで全身を覆い、フードを目深に被った妙齡の女性。僅かに覗く口元の美しさから、こちらも桁外れの美女だろう。

鍛え上げられた強靱さと、女性の中でも恐らくは最高の部類に入るだろう豊穣さ、その二つが完璧な均衡で同居する極上の肢体。胸部、両腕、両脚を覆う必要最低限の鎧。癖の強い黒髪を後ろに撫でつけた神々しい美貌を誇る女性。

豹や虎に共通するしなやかで強靱な肉体、寧猛な輝きを放つ瞳。動きを阻害することのない意匠を施された蒼色の軽鎧を身に付け、同じ蒼色の長髪を束ねた不敵な表情で笑う男。

涼やかな紫の陣羽織を纏い、飄々とした笑みを浮かべた玲瓏たる侍装束の男。信じがたいが、その背丈と同じような長刀を背負い、『佐々木小次郎』と名乗ったのは聞き間違いではないだろう。

そして、今まで一言も発していない最後の一人。漆黒の軽鎧の上に真紅の外套を重ねた衣装と、硬く鋭い剣のような意志を宿した瞳。褐色の肌に逆立てた銀髪、鍛え上げられた身体。なぜか、理由もなく、親近感と敵対心が入り混じった妙な気分になった。

「よい、しよつと。うう……どうして、私だけが下に落ちちゃったんでしょうか……。痛いですー」

なんて、場違いとも言えるような声を出しながら登場したのは八人目。黒地に赤でラインの入った、どこことなく危険な香りのするぶかぶかのパーカーを羽織った少女。大きすぎる服のサイズや丈にも関わらず、何となく身体のラインが見えてしまう辺り、バーサーカーと名乗った美女にも負けない肢体の持ち主なのだろう。輝くような

なぜかタイミングぴったりで叫ぶ紅い装束の男に改めて親近感と、
言いようのない敵対心を感じつつ……何か、全ての運命を変えるよ
うな物語が始まったのだと、強く感じた。

第一話 邂逅 終幕

第一話 邂逅（後書き）

小動物好き、小さくて可愛いもの好き、そんな作者が癒される物語を書きたくてやっちなった作品です。

初の連載、長編物として考えた作品。

第二話 状況把握とひと騒動（前書き）

この作品は作者の妄想や勝手な解釈がこれでもかと反映されています。

以上を踏まえた上で読みましょう。

第二話 状況把握とひと騒動

居間に置かれた大きなテーブル。いつも座っている定位置に俺が正座し、卓上には一見人形と見間違えるような小サイズだが、ちよこちよここと動き回る八人の『サーヴァント』が居た。

「　　という状況なのです。理解しましたか？」

「えーっと、大体のところは」

衝撃的な出会いから一時間半。キャスターによる身振り手振りを交えた説明を受けていた。情報量が多いので即座にすべてを理解したとは言えないが……割とシリアスな空気にそぐわない、とても愛らしい仕草だった。ちなみに、フードを取ったキャスターの素顔はとんがり耳の絶世の美女。

実在したか否かに関わらず、人々に英雄と認められた者の霊格。『英霊』と呼ばれるそれらが持つ能力や傾向を七つのクラスに当て嵌め、最盛を誇った時の姿と力を与えて現世に召喚したのが『サーヴァント』となる。

そして、サーヴァントを従えた七人の魔術師が万能の願望機たる『聖杯』を手にするために殺し合う戦い。生き残った最後の一人だけが、究極の神秘を手にする戦いを『聖杯戦争』と言う。

聖杯戦争の中で盾にして矛となるサーヴァントを従えるための契約の証。そして、三回だけ絶対命令権として使用できる『令呪』という名前の痣。

本来、一人一つが原則である令呪が衛宮士郎に全て宿っており、さらにはイレギュラークラスまで存在していること。英霊の力を完全に再現した上で召喚されるはずが十分の一以下に制限され、そのせいで全能力の大幅なランクダウン+ちびっこい外見+現界に必要な魔力量が非常に少なくなっていること。このおかげで、衛宮士郎の生み出せる魔力でも七騎のサーヴァントを維持できていること。

以上が、キャスターの説明で理解できた部分である。

ちよこちよここと動き回り、時折『はふう』なんて息を整えながら説明するキャスターの姿。微笑ましいを通り越して、鼻血が出てもおかしくないような可愛らしさだった。

「……………んう」

何が気に入ったというのか。俺の右肩にちよこんと座り、無言のまま首筋に身体を擦り寄せて小さく息を吐くライダー。すごく積極的かつ妖艶な仕草でドキドキするんだが、なぜだろう……………蛇に捕食される寸前のネズミのような気分になってしまう。小さくても色々な所がふにやりと柔らかかったり、すごく甘くて良い匂いがしてキャスターの話が片っ端から吹き飛んでしまいそうになるから自重して欲しい……………。

「……………」

ライダーの反対側、左肩に陣取るのはセイバー。無言、ただ、ひたすらに無言。だが、口ほどに物を言う目が凶器のような鋭さになり、視線で斬り裂こうとするようにライダーを睨みつけている。俺の耳

元で妙な風が唸りを上げ、透明な『何か』を握った両手から眩い金色の光がちらちらと見えているのが怖すぎる。セイバー自身の感情を示す機能でも付いているのか、ひょこりと揺れていた頭のクセ毛がびしりといきり立つ。

「ライダー…… 『私』のマスターに対して失礼な真似をしないでもらいたい。嫌がっているではないですか。私たちサーヴァントはマスターの剣であり盾。そのような、はしたない拳動は慎むべきだ」

「貴女のような石頭と話すのは疲れるのですが……聞き捨てならぬ言葉を耳にしてみましたので付き合ってください。まずは『私』のマスターではなく、『私たち』のマスターです。自分の都合の良ように事実を捻じ曲げることこそ、マスターに対して失礼なのは？それに、嫌がっているかどうかはマスター自身の気持ちであり、貴女の関知するところではないと思います。幼稚な嫉妬は見苦しいだけです、最優のサーヴァント・セイバー？」

「面白い。破廉恥な格好と拳動をせねばマスターの関心を引くこともできぬ騎乗兵ごときがよく吠えた。その愚かな蛮勇を讃えて一刀の下に斬り伏せてやる。さあ、構えなさい」

「その『破廉恥な格好と拳動』しかできない『騎乗兵ごとき』に言い伏せられ、劣勢になれば剣を振り回しますか。愚かな堅物の相手をする暇も余力も私にはありません。他を当たりなさい」

売り言葉に買い言葉で加速度的に険悪空間が広がっていく。プレッシャーや発散される魔力は凄まじいんだが……姿形が小さく、丸っこいせいで非常に和む。とは言え、戦う必要など何ひとつ無い仲間だというのにいがみ合うのは良くない。互いの武器を取り出そうとした辺りで仲裁に入った。

「はづっ!?!」

「ひゃうっ!?!」

「こら、二人とも喧嘩はダメだ。口喧嘩まで『やるな』とは言わな
いけど、武器を使うのはいけない。戦争のために召喚されて、争う
のが本来だったかもしれない。だけど、今は、ここに居る全員が仲
間で争う理由なんてどこにも無い。仲良くしなきゃ」

諭すように言葉を紡ぎ、痛くしないようにそつと二人の身体を握っ
てテーブルの上に降ろした。なぜか、顔を真っ赤にして黙り込んで
しまった二人を視界の端に入れつつ、お茶受け用に取っておいた鯛
焼きを探して戸棚を開け始める。

「えーっと、確かここら辺に……おっ、あったあった。ほら、とっ
ておきの鯛焼きがあるからみんなで食べよう」

衛宮家にやってくる虎の魔手から逃れ、出番を待っていた鯛焼きを
依然として固まったままのセイバーとライダーの前に置く。テーブ
ルの上で思い思いの別行動を取っていた他の面々もちよこちよこと
集まってきた。

「なんだこりゃ? 魚のカタチをしてるみてえだが……甘い匂い?」

「これは……面妖な……。むっ……茶菓子の類か?」

「これは何なんですか、ますたー?」

「んー? 一応、食べ物みただけど……」

「……………」
ランサーと小次郎はしげしげと眺め、アンリマユは目を輝かせながら質問し、キャスターは自分なりの推理を呟き、バーサーカーは恐る恐るといった様子で突つつく。その様子に胸の内が温かくなり、ふと鏡状になったガラスに映る自分の顔を見て、知らないうちに頬が緩んでいたことに気付いた。ここで、硬直していた二人が再起動

「まつ、ますたー！？いくら小さく姿形が変わってしまっているとはいえきつ、きききききき気軽に持ち上げたり握ったりするなんて！いくら契約を結んだマスターとはいえ断固として抗議します！！」

「あー、そんなに嫌だったか？セイバーを不愉快な気持ちにさせるつもりは無かったんだ。すまない、俺の配慮が欠けてた」

取り乱して声を荒げるセイバーの様子に、自分がずいぶんと失礼なことをしたのだと思いつつ頭を下げた。確かに、身体は小さくなつていても彼女たちは歴史に名を残す英雄なのだ。軽々しい扱いなどするべきではなかった。しかし、頭を上げてみるとセイバーは頬を染めたままオロオロと右往左往するだけで、先ほどとは違った様子で取り乱している。

「あ、う……………いえ、その……………そこまで嫌ではなくて……………その……………いきなりで驚いたと言いますか……………混乱のあまり辛辣な言葉を口にしてしまいました、心の準備ができていれば決してやぶさかではなく……………」

「えっと？セイバー？」

小声と早口で何かを呟きつつ、セイバーが再び硬直してしまう。ど

うしたら良いか分からず俺も硬直していると、とことこと歩み寄ってくるライダー。」

「……………マスターの手は、男性らしい手ですね」

「えっ？あ、ああ…よく機械いじりとかするからな。すまん、節くれ立ってるから握った時に痛かったか？」

「いえ。とても優しくて、温かくて、すごく嬉しい気持ちになれる…そんな、手でした」

突然話しかけられて少しばかり戸惑うも、にこりと微笑むライダーに思わず見惚れてしまった。マスクで隠されてしまっているため瞳を見ることはできないが、きつと、深い慈しみの宿った優しい瞳をしているだろう。

「あの…マスター。よろしければ、もう一度、私を手に乗せてもらえませんか？」

「ライダーが良いと言ってくれるなら、喜んで」

言葉にされた『願い』と呼ぶにはあまりにも些細なこと。それに応えるため、細心の注意をもって彼女の身体を右手に乗せた。

「はふう…ライダーさん羨ましいです…。あの、マスター、良かったら私も乗せて欲しいですー」

パーカーの裾を握りながら、おずおずとねだってきたアンリマユの目の前には空いた左手を差し出す。その見返りは、慎ましく咲いた小さな花のような笑顔。切嗣が死に、一人で暮らすようになった五

年前の夜から、ずっと何処かが空虚なままだった心と身体。それが、温かく優しいもので満たされていくような気がした。

「ごめん、ライダー。肩のほうに移ってくれないか？」

「どうしたんです……なるほど。そうですね、みんなのマスターを一人占めするわけにもいかないので譲ってあげるとしましょうか」
俺の言葉からすぐに事情を察し、軽々と跳躍を繰り返して右肩まで辿り着いて腰かけるライダー。いつの間に復活していたのか、寂しさや残念さを押し込めたひどく悲しそうな目のまま背を向け、そっと離れようとしていたセイバーに声をかける。

「右手が空いたんだけど……良かったら、セイバーが乗ってくれないかな？」

「しかし……私はサーヴァントだ……。マスターの剣となり、盾となるものがそんな事をしようなどと……私よりも、他の望んでいる者に乗せるべきでしょう……。それに、取り乱していたとは言え、マスターの厳しい言葉を浴びせてしまった……。そんな私が乗っては……」

一瞬だけ瞳を輝かせるも、すぐに頑なな表情に戻って拒もうとする。僅かに見せた嬉しそうな顔から、内心は言葉と正反対なんだろう。それを、自分を抑えて誰かに譲り渡そうとしている。

「こうなったら、あまり気は進まない方法だけど……意地でもその気にさせてやる……」

「えっ？」

「ごほん……マスターとして、我がサーヴァント・セイバーに命ずる。俺の右手に、乗ってくれ。」

きつと、提案や自らの意志に任せるやり方じゃ、セイバーは首を縦に振ることはないだろう。押し問答が続くことになって、決着が付かないまま終わるのが目に見えていた。だから、あえて命令調にする方法を選んだというわけだ。

「えっ？ええっ！？」

「サーヴァントはマスターの命令に従ってくれるんだろ？それに、聞いたけど『セイバー』のクラスに当て嵌まる英霊は優れたものが多いそうじゃないか」

「マスター……ええ、そうですね……。私は、最優のサーヴァント・セイバーです。マスターの命令なら仕方ありません。乗ってあげるとしましょ」

俺の言葉に隠された真意を汲み取ってくれたのか、にっこりとセイバーは笑う。その、あまりにも眩しく美しい笑顔が、何よりも嬉しかった。

Interlude

頬を染めながらマスターの指を掴み、差し出された右手に乗るセイバー。ガチガチに緊張しているらしく、手足が同時に動いているのは何とかした方がいいと思う。できるだけ分かりやすく、要点を整理して現況を説明した私にも『ごほうび』が欲しいところだけど……三人も相手をしているマスターにこれ以上の負担をかけたくない

ので我慢しておく。

「別に、今じゃなくてもチャンスはあるものね……」

「ん？何か言ったかキャスター？」

「いいえ、何も。それにしても……他のサーヴァントも居るっていうのに、仲睦まじいことよね」

思わず口に出てしまっていたらしく、近くに立っていたバーサーカーが聞き返してくる。僅かに熱を帯びてくる顔を彼女の視界から逸らしつつ、別の話題を振ってごまかしておくが……笑みを含んだ声から推測するに、完璧に聞かれてしまっているんだらう。体温が上がってきて、ローブを脱ぎ捨ててしまいたくなる。

「良い、光景ではないか。本来であれば、強大な力を振るって殺し合わねばならない私たちが共に過ごしている。このような姿で、穏やかに。異常な事態ではあるが、私はそう悪い気分ではない」

「そう……かもしれないわね」

そう言っつて、小さな女狂戦士は少しだけ表情を柔らかくした。それだけで、何もかも包容してしまう慈母のような雰囲気になるんだから、ちょっとばかり妬けてしまう。

「『かもしれない』か。素直ではないな、キャスター。さて……確かに、我らが主と親睦を深める機会には後にもあるが、本当に『今』じゃないなくても良いのかな？」

「うっ！？……ずいぶんと絡んでくるじゃないバーサーカー。ク

ラスに当て嵌まっているのに狂化せず、普通でいられるからって調子に乗りすぎじゃない？」

「私は羨ましそうに、物足りなそうに見つめるだけのキャスターの背中を押してやるうと気を利かせただけだよ」

悪戯っ子のように瞳を光らせながら話すバーサーカーとのやり取り、彼女と過ごすこの時間はとても心地良いものだった。

「それじゃあ聞くけど、貴女は行きたくないのかしら？」

「行きたくないのかと問われれば、『否』と答えたい。しかし……先ほどは『悪くない』と言ったが、やはり異常事態には変わりない警戒しておいて損は無いだろう？小さくとも、万が一の事態から我が主を守るためにできる事をやらねば」

思い返してみると、召喚されてからと言うものの彼女だけが少し距離を取っていた気がする。ずっと、周囲を警戒していたのだろう。それだけじゃなく、召喚されたサーヴァントがおかしな行動を起こさないか、自分自身が大丈夫なのかの監視も兼ねていたような気がするが。

「狂戦士の名が泣くほど慎重で殊勝な心掛けだこと。いいわ、気が変わった。貴女だけに任せるのも心配だし、私も手伝ってあげる」

「ふっ、ふふっ。やはり素直ではないな、キャスター。比類する者なき美しい容姿だというのにもつたいない事だ」

「素直な振る舞いのやり方なんて、とうの昔に忘れてしまったわ。例え覚えていたとしても……『魔女』の私に、そんな振る舞いをす

ることが許されるはず無い」

「忘れた……か。それなら、ライダーやアンリマユ、セイバー達を見て思い出していけばいい。『忘れた』だけならば、どこかに眠っているだけだろうからね。それに『許されない』とはおかしな話だ。『魔女』とは己の欲望に忠実であり、目的のためならばどんな手段もいとわない者のはず。つまりは、ある意味で最も素直な輩と言えなくもないと私は思うんだが。許すも許されないも関係なのでは？」

「キャスター。私はね、犯した罪や抱えた後悔に囚われ続けるのではなく、一歩ずつでも新たな道を進む、そんな美しき魔女が居ても不思議ではないと思う」

聞く者の心に沁み込んでいくような深い声。生前、私がしたことは決して許されるものではなく、この身に刻まれた『魔女』の烙印は消えることは無いけれど、目を閉じたまま彼女が静かに紡ぐ言葉に、少しだけ心が軽くなったような気がした。

「
考えて、おくわ。まったく……貴女こそ、そんなお固い言葉遣いじゃ綺麗な顔に似合わないと思うけど？」

「こんな、本来のものとかけ離れた姿形で召喚されてしまったからね。まだ、慣れていないだけだよ。別に何か不都合があるわけではないし、私自身、そう悪い気もしていないんだから細かいことは言いつこなした」

うつすらと桃色な空気を纏い始めたマスターと三人の色ボケ英霊、何やらぎゃーすか騒ぎ始めた三人のバカ英霊の間で私とバーサーカーは笑う。

「バーサーカー」

「キャスター」

一言、伝えておきたい言葉があったので口を開くと彼女と同時になつてしまった。譲るために、手の仕草だけで先を促す。

「む、すまない。これから、よろしく頼む」

「ええ。私の方こそよろしくね、バーサーカー」

Interlude out

Interlude

「やれやれ。あのように見せつけられてしまうと居心地が悪くて仕方ない。そうは思わないかご両人？」

『たいやき』なる物を食べつつ、背後に居るはずのランサーとアーチャーに問いかける。男と語り合うのは趣味ではないのだが、口説きたくなるような好みの女が居ないのでせめてもの暇潰しというやつだ。一拍置いても返事がないので振り返ってみると

「だーからーよー、てめえの目測が間違ってるって言うてんだろうが」

「何度も言つが私の目に狂いはない。全ては君の言いがかりだ。そして、非常に暑苦しくて不愉快だから近付くんじやない」

喧嘩していた。あくまで直感だが、極めてくだらない理由で言

い争っているような気がしてならない。

「てめえが大人しく間違いを認めて謝れば喜んで引き下がってやる。だが、そうやって折れないでいるなら俺も引かねえ」

「だから……ちっ、明らかに異常な事態が起きているというのに貴様の愚かな言いがかりに付き合っている暇はない。いい加減しろ、ランサー」

額に青筋を浮かべながら詰め寄るランサー。一見すると冷徹な無表情に見えるが、よく見ると抑え切れない怒気であちこちが引き攣っているアーチャー。次の瞬間には互いの得物がぶつかり合っても決しておかしくはない空気。このように小さな姿、小さな力なので周囲への被害はほとんど無いだろうが……このまま放っておくわけにもいかなないので仲裁に入ってみる。

「何が原因かは分からないが、そこまでいがみ合わずとも良いではないか。せつかく主殿がたいやきを用意してくれたのだから仲良くすべきだと思っが」

「うるせえ。俺はこの赤バカと話してんだ。黙ってすっこんでろアサシン」

「今は、この躰のなっていない青犬を叩きのめすのが優先だ。余計なことを言わないでもらおうか」

「……………」

いっそ、二人まとめて、叩き斬ってくれようかこのバカ共は。

「それで、だ。偉そうに高説を垂れて逃げを打つのか弓兵？こそこそと隠れて狙い撃つしか能がない輩らしいな」

「……………猪武者の貧弱な頭では戦のことがよく分からんらしい。古来より戦場において最も人を殺し、戦況を左右する主力となったのは飛び道具だ。いいだろう、言葉で伝わらん馬鹿者には実力行使だ。相手になつてやる」

「ハッ！！最初からそういう態度でくりゃ話は早かつたんだよ。それから、弓を取れよ。矢を番えるまで待つていてやる」

「ふん。最速のサーヴァントが『待つている』とはずいぶんと甘い言葉だ。そのような言葉を発する程度の相手、弓を使うまでもない……………』。これで、充分だ」

禍々しい空気を纏う深紅の槍を構えた青蒼の獣が笑い、鋼の背中与鷹の瞳を持つ男は何かを小さく呟き、虚空から姿を現した黒と白の双剣を握る。

「私は、もう何も知らんぞ」

恐らくはバカな原因に端を発する、バカとバカによる、はた迷惑この上ないバカな戦いが幕を開けようとしていた。まったく……………参戦する気も起きん。

Interlude out

「むぐむぐ……………こつ、これは！マスター！！現代にはこのように美味なる物が溢れているのですかっ！？う、うう……………私が……………私が口にしていたアレらは、やはり『料理』などと呼べる代物ではなかつ

た…はむっ、んぐんぐ」

「んっ、んふ……はっ、あ…マスターったらこんなに大きいものを私に渡すなんて…意地悪なんですね。私の口に入り切るでしょうか？でも、がんばります」

「はあー、今はこんなに美味しい物が食べられるんですねー。マスター、もう一個食べてもいいですか……ってマスターもちゃんと食べなきゃダメですよ？」

小さな身体で鯛焼きひとつ分を抱え、口の周りにあんこをくっ付けながら食べ進めるセイバー。目を輝かせながら、はむはむこくこくと食べる様子を見てみると心が和むどころの話ではない。もはや浄化と言っても過言ではないように思う。時折、遠い目をしては怒りや憎しみの表情と呟きを零しているのが少し気になるけど。

ライダーは行儀よく食べている……はずなのだが、口に行っている言葉が非常に不穏だ。ちよつと受け止め方を間違っただけで、えらい勢いで誤解を招きそうな言い回しになっている。そして、なぜ鯛焼きを食べるだけなのに頬を染めているのか、なぜ指や口端についたあんこを舐め取る仕草がムダに妖艶なのか、なぜマスクで隠れているはずなのに誘っているような視線を感じてしまうのか。小さいくせに、すごく、心臓に悪い。

行儀よく、特に問題を起こすこともなく食べているのはアンリマユ。鯛焼きの味が気に入ったのか、感心したように頷いている。きちんと俺に確認を取ってからおかわりしようとするのはとても素晴らしいのだが、妙に不吉な印象を受ける漆黒の影を揺らめかせ、それを刃物のような形に変えて鯛焼きを切り分けるのは止めないか？たしかに便利そうだけどさ。

「む？そう言えば、他の五人は……って金属音？」

目を離していた間に何か良いことでもあったのか、バーサーカーとキヤスターは二人で何か楽しい空気。小次郎は妙に疲れた表情で縁側に座っている。そして、ランサーとアーチャーは

「おらおらおらあッ！！！！！！」

「はあああああッ！！！！！！」

居間の中で、戦っていた。槍を突き出す瞬間も、引き戻す瞬間も見えず、紅い流星が横殴りに降っているようにしか見えない槍兵の連撃。対するのは二刀一対の双剣を巧みに操って流星を打ち払い、叩き落とし、受け流す弓兵の姿。二人の力の質は全くの逆、持つて生まれた天賦の才と常人には想像もつかない弛まぬ修練をもつて極致へと辿り着いたのはランサー。突出した才覚も能力もなく、ただ、鋼の意志と狂気にも似た執念で積み重ねた修練の果てに辿り着いた……否、辿り付いてしまった極致のアーチャー。二人が繰り広げる激しく壮絶な戦い、それは見る者の心を奪う美しさすら感じさせ、『剣舞』と呼ぶにふさわしい光景だった。

まあ……小さくなければもつと格好がついたんだろうけど。あの姿では、ちよいとスケールの大きい小動物のじゃれ合いにしか見えないから哀れだ。

「それでも、さすが英霊だけあるよな。畳がボロボロになってるし、テーブルの脚が傷だらけになってるし」

「ま、ますたー……？」

「はむは、むう！？……ま、ままママスター…顔が…」

「……………（ガクガク）」

「あつ、ガラス割って中庭に飛び出していった」

より広い空間を求めてだろう。中庭に面したガラス戸のど真ん中を斬り割って飛び出し、さらに戦いは加速していく。ランサーの刺突は神速の域へと入り、アーチャーが織り成す黒白の二刀による鉄壁の護りは冴え渡る。月光が降り注ぎ、蒼く染まった夜に咲き誇る剣戟の花。

「かつ、はははっ！！！！やるじゃねえか！！弓兵のクラスに当て嵌まり、二刀を使ってこれほど打ち合えるヤツなんぞ聞いたことがない！何者だてめえ！？」

「あいにくだが、例え死ぬことになっても正体を明かすつもりは無い。深紅の魔槍に獣のごとき素早さ………そういう君はクランの猛犬、アイルランドの御子、高名なクー・フリーンと御見受けする」

「くつ、くくつ。いいねえ、こんな姿なのは少々残念だが…名を知られたからには本気でいくぜ」

「ほう、これまでは本気じゃなかったと？その割には突きに随分と力が入っていたように感じるが」

「口はよく回るようだが、顔色が優れないぜ弓兵。貴様の心臓、貰い受ける」

言葉を交わすたびに高まり続けた殺気と闘気が臨界へと達し、切り札たる絶対の一撃が放たれる瞬間がすぐそこまで迫っていた。

「、、両雄、共二命ヲ別ツ。干将莫耶」

何事か呟きつつ、虚空から次々と双剣を生み出して投擲するアーチヤー。美しい軌跡を描いて闇を奔る二組四本の黒白を伴い、凄まじい魔力を纏って翼のように変化を遂げた三組目の双剣を握って疾駆し

「刺し穿つ」

必要なのは絶殺に至るための一撃。それ以外は要らぬとばかりに身体中の筋肉、精神を引き絞るランサー。周囲に満ちるマナを貪欲に食い尽くした魔槍が輝きを増し、向かい来る剣の包囲を迎撃する。

「、重層 鶴翼、三連ツ!!」

「死刺の槍ツ!!」

「はあああああああああッ!!!!!!!!!!!!!!」

「背が高いのは俺だあああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

くっつからない事を全力で叫びながら紅と蒼が交錯し、ぼふんと気の抜けた小さな爆発音が響き渡る。僅かに闇を駆逐した光が収まると、身長の高低を争っていたバカ二匹が気絶して転がっていた。

言うまでも無いが、何もかもがとても小さいので、見る方としては非常に微妙な気分にならざるを得ない。何となく予想はついてい

だが、それでも改めて争いの理由が明かされると……怒りも呆れも
乗り越えた感情の極北に到達してしまう。しかも、そのせいで、
家が壊されたとくれば……。

「さて、と。厚紙ってどこにあったかな……」

目を覚ましたバカ共を制裁するための武器の材料を探しておく。見
つけ出した厚紙を丁寧に、丁寧に折って形を整えて……っと。

「うん、上手く作れたな。仕上げに 同調、開始」

作ったままの魔術回路を通して作り出した魔力を完成したハリセン
に流し込み、物質の強度を飛躍的に高める『強化』の魔術を施す。
今まで一度で成功したことなど無かったのだが、簡単に成功した。
サーヴァント達を召喚してから、妙に調子が良い。

「うお、成功しそうな気はしてたけど……実際に成功すると嬉しい
もんだな。これなら……身体強化もいけるか？」

物質の強化よりもさらに難易度の上がる身体能力の強化に取りかか
る。失敗してしまわないように慎重に、ゆっくりと魔力を流す。こ
れまでにないほど魔力の流れを感じやすくなっているので、焦らな
ければさほど難しくはなかった。

「こっちも成功。回数をこなして身体を慣れさせていけば、もっと
素早く強化できそうだな……」

常人では到底及ばない身体能力となった身体、鋼もかくやという強
度を得たハリセン。これなら、いける。素振り強化した身体の手
エックをしていると、再び罵り合う声が聞こえてきた。目を覚まし

たバカ共が肉弾で二回戦を始めたらしい。

「てめっ、こんのドアホがっ！！なに殴ってんだこの野郎！！」

「貴様が殴ったから殴り返してるのだ大バカ！！」

有利なマウントポジションを奪うために取っ組み合い、転がり回るちっこいバカ達を制裁すべくゆっくりと立ち上がる。巻き込まないようにセイバー、ライダー、アンリマユはそっとテーブルに降ろしてあるので全力でいける。

「マスター、ご武運を」

「容赦も遠慮も一切せず、全力で叩き潰してきてください」

「これはランサーさん達が悪いですからね。当然のお仕置きです」

「私も参加したい所だけど……マスターの雄姿を見る方に回るとし
ましようか」

「言いたいことは言われてしまったので私からは特に。主殿、思い
切り頼む」

五人が一行に並び、思い思いの言葉を口にしながら見送ってくれる。
ちよこちよこ手を振ってくれる辺り可愛らしいものだ。

「おう、任せてくれ。それじゃ、ちよつと行ってくる」

「我が主よ。いくら大幅に弱体化しているとて、奴らは英霊であり
サーヴァント。一人では心配なので私も同行する」

「おつ、と。バーサーカーか。俺一人でも大丈夫だと思っただけど」
黒髪と主に胸部の辺りを揺らしつつ、ぽふりと肩に飛び乗ってきたのはバーサーカー。視界の端には、むすっとした表情にも関わらず寸毫ほども美しさの損なわれない美貌。召喚時を除けば、彼女とともに言葉を交わすのはこれが初めてになる。

「そんな油断が危険を招く。事前の備えはやり過ぎという事はない」
呑気な俺の答えが気に入らなかったのだろう、不機嫌そうに眉をひそめてしまった。俺の安全を一番に考えての言動だというのはよく分かってるので、そつと頭を撫でる。

「ありがとな。それじゃあ、護りは任せたぞバーサーカー」

「言われるまでもなく、我が主には傷一つ付けさせはしない。こう見えて、私は結構強い」

撫でられながら心地良さに細めていた瞳を一気に鋭くし、ぐいつと力こぶを作るように腕を曲げるバーサーカー。僅かに染まったままの頬も相まって可愛らしいったらありゃしない。

「はっ、ははっ！うん、期待してる。さて……それじゃあ、そろそろ征こうか」

「ん」

さあ……くだらん理由から始めた喧嘩で家を傷つけ、仲良くしようと云ってる矢先から騒ぎを起こしたバカ二匹を肅清してやるとしよう。

思い切り、一切の容赦なく。

「我が主、私の初撃はどうしたらいい？できれば、全力の一撃を叩き込んで即座に仕留めたいのだが」

「そうだな……元気もあり余ってるみたいだし、英霊ならちよつとやそつとじゃ大事にも至らないだろ。全力でいこう」

「承知。では、宝具による先制で確実に沈黙させる」

ふむふむと頷き、腕の一振りで身の丈を超える大剣を顕現させる。いや、『剣』というよりも岩の塊と形容したほうが正しいかもしれない。そんな代物と縁があるように見えない華奢な腕で易々と持ち上げ、肩に担いだままこちらに視線を送る。それに小さく頷き

「征くぞツ!!」

「征きます」

「ッ!!?」

研ぎ澄まされた感覚で危機を察知したのか、どつたんばつたんと組み合っていた状態から素早く回避行動へと移る二匹。だが遅い、判断の遅れは僅かだが致命的だ。

俺は赤いやつに向け強化された脚力を存分に活かして走り、それと同時にバーサーカーが青い方に向けて疾風の速度で飛ぶ。

武器である大剣と己の身体に魔力を込め、狂戦士は槍兵へと肉薄する。剣速はより速く、閃光の速度を超え、神速の領域すら超えたそ

の先へ。一閃では足りず、二閃でも足りない。最高の一撃を重ねて九閃。その身を英雄とならしめ、英霊の座へと導き上げた比類するもの無き究極の一。使用する本来の武装ではあらず、姿形すら本来のものを失ってしまったが……身に宿した宝具の何が変わるつか。その絶技の名は

「喰らえ、我が宝具　　“射殺す百頭”」

「おいおい本気がよっ！？ちよっ、待つ、ぬあああああああああ！！！！」

空間ごと斬り滅ぼすように放たれた九つの煌めきは美しい軌跡を描いて青バカに直撃、えらい速度で吹き飛ばして中庭の壁にめり込ませた。

俺は、妙な親近感と苛立ちを感じる赤いヤツに向けて疾駆する。分かる、今のアイツの身体は完全に死に体。先ほどの回避行動が最後で、この瞬間に自由に動かせる部位は一切存在していない。数秒後にヤツの身体が存在しているだろう空間に向けて狙いを定め、地面に叩き付けるように踏みしめた左足を固定。そこを軸にして右脚へ体重を乗せ、全身の筋肉を捻じり上げたことによって生み出された力を回転運動でさらに増幅。両腕を鞭のようにしならせ、全ての力をハリセンへと伝える。

「おりやあああああああああ！！！！！！！！！！！！」

「きさっ、さて……いぎやあああああああ！！！！！！！！！！！！」

これ以上のものは望むべくもない最高のスイング、最高の打点によって生み出された凄まじい威力。インパクトした瞬間に『へぶっ』

なんて小さな呻きを残し、赤バカは青バカの隣へとめり込んでいった。

「よし、これで一件落着だな」

一息ついて周囲を見回していると、とことことバーサーカーが近付いてくるのが見えた。軽々と飛び上がり、最初と同じようにちょこんと肩に乗っかる。

「ふう、久しぶりに全力を出せた。でも……本来の威力には遠く及ばない」

「お疲れ様。まあ、そんな小さくなってしまっただら仕方ないかもな。俺の魔力量が少ないせいで供給も充分じゃないだろうし」

「む、そんなことは無い。この姿形は悪くないし、主の魔力は……その、好ましいと思っている。充分すぎるくらいだから、心配しなくていい」

「そうか……ありがと。うーん……かなり時間も遅いけど、みんな腹減ってるだろうし簡単に夜食でも作るうか」

「私はそれほど空腹では……ッ!？」

きゆるるーなんて慎ましい音を立てて空腹を訴えるバーサーカーのお腹。朝もあるけど、やはり食事を作った方がいいようだ。赤面する小さな狂戦士の頭を撫でながら縁側の方へと歩いていく。

「むう……不覚……」

なんて呟く彼女の声に頬が緩む。

「これから色々忙しくなりそうだな」

「？」

「まだ、ちゃんとした自己紹介もしてないし、お互いどう呼び合ったらいいのかも話さないといけないし、他にも生活する上で必要な物とか揃えなきゃいけないだろ？」

「うん、そうだな。私も、そう思う」

優しく微笑むその顔は、見る者を癒す女神のよう。セイバーに笑ってもらえた時も嬉しかったが、『狂戦士』の名を冠した美女のあどけない笑みも本当に嬉しかった。

「……………んっ、ごほん！えーっと、その、行こうか」

「はい」

Interlude

激闘の余韻も消え去り、静けさが戻ってきた無人の中庭。聞こえるのは風に吹かれて擦れ合う葉音だけ……………のはずが、小さく弱々しい声が混じってくる。

「げほっ、げほっ！おい……………赤バカ」

「ごふっ……………何か、用か？青バカ」

壁にめり込んだまま抜け出せず、寒風に震えながら必死にダメージ回復に努めるランサーとアーチャーの哀れな姿がそこにあった。自業自得と言ってしまうえばそこまでの話なんだけど。

「……抜けそうか？」

「うるさい。貴様はどうだ？」

「抜けそうにねえから聞いたんだろっが。ちったあ考えるバカ」

「聞いておいてその態度は何だ、この大バカ」

聞く者、見る者が居れば、あまりにも哀れな姿で泣いてしまいそうなやり取り。しかし、そのどちらも居ないので罵り合う声は闇夜に溶けていくだけである。

「あいつら……絶対に俺たちのこと忘れてるよなあ……」

「元を正せば、貴様が私に喧嘩を売ってきたのが原因だろうが!!」

「なっ!?!?てめえが身長ごまかすから喧嘩になっただよ!!」

「だから事実だと言っているだろうが!因縁をつけるのもいい加減にしる槍バカ!!」

「そこまで言うならもっかい測り直すぞこげ茶バカ!!さっさと出るこの野郎!!」

「望むところだバカ者!ここから出られるというならな!!」

「……………はあ……………」

「通りわめき合い、大きな溜め息と共に静かになる。どうやら、ようやく不毛な言い争いの空しさに気付いたらしい。一際強い風が吹き抜け、ひどく物悲しい空気が漂う。」

「なあ、アーチャー」

「何も言つな。私は別に何も感じてなどいない」

「意地張るなよ。一緒に言えば、少しは気も紛れるだろう？」

「どつという理屈だそれは……………」

「いいから、いいから。そんじゃま、いくぞ……………せーの」

「腹減つたー」

「……………」

「てめえ！！一人だけ黙りやがって！何で俺だけが恥ずかしい思いしなきゃなんねえんだよ！！」

「……………ぶっつ」

「ぬあああ！！笑いやがった！このっ、待ってる、今、ぶっ潰してやる……………このっ！くっ、抜けねえ！！」

Interlude out

「おい集まれー。朝飯もあるからしつかりした物は作れないけど、おにぎりを用意したからさ」

冷凍しておいたご飯を解凍し、適当な具を詰めておにぎりを作る。皿に乗せて台所から居間の方に移動すると

「ならば、私は縮めてバサカと呼んでもらおうか」

「呼びやすくして良い感じですよー。あうー、私はどうしましょう…?」

「そうね……アンリ、なんてどうかしら?」

「それ採用ですよー!」

「私はセイバーのままをお願いします」

「んー、私も今はキャスターのままが良いわ」

「ライダーは何か希望がある?」

「私は特に。ただ…真名で呼ばれるのは苦手なので、クラス名のま
まが良いです」

「さて、それじゃあ……最後はアサシンね」

「ん?私か?特に希望はないので、好きに呼んでくれて構わん」

「好きに、ね……では、アサ次郎はどうかかな?」

「小次郎ちゃんの方が良いんじゃない?」

「こじちゃんとか可愛いですねー」

「……………小次郎、と呼んでくれ」

「あの三人、楽しそうですね……………ん？どうしたんですかライダー」

「こっ、こじちゃん…！ぷっ……………くふっ……………」

早速お互いの呼び方を決めていたらしい。えらく楽しそうなので最初から参加できなかったのが少し悔やまれるな。まあ、作る者は作つたし俺も合流させてもらおうとしようか。

「マスター、何やら美味しそうな匂いですがそれは一体？」

真つ先に反応を示すセイバー。鯛焼きの時も鋭く反応していたし、食に対する強い執着でもあるのだろうか？

「ああ、『おにぎり』っていつてな。この中に色々な具を詰めてあるんだ」

「色々な……………。何だか、宝箱みたいですね」

きらきらと目を輝かせながら見上げてくる美少女騎士。その待ち切れない様子に苦笑しつつ、テーブルに皿を置いて自分の定位置に座る。

「作ってる間は会話に入れなかったからな。俺も入れてもらって構わないか？」

「無論だ、我が主」

「むぐむぐ……なるほど、この塩加減がなかなか……」

「ん？セイバー！？ああつ！梅干しに当たったのか！！えーつと水、水つと」

「まったく…梅干し程度で大騒ぎとはセイバーも情けない。どれ…
…ほう、なかなか美味く漬けてあるではないか」

「こんなやり取りなどもしつつ、夜食のおにぎりも綺麗に食べ終わるとは言っても、夕食を済ませている俺はお茶を飲み、食べるのはサーヴァント達が中心だったが。皿を洗って棚に戻し、先ほど決まったらしい各自の呼び方も含め、改めて自己紹介をする。

「えーつと…まずは俺からの方がいいかな？」

「いえ、人数も多いので先に私たちから。こほん、では…改めてサーヴァント・セイバー、真名もあります…ここで明かしてしまうのはちょっと…。呼び方はクラス名をそのまま使ってください」

「サーヴァント・ライダー、真名はメデューサ。真名で呼ばれるのは、少し苦手なので呼ぶ時にはクラス名でお願いします」

「私はキャスター。真名は…その、メディアよ…。ライダーと同じ理由があるから、呼ぶ時にはクラス名でね」

「クラスはアサシン、真名は佐々木小次郎。呼び方は小次郎で頼むゆめゆめ、おかしな呼び方を付けないでくれ」

「クラス・バーサーカー、真名はヘラクレスという。呼び方は色々
と検討してバサカに決まった。気軽に呼んで欲しい」

「とつ、トリになってしまいまふいた……。えつと、イレギュラーク
ラス・アヴェンジャーのアンリマユです。お気軽にアンリと呼んで
くだひゃい！」

ずらりと並んだサーヴァント達の真名も教えてもらうと、この小さ
な英雄たちが本当に凄まじい面々なのだ実感する。いずれも歴史
に名を残した英雄、数々の伝説や偉業を達成した者たちとこうして
話をしているのだ。普通ならば卒倒ものだと思う。

「はあ……本当に凄いやつらを召喚しちゃったんだな……。セイバー
の真名は教えてもらえなかつたけど、いつか『良い』と思えるよう
になったら教えてくれな。そして、キャスターとライダーは苦手な
のにちゃんと真名を教えてくれて感謝してる。ありがとう。すごく
良い名前だと思うぞ」

「マスター……はい、必ず」

「……………真顔でそんなことを言うなんて……ねえ？」

「まったくです。マスターは油断なりません」

申し訳なさそうにしていたセイバーは明るく、キャスターとライダ
ーはなぜか顔を赤くしている。何か変なことを言っただろうか？ひ
とまず、気を取り直して自己紹介に移った。

「それじゃ、俺の番か。名前は衛宮士郎、まだ半人前にもなれてい

ないが一応は魔術師だ。目指している目標もあるけど、時間も遅いし次の時に。呼び方は……みんなの好きなように呼んでくれ。あー、ひとつ条件を出すなら『マスター』とか『主』みたいなかまいった呼び方はしないで欲しい。普通に呼んでもらった方が堅苦しくないからな。何も知らない未熟なマスターだけど、みんな、よろしく頼む」

互いにしつかりと自己紹介して、ようやく一段落した。俺の言葉にそれぞれが笑顔だったり、身振り手振りで反応してくれる。いつの間にか草木も眠る時間になってしまった。鍛錬の続きをするわけにもいかないし、今日はこのくらいにして寝るとしよう。

「かなり時間も遅いし、俺は寝ようと思うけど……みんなはどうする」

「ふあ……あふ。本来ならサーヴァントは睡眠も食事も必要ないんだけど……どうやら、今の状態だと普通に必要になるみたいね……。私は眠りたいわ」

「んー、私も眠いですー」

「みな同じ状態のようだ。あるじ……んんっ！ 士郎の手を煩わせてしまつてすまないが、どこか寝ても構わない場所を教えてくださいな。いだろうか？」

「そうだな……今日は、俺の部屋で全員一緒に休むとしようか。布団をもつ一組敷けば、余裕で寝られるだろうし」

あくびをしたり、目を擦ったりする面々を手や肩に乗せて自室に向かう。いつもは空虚な冷たさしか感じない長い廊下も、小さな英雄

たちと歩く今夜は不思議と温かなものに思えた。夜が明けてからどんな日々が始まるのかは分からない。それでも、今はこの温もりだけを感じていたい。

第二話 状況把握とひと騒動（後書き）

これで書き溜めていた分は全て放出。

この先はちょこちょこ書きながらの更新なので、不定期極まりない感じになるでしょう。

やりたい放題な作品ですが、なまぬるーく見守ってやってください。

第三話 目覚めの朝とまた騒動。(前書き)

相変わらず作者の妄想が反映され、好き勝手に書いてます。

それでも構わない、ドンと来いつてな心の広い方にオススメしたい。

そんな内容で良ければ、先に進んで読んでみましょう。

第三話 目覚めの朝とまた騒動。

第三話 目覚めの朝とまた騒動。

空も、大地も、全てがくすんだ赤に染まった丘に立ち尽くす少女。その眼前には自分の理想を信じ、命を懸けて忠を尽くしてきてくれた者たちが幾人も、幾人も亡骸と化して倒れている。ただ、誰もが幸せになつてほしいと願つて走り続けてきた……だというのに、此処に辿り付いてしまった。何が間違つていたのか、何処で間違つてしまったのか、巡る思考は絶望に染まり、ふと、零れ落ちる自らの血を見て思い至る。

『 そうか……私が、王になつたから……』

誰よりも優しく、誰よりも正しくあろうとした亡国の王は求める。あらゆる願いを叶える聖なる杯を。その手に握つた時、告げる願いはただ一つ。

『 王の選定、あの時から全てをやり直したい』

誰も彼も、この世に生きる者に等しく幸せであつてほしい。涙を流し、悲嘆に暮れる者が一人もいなくなつてほしい。少なくとも、この目に映る人々だけは。その一心で戦い続けた青年が居た。その真意を理解する者は少なく、ほとんどの人間は彼を便利な道具としか見ることはなかった。だが、青年は笑う。

『それでも構わない。誰かの命を救うため、誰かの笑顔を護るためになるのなら、俺はどんな扱いでも構わないんだ』

だが、全てを救うには彼の両手は小さすぎ、彼の力はあまりにも脆弱だった。青年はいつの頃からか十を救うことを諦め、一を切り捨て九を救うようになる。そして、彼が抱いた理想は歪み折れ、摩耗した壊れかけの心は悲しい狂気へと堕ち沈む。

『聖なる杯など必要ない……あの時、あの時代に召喚される、それだけいい。あとは、私が、この手で全てを終わらせる』

『それは違う』と叫ぶ。やり直しを求めるのは間違っている、どんな結果になっても自分が最善と信じて進んできた道を否定するなんておかしい。少女に向かって、届くはずのない思いを叫び続けた。

『どうして諦めるんだ』と叫ぶ。抱いた理想は間違っただけなのに、到底叶えられない願いと理解していても、それでも構わないと走ってきたんじゃないのか。青年に向かって、届くはずのない思いを叫び続けた。

涙が、零れる。どうして伝えられない。こんなにも近くに居るのに、手を伸ばせば触れられそうなのに。ただ一言、『その想いも、選んだ道も、間違っただけじゃない』と伝えたいだけなのに

「ん、ああ……朝、か。夢……だったんだ」

ふと、冷たさを感じたので顔に触れるとそれは涙の残滓だった。夢で見た光景が忘れられず、目を閉じてもう一度思い返す。

「気にしても仕方ないか。さて、朝飯、作らないと……」

昨日、というよりは僅か数時間前の出来事を思い返す。八人の小さな英霊たちを召喚し、サーヴァントとして従えたこと。色々な説明をしてもらったけど、端的に言えばおかしな事態に巻き込まれてしまったこと。

「けど……そう、悪い気分じゃないんだよな」

ゆっくりと天井に向けて伸ばした右腕、そこに刻まれた四つの紋様。弱々しい朝日に照らされてもなお、鮮烈な赤を失わない英雄たちとの繋がり。の証。

「ん、ふあ、ああ……。……ふう、いつもなら、すぐ目が覚めるのに……」

布団よりも柔らかくて温かな感触に、立ち去ったはずの睡魔がゆっくりと戻ってくる。あくびをして、本格的に眠り込んでしまう前に起き上がるうとした時、ようやく違和感に気付いた。制裁したバカ二匹を除いた六人のために敷いた布団に、その姿が無い。

「まさか……この感触って……」

ゆっくりと視線を胸のほうに下げていくと、とんでもない光景が広がっていた。

「んっ……ふみゅ……シロウの……ご、はん……えへへ」

「しろ……しろっ、さん……て、のっても……いいです、か……」

「すう……すう……ますたー、しっかり……かまって、ください……ね……んふっ」

「……………くすくす……ますたー……「うーうー……」

「……ちゅっ、ちゅる……ぴちゃ……ちゅっ、ちゅっ……」

鼓膜を揺らすのは五種類のとろけきった甘い寝言。その響きの心地よさといったら、現実も何もかも消え去って魂がどこかに抜け出ていきそうなものだった。

「　　っ!?!?　　ッ!?!?!?」

声を出さずに叫びを上げるといふ荒技をやったのける。とっさの判断だけで、声帯の動きを封殺しきった自分のことを少しだけ褒めてやりたくなった。必死に混乱を落ち着かせ、完全に覚醒しきった頭で衛宮士郎の置かれている状況を再確認する。胸の上で眠りこける四人。金、黒、青、赤いラインの入った黒の順番で綺麗な髪が質素な色合いの俺の寝間着を彩っていた。

金髪娘さんは姿勢よく仰向けでよだれを垂らしながら睡眠中。幸福絶頂といった笑みを浮かべて、何かを掴もうと空中に手を伸ばしている。

癖っ毛をボサボサに爆発させている黒髪娘さんはうつ伏せ。すりすりとの胸に頬を擦りつけ、こちらもよだれをオポジションに付けて睡眠の真っ最中。

とんがり耳をぴこぴこ動かしながら眠る青髪娘さんは横向きで丸く。一体どんな夢を見ているというのか、やたらと艶っぽい表情で微笑んでいる。

赤黒のしましまフードをすっかり被り、丸まって眠っている銀髪娘さん。起きている時に発しているほんわかオーラはどこへやら、妙に黒い雰囲気振りまきながらクスクスと笑っている。フードの影になり、表情が見えないのでかなり怖い。

「問題なのは……」

見える範囲に姿はなく、かろうじて視界の端に紫色の髪を見止めることができる娘さんだろう。首筋には生温かい温度と吸われる感。頸動脈の辺りを甘噛みしたり、舐めたり、吸ったりしているようである。見ることはできないが、それはもう幸せそうな顔で吸い付いていると容易に想像できた。たぶん、この想像は外れていないと思う。

「ライダーを何とかするのが先決か……そりゃ」

「むー……みゅっ!?!」

ひと際強く吸い付いた瞬間に素早く捕獲する。まあ…眠っているとこころを不意打ちだから逃げられる心配など一切ないのだが。何とも形容しがたい鳴き声を上げたライダーをそっと持ち上げ、顔の前ま

で持ってくる。

「あう……しろつ……？なにをするのですか………あつ？」

持ち上げた拍子に絹糸のような紫髪が揺れ、騎乗兵の素顔が露わになった。サーヴァントの女性陣は誰もが現実離れた美貌の持ち主だが、ずっと半面をマスクで隠していたライダーの顔は、頭が真っ白になるほど美しかった。とりわけ、深く鮮やかな紫を湛える二つの瞳は極上の宝石も霞むほど美しい。

「ライダー……本当に、綺麗だな……」

「へっ？えっ、あつ！？マスクが！？いけない………土郎！！」

「ん？どうかしたか？」

「………あれ？あの、土郎……大丈夫、ですか……？身体が固まる………とか、石になる………とか、何か問題は………？」

「全然、問題ないけど………なんでさ？」

俺に掴まれ、宙吊りになったまま慌てふためいた理由の説明を始めるライダー。俺もすっかり忘れていたんだが、彼女は石化の魔眼で有名なメデューサである。その威力は凄まじく、わざわざ目を合わせる必要は一切無い。彼女の視界に入りさえすれば、全てを問答無用で石化させる。恐ろしく高い対魔力、魔眼に対抗するための高度な魔術礼装ですら即死を防ぎ、かろうじて石化を押し止める程度。この威力を無秩序に振りまかず、発動による多大な魔力消費を防ぐため、普段はあの半面を覆うマスクで封印を施しているらしい。

「なるほど。それで、どうして封印のマスクが外れているんだ？あと、魔眼が発動しているはずなのに、なんで俺は何ともないんだ？」

「えー……それは、その……寝てる時に邪魔になって、外しちゃったのではないかと……。一応、魔眼は発動してるみたいですが……ほとんど魔力も消費されてませんね……」

「んー、小さくなって召喚されたせいで調子が悪くなってるんじゃないか？」

「そう考えるのが妥当ですね。まあ……これで、普段の生活で魔眼を気にする必要が無くなりましたし、何よりも士郎に被害を及ぼさずに済むので私は嬉しいですよ」

英霊は『宝具』と呼ばれるそれぞれを象徴する強力な武器や技、俗っぽい言い方をするならば必殺技を持っており、それを失ったり、使えなくなるといふ事は相当な弱体化に繋がるというキャスターの説明を思い出した。その宝具が正しく機能しなくなったというのに、俺のことを真っ先に心配したライダー。初めに見せた真っ青になった顔、そして今見せた心底嬉しそうな顔、どちらもすごく嬉しくて……ライダーの小さな頭をそっと撫でた。

「んっ、んう……もう、士郎に撫でられるのは気持ち良くてクセになるから困ります」

「そうか？こう見えて痛くしてしまわないか、嫌な気分になんかせてしまわないか、結構心配してるんだぞ」

マスクに覆われていた時には分からなかった表情のちょっとした変化、嬉しそうに細めた瞳や薄紅色に染まった頬などがよく分かる。

魔眼なんか無くても、これだけで石化してしまいそうだ。

「おっ？結構、時間が経っちゃったな……いい加減、そろそろ動かないと。桜も来ちゃ……って、しまった！ちよつと！みんな起きてくれ！！」

「どうしたんですか？」

「桜っていう妹みたいに思ってる後輩の女の子が来るんだ。今朝は自分が朝飯を作るんだって言ってたから、そろそろ到着する時間なんだよ」

昨夜からのドタバタで完全に忘れていたが、桜だけじゃなく虎……もとい、藤ねえも来るのに何も対策を立てていなかった。とりあえず、八人全員を集めてどこかに隠れてもらわないと……不幸中の幸いといえば、この小さなサイズのおかげで隠れ場所に困らないことか。

「その方は魔術関係とは……」

「全くの無縁」

「ですよね。分かりました、私も協力します。さあ、セイバー起きなさい！いつまでだれを垂らして……って、ちよつ、私の髪は食べ物では、食べないでー！！」

すぐに事情を察してくれたライダーはすぐに行動を始め、セイバーを起こしに行くが……寝惚けたセイバーに押し倒され、髪の毛をはむはむされている。微笑ましい光景なので見ていたいが、本当に時間の余裕がないので残りの三人を起こす。

「キャスター、バサカ、アンリ！早く起きてくれ！！」

「ん、こんな朝っぱらから騒がないで……大声出さなくても、ちゃんと起きたわよ……おはよう」

「くう、う……おはよう士郎。何か、問題でも起きたのか？」

「……はう！？ま、まままますたー！？わっ、私は何もしてませんよ！？おっ、おねしょなんてしてません！！」

「よし、起きればいいんだ。そしてアンリは落ち着こうな？おねしよしてないのは分かってるからさ」

「へっ！？はっ、あうううう……恥ずかしいです……。あと、おはようございます」

「……士郎、セイバーを完全に起こしてきました」

「だから謝っているではないですかライダー……。おはようございます、シロウ」

「ありがとな、ライダー。あとで髪洗ってやるから少しだけ我慢してくれ。そして、みんなおはよう」

それぞれ個性的な反応を見せつつ、これで部屋にいる全員が起床したことになる。姿の見えない小次郎とすっかり忘れていた赤青コンビは後で捕獲するとして、まずは目の前の五人を何とかしなくては。

「それで、だ。ライダーにはすでに話してあるんだが」

ざっくりと事情を説明し、少しの間だけ押入れの中に隠れてほしいと頼み込む。

「なるほど、ね。事情はよく分かったわ。だけどね……わざわざ隠れる必要はないわよ」

「キャストの言う通り。私たちを『霊体化』させれば済む、とても簡単な話だ」

「れいたいか？」

「やっぱり知らなかったのね……では、私が説明します。私たちサーヴァントの身体はエーテル体、要するに魔力で構成されていて、士郎からパスを通して供給される魔力で維持されているの。何かしらの要因で小さくなり、現界に必要な魔力が極めて少なくなっている今の状態でもそこら辺は変わってないみたい。サーヴァントに供給する魔力を必要最低限まで絞って完全に姿や気配を消させたり、消費魔力を節約する手段。それが『霊体化』よ」

魔術の知識に長けるキャストが要点をしつかり押さえて分かりやすく説明してくれる。なるほど……確かに、考えてみれば英霊とはすでに死んでいる者たちであり、こういう言い方はしたくないが凄まじく強力な幽霊みたいなものだし。

「よく分かった。キャスト、霊体化のやり方を教えてくれ。頼む」

「あつ、士郎。その前にやることがあったわ。」

「ん?」

「何か紐状の物を手首に巻いて両手を出して。その手の甲にある令呪、隠しようがないから日常生活で支障が出るでしょ」

「紐状って……ああ、そう言えばこちら辺に藤ねえがもらってきたミサンガがしまつてあつたはず…よっ、と…これでいいか？」

「ええ、上等よ。これに認識阻害の効果を付加すれば、手袋なんかでわざわざ令呪を覆い隠す必要がなくなる。小さくなったことでサ―ヴァントとしての力は弱くなつたけど、『私自身』に刻み込んだ魔術まで弱体化するわけじゃない。探索、感知に特化した高位の魔術師が集中して見ない限り、看破することは困難だと保証するわ」

そう言つて、俺の手にちよこんと乗つかつたままキャスターが魔術を行使する。俺の知らない言葉を一言呟いただけで、凄まじく精巧で複雑な術式が成立した。こんなに小さくて可愛らしい姿形で、やはり神代に生きた伝説の魔術師であることに変わりはないのだ。

「あつ、ありがとう」

「まったく……半人前と言つてたけど、ほとんど素人と同じね…。危なっかしくて見てられないし、落ち着いたら基本から魔術を教え込むから覚悟しておきなさい。それで霊体化のやり方だけど、難しくはないわ。まずは士郎から私たちに繋がるパスと、流れていく魔力を意識して」

「分かった、やってみる 同調、開始」

目を閉じ、言われた通りに意識を集中して身体の状態を確認する。すると、いつも魔術回路を形成する辺りから七つの『路』が外に向

けて作られていること、そこから魔力が流れ出ていることが分かった。

「ん……？パスが七つしかない……？」

「えっ？それはどういうこと？士郎、ちゃんと説明して」

「いや……八人と契約してるんだから八つのパスが通ってるはずだろ？だけど、俺自身に直接繋がってるパスは七つなんだ。もう一つはすごく細くて……何か、別の物を経由してるような……感じてさ……」

「……………どういふことかしら……？気にかかるけど、桜ちゃん？
が来るまで時間が無いのよね。仕方ない……詳しい事情把握は後に回すわ。パスと流れが掴めたのなら、それを絞るイメージをするだけよ」

キャスターが言う通りに流れていく魔力を絞るイメージを作り上げる。必要最低限の流れになったことを確認して目を開けた。

「あれ？キャスター！？みんなも!？」

『心配しなくても、ちゃんとここにいるわ。もちろん、バサカモライダーもアンリもね』

『取り乱さなくても士郎を置いたまま消えたりはしない』

『まったくです。仮に消えてしまったとしても、意地でも戻ってきてみせます』

「土郎さんと会ったばかりだったというのに、消えてられないですよ」

頭の中に直接入り込んでくるようにキャスター達の声が聞こえる。完全の姿は見えぬ、気配も全く感じられない。なるほど…これが霊体化か。ずいぶんと便利な能力だな

「って、なんでセイバーは普通に見えてるんだ!？」

「すみません…私は、その…霊体化できないんです」

きつちりと実体を保ったまま、ちょこんと申し訳なさそうに正座しているセイバー。俺が感じた細いパスはセイバーとの物だったのか……パスが経由している『何か』は感覚的に俺の中に存在しているみたいだし、すごく気に掛かるが今は時間が無い。それに、考えてみれば小次郎に赤青コンビも確保しないとイケないし。

「分かった。詳しい事情はあとで聞く。セイバーは…えっと…よし、この上着のポケットに入れていてくれ。一人で残していくわけにもいかないからな」

「分かりました。では、失礼します」

普段は使うことが少ない上着を羽織る。大きめのサイズでポケットも多いのでセイバーを隠したまま行動するのにちょうどいい。衝撃や振動を少しでも和らげるため、怪我をした時のために常備している柔らかいガーゼを敷き詰めておく。

「苦しかったり、痛かったりしないか？」

「こんなにしなくても大丈夫なのに……でも、ありがとう、ごさいます。とても快適です」

真つ白なガーゼに包まれて恥ずかしそうに俯くセイバー。その姿に俺まで照れくさい気分になってしまった。ただ、姿が見えないキャスター達の何とも言えない不穏な沈黙が怖い……。下手に触れたら大きな災厄を引き起こしそうだったので咳払いをしつつ部屋を出る。

「えーっと、魔力を絞ってるから小次郎たちも霊体化してるんだよな？」

「……………まあ、追及はあとにしましょうか。そうね、セイバーの分を除いた七つのパスを全て絞ったのなら霊体化してるはず。実体化させない限りケンカやイタズラのしようもないし、放っておいても良いと思うわ。そのうち集まってくるわよ」

「そういうもんなのか？」

「そういうもの。元の身体や能力のままだったら問題だけどね。仮に霊体化できていなくても、今の状態なら大人しくしてればよく出来た人形と思われておしまいよ」

キャスターと会話しているうちに、居間に到着する。同時に玄関の引き戸が開く音が聞こえ、俺の通う学校である穂群原学園の後輩、弓道部に所属する間桐桜の到来を告げた。

Interlude

『佐々木小次郎』

かつて、私の生きた時代の寝所といえば固く冷たいものと相場が決まっていたものだが、この時代はそうではない。私が横たわっている柔らかく温かな寝具、様々な汚れもなく、綺麗に整えられた家屋、なんの因果によるものなのかは知らないが、再び得ることになった身体で感じる『今』は、昔とは比較にならないほど恵まれた時代になっている。

「とはいえ……このように快適な環境でも、昔と同じように目覚めてしまうとは……やれやれ、習慣とは恐ろしいものだ」

身体を起こして見回す部屋の中はまだ暗い。夜明け前に目覚め、日がな一日刀を振っていた生前の習慣通りに起きてしまったらしい。当然のことながら『ものふ』の字が名前に入る我らが主殿は眠りの中、となれば他の者たちも眠っているはず……しかし、用意してもらった布団の上に居るのは私だけ。

「ふむ、確か……眠る前まではこの布団でごろごろしていたんだがな……」

暗い部屋の中で目を凝らすと、仰向けに眠る主殿……いや、士郎の胸の上に四つの小さな影。寝相の悪さであそこまで移動したとは考えにくいので、どうやら私が寝静まったあとに移動したらしい。見えている影だけでは寝る前に部屋に居た人数と揃わないが……まあ、士郎の近くに居るのは確かだろう。

「まったく……いじらしいというか、ずいぶんと仲の良いことだ」
わざわざ近くまで見に行かずとも、心底幸せそうな顔をしていることが容易に想像できる。昨夜、布団を抜け出して士郎の胸の上までこっそりと上っていった姿を考えると、思わず苦笑が漏れてき

てしまった。このまま士郎たちが目覚めるまで過ごしてもいいんだが、せつかくなので少しばかり歩き回ってみようと思う。

「この快適な寝所から抜け出すのは少しばかり心残りだが……あのバカ二人がどうなったのかも気に掛かる」

眠る前に解いておいた髪を元通りに纏め上げ、通れるくらいに襖を開けて廊下へと出ていく。よく手入れがされていたおかげで小さな身体でも存外楽に開閉できたのは運が良かった。さすがに障子を破って出るわけにはいかないだろうからな。

「一所に留まり、ただ時を過ごすのも慣れてはいるが…せつかく、こうして与えられた身体だ。有用に使ってたらねばもつたいない」

冬の季節に相応しい冷気に満たされた廊下を進んでいく。「家」とはそこに住む者の心や人柄を表すと誰かが言っていたが、こうして薄闇に染まり、静まり返った光景からは何も感じられない。寝る前に感じた温もりとは正反対の、ひどく、空ろな印象が強くなっていった。どちらも士郎の本質なのだろうが、こちらの方がより深い位置にある。そう、感じた。

「どうやら……我が主殿は一筋縄ではいかない者のようだ……。昨夜の姿を見る限りでは意思の強い、良い瞳をした少年なんだが……さて、これからどうなることやら」

居間の近く、中庭を見渡すことができる位置まで到着する。このまま外に出たいのだが、しっかりと鍵が掛かり、昨夜の騒動でアーチャーとランサーが割ったガラスはすでにキャスターの手で修復されている。愛刀をもって斬り割ることは容易いが、わざわざ怒られることをするのは得策ではないし、あの女性陣を敵に回すほど命知ら

ずでもない。

「これは参った……こちらの意思による霊体化は……むう、できないようだな……。やれやれ、仕方がない……今は、家の中を見て回るだけにしておこうか。あとで自由に出入りできないか士郎に尋ねなくては……」

一瞬、脳裏によぎったガラスを斬り割る選択肢を封印し、歩みを再開する。外に出ることは叶わなかったが、結果だけを言えば見る物全てが目新しくて楽しめた。あちらこちらと歩き回り、大体の部分を見終わった頃、流れ込んでいた魔力量が絞られて身体が霊体化する。

「む？どうやら、士郎の方で霊体化させるのは可能らしいな……だが、霊体化させるとは何かあったと考えるべきか……」

敵が入り込んだ気配は感じられなかったし、パスを通して感じる士郎の様子からも危機的な状況は感じられないが……念のため戻ってみるとしよう。

Interlude out

Interlude

『弓兵と槍兵』

衛宮士郎と佐々木小次郎が寝静まり……セイバー、ライダー、バサカ、キャスター、アンリマユの五人が示し合わせたように士郎を指そつと起き上がる。それぞれが同じ目的を持っていることを感じ取り、共感と団結心と敵対心の入り混じった複雑な心境と共に見つ

め合っていた頃。

「はあ……やつと、抜け出せたな……。あん？何やってんだ？」

「見て分らんか？壁に空いた穴の修理だ」

ようやく叩き込まれた壁から抜け出し、ぐったりと地面に座り込んでいたランサーの目に映ったのは、ボロボロの格好のまま壁に何本も剣を突き刺して梯子代わり、足場代わりにし、高い魔力の込められた剣を穴の周囲に設置しているアーチャー。

「とてもじゃねえが『修理』には見えないな。むしろ、剣をぶっ刺してるから傷が増えてるように見える。その剣で直せんのか？」

「これは足場が必要だったから刺しただけだ。下りていく時に順番に直していく。この剣は特別でな……。『欠損を埋める』という特殊な概念に特化している。発動させると無機物、有機物に限らず欠損している部分を綺麗に埋めることができるんだ。だが、あくまで『埋める』だけで対象物が粉々になっていたり、真っ二つになっていたり効力を発揮しない。有機物……例えば人体などに使用した場合は、傷自体は『埋まる』が失われた血液、切断されて機能を失った神経や筋組織などの修復などは不可能。使い勝手が悪いと敬遠されていた概念礼装だ」

「……………話が長え……………」

「……………貴様……………」

使用している礼装の説明をたった一言で切り捨てる槍兵。確かに長い説明ではあったが、話を振っておいての仕打ちに顔を引きつらせ

る弓兵の心情は察して余りある。鷹のような目が殺気で鋭さを増し、両手から蒼白い魔力の火花が弾けている。

「まったく、カリカリすんなよ。ただの軽口じゃねえか」

「……………ッ！……………くっ、まあ……………いい。『礼装発動』」

「おおっ！？すげえな……………使い勝手が悪いとはいえ、綺麗に塞がるもんだ」

「道具は使い手の技量、工夫、発想によっていくらでも真価を発揮させることができる。己の力不足を道具のせいにして、『使い勝手が悪い』と捨てるのは愚か者の所業だ。この礼装は条件さえ合っている欠損ならば即座に埋める。つまりは……………」

「出血し続けて体力を奪ったり、動きに僅かな齟齬を生み出す程度の傷を即座に塞ぐことに役立つってわけか」

「それだけではない。復元呪詛を用いてどんな傷も完璧に回復させる輩を相手にする時には、この礼装で先に傷を『埋めて』しまえば機能の完全な回復など望めん」

「なるほど、な……………くっ、くっ。ずいぶんと饒舌なこつた。すっかり機嫌も直ったみたいだな」

「む……………まあ、今回は勘弁してやる。それに、次に貴様と余計な騒動を起こしたら……………一切の情けも容赦もなく滅殺されそつだ」

「ああ……………それは違いねえ……………。今回だって初っ端から宝具をかましてきたからな……………次は何をしてくるのやら」

再び斬り合いへと発展するかと思われた雰囲気はランサーの緩んだ態度と空気であっけなく霧散する。寒空の下、和解したのか妥協したのか何とも言えない空気を作り上げる男たち。

「……………あー、その、なんだ…そろそろ家ん中に入らないか？さすがに寒い」

「そう、だな…。壁の穴も修復したし、また騒ぎを起こすつもりもない。家の中に入っても文句は言われないだろう」

「そんじゃま、さっそ……………んぎゃあああああああ！！！！！！！！！！」

「ランサー！？」

とことこ歩いて屋敷のそばに近付いた瞬間、ランサーに凄まじい電撃が襲いかかった。しばらくバチバチと火花を散らし、ぽてっと地面に崩れ落ちる蒼……………黒こげの槍兵。

「大丈夫……………ではなさそうだな…。これは一体……………」

『「」

黒い物体と化した男をあつさりで見限り、目を閉じて地面に片手をつける弓兵。何かを小さく呟き、意識を集中させたまま沈黙する。

「なるほど…特定対象の侵入を阻む結界か。これほど精巧かつ強力な物を展開し続け、結界に触れたというのにさらなる迎撃がないことから考えると……………キャスターの持つ何かしらの魔術礼装によるものだろう」

「……………ぐっ、がふっ…だから…てめえの、話は…なげえ、んだよ…」

「ほう、話せるほどのダメージで済んだとは。本来であれば消し炭になっただけでも不思議ではない威力だっただろうに…このように小さくなって弱体化していたようだ。範囲としてはそうだな…最大まで展開しても庭を含め、この家の敷地を護るのが精一杯といったところか」

「……………そうかい。長々と高説を垂れたださり誠に光栄だよ。バカヤローめ。で？家には入れねえ、このナリじゃ他に行き場所もねえ、どうすんだよ？」

「たつたの数動作、一分にも満たない僅かな時間を費やただけで家への侵入を阻む結界の全てを看破してみせたアーチャーの名を冠する男。おおよそ『弓兵』とは思えない挙動ではあるが、割と深刻なダメージを負っているランサーは気付かなかつたようだ。悪態を吐きつつ、家と自分たちの主が起きてくるまでの時間をどう過ごすのか問う。」

「それについては問題ない。向こうの方に土蔵がある。さすがのキヤスターと言えど、あそこの存在までは気が回らなかったようだ。結界の効果範囲から外れているから出入り自由だ」

「先にそれを言えってーの……………」

「仕方あるまい。君が結界に引つかかるまで私も存在に気付かなかつたのだから。仮に気付いていたとしても、言う間もなくさっさと進んでいったのは誰かな？」

「……………あー、はいはい！俺が悪かったよ！！…たく…ん？お前、今…『君』って言ったか？」

「むっ……………知らん、な…」

「はっ、あははははは！…くっつ、いやはや……………ずいぶんと態度が柔らかくなっつてんじゃねえか！いいねえ、最初は気に食わなかったが喧嘩してみるもんだ！」

「……………はあ…おかげで、ずいぶんと酷い目に遭っているがな」
本人たちが自覚しているかどうかは分からないが、傍から聞いていると仲の良い男同士が憎まれ口混じりに会話を楽しんでいるようにしか聞こえない。すっかり気を良くしたランサーが嫌そうな顔のアーチャーと肩を組み始めたから、余計に微笑ましく見えてしまう。

「うっし、動けるくらいには回復したし、その土蔵とやらに行こうじゃねえか」

「土蔵には行くが、君は中に入るな。私が戻ってくるまで外で待機だ」

「はあ？何でだよ！？」

「キャスターの結界の効力範囲外ではあるが、他に何か仕掛けがある可能性もある。私はそういった物を無効化できる手段を持っているが、君には無いだろう？土蔵の中で防寒に役立ちそうな物を持ち出してくるから待機しているんだ」

「その手段とやらを二人分出せばいいじゃねえか。そうすりゃ揃っ

て土蔵の中に入れるんじゃないのか？」

「生憎だが、一人分しか無い。そして、私だけが土蔵の中に居るつもりもない。長時間に渡って中に留まっただけでは感知されるかもしれないからな」

「ふうん？まあ……仕方ねえ、か。お前の言う通りにしてやるよ。寒いんだし、早めに済ませてこい」

アーチャーの言葉の端々から土蔵に行かせたくない雰囲気を感じ取り、少しだけ訝しげな顔になるランサー。すぐに表情を緩めるが、探るような目つきは変わらないまま。その視線を受けつつ、土蔵の中へと消える紅い背中。

「なーんか隠してんな……あれで隠し切れてるつもりなのかねえ……ま、言いたくなりゃ自分から言うか」

「何をぶつぶつ言っている？そら、お前の分だ」

「おっ、と。何だこりゃ……って、ローブか？」

「余った布を使って簡単に作ってみた。少なくとも、無いよりはいいくらいマシだろう」

「お前……本当にどこの英霊だよ……双剣を使い、妙な力も使う。おまけに、こんな裁縫までこなすなんて」

「さあてね。ノーコメント、だ。ほら、散々『寒い』と言っていただろう？さっさと着て寒風の影響を緩和したらどうだ」

「いや、まあ……着るけどよ……。」

肩をすくめながら薄く笑うアーチャーお手製のロープを身に付け、
釈然としない表情のまま中庭に植えられた木の根元に腰を下ろす。
少し離れた場所に同じようにロープを纏ってアーチャーが座った。

「まさか、召喚された初日に野宿することになるとは思わなかった
ぜ」

「何度でも言うが、自業自得だ。」

太陽に世界を照らし出す役割を譲り渡すため、天空で淡く輝いてい
た月がゆっくりと傾いていく。その傾きが大きくなるにつれ、深海
から水面へと浮き上がっていくように少しずつ夜の闇も薄れていく
だろう。

冷たい風が当たりにくい木の根元に寄りかかり、黒い布で作られた
ロープで頭から足先まですっぽりと覆った小さな二人が眠っている。
何かの拍子に体勢が崩れたのか、白髪の青年の頭が、蒼髪の青年の
上腕辺りに当たってしまっていた。その光景は、仲の良い兄弟がう
たた寝をしていると表現するのが最も合う。恐らく、二人が起きて
いれば『誰がこんなヤツ』だの『ふざけるな、願い下げだ』だの喚
き散らして否定するだろうが。

斬り合ったり、殴り合ったり、吹き飛ばされたり、口喧嘩したりと
盛り沢山の騒動を起こしたことでよほど疲れていたのか、二人はこ
の後、自分たちの身体が霊体化する時まで昏々と眠り続けたのだっ
た。

玄関の引き戸を開けながら『失礼します』と小さく声をかけ、軽い足音を響かせて居間に姿を見せた制服姿の女子。艶のある長い髪の毛の左半分をリボンで纏め、その名の通り淡く可憐な印象を周囲に与える少女は、台所に立って料理の準備をする俺を見て目を丸くしている。

「あれ？先輩もう起きてたんですか？」

「ああ。どういうわけか、早めに目が覚めちゃってさ。ちょうど桜が来そうな時間だったし、ここ最近は起こされてばかりだったから今日は出迎えてやろうと思ったんだよ。」

「そうだったんですか……嬉しいですけど、少し……残念です」

「ん？すまん、ちょっと聞き取れなかった。もう一度……」

「えっ！？あつ、その……なつ、なんでもありません！それより……えっと、おつ、おはようございます先輩……」

「あ、ああ……おはよう、桜」

食器を置いた時の音に重なってその声が聞き取れず、謝りながら振り向くと桜は僅かに俯いて残念そうな表情。何か大切なことだったのかと問い掛けようとすると、顔を赤らめて取り乱してしまった。その勢いのまま、すっかり忘れていた朝の挨拶を交わす。

「あつ、料理のお手伝いをしますね。少し待ってください、ちゃちゃっとエプロン付けちゃいますから」

「桜一人にやらせてしまってたし、今日くらいは俺に任せてくれてもいいのに」

「そういうわけにはいきません。先輩と台所に立つのは楽しいですから。それに……先輩の一番弟子としては、まだまだ料理のことを教えてもらわないと」

桜に起こされる時には食事の準備も大体終わってしまっていたから、こうして朝飯を作るために台所に立つのは数日ぶりとなる。今日くらは桜に休んでほしかったんだが、優しい笑顔と一緒にこんなことを言われてしまつては何も言えない。いや、その笑顔と言葉に心臓が跳ねてしまつて、言葉が出てこなかった。

「先輩？どうしたんですか？」

「あ、いや……何でもない。えーっと、とりあえず始めるか」

「はい！」

最初の頃は食器や料理道具を洗つたり、棚にしまつたりするのが精一杯だった桜も……今では一人で様々な料理を作れるほどに上達している。こと、洋食関係に至つては俺よりも上手くなつているんだから侮れない。最初こそ俺が教えていたが、その後の上達は桜自身の努力や資質によるものだ。もう、教えることなんて何も無いけど……それでも、この先も桜に頼られるように俺も腕を磨かないと。

『あつ、あのように胸が揺れるものなのですか……！？』

『そりゃあ……あんなに大きければ揺れるでしょうよ』

『うむ、揺れるな。私もこの姿で召喚されて、文字通り『身を以て実感した』』

『揺れますね。私の場合、持ち味を活かすために高速で動き回るので余計に』』

『実は私も……』』

『アンリもですか！？しかし、貴女は私と同じだとばかり……！！』』

『せつ、せいばーさん！？くっ……くるしいですう……』』

『落ち着きなさいセイバー。アンリの首を絞めたって膨らむものじゃないわよ。アンリの着てる服はぶかぶかの大きいサイズだから、身体のラインが分からないのは仕方ないじゃない』』

『くっ、うつうつうう……なぜ私だけ……そうです！シロウのご飯をたくさん食べればあるいはっ……！』』

『いや、セイバー……その、言にくいのだが、私たちは英霊だ。生前の肉体、命ある時ならばともかく、今の私たちには成長という要素は存在しない』』

『………分かっていきますよバサカ……でも、でも、少しくらい希望を抱いても良いじゃないですか……』』

料理に集中したいんだが、俺にだけ聞こえるこんな会話があつては集中しようがない。ポケットに入ったままのセイバーと、霊体化しているので見えないが近くの棚の上に座るキャスター達の会話であ

る。どうしても離れたセイバー達が会話でき、ポケットの中では分
るはずもない外の様子をセイバーが把握し、その内容を俺が聞けて
いるのか。その理由は桜を出迎える前にキャスターから各自に配ら
れた魔術礼装の効果によるものである。

キャスターの説明によると、この複雑な紋様が刻まれたブレスレッ
ト型の魔術礼装は所持、または着用している者同士の感覚を共有さ
せ、念話の機能まで備えているお役立ちアイテムらしい。さらに、
一対一である必要はなく、持っている者を増やした分だけ様々な情
報を共有できるとのことだ。ちなみに、ローブの中からこの礼装を
取り出すキャスターを見て、とあるキャラクターを思い出したのは
内緒だ。

こんな会話を聞いてしまっているからどうしても視線がそちらに行
ってしまう。となりでテキパキと動く桜、エプロン、制服などいく
つもの障害を経てもハッキリと視認できる膨らみ、その挙動から一
動作遅れて動く柔らかさそうな……

『ふふっ、やっぱり士郎もちゃんと『男』ねえ』

『まあ、士郎も男である以上、仕方あるまい。健全な証だ』

『…………… たった今、初めて『元の大きさだったなら』と思いまし
た……………』

『士郎さんが獣になりますっー』

『シロウ…そんなに大きい方が良いのですか…………… いいです、私はマ
スターの剣であり盾ですから……………』

「ぬあああああああああ！！！！！！！！！！」

どうやら俺の見ている光景や考えの一部が漏れ出してしまっていたらしい。自分の意思で思考や感覚の共有を遮ることもできると聞いていたが、気を抜いてしまったのが原因のようだ。恥ずかしさが臨界点を超え、思わず口に出して叫んでしまった。

「ひゃあっ！！！？せつ、先輩！？どうしたんですか！？私が何か失敗でも…」

「いつ、いや…桜は何も悪くないぞ、うん。すまない…えっと、ぼんやりと考え事してたらつい、口に出てしまっただけなんだ」

「そうなんですか…？」

「そうなんです」

「考え事ってその…何を考えていたのか教えてもらえたりしますか？」

何とか取り繕うとして言った言葉に桜が追及の手を伸ばしてくる。まさか、こういう反応が返ってくるとは思っていなかった。焦りが頭の中を満たし、真っ先に思い付いた言葉を口にしてしまった。

「その…あれだよ、桜のエプロン姿って改めて見るとよく似合ってるなーとか、良い奥さんになるなーとか、そんな事を考えてたんだ」

「せつ、先輩…！？」

言葉を声にして発してしまつたら、どんな手段を用いても消すことはできない。まして、あれだけ大きな声ならば余計に。繕いの言葉も浮かばず、後悔と自責の気持ちだけに満たされて沈黙する。

「あの……先輩……わたし……」

「すまない。こんな事を言つても迷惑なだけだよな。嫌な気分になさせてしまつて、本当にごめん。桜は休んでくれ、あとは俺がやっておくから」

おずおずといった声色で桜が話しかけてくるが、それを封じ込めるように立て続けに言葉を重ねて作業に没頭しようと

「嬉しい、です」

「へっ？」

「先輩に、そう言つてもらつて……わたし、すごく嬉しいです」

俯き、長めの前髪に隠されて表情の全てをうかがい知ることにはできないが、僅かに見える頬が真っ赤に染まっている。桜の言葉がゆっくりと頭に浸透して、ようやく理解に至つた時、身体中が発火したように熱くなつた。

「そっ、そっか……喜んでくれたなら良かった……。その……料理の続き、やるっか」

「はっ、はい！」

二人揃つて真っ赤になり、いつもよりもぎこちない動きで朝食作り

を進める。自分の弁当に入れる分とごまかしてセイバー達の分のご飯も用意し、食卓も全て整えて作業を終えた。我が家に襲来する虎が到着する前に制服へと着替えるべく部屋に戻る。

「はぁ……」

溜め息を吐きながら部屋着を脱ぎ、替えの下着や制服の用意をする。ちなみに小さな少女剣士はまだハンガーにかけた部屋着のポケットの中。妙に静かだったので何も言わず着替え始めてしまったけど……霊体化している他の連中と違い、見つかったらどうにも言い訳できないので仕方がない。

『ずいぶんと気疲れしてるみたいじゃない』

「キャスターか……。さっき着替えるから外に出てくれって言わなかったっけ？」

『失礼ね、ちゃんと外に居るわよ。これは礼装を通しての念話』

「それなら良いけど……どうかしたのか？」

『用件は簡単。今日は』

『俺らも一緒に『学校』つつーのか？そこに行くってことだ』

「誰の声だよっ!？」

『おいおい、そりゃあんまりだぜマスター……。夜にあんたとバサカがぶつ飛ばした二人の蒼いヤツだよ。紅い槍を振り回してたほう。召喚した時に自己紹介はしたと思ったんだがな……。ランサーのサー』

ヴァント、真名はクー・フリーン』

かなり落ち込んだ様子の念話が聞こえてくる。そこまで言われてようやく思い出した……考えてみれば、ランサーとまともに話すのはこれが初めてではないだろうか。姿が見えないのは霊体化状態でキヤスターたちと一緒に廊下に居るからか。

『ほれ、お前に至っては一度たりとも自己紹介してねえだろ？一言くらいやっつけよ』

『……………アーチャーだ』

『本当に一言で済ますなよ…』

『なんだか漫才って言うんですか？あれを見てみたいですよ』

『正直……いえ、ただの捻くれ者みたいですね。それよりもどこか覗ける場所は……』

『くつくつく、面白い男たちだな。ああ…ランサー、騒ぎを鎮圧するためとはいえ昨夜はすまなかった。身体の方は大丈夫？』

『おう、なかなかキツイ一撃だったぜ。今まで戦ってきたヤツん中でも、あれだけ強力な宝具を持つてるのは居ねえよ。威力だけみれば対人宝具としちゃ最高ランクじゃないか？』

『そういうランサーの宝具も相当な代物だと思う。一度しか見えないけど、恐らく事象の因果すら捻じ曲げる属性の一撃じゃない？』

『バサカ……お前とは酒でも飲みながら話してみてえな』

『ふふっ、望むところだよ』

一人が話し始めると次々と参加者が増えて、全く話が進まなくなる。ひとまずランサーと少しだけ話し、複雑な感覚を抱いてしまふ白髪の男…アーチャーの一言を聞いたので良しとする。

「あーもう、最初に何の話をしていたか分からなくなったし、収拾もつかなくなっただじゃないか…。えーっと、紅い服を着て、白い髪を立ててたのがアーチャーってことか？ランサーもアーチャーも、二人ともこれからよろしくな」

『おうよ、こうして妙な契約を結んで、状況に置かれたのも何かの縁だ。楽しくやっていこうぜマスター』

『……………』

「さて、いい加減に着替えないと…」

「すみません、シロウ、気持ち良くてすっかり眠っています……………」

全ての衣服を脱ぎ捨て、新しい物を手に取った姿勢のまま固まる俺。こしこしと目を擦りながらポケットから出てきた状態で固まるセイバー。ああ、眠り込んでしまっていたから、静かだったんだな。見開かれたままの綺麗な翡翠色の瞳、少しずつ赤みを増していく白く滑らかな頬。俺の全身も頭も急速に沸騰していく。ああ、きつと、真っ赤になって見えてるんだろう。

「その、セイバー……………これはな、事情があるんだ……………」

「シロウ……あの、私は男性の身体を見たからといって、大声を上げるような女性らしさは持ち合わせていませんが……その、そろそろ隠しては……どうでしょう?」

「すっ、すまん!その、すぐに着るから!!えっと……ああもう、向きが逆とか!」

学校に向かうために出発する時間は迫ってるのに、どうやら、もう一波乱起こりそうだ。というか、すっかりスルーしてたけど霊体化状態とはいえ学校にも付いてくるんだよな?まあ、放っておくなんてできないから連れて行くのは仕方ないけどさ。そうになると……霊体化できないセイバーも何とか隠して連れていかないとイケないだろう。

「一波乱じゃすまないな……今日一日、どうなるんだろ……」

「あの、シロウ……まだ上半身が……」

「ああっ!?!?すまない!」

第三話 目覚めの朝とまた騒動。 終幕

第三話 目覚めの朝とまた騒動。(後書き)

途中でスランプに陥ったり、どうにも上手く進められなかったり、なかなか言葉が出てこなかったりと難産だった第三話。

こうして連載するのは初めての経験だし、こんなに長く物語を書くのも初めてなのでかなり大変ですが……同時に楽しいなーとか、良い経験になってるのかなーとか思っています。

遅筆、凡才ゆえ更新が滞ることも多いでしょうけど……何とか、完結まで書き抜きたいと思っているので、最後までちびサヴァをよろしくお願いします。

第四話……と思わせておいて、おまけというか番外というか、ただの悪ふざけ館本編ではありません。

衛宮さん家のちびサーヴァント騒動の本編とは全く関係ありません。

仮に、今後本編の方で似たような話やキャラが出てきたとしても、気のせいです。

ただのプラズマ現象による幻です。

どこぞの幻想殺しを連れてきたとて、何とかできるものではないので悪しからず。

ただ、虎の力量不足でネタが枯渇してしまっただけですから。

『ああ……昔のネタを引っ張り出して流用しないとどうにもならないくらい追い詰められてるんだな……』と哀れみの目で見てあげてください。

そんなわけで広い心と生ぬるい心、仕方ないねという許容の心で読むようにしましょう。

あまりにも批判や否定的な意見が多い場合は……ざっくり処分します。

第四話……と思わせておいて、おまけというか番外というか、ただの悪ふざけ館
丘の上の教会の言峰・マーボー・綺礼と愉快な英雄王。

神聖な神の家である教会に不釣り合いな、重苦しく陰鬱な声が聖堂
に響く。

「ふむ……始まったか……では、私も動き出さねばなるまい」

鍛え上げられた屈強な肢体を神父服に包み、首から十字架のロザリ
才を下げた男の名は言峰綺礼。

この冬木教会を取り仕切る神父であり、裏の世界に存在する二つの
協会に籍を置き、魔術師にして神の名のもとに異端を殲滅する代行
者である男。

そして聖杯戦争の監督役の裏で、暗躍する黒幕。

であるはずだった。

「もしもし？言峰だが……」と　のあな』かね？今月の同人誌新刊
を全て3冊ずつ注文したい」

『あつ、毎度ありがとございます！では、いつもの様に送らせて
いただきます』

「うむ。支払いは、いつもの口座から引き落とせば良い」

『分かりました。あつ、そう言えば……今度、新作のフィギュアが発売されるという情報が入ってるんですがどうします?』

「ほう……前評判はどうなっている?」

『完成度の高さは折り紙つき。限定版は特典にも力を入れるとの話です』

「買おう。すぐに発注しろ」

『了解です!』

「用件は以上だ。また何かあったら連絡する」

『ありがとうございます!』

今は、ただの変態神父に成り果てるが。

「帰ったぞ綺礼」

横柄な口調と共に扉を開けてきたのは、豪華な金髪に赤い瞳をした美貌の青年。

身に纏った衣服は、一目で最高級と分かる逸品。

「帰ったか……それで、首尾はどうだ?ギルガメッシュ」

深淵のような瞳に隠し切れない欲望を滲ませ、問いかけるのは言峰綺礼。

その口から語られた青年の名に、誰もが愕然とせざるを得ないだろう。

メソポタミアの時代……最古の都市ウルクを治め、世界に散らばっていた全ての財宝を手中にし、暴帝としてその有り余る力を振るった王の中の王。

死した後も……世界によって英霊の座へと導かれ、その比類なき力と存在から「英雄王」と称されるモノである……はずだった。

「ふん、聞くまでもなかつ……我は英雄王ぞ。失敗なぞ最も無縁な言葉よ」

パチン、と指を鳴らすと彼の背後の空間が歪み、大きな紙袋を出現させる。

そこに刻まれた言葉はふたつ。『ア メイト』と『メ ンブックス』

「予約していた新刊10冊と、注目の新シリーズ3つ。全て初回限定版。さらに予約特典とポイントが貯まっていたのでグッズと交換済みだ」

「そして……我を崇め奉れ綺礼。貴様が探していた限定フィギュアを万 書店で発見したので、買ってきてやったぞ」

「状態も良く、今は入手が難しい。なかなか価値がある」

次々と品物を出しながら、頬を緩ませ説明するギルガメッシュに……英雄王の威厳は欠片どころか、原子ひとつ残っていない。

ただ、偉そうな態度の変態だ。

その話を沈黙と共に聞いていた言峰だが……プルプルと震えている。

「ギルガメツシュ……」

「何だ綺礼？我はこれから本命ルートの攻略を始めるのだ、邪魔立てすると消し飛ばすぞ」

「お前、最高……！！」

イイ笑顔でぐっ、とサムアップする言峰。

以前の彼を知っている者が見たら、驚愕のあまり失神確実のイイ笑顔だ。

「ふん……貴様は、王たる我に新たな楽しみを教え、同じモノを愛する同志よ」

言葉を紡ぎながら、ギルガメツシュは背を向け歩き出す。

「いつか出会った者が言っておったわ……『愛するモノが同じ同志なら、助け合わねば、それを愛する資格は無い』とな」

「王に対し不敬にも程がある……だが、奴の瞳に宿る信念は本物であった」

ポケットに入れたままの右手を抜き出し、静かに横へと伸ばしていく。

「つまりはそういう事よ。礼は必要ない。ただ、我が通りかかった

店にそれが置いてあった……それだけの話だ」

その握り締めた拳から、力強く親指を立てる。

「ギルガメツシュ……」

「ふっ……我が覇道に並ぶ者は必要ないと思っていたが……我も随分と血迷った」

最後にそう小さく呟き、自室へと消えていく英雄王。

「待て……戻る前にその箱を持っていけ」

視線を向けることなく、こちらも静かに声をかける。

「む……？」

「お前が気にしていたDVD全巻、初回限定版だ。それと冷蔵庫にプリンも入っている……賞味期限の切れる前に、食べてしまえ」

「うむ……大義であった」

扉の閉まる音が響き、聖堂に静寂が戻る。

「さて、では私も戻るとしよう……ふっ、今夜は寝かさん……」

などと手に持ったフィギュアに声をかけ、なんとなく良い雰囲気をつたがしながら自室に戻っていく変態神父。

怪しいオーラを放ちつつも、丘の上に建つ言峰教会は今日も平和だった。

ちびサヴァと過ごそう！！ クリスマス編。

現在連載している『衛宮さん家のちびサーヴァント騒動』とは何の関係もなく、リメイクした現在よりも前に書かれた虎の悪ふざけの結晶です。

「本日は我らちびサヴァ揃い踏みでクリスマスを祝いに来た」

うむ、そういう事だ。さすがはバサカ。

みなに愛される良い娘だ。

「そつ、そんな事はないぞ！？わっ、私はただ……いつも世話になっているアチャ虎の友人達に喜んで欲しいから祝ってあげたいだけで……」

照れるなバサカ、各方面で蕩れ狂うヤツが続出するから。

「バサカに口火を切られたけど、そういう事ね。本当ならマスターと一緒に過ごしたかったけど……バカトラが土下座するし、仕方ないわ」

土下座などしておらん!!

お前達は俺が生み出したのだ!!

創造主に従うのはとうとう……ごめんなさい、わたちの娯楽アイテム達に刃物を近付けないで!!

謝るからッ!!

あとでたっぷり士郎とラヴらせてあげるから!!

斬刑に処さないでえええ!!!!!!

「そうね……えへへ、そこまで言うなら許して……ふみっ!？」

「……わたしも」

ら、ライダー……どこから降りてきたんだ?

てゆーか、キャスター下敷きにしてるし。

「だって……私も士郎と仲良くしたいから」

分かったよ。分かったから、そうぶくーっと膨れないの。

まったく……可愛いじゃねえか。

ん?どうしたバサカ?

「その……よかったら、わたしも……仲良くしたいなーとか」

がつてんしょーちだバサカ。

お兄ちゃんに任せておけ。

だから隣で添い寝してえええ！！！！！

「断る」

「いい加減にどきなさいライダー！！はあ……痛かった……。そう言えば他のみんなは？」

ふっふっふ……ちよいと趣向を凝らしてみてな。

そろそろ来るハズなんだが……。

「あ、アチャトラ……ちよっと、この服は派手というか……その、露出が多いんですが……」

「騎士王などと聞いて呆れる。所詮は、貧相な体の表だな」

「なっ！？そんな貴様とて大して変わらないだろう！！」

「ほらほら、セイバーもオルタも喧嘩しない！！今日はクリスマスなんだし、楽しく過ごさないと」

「「リリイ……」」

「ん？なに？」

「貴女は……持てる側の存在だから……そのような事を言えるのです……」

「うむ、万死に値する。そこに直れ、削ぎ落としてくれる」

「すまぬ、遅くなったな。アチャトラ、妾の服は胸元がキツイぞ。そこにいるツルペタ共とサイズを間違えたのではないか？」

「それと、紐しまパンを用意するとは……お主も分かっているではないか」

お褒めに預かり、光栄の極みだよ紅の騎士王殿。

「うむ、下々の者達に見せてやりたい位だ」

「……………」

「あれが……私の一面だと……。あんなに……たゆんたゆんと……私は、私は……あは、あはは、これは夢……夢なのだ」

「セイバー……向こうにケーキがたくさんあった。共に征かぬか？」

「オルタ……………」

良いねえ！盛り上がってきたじゃないか！！

どうだ、アチャ虎謹製の四色セイバース勢揃い！！

限界まで短くしたスカート、肩から胸元まで大きく開いたトップ、そして黒ニーソ。

白いモフモフをふんだんにあしらった赤い服を着用！！

「私はアーチャーではありませんが？」

違うわっ！！

みんな大好きミニスカサントだああああ！！！！

「私は可愛くて好きだなー。ねえ、アチャトラ……パンツって置いてあつたっけ……？」

ちゃんと置いた……って、まさかりリイ！？

「なーんてね。さて、準備でも手伝ってこよつと」

むう……侮れんな、セイバーリイ。

「あらまあ、ずいぶんと可愛らしくなっちゃって。セイバー、次は私の服も着てみない？」

「着ません！！」

「お前とは趣味が合う。キャスター、服の献上を許すぞ」

恥ずかしげにもじもじするちびセイバーは……やはり至高だ。

おっ、この気配は……次々と到着したみたいだな。

「あの……小次郎様、私までこのような格好をして良いのでしょうか

か……？」

「よく似合っているぞ。作者殿もなかなか良い趣味をしている」

長い黒髪は艶やかに光り、肌は処女雪の白さ。

涼しげだけど温もりに溢れた黒耀の瞳。

大和撫子を純粹に体現した見目麗しさ。

さらに黒いふわ毛で覆われた猫耳と尻尾付き。

我が権限でリミットブレイクさせた猫様だ！！

小次郎よ……今日は2人で仲良くクリスマスを楽しむのだぞ。

「作者殿……かたじけない」

うむ、良いのだ。

「おい、馬鹿者」

なんだ幼女アーチャー！。

「普通にとち狂った返答をしているんじゃない！！何なんだ私の姿はッ！！」

幼女アーチャーだ。

「貴様……」

ああ、すまん。

言葉が足りなかった。

つるぺた銀髪ポニテの幼女アーチャーだ。

「うるさいッ！！私は男だ！！」

話の分からない奴だな……今日はクリスマスだぞ？

無礼講だぞ？

だから女性化させてみた。

「腐れて死んでしまえッ！！」

ちなみに魔術や宝具は封印済みだ。

俺様に手を出そうとしても無駄だからな。

「ぐっ……このド変態め……！！」

ふっ、『紳士』と呼んでもらえるかね？

「まあまあ、良いじゃねえかアーチャー。楽しいし」

おう、ランサー。

がっつりハイスペック、グラマラスボディの調子はどうよ？

「ん、良い感じ。バサカとタメ張れるようにするとは……お前も好きだな」

やはり漢なら実用性も追求すべきだろう。

「貴様らの会話を聞いてると脳が腐りそうだ……」

ふん、そう褒めるな。

「褒めてないわー!」

さて、おーい。

バサカにキャスター、ライダーやーい。

ほれ、お前達の分のミニスカサンタ服。

着替えておいで。

それともう2人ほど着替えルームに居るはずだから連れて来て。

「そう言えばアンリが居ないな？分かった。着替えてから一緒に連れて来るよ」

おう、頼んだぞバサカ。

「アンリは分かりましたが、もう1人は誰のですか？」

んー、気難しいけど単純というか……王道のツンデレというか。

まあ、良い子だし仲良くできると思っから温かく迎えてやってくれ。

「分かりました。では、いってきます」

あいよー。

「ふう、じゃあ私も行くわ。これだけ人数が増えて賑やかになるとストッパー、良識役も楽じゃないわよ……」

そう言うなよ。

期待してるぜ、みんなのキャス姉ちゃん。

「うるさいわね。……まあ、悪い気分じゃないけど」

さて、幼女アーチャー。

ケーキや料理を並べるから手伝ってくれ。

おーい、用意ができたヤツから準備の手伝いに来てくれー。

「うむ、分かった……ってさり気なく『幼女』を定着させようとするな……」

たわけ！！幼女に『幼女』と言って何が悪い！！

「ああ……！！小次郎様は座っていて下さい！大切な……その、旦那様がケガでもしたら大変です……！！」

「そこまで心配せずともよい。私とて、かけがえのない伴侶ばかり働かせるのは心外だからな」

「小次郎さま……」

「あーぶねえつつーの！！セイバーは何もすんな！被害ばつか増える！！」

「なっ！？ランサーその発言の訂正を求めます！！」

「そう言ってるそばから皿が大ピンチなんだよ！！まったく……ほれ、大人しくしてる。あとは俺と幼女アーチャーに任せとけ」

「むう……不覚です」

「ランサー、あとで話したい事がある……主に拳で」

「そして気にするなセイバー。人には誰しも得手、不得手があるからな」

素晴らしい盛り上がりだな。

やはりクリスマスはこうじゃないとね！！

「ただいま。脱いだ服に絡まり、半裸で身動きが取れなくなってたアンリも助けてきた」

「あう……その、お手数おかけしました。うう……恥ずかしいです」

スカートの裾を引っ張り、胸元が危うくなる。

慌てて胸元を直し、今度はスカートが危険に。

永遠に続く必殺……いや、悩殺コンボだぞアンリ。

グッジョブだ!!

「わっ、我を誰と心得る!! 英雄王だぞ! 偉いんだぞ! なのに……こんな恥ずかしい格好で出ていけるかー!!」

「……その、我は嫁入り前なのだ!! 肌を晒せるわけ無かるう!!」

「それと……みんなと仲良くなれるか……不安なのだ……」

「よく似合ってるし、貴女ほどの器量なら山のように貰い手が居るから平気よ」

「それに、他のみんなも良い人ばかりだからね。絶対に仲良くなれるわ。さあ、行きましよう」

「キャスターの言う通り。アチャ虎が料理やケーキをたくさん用意してますし、みんなで食べると楽しいですよ」

「ぐっ!?!?ぐう……残すは我だけなのだな?」

「そういつこと」

「その通りです」

「はあ……ならば仕方ない。私の肌を見るなどけしからんが、皆に迷惑をかけるわけにもいかん。行くぞ!!」

何だかんだとバタバタしてたみたいだが……無事に出て来れたね。

待ってたよギルガメッシュ。

「英雄王たる我がトリを飾るのは当然であろう。雑種の間際で我を呼び出しおって」

そう言うなって。

ミニスカサンタ服もよく似合ってるし、凄く嬉しそうに見えるけど？

「我が着ればどんな服だって一級品なのだ!!その……ちょっとくらいは、感謝しなくもない」

そうかそうか!!

よし、みんなに自己紹介しておいで。

終わったらパーティーを始めよう!!

黄金色の髪を揺らし、ついでに上半身の一部も揺らし歩く少女。

魂まで奪われるような美貌、真紅の瞳は宝石のように輝く。

纏う雰囲気は気高く、一線を画している。

身に付ける衣装はもふもふ装備のミニスカサンタだが。

「我の名は英雄王ギルガメツシュ！クラスはアーチャー！雑種ども……ではなくて、皆よろしく頼む！！」

「私はアーチャーだ。ワケあつて真名は明かせないがよろしく」

「俺はランサー。真名はクーフリーン。どっちでも好きな方で呼んでくれ」

「私はさつき自己紹介したけど、キャスターね。メディアでもいいけど」

「セイバーです。真名はアルトリア。どこかで会ったような気もしますが……仲良くしていきましょう」

「佐々木小次郎という。こちらは我が妻ネコ殿だ」

「小次郎様の妻、ネコと申します。よろしくお願いしますね」

「ライダー。真名メデューサ。好きなものは士郎全般です」

「では、私セイバー・リリイが代表で紹介します。こっちの無愛想なのがオルタ、あつちでイケナイ本を読みふけってるのが赤セイバーね。よろしく！」

「どうやら私が最後までいただね？クラス名はバーサーカー、真名はヘラクレス。みんなからはクラス名かバサカで呼ばれてるよ。よろしくね、ギルガメツシュ」

「うむ！！良い者達ばかりで安心したぞ！！」

ふう……無事に馴染んで良かった。

うーん、女性化すると良いツンデレ娘になるんだがなあ……なぜ本家だとあんな状態になるんだか？

「何をブツブツ呟いているのだ？さっさと始めるぞアチャトラー！」

へいへい、分かりましたよ金ピカ。

よし！！特にクリスマスに関係した話もなかったが……いつちよ始めるかー。

せーのー！！

「「「「「メリークリスマス！！！！！！！！！！」」」」」

ちびサヴァと過ごそうー！！ バレンタイン編。

現在連載している『衛宮さん家のちびサーヴァント騒動』とは何の関係もなく、リメイクした現在よりも前に書かれた虎の悪ふざけの結晶です。

しゅーーーーぞーーーーう!!!!!!!!!!!!!!

間違えたあああああ!!!!!!!!!!

しゅーーーーーーーーじゅーーーーーーーーう!!!!!!!!!!!!!!

「うるさいわよバカトラ!!」

「アチャ虎?どうした騒がしい」

「あつ、あちやとらさんが壊れちゃいました……」

バサカ、キャス子にアンリか。よく来た!!

ん?他のやつらはどうした?

「えつと、ライダーさんはエミヤさんの枕に抱きついて『んー』とか言ってる、ギルさんは赤くなりながら布団にくるまってましたよー」

「四色セイバー達はカップアイスを見て『ここで泳ぐにはどうしたらよいか』とよだれを垂らしながら会議してたな」

「男性陣はアーチャーが片っ端から投影した剣を見て、ぎゃーすか騒いでたわよ?喧嘩しつつ仲良さそうにね」

要するに俺を無視しているということか……おのれ舐めた真似をしやがって……よし、『創作者が絶対令呪において命ずる。我が望む

姿となりて此処に集えッ!!」

「何ですかそれ？」

簡単に言つと士郎が持つてる令呪よりもさらに強力なヤツだな。

無制限に使い放題だし、お前たち限定だが姿形も俺の好きなように変えられる。」

まあ……説明よりも見た方が早いだろ。

「おわっ!?!?なんか居間に来てんだけど!……って、アチャ虎じゃん。おひさー」

ようランサー。久しぶりの女体化はどうよ？

「女体化?なに言つて……あれ？」

ちよいと楽しいことを思いついてな。お前たち全員でやつてもらいたい事がある。」

「はー、なるほど。クリスマスん時みたいにかやらせる気だな？」

「ご明察。」

「それで私はまたこんな有様というワケか」

『Exactly』ってヤツだ俺の好みでポニテ標準装備の幼女ア
ーチャー!。」

「恐ろしく不愉快な話だが、前回で耐性がついてしまって驚く気にもなれん」

「アチャトラ」

ん？どうかしたルージュ。

「ルージュ？余のことか？」

うん。他のセイバー達にはそれぞれの呼び方があるけど、お前には無かったろ？

『紅の騎士王殿』じゃ長いし、『赤セイバー』じゃ可愛くないからな。

色々調べて一番良さそうな『ルージュ』を選んだってわけ。ちなみにフランス語らしいぞ。

「ふむ……まあ、なかなか良いではないか。いつまでも名無しでいるのは気分が悪いし、『ルージュ』と呼ぶことを許す！！おい！みな聞いてくれ！余を呼ぶ時には『ルージュ』だぞ！！忘れるな！！！！」

光栄に存じますよ『騎士王ルージュ』……って行っちゃったし。あの様子だと結構気に入ってくれたみたいだな。

そついや何か聞きたかったみたいだけど……まあ、思い出した頃にまた聞きに来るか。

「……………」

三点リーダを大量生産して殺気を振りまくライダーさんはどうしたのかな……？

「嬉しい気分を壊されたから」

えーっと、士郎の枕と戯れてる所を呼び出したから怒ってるのかな？

「　　っ！！」

ぼん、と赤くなった所を見ると凶星みたいだね。

「用があるなら早く。さっさと終わらせる」

キャラが変わってるぜライダーさん……あとで士郎くんTシャツ（使用済み）を横流してあげるから機嫌直さない？

「むっ……仕方ないですね。アチャ虎の誠意に免じて許してあげます」

はあ……ライダーの士郎ラブっぷりにも困ったもんだな。

「原作ではなかなかエミヤさんと絡めませんでしたし、ファンディスクでも物足りなかったんだと思いますよー」

アンリ……そういう発言は慎んだ方がいい。

「へ？どうしてですか？」

世界の修正力によって消されかねんぞ？

「なんか……おっかないんですね」

そう、おっかないんだよ。というワケで猫もクリスマスん時みたいになってるだろ？ギルガメッシュは最初から変えておいたが。

「なるほどー。だけど、どうしてギルさんは最初から？」

前회가割と気に入ってな。本人もまんざらじゃなかったし、そのままにしておいた。

他のメンツは本編にも登場しなきゃなかったから戻したのもある。

さて、そろそろ本題に入るとするか……みんな集まってくれー。

バサカとセイバーはみんなを整列させてくれ。

「「分かりました」」

さすがはカリスマスキル持ち……こういう時に役立つんだよね。

並んだみたいだな……では、これより今回みなに集まってもらった理由を発表するー！！

端的に言うと、『チョコ作りをするぞー！！』ってことだ。時期的にもバレンタインだしな。

「すでに日付は過ぎているが？」

質問は拳手してからだ幼女アーチャー。

だが、今回は許そう。ぶっちゃけた話……日付は過ぎているが、
『2月中なら良くね』って感じた。

「我は作り方が分からんぞ？」

板チヨコ溶かして型に流し込んだり、適当に飾りつければいいから
ギルにも出来るぞ。

それに士郎にあげれば喜んでくれると思うぞ？

「むっ……べっ、別に衛宮は関係ない。我は王ゆえ自らの手で何か
を作るなどやったことが無いから……」

まあ落ち着けギル。真っ赤なほっぺが正直すぎる。それに、何事も
素直な方が可愛いと思ってもらいやすいと思うぞー？

「……やはり……素直な方がいいのか……。そこまで言っなら
……その、衛宮に喜んでほしいから……作ってみたい……」

うんうん。やっぱり、その方が可愛いじゃないか。

さて……材料やら道具はすでに準備してあるし、早速やっちゃおう
！！

アサシン&ネコ組

「私は本来の姿の時は食べれないんですけど……この状態なら大丈夫

夫そつですね」

うむ、創作権限でそこらへんも対応済みだから安心するといひ。

「ところで、質問があるんだが構わぬか？」

ん？小次郎から質問だなんて珍しいな。何か問題でも起きた？

「いや、問題は起きてないが……その、他の男連中はみな女子と化しているではないか。なぜ私はいつものままなのか気になってな」

ああ……そういえば説明してなかったか。話は単純だぞ？ネコとの組み合わせがあまりにも『理想の夫婦』って感じでな。俺も気に入ってるから小次郎はそのままなんだよ。

ネコもそつちの方がいいだろ？

「えっ！？そつ、その……私も……殿方の小次郎さまと一緒にいいです」

「ネコ殿……」

ほらな？ネコもちゃんと男の小次郎がいいってさ。全く……幸せなところを見せてくれちゃって。そら、どうせなら一緒にチョコ作ってこいよ。

「いや、私もそうしたいのは山々なのだが……『旦那様に食べてほしくて作ってるんですから』と手伝わしてくれんのだ」

いいねえ、心底愛されてるじゃないか。

「私には過ぎた温かさだとよく思う。しかし……本当に悪くない。創作者殿には感謝しておる」

『小次郎にはこういう幸せのカタチが似合う』っていう俺が勝手な考えを投影してるだけだから……礼を言われるようなもんでもないさ。

しんみりしちまったな……気分を変えてネコの和服&割烹着姿を見
てみるかー！

「私が言うのも何だがよく似合ってるぞ」

うむ。黒髪をポニテに纏め、微かに歌を口ずさみながら料理をする
姿……こう理想的な純和風の若妻って感じた。

とても良いキャラに育ってくれている。

「あの後姿、うなじの辺りなど男の理想だと思っただが」

おっ？分かってるじゃん小次郎。

「出来上がりましたよー。小次郎さまの口に合いやすいかと思って、
シンプルかつ和風に仕上げてみました」

白玉に溶かしたチョコをかけ、削ったチョコも散らしてあるのか…
…美味そうに出来上がってるじゃないか。

「では早速……ほう、これは」

「お口に合いますか？」

「うむ、とても美味しい。何よりネコ殿が作ってくれた物だから余計にな」

小次郎、頭でも撫でてあげると喜ぶと思つぜ（小声）

『なるほど……かたじけない（小声）』

「はわ！？こつ、小次郎さま！？」

「言葉だけの感謝では足りなくてな……嫌か？」

「いえ……その、恥ずかしいですけど……すごく嬉しいです」

うむ、仲良きことは素晴らしいかな。さて、お邪魔虫は次の連中を見に行こうかね。

四色セイバース組

今回のイベントで最も不安なやつらの所を見にきたワケだが……おい大丈夫かー？

「こんなチョコもあるのですか……ああ、シロウの手で作られた物を食べてみたいものです……」

「このまま食べた方が美味しいではないか。溶かしたり固めたりする必要があるのか？」

「はむ、ちゆる　んふ、こんなに濃い味をさせおって」

「セイバーは料理本ばっか見ない！オルタはそのまま食べちゃダメ！わざわざ指にチョコ付けて舐めるなルージュ！しかも何かやらしい！！」

やっぱりこうなってるか……。

「あつ！アチャトラ！！こいつら何とかするの手伝って！！」

リリイに頼ってもらえるのは嬉しいけど……腹ペコ王、ジャンク王、色欲王の御三方を何とかするのは相当厳しいかと。

「創作者が何とかできなくてどうすんのよ！！ルージュ見て前かがみになるな！！」

「ほう？余はただ『指についたチョコ』を舐め取っていただけぞ？アチャトラは何を想像したのかな？おっと……今度は顔に飛んでしまった」

すまんリリイ……これは男として生まれたからには逃れられない宿命なのだ。

ルージュ様……目をそんなに輝かせながらセクハラしないで下さい……。

「ふっ……何だかんだと言いつつアチャトラも『一匹のオス』ということだ。どんな男も発情すれば獣よ」

「そつ、そこまで言うなら……ちょっとくらい参加してみようかな……?」

うんうん。ほら、チョコでも食いながら案を出していこう。

バサカ&キャス子&アンリマユ&???組

「メディアこの後はどうすればいいんだ?」

「えーっと……そこまで出来たら、これとこれに乗せて……冷やして固めればおしまいよ」

「メディアさん……あの、チョコ零しちゃいました……」

「もう、仕方ないわね……うん、大丈夫よ。拭けば問題ないわ。焦らないでゆっくり作っていきましょ」

「時間はあるし、失敗しながら作った方が良い物ができやすい。よし、私も手伝おう」

「バサカさんまでありがとうございます〜」

「泣かなくてもいい。その……私たちは友達だし、家族みたいなものだからな」

「そういうことよ。さあ、もうひと頑張りしていきましょうか」

何というか……非常に声をかけにくい……。めがっさいイ場面を見

てしまった分、余計に出ていきにくいぞ……。

さて、どうする？ここからひっそりと眺めておこうか……しかし、なんか物足りない……。

「アチャ虎、何をぶつくさ呟いているのだ？」

ぬあっ！？なんだ……ギルか……びっくりさせないでくれ。

「我はここで普通にチョコを作っていた。気付かなかったお前が悪い」

えーっと……ギル一人で作ってたのか？

「そうだ。たとえ菓子作りだろうが、英雄王たる我が他人の力を借りるわけなからう」

あっちでバサカ達と作った方が賑やかで楽しいと思うぞ？あいつらも歓迎するだろうし、ここじゃ『英雄王だから』とか『サーヴァントだから』とか言う必要もないし。

「そんなことちゃんと分かっておるわ！！あーもー、気が散る！！あっちに行け！！」

なんだよー……せつかく気い遣ってやったのにさ。始まる前は素直になったと思っただけだな……。

仕方ない……物陰から少し様子を見てみつか。

「むう……なかなか難しいが……割と面白いではないか。これで衛宮の喜ぶ顔が……って我は英雄王だぞ！？あんな雑種に懸想するなと……しかし、なかなか見所あるし……」

「おーなんか思考の無限ループに嵌まってるな。さらにお手本のような百面相まで。」

「なんと言つて渡そうか……『ありがたく受け取れ雑種』は偉そうだし。『みなが作ったから』では印象に残らなそうだし……ってなんで渡す前提で考えてるのだ我はー！！」

「ヤバいな……これすんげー面白い。」

「あの娘なりの考えがあつて一人で作ってるのよ」

「おわっ！？キャス子！？」

「ずいぶんと失礼な反応ね？」

「すっ、すまん……あれ？バサカとアンリは？」

「チヨコ作りも一段落したので、ギルの様子を見に来たのさ」

「二人のお陰でわたしのチヨコちゃんと仕上がりましたー」

「というわけなのよ」

なるほどね……お前たちが一番バレンタインらしい光景を見せてくれたよ。小次郎たちはただのバカップルだし、四色セイバーズはよく分からん感じになったし。

「セイバー達は仕方ないわね」

「セイバー達なら仕方ない」

「仕方ないですー」

そう言えばギルが一人で作ってる理由ってなんなのさ？

「あら？坊やの口癖……は置いといて。私たちも『一緒に作らない？』って声をかけたんだけどね。『自分で作った物を誰かに渡すなど初めての経験なのだ。できれば自分だけの力で作って渡したい』って断られちゃったのよ」

「本当はもっと恥ずかしそうに途切れながら言っていたな」

「顔も真っ赤になってましたよー」

つまり……さっきの対応は恥ずかしくて本音を言えず、どうしたら良いか分からず突き放した言い方になったというワケだな。

「よく出来ました」

……………めっさ可愛いなギル。

「本当に可愛いと思っわ」

「ああ、私も可愛いと思う」

「とても可愛らしいですー」

「
私のことで好き勝手に盛り上がっていていいと許した覚えは無
いぞ雑種ども」

おや、士郎くんも一発で落ちそうな可愛さを秘めたギルっち。

「あら、愛しの彼へのチョコは出来た？ギルちゃん」

「うむ、我が主は稀にみる良い殿方だからな。みな想ってしまつのは仕方あるまい」

「みんな士郎さん大好きですから、ギルさんも恥ずかしがらなくていいんですよー」

「なっ、なっ………そんなに生温かい目で見るとは………あああああ
………！！！！』王の財宝』……！！」

あっはっはっはっは！！ギルっちが怒ったぞー！！みんな逃げろー
！！！！

「ふふっ、本当に可愛いこと」

「はははははっ！！全くもってメディアの言う通りだ……！！」

「わひゃ！？あっ、あたっ、当たっちゃいますよ……！！ギルさっ、
こっち狙わないで……！！？」

ランサー&アーチャー組

「んー？なんか楽しそうに騒いでんなー。いいなー俺も混ぜてこようかなー」

「混ぜるのは勝手だが、絶対に物は壊すな。どうせ修理に駆け出されるのは私と小僧なんだから」

「冗談だつーの。今いいとこまで出来てるし」

「だったら言葉にするなたわけ」

「口が悪い幼女も萌えるけど……やっぱり素直な方が可愛いぜ？ほれ、初っ端にアチャ虎も言ってる？」

「今はこんなナリだが私は男だ。可愛げを求める必要性がどこにある」

「ばっかだなー。『郷に入らば郷に従え』って言葉があんだろ？女になつたら女らしい可愛さを醸し出さねえとな」

「諺の使いどころが激しく間違っていると考えられないのか……そんな事を言ったら、貴様の喋り方はどうなんだ」

「これか？んふふー、男口調の年上姉さんキャラって好きなヤツ多そうだろ？」

「知らんわバカ者」

「さーて、つれない赤色弓バカの相手は止めてチヨコの続きーっ」と
「ぐっ……」

何だかんだ言っても仲良いんだなお前ら。チヨコ作りは進んでるかい？

「おう、アチャ虎。そうだろー？俺は割と気に入ってんだけどさ……こいつが捻くれたまま素直になんねーのよ」

ふむ……典型的なツンツンデレくらいだな。ランサー、諦めずに好感度を上げていけ。こういうタイプはデレるとそりゃあ可愛いぞ。

「ほほう、興味深い話だな……って経験あんのか？」

画面向こうの女の子を落とした時の経験談だ。うむ、言いたい事は分かる……だから何も言わないでおいてくれ。

「ああ。生きてりゃ色々あるよな」

「お前たちが話し始めると頭が痛くなる……湯せん用の熱湯で目を覚まさせてやるうか？」

お約束みたいにお湯をこぼしてヤケドすんのが関の山だと思うけど、いつもの姿ならまだしも、ポニテ幼女化してるから無理すんたって。

「うっさいわー！くっ、このっ　！にゃあっ！？」

あっ！？ばかやろっ！！

「っのバカ 言わんこつちやねえ!!」

あああああああつちいいいいいいいい!!???

「うわつちちちち!!??ちよつ、とらつ!動くな!!飛び散つてつから!!俺にかかるつ!!」

それどころじゃねええ!!!!手がつ!!手がああああ!!!!
!俺の唯一のチャームポイントがあああ!!!!!

「こつちは全身がピンチなんだよバカあああ!!!!」

「ちきしょう!!水つ、水は!？」

ああああああああああ!!!!ランサアアアア水
だああああああ!!!!

「おまつ!それバケツううう!!!!」

「んにゃああああああ!!!!」

ぜえ、はあ……げほつ、はあ……ランサー、無事か……?

「洪水か……津波に、直撃された気分……」

すまん……なんかもう色々と焦りすぎて……。

「っーか……何であの状況でバケツを選んだよ……」

いや、俺の腕とか冷やしながらくさん水運べるモノって考えた結果……みたいな？

「なるほどね……って、びしょ濡れになっちまった」

タオル持つてく。

「ん？なに固まってんだよ？」

らんさー、かみがおりてる。ふくがさらにびったり。いんしょうがちがう。えっちい。

「ひゃっ!？」

これ、たおる。ぐふっ……はなぢが……ていっしゅ、ていっしゅ。

「うー、不意を突かれるとやっぱ恥ずかしいもんだな……」

「お前たち……本気で私のことを忘れていただろっ？」

うい？おー、アーチャー無事だったか。

「俺はタオル巻いてんのに何で固まんだよ？アーチャーがどうかした……ってエロっ!？」

ふ、ふふっ、ふふふふ……しろいえきたいが、どろりのうっ……。

「こっ、これは溶かしておいたホワイトチョコの器に突っ込んでしまっただけだ!!あんな物体と一緒にするんじゃない!!」

「んー？『あんな物体』って何のことかなー？」

「口に出して言えるかバカ者！！」

「常識人な顔して、意外とムツツリだなー。そう思うだろアチャ虎
って、あれ？」

血が……血が足りねえ……しかし、我が生涯に一片の悔いなし……
くはっ！！

ちびサヴァと過ごそう！！ 黄金週間編。

現在連載している『衛宮さん家のちびサーヴァント騒動』とは何の
関係もなく、リメイクした現在よりも前に書かれた虎の悪ふざけの
結晶です。

妄想学園文章創作部4年 手乗り弓兵アチャ虎、推して参るッ！！

「無駄に酸素を消費しながら、無駄にかっこつけて、何をやってる

んだ無駄存在バカ虎。貴様のせいで地球温暖化に拍車がかかった。全人類、地球、むしろ宇宙に謝罪して息絶えろ」

おーう、今日も毒舌が冴え渡るねえロリアーチャー。何か良いことでもあったのかい？

「ひとまず西尾維新さんとファンの方々には土下座しろ。話はそこからだ。それと正気の沙汰とは思えない呼び方を今すぐ訂正しろ」

ひどいねえ……最近は何良々木くんも、ツンデレちゃんも来てくれないし、忍ちゃんまで構ってくれないからこっちに来てみたのに。ゲストなんだよ？もっと丁寧に扱うのが筋ってもんじゃないのかな？

「アチャ虎ではないのかっ！？というか忍野メ！？なんでこんな所にっ！？」

なーんつつてーww騙されてやんのwwwどこぞの人類最強みたい
に声帯模写はできないから、文章模写などしてみたのだ。

「……………そこに直れ。このサイズでも干将莫耶の切れ味が変わらないことを証明してやる」

痛くしないって約束してくれる？やっ、優しくしてね？

「気色悪い真似をするなっ！！微妙に顔を赤らめるな！！」

よし、充分ロリーチャーいじりも楽しめた。では本題に入るとしようか。ちなみに『ロリーチャー』とはロリアーチャーを縮めた新名称だ。思い付いた時はアルキメデスさんばりに全裸で走り回ったもんだ。

「貴様……しばらく見ないうちに変態になってないか？」

できるだけ見せないように気を遣ってるだけで元から変態紳士だよん。それで本題つつーのはだね、世間は黄金週間だろ？みんなが何をしてるのかウォッチングしてみようかなーと思っつてさ。

「要するに暇を持て余して退屈だから覗きをやりたい。そういうことか？」

『覗き』なんて人聞きの悪いこと言うんじゃないよロリーチャー。あくまで皆が元気に楽しく連休を過ごしてるか様子を見に行くだけだ。

「ふん、くだらん……私は忙しいんだ。貴様だけで勝手にやればいい」

ほう……忙しい割にはこの変態紳士との会話にずいぶんと時間を割いているみたいだが？俺が来る前はお茶を飲みながらぼーっとしてたみたいだし？

「ぐっ……」

「おい、アーチャー。ひーまーだーぞー。なんか楽しいことやるぜー」

ころころと転がりながら移動するんじゃないよランサー。萌え死んでしまっじゃないか。

「うい？アチャ虎が居るつつーことは……何か面白いことが始まる

んだな？」

相変わらずランサーは理解が早くて助かる。こっちの毒舌少女は素直じゃないし、頭は固いし困ったもんだ。

「まあ、アーチャーだからなー。そんで？これから何をやらかすんだ？」

うむ。これから他のメンバーがどういう休日を過ごしているのかウオッチングしに行くのだ。言うまでも無いだろうが：せつかくの休日を邪魔しちや悪いから隠密行動でな。共に征くか？

「はっ！！それこそ問いかける方が野暮ってもんだ。そこは『黙って付いてこい』くらい言わねえと締まんねえぜ？」

それもそうだな。よし！！
これより我らは走り出すッ！
！進み征くは修羅の道！我らが後ろに退路は無いと知れッ！！足を止めず、ただ前に！全霊を燃やし尽くして走り続けるのだッ！！諸君、用意は万端か！？万端ならば氣勢を上げる！そして我が背中に付いてこいッ！！！！！！

「「応ッ！！！！！！」」

「なんだかんだ言ってもお前だつてノリノリじゃねえか」

「ちっ、ちがつ！？思わず流されてしまっただけで」

「はいはい、細かいことでうだうだ言わない。返事したのは事実なんだからさっさと行くぞ」

「バカな真似をしようとしたら実力行使で止めるからな」

「おうよ！期待してるぜ正義の味方！！」

「おい、せっかく格好良くキメたんだから早く行かないか？割と恥ずかしいぞ…。」

「わりーわりー。そんなじゃま行くのでしょうか。最初に誰を見に行くとか決めてんのか？」

腹ペコ王にして最強の自宅警備員、セイバー達の様子を見に行こうと思う。四色セイバースみんな一緒に居ることが多いし、今は部屋に居ることが判明しているからな。

「りょーかい」

「まあ、バカ虎にしては妥当な選択だな」

セイバー&オルタ&リリイ&ルージユ 四色セイバース組

「この×××に××した×××を入れて×××すると状況によっては危ないのできちんと××しないとダメなのが肉体のある人間。妾たちのように身体がエーテルによって作られている場合は××の心配が無いので×××し放題、マスター、妾たち共に気兼ねなく楽しめるというわけだ。さらに質の良い魔力を補給することもできて一石二鳥！！言うまでも無いが妾は受肉していようと、していまいと××の×××派だ」

「やはりこの手の話になるとルージュと気が合う。私も××派だ。やはり快樂は元来の在り方を楽しむのが本筋というものよ。だが…気に入った相手でなければ首を跳ね飛ばしてやるがな」

「ルージュにオルタ！！昼間っからなに話してんのよ！！」

「ナニの話に決まっている。ふむ、リリイは思っていたよりもこのような話には耐性が無いのか」

「案外と初心なヤツじゃ。こんなに真つ赤な顔になりおって……今宵は妾が可愛がってやるうか？」

「なっ、なななな何言ってるの！？そんな事するわけ　　！！」

「ん？妾は『肩でも揉んでやるう』という意味で言っただけなりなんだが……何を動揺しているのだ？」

「　　ッ！？　　っ！！！！！」

「セイバー、先ほどから黙りっぱなしだがお前も混ざらない　　か？」

「シロウ……あれほどしたのにまだ、こんな……。これ以上されたら本当に……でも、シロウとなら……何度でも、したい」

「……………セイバー」

「はひっ！！？何でしょうかオルタ！？」

「瞳を潤ませるのはいい。頬を赤く染めるのもいい。何やら怪しげ

な様子で身体や両手を揺らすのも許容範囲だと思う。だがな……想像していることを言葉にして漏らしてしまうのはマズイと思うぞ」

「りゅっ、留意します……。あう、冷たい……」

「代えのパンツか？ならば私のおきをおきを貸してやるぞ」

「あんなフリフリで紐みたいなのヤツを穿けますか！！自分の物がありませんッ！！」

四人揃って部屋に籠り、何をしてるかと思えば……ははーん、なるほど。紛う事なき猥談だな。

「ああ、猥談だ」

「セイバー……」

泣くなってロリーチャー。夢はいつか覚めるものなのだから。セイバーの新たな魅力を発見できたと思えば幸せじゃないか！！ちなみに俺はかなり嬉しいし、興奮してるぞ？

「男なら興奮せざるを得ない光景だな。ちなみに女になってるが俺も興奮してる」

「黙れバカ共！！」

欲望に素直な方が楽しいのにー。オルタとルージュに賛成の自然派だー。

「素直になれよロリーチャー。俺も生きてた頃はずいぶんとヤンチャしたもんだぜ」

「欲望に流せるなど動物と同じだ！人間らしくご利用は計画的に！安易な行為が取り返しのつかない事態を引き起こすのだ！」

でもさー、桜とかライダーとかセイバーとか遠坂を相手に士郎くんはがつつり欲望に流されてた気がするんだけど？

「小僧が大馬鹿者なだけだ！！私はそんなことなかった！！」

嘘つきめ。俺は知っているぞ……回数自体は少ないがお前も生前は……

「ああああああ！！！！」

「おー取り乱してんな」

「さあ、セイバー。隠し立てせずお前とシロウの蜜夜の出来事を話してみよ」

「その清廉潔白な顔と身体を淫蕩に乱れさせ、シロウと獣のように絡み合ったのだらう？それを詳細に話せ」

「 どんな、かんじだった？」

「そ、そんな…私の話を聞いたって何も楽しくは……ってリリィ！

「目が虚ろになってますよ!？」

「楽しいかどうかは関係ないのだ。妾たちの中でシロウと睦み合ったのはセイバーだけなので今後のために聞いている」

「今後のためってどういうことですか?!」

「特に他意はない。妙な妄想を広げすぎではないか?そもそもこんなちまい姿形では満足に伽の相手も務まらんし」

「いや、ルージュ…この姿だからこそ出来ることもあるはずだ。我らが妄想と実行力に不可能は無い」

「ふふっ…では、ひとつ案を語り合ってみるとしようか」

うんうん、平和かつ楽しそうな仲良し四人組の光景だね。

「楽しそうだなー…俺も混ぜて話したい」

「」

なあ、ランサー?このロリーチャーの状況を的確に表すフレーズがあつたよな?

「ああ…あつたな」

そんじゃあ、同時に言ってみようか。

「うい」

「へんじがない。ただのしかばねのようだ」

佐々木小次郎、ネコ夫妻組

未だに春の陽気を含んだ風に薄紅の花弁が揺れる。衛宮家の中庭に植えられた桜の下に小さな影が二つ寄り添う。

「小次郎さま？」

「む？どうかしたか？」

「いえ、ただ名前をお呼びしたくて」

「そうか……ネコ殿、その、幸せ……だな」

「ふふっ、そうですね……とても、幸せです」

小さな御座の上に座布団を二つ並べ、触れ合う肩から互いの体温を共有する。降り注ぐ柔らかな陽光が身体を温め、心地よい眠りへと誘おうとする。

「ふあ……あふ……」

可愛らしいあくびに合わせ、黒い柔毛に覆われた猫耳がふるふると小刻みに揺れる。さらりと艶やかな黒髪が風に靡いて、花の蜜に似た甘い香りを放つ。

「眠っても構わないぞ？私はそなたの隣で桜を愛でているからな」

「お心遣いは嬉しいですけど…小次郎さまと一緒に話したり、桜を眺めていたいです。私だけ眠るのは…少し寂しいですから」

頭上で揺れる花弁と同じ薄紅色の頬をぷくりと膨らませ、おずおずと少女は青年の腕へ自分のそれを絡める。

「では、桜を纏いさらに美しさを際立たせたネコ殿を愛でようか」

青年は表情を引き締め、伸ばした指で少女の頬から顎の滑らかな曲線、ぱたりと倒れた猫耳を優しく撫でる。

「あつ…はあ、こじろ…さま」

さらに鮮やかな紅色へ変わった頬、潤んだ黒曜石の瞳、熱を含んだ吐息。その妖艶な姿はまさに男を狂わせる魔性にふさわしい。

とまあ、こんな感じに地の文が付けられそうな甘々な光景が中庭に広がっているなう。

「完全に自分たちの世界か。ただのバカップルなんだが…落ち着いた雰囲気のおかげで『仲睦まじい夫婦』に見えるんだから不思議だよな」

「どちらも純和風な出で立ちだからな。余計にしつくりと馴染む」

それにしても我ながらネコっちを人間化させる案はナイスアイデアだぜ……自分の才能が怖くなっちまう。

「貴様には才能の欠片も存在していないだろうが。ネコさんの外見にしたって貴様の趣味嗜好を優先させまくったくせに……」

いいじゃん…黒髪、和風美人、黒毛の猫耳&猫尻尾……好きだし、可愛いんだもん…。

「まあまあ喧嘩すんなって。それよりもアレを止めなくていいのかわ？ R - 18 指定な展開になだれ込む5秒前だぞ」

詳細に描写しなきゃ何も起こってないのと同じだし、好き合う者達が互いを求めるのは自然なことさ。ちまい姿だけど、愛情に身体の大きさは関係ないだろうからな。さーて、睦み事を覗くなんて無粋な真似をするわけにもいかないし、次に行くとしようか。

「あーいよ。ほれ、行くぞロリーチャー」

「うむ、分かった……って貴様までその名で呼ぶんじゃない……」

「でけえ声出すんじゃないやねえバカ……!! あいつらにバレるだろうが……」

「ぐっ……」

幸いなことに聞こえてなかったみたいだな……今のうちに離脱するぞ。

バサカ&キャス子組

「~~~~~」

「~~~~~」

バサカとキャス子を観察しに居間に来ているなう。なんというか……全然知らない曲調なのにどっか懐かしい感じがする。キャス子が□ずさんでるって事はやっぱり神代の曲だよな……？

「だろうな。俺も懐かしい気分だし。あいつ歌の才能まであったんだな……」

「この歌声がキャスター……いや、メディアとしての本質なんだろう。私も貴様らと同じ感じを抱いている。生きた時代、場所、人種に限らず、私たちの内に刻まれた螺旋の記憶は共通と言える証拠なのかもな」

ああやって裁縫しながら歌ってる光景って………すげえイイ感じだよな！。

「ちっちゃいけど………イイな」

「元のサイズならもつと様になっただろうが、これはこれでイイと思う」

隣に座り、優しい顔で微笑みながら耳を傾けるバサカも素敵すぎる

…。

「うん」

「

」

「

」

」

」

「おおっ！？バサカが重なった！」

「さすがに歴史に名を残し、伝説となった人物だけある……これはどとは……」

「ああ……神々しい調べで心が洗われるようだ……何だか泣けてくるよ……」

「

」

「……ぐすっ」

「べっ、別に泣いてなんかいいえ……これは、その、そう……目にヨミが入っただけ……！」

お前らは異常なんかじゃないからなっ！！ちゃんと幸せな時間を過ごすために此処に居る！！妙な感傷に浸ったりしなくていいから、何も考えないで思いつ切り楽しめよっ！！！！！！

「お前らと一緒に居られて嬉しいんだからな！このやるーめ！！」

「君たちと過ごせてありがたいと思っている！！これからもよろしく頼むっ！！！」

次行くぞっ！！！！！

「「あいよっ！！！！！！！」

「「……………ぶっ」

「ぶっ、ぶぶっ……………あははははは！」

「くっ、あははははは！！！」

「あのおバカ三人組も…たまには可愛く見えるものなのね」

「瞳を潤ませながら……………という事は歌っている辺りから覗いていたんだろうな。大方、連休の暇を持て余してあちこち覗いて回っているといった所か」

「いつもなら追いかけてお仕置きだけど、今回は許してあげましようか」

「ふふっ、そうだな。ところでメディア？」

「ん？どうかした？」

「ずっと気になっていたんだが……さつきから何を作っているんだ？」

「ああ、オルタに頼まれたゴスロリ衣装よ。あの娘とは趣味嗜好が合うからよく衣装を提供してるの。本当はセイバーにも着させたいんだけど……いつも逃げられるのよね……。今回はかなりの自信作よ」

「……………そうか、まあ、頑張ってる」

「もちろん」

ライダー&アンリマユ組

「んふふー」

「ライダーさんったらごきげんですねー」

「士郎の着用済みTシャツに包まっていますからね。これで機嫌が良くならないようなら何か重大な病気です」

「はー、そうなんですかー。これでよし……っ。ふう………ますたーから教えてもらったとはいえ、この大きさと洗濯物を畳むのもー苦勞です」

「いくらサクラでも服に包まったくらいで怒るとは思えませんけど。むしろ嬉々として一緒に包まろうとするような……」

「ライダーさんは甘いです。ますたーならニッコリ笑顔で奪い取って一人占めです。そして布団の中で色々ともぞもぞするんです」

「アンリ……意外と言う時は言うんですね。では、入れ替わるとしますか」

「はい……ってライダーさん、ころころ転がって移動しないでくださいよ。」

「私とてたまには怠けたくなるということです。はふう……ああ、サクラの匂いも素敵ですね。とても落ち着きます」

「あー、エミヤさんの匂いってお日様みたいにあっただかいです」

「あんな風に若干だれてるライダーも珍しいよな」

「ああ。少しばかり腹立たしいが、こういう機会が無ければ滅多に見られないだろうな」

「よっぽどアンリに心を許してるってことか。他の奴らが居ることも知ってるだろうし、無防備な部分を見せるようになってるのは嬉しいもんだ」

「スルーした方が良くいんだろうが……気になる発言がいくつかあったよな……」

「そこを気にしたら消されるぞロリーチャー」

「その名で呼ぶなど……はぁ、もういい。アチャ虎は？」

「まだ向こうで倒れてんぞ」

「ふむ。静かで快適だからもう一発撃ち込んでみるか……」

「それなりに反省しただろうし許してやれって」

「アンリ？」

「はいー？」

「この二つを重ねて、一緒に寝てみたら……さらに素晴らしい感じになるとは思いませんか？」

「ライダーさんの冴えっぷりが凄すぎです……！さっそく……いきましようか」

「「はぁ」「」

「これは……樂園ですー」

「くう」

「ライダーさ……って、あれ？寝ちゃってる？……ぶぶっ、これ

「は可愛い寝顔ですね」

「むー、わたしも……ねむ、く　　すう」

「あんな寝顔見ると……こっちまで眠くなってくんなー」

「……………」

「とりゃ」

「にゃあー!?! なっ、ななななな!?!」

「『何するんだ』ってか? こっくり、こっくりと気持ちよさそうに船を漕ぎやがって……この、ローリーチャーターが」

「だからといっていきなり胸を鷲掴みにするんじゃないツ!」

「はいはい。それにしても……そんなナリで意外と質量あるんだな」

「うっ、うるさい! ……胸を見るな!」

「俺を忘れないでくれー。おい、聞いてるー? おい、おい、おいってばー……………」

ようやく復活できたので最後のメンバーを見に行く！！トリを飾るのは休日は何をしているか気になるランキング1位に燦然を輝くギルガメツシュだ！！

「あー、言われてみりゃ確かに気になるな」

「強いて言うなら、そこら辺をうろつろしていそつだが」

ギルガメツシュは士郎くん印のちびサヴァ専用部屋に居るみたいだし……早速、行ってみるぞ。

「うむ、こんな所か……やはり英雄王たる我に不可能なことなど存在せぬ。初めて作った割には良い仕上がりではないか」

「特に髪と瞳の色合いの再現率、元の精悍な顔立ちを再現しつつ可愛らしい人形に仕上げている所などちょっとやそつとでは出来ぬだろつ」

あれは……確実に士郎くんをモチーフにした人形だよな？

「ああ。しかも自分の身長と同じくらいの大きさにしてるみてえだな」

「使われている布地や中綿は最高級品、初めて作ったにはかなり良い完成度だ。うっかりで金ぴかだが……やはり英雄王と称され

るだけあって元の資質は高い」

「もふもふ具合もちょうどいい。これで寝る時も寂しくないな。まったく……セイバーやバサカやライダーにはかり構いおつて…我とて、エミヤと遊びたいのだ!!」

「普段なら我に対する不敬罪で即刻斬首に処すところだが……エミヤは特別に許してやる。そつ、その代わり!!くつ、くつ、口づけをしろ!!それで帳消しだ!!」

……

「……………」

「……………」

なんかさー、すげー見ちゃいけないものを見てしまった気分。

「実際、見てはいけないものだったと思う」

「ギルにあんな一面があったとはなー。えーっと、あれが有名なツンデレってヤツか？」

ああ。王道を通り越して霸道と言っても過言ではないツンデレだ。

「ランサー、アチャ虎。ここはもう、何も見なかったことにして終

わりにしないか？」

「……………そうだな。ここらが潮時だろ」

燃え尽きたテンションではーっと終わりたかったけど、何かの拍子にバレたら命ごとぱーっと散らされかねないし……………賛成する。

何だかんだで心の底から楽しい時間を過ごせたし。

またしばらくの間は会えなくなるけど……………元気だな。

「おうよ。たまには本編の方も書いてやれよー」

「まだまだ未熟という領域にも入れていないんだ。せいぜい足掻いて文章力を付けるんだな」

ああ、ありがとよ。

それでは皆様、またの機会までご機嫌よう。

第四話……と思わせておいて、おまけというか番外というか、ただの悪ふざけ館
うーむ……ただの悪ふざけですね。

ほら、全国各地で批判の嵐が巻き起こっている……えっ？お前の駄
文のそこまでの影響力は無い？

ですよー。

第四話 学校に行ってみよう。(前書き)

ちびサヴァの正統なる第四話となります。

今回は悪ふざけ編ではありません。

正真正銘の第四話です。

相変わらず作者の妄想が反映され、好き勝手自由気ままに書かせて
いただいています。

温かい心、広い心、仕方ないねという許容の心をもって読んでいた
だけると幸いです。

第四話 学校に行ってみよう。

第四話 学校に行ってみよう。

『英霊とは…その強弱はあれど、総じてヒトの枠に収まっている限り決して敵わない規格外の力を持った存在。不可能ではないにしても召喚して使役するのが極めて困難なものよ。それを召喚し、令呪をもって使役することを可能にしたのが聖杯戦争。これは士郎も分かるわね？』

『説明してもらったから何とか、な』

『その聖杯戦争を行うのに必要な強力な英霊と従えるための令呪が一人の人間に集結し、マスターの矛であり盾となる英霊の姿形は小さくなって能力も弱体化している。そして、令呪の宿った部分を切り落とすにしろ、魔術的な方法を用いて他者に移植するにしろ、令呪自体は『ただ一人』の物ではない。私の言いたいことが分かるかしら…？』

『……ッ！…！』

『分かったみたいね。そう、この異常事態に気付いた人間にとつては格好のチャンスになるのよ……弱体化しているとはいえ八体の英霊を手に入れ、従える方法を手に入れるための。士郎の持っている魔力量や回路が少ないことが幸いして他の魔術師に気付かれている可能性は低いけど、決してゼロではないわ』

『みんな……ランサーとアーチャー、小次郎は話が終わる頃に合流してきたから簡単にしか説明しなかったけど、今まで話した理由か

ら士郎に同行するという結論に落ち着いたというわけ』

穂群原学園に向かう道を歩きながら、キャスターより学校に同行する理由を改めて説明してもらう。どうやら、想像していたよりも衛宮士郎の置かれていた状況はかなり危ういものになっているようだ。現在、同行しているのはアーチャーを除いた霊体化している六人と上着ポケットの中に居るセイバー。アーチャーはどうしても同行しないと行って聞かず、バサカの『七人も同行すれば充分だろうし、好きにさせよう』という一言で家での待機が決定している。

『それにしても……アーチャーの頑なな態度が気になるね。どうも、士郎に対して良からぬ感情を抱いてるような感じがする』

『ふむ、やはりバサカも分かったか。ランサーとのやり取りの時と士郎と相對した時とは全く違う。だが……どこか、必死で繕っているようにも思えるのだ……』

『行き場を失くして溜まり続け、煮詰まって、煮詰まって……狂気と化した憎悪と後悔……そう、感じました……。私は……この身の持つ属性や方向性、生前の経験からその手の負の感情には敏感なのでよく分かります……。だけど、小次郎さんの言う通りです。迷って、揺らいでいる部分もある気がします』

『アンリ……大丈夫ですか？』

『ライダーさん……ありがとうございます、もう大丈夫です』

記憶を掘り起こし、僅かな知識を思い出す。古代イラン、ゾロアスターが開いたとされる古い歴史を持ち、完全なる善神と完全なる悪神が闘争を行い、全世界が浄化された後に善神が完璧なる世界を構

築するとした火を拝する宗教。その教えに登場するありとあらゆる『悪』を肯定し、体現し、その身に宿す究極の悪神……その名はアンリマユ。そう……小さな花のような笑顔がよく似合う、穏やかな空気を纏った銀髪の少女の真名。

「俺は、さ……アンリがどんな属性を持っていても、どんな歴史を持っていて、どんな経験をしていても、アンリを受け入れる。頼りないマスターだけど、俺のサーヴァントであってほしい。アンリだけじゃない……他のみんなも同じだ。アーチャーに関しては……まだ、分からないけどな」

小さな英雄たちと出逢い、その真名を覚えてもらった時にそう思った。俺は……彼ら、彼女らが持つ伝説や歴史を知っている。語り継がれる素晴らしい話だけではなく、未来永劫に渡って残り続ける凄惨な話も知っている。だが、それは、誰しも持っている様々な『顔』のほんの一部に過ぎない。一日に満たない短い時間だが……言葉を交わし、その姿や行動を見てきて、そう思う。一部の『顔』を知ったからといって、全ての面が同じだと決めつけてしまうのは到底正しいことだとは思えなかった。

「だから……その……む、上手く言葉にできないな………すまない……」

『いえ、ちゃんと土郎さんの『言葉』は伝わりましたよ。ふふっ、キヤスターさんが貸してくれた魔術道具の効果を忘れちゃいましたか？』

『感覚の共有に念話……油断したわね？考えてることがすっかり伝わってきたわよ。まあ、悪い気分はしないわね』

『土郎は良い男だな。確かにまだ短い時間ではあるが、こうして仕

えられることを幸せに思う。八騎ものサーヴァントを召喚できた理由も分かるような気がするね』

『言いたいことは大体言われてしまいましたね。士郎…ありがとうございます、とても嬉しいです』

『くつくつく、こりゃあ良いマスターの所に召喚されたもんだ。これで女なら言うこと無しなんだけどな…ま、今でも充分すぎるくらいに上等だ』

『これはこれは、我が主殿はとんだ女殺しの素質を持っているようだな。名立たる英雄を落とすのだから末恐ろしい。いや、まことに重畳』

姿が見えないのでどんな表情をしているのかは分からないが、伝わってくる声の調子や言葉から満足げに笑っていることが容易に想像できた。俺が言葉しなかつた部分まで伝わってしまったのは少し…いや、相当に恥ずかしいけど、結果的には良かったんだろう。

「なんか…すごく照れくさい…。ん？セイバーが黙つたままだよな？セイバー、大丈夫か…？」

「……………あつ！？すつ、すみません……………その、昔のことを少しだけ思い出していました…。大したことではありません。私も、シロウがマスターであることに異存はありませんし、好ましいと思います」

「そうか…俺の歩き方が荒くて、気分を悪くしてしまったんじゃないかと思つてさ。みんな、ありがとな」

『せつかく役に立つ道具を貸してあげたのに、活用しないで普通に喋るなんて…ちょっと切ない気分になるわよ、素敵なマスターさん？それに、そろそろ人も増えてきたし、ぶつぶつと独り言はまずいんじゃない？セイバーも迂闊に声を出すと怪しまれるわよ』

『『ツ！！？』』

黙ったままのセイバーが心配になってけど、どうやら物思いに耽っていただけのようで安心した。『昔のこと』と聞いて、ふと今朝の夢を思い出しかけたが…少しだけ拗ねた口調のキャスターの指摘で思考が中断する。普段ならもつと長く感じる学校への道のりだが、みんなと話しているうちに視界に収まる位置まで到着してしまっていた。慌てて念話に切り替える。

『どうして、初対面のはずのアーチャーがそんな感情を俺に向けるのか…理由は分からない。俺も……なぜか、アイツとは相容れないと思う心が先に立つ。でも……』

『同じ仲間だから、良い関係を築きたい…ですか？』

『アンリの言う通り。理由が分からなきゃ、本人に聞いてみるさ。けど、俺とアーチャーだけじゃ上手くいかない可能性の方が高いから、みんなにも手伝ってもらうことになると思う。情けない話だけどな』

『いや、上等な考え方だぜ士郎。自分には何ができて、何ができないのか、そいつを踏まえるのは肝心なことだ。そんで、できないことを達成するために誰かの力を借りるっつーのは情けないことじゃねえ』

『私が思うに、土郎は一人で全てを何とかしたがつています。小さくとも、弱体化していようと、貴方には私を含めて七人の英霊が付いているんですよ？これを活用せずにとどめるんですか』

『ライダーさんが、初めて良いことを言ったような気がしますー…』

『おやおや、そんな失礼なことを言う口はこれですか？ちょっと懲らしめてあげましょう』

『いひゃひゃひゃ！？らふいだーひゃん！いひゃいでふつてー！』

せつかく良い話の流れだったのに、すっかり楽しい雰囲気染まってしまった。全然悪くはないし、俺自身も心が軽くなったような気がする。結局、昨夜はハリセンで殴り飛ばしただけだし、今朝も一言交わしただけだからな……帰ったら、きちんとアーチャーと話してみよう。

『それじゃあ、みんな分かっていると思うけど……霊体化しているとはいえ、くれぐれも勝手な行動はしないように』

校門がすぐそばまで迫っていたので、大丈夫だとは思ったが念のため一言伝えておく。勢いというか、流されるがままに学校まで連れて来てしまったけど……何だか、急に心配になってきた……。本当に大丈夫だろうか…？

Interlude

『アーチャー』

勝手な行動をするなと散々釘を刺され、霊体化しているとはいえ好き勝手に出歩いたら容赦なく制裁するとまで言われ、あの男と行動

を共にしないために了承したのが小一時間ほど前。行く場所も、することもなく、ぼんやりと時間を過ごす。

『ここは……どうなっているんだ……。私の……俺の知っている聖杯戦争とはまったく違う』

生前の記憶……今となっては、鮮明に思い出すこともできなくなった。遠い記憶を掘り起こす。月夜の下、魂すら奪われるような美しい少女との出会い……。そして、黄金の光に照らされ、一陣の風と共に消えていった彼女との永遠の別離。あの世界では、英霊は例外なく強大な力を振るって壮絶な戦いを繰り広げていた。

『たった一人、しかもあの小僧に令呪とサーヴァントが集結し、『復讐者』のイレギュラークラス……。真名はアンリマユときた……。これだけ歪むとなれば、自然のものとは考えにくい……。何かしらの意図が絡まなくては……』

聖杯を強く求める者に令呪が与えられるのか、聖杯を得る資格のある者が令呪を与えられるのか、それとも他の何かが影響しているのか……。仮に『何かの意思』が作用しているとすれば、聖杯が明確な意思を持っていることになる。歴史において比類する物なき最高にして万能の願望機が意思を持っているなど

『我ながら飛躍しすぎ、か……。荒唐無稽だな……。だが、英霊の姿形を変え、令呪を宿す人間を限定するなど……魔法使いでも成し得るかどうか……』

思考はひたすら巡り続け、答えが出ないまま時間だけ過ぎ去っていった。正常な状態であれば個人の意思で霊体化の解除もできるのだが、小さく弱体化している現状では、完全にマスター側でコントロ

ールされているらしい。まったく、忌々しい話だ。

『おまけにこの姿形で召喚されてからというものの、妙に感情の揺れ幅が大きい……。あれほど渴望した召喚、弱体化しているとして小僧を始末できるだけの手段はいくらでも用意できるのに……。意識しなくては、何もかも溶けてしまいそうになる……』

『マスターとサーヴァントの関係になり、簡単に背後や寝込みを襲って殺せる立場だというのに……。できなかつた……。いや、』やろう』という思いすら、忘れてしまっていた』

『楽しい』と思うことなど、許されるはずがない。この身体、この意識に必要なのはより多くを救うための冷徹な思考と躊躇のない行動だけ。そして今は、過去の過ち……。いや、これから過ちを犯していく存在もるとも全てを殺し尽くす。そのためだけに動くべきなのに、煮詰め続けた執念はたやすく薄れてしまうのだ。

ここは、優しく温かすぎる。

『ちっ、くだらん……。何を取りとめもないことを考えている……。あの男がサーヴァントと笑い合っているから、幸せそうに笑っているから、その程度で揺らぐなど……。あれは愚直に理想を追い求め、災禍を振りまく存在……。それに変わりはない。私は、殺す。殺して、何もかも……。消えなくてはならないんだ……。!!』

Interlude out

「 という風になるわけだ。ここは試験にも出しやすい所だからしっかり勉強しておくように」

『さっぱり分かんねえな。こんなこと習って何の役に立つんだ？おつ、小次郎見てみるよ。あそこの娘、将来イイ女になりそうだと思うわないか？』

『ほう……なかなか見込みのありそうな女子だ。しかし、私はもう少し和な雰囲気強いほうが……む、あそこの娘御などが良いな』

「退屈ねえ……アンリ、何か面白いこと言って」

『ふえー？えつと……昨日の夜なんですけど、ちょっと目が覚めちゃった時があつたんです。それで、バサカさんのおっぱ』

『待てアンリ。何を言おうとしている』

『あの……寝てる時にずれちゃったみたいで、バサカさんのおっぱ』

『もういい、何も言わない。それ以上言ったら、あとで酷い目に遭わせるからね』

『だってキャスターさんが『面白いこと言って』って言うから……あつ、キャスターさんはローブがはだけてて、色んなところが丸見えでしたー。キャスターさんって何も着けてないんですね』

『なっ！？何を言ってるのよアンリ!!』

『素敵な美尻でしたー。他のところも綺麗ですよね』

『『いい加減に黙れええええ!!!!!!』』

『はぎゅっ!?!』

『すう、すう』

『士郎は先ほどのアソリの話、興味がありますか？私でよければ、いくらでもお見せしますよ。そう、悪いものではないと自負している、ふぐうっ!?!』

『悪は滅びたわねバサカ』

『ああ、これで少しは落ち着ける』

特に問題が起こるわけでもなく授業は始まったのだが、大きな問題が静かに……俺だけに多大な被害を及ぼす範囲で起こっている。簡単に予想することもできたはずなのだが、現代学生ですら耐えられない退屈な授業に英雄の方々が耐えられるはずがなかった。

授業開始から僅か十五分ほどで限界に達したらしい。俺は念話で伝わってくるやり取りの声でしか状況を掴めないが、賑やかにじゃれあって暇を潰しているようだ。会話の内容がさまざま不穏でまったく授業に集中できない。唯一、セイバーだけは眠りに落ちているように大人しいのが救いではあるが。

『なあ、キャスター』

『どうしたの？さっきの話を蒸し返そうっていうなら、士郎もちよつと酷い目に遭ってもらっけど』

『いや、そうじゃなくてさ……霊体化してても、英霊同士って見たり触ったりできるのか?』

『そう言えば説明してなかったわね。どっちもできるわよ。士郎が見て、触れていたのは魔力を編み上げて形作っていた身体っていうのは説明したわね。霊体化っていうのは、それを解いて『核』となる魂だけの状態になっているだけなの。士郎の目に映り、脳が理解している世界とは違う位相に存在すると言えいいのかしら。同じ位相にあるのだから、見たり触れたりするのも自由なのよ』

『ただ透明になっただけじゃなかったんだな……』

探検に行こうとするランサーと小次郎を止めたり、目を覚ましたライダーとアンリが別の意味でアブナイ話を再開してしまったり、暴走した二人がキャスターとバサカを脱がそうしたり、それらのやり取りを聞きながら普通の顔を保つ必死の努力。尋常ではない気疲れがピークに達する辺りでようやく午前中の授業の終わりが見えてきた。

『疲れた……すごく、疲れた……』

『私も疲れたわよ……なんで、やらしい方向となるとあんなに元気になるのかしら……』

『……この衣装、やめようかな……。まさか、こんな場所で全裸にされかけるとは思わなかった……』

『惜しかったですねアンリ。バサカはもう少しで全裸にさせることができたのに』

『お衣装が大胆ですからね。筋力では勝ち目がありませんけど、怪力スキル持ちのライダーさんと二人がかりなら結構いけるもんです』

『なー、そろそろこの目隠しと拘束を解いてくんねえか？別に年増どもの裸にや興味な、ぐおふっ！？』

『探検に行かせてもらえず、残っていれば縛られ、目隠しをされて脱がせ合いの声を聞かされる。なかなか酷な仕打ちだな。いや、健康な生身の青少年である分、我らが主殿のほうがか酷かな？』

『んっ、ふあっ……あ……シロウ……すみません、また眠り込んでしまったようです……。おはようございます』

十二時ぴつたりいきゆるーなんて俺にだけ聞こえる音でお腹を鳴らし、セイバーが目を覚ました。それとほぼ同時に授業が終わり、静かだった教室に少年少女が思い思いに会話する騒がしさが戻ってくる。力が抜け、ぐったりと机に突っ伏していると、聞き慣れたさっぱりとした声がかけられる。

「よう、衛宮。今日は何だか疲れてるみたいだね？間桐と何かあったのかなー？」

「美綴か……いや、ちよつと寝不足とか色々あつてさ。桜と何かがあつたわけじゃない」

「ふうん？何となく、今日はいつもと違う感じがしたんだけどね。私の気のせいだったみたいだ。衛宮は昼飯どこで食べるんだ？決まってるなら、あたしと弓道場に行かない？」

ざっくりと切り揃えられた光沢のある綺麗な髪、強い意志と悪戯好

きの猫のような光が宿る瞳、和風美人のお手本のような少女は美綴綾子。かつて、俺がまだ弓道部に籍を置いていた時から交流のある友人だ。何かにつけて俺を弓道部に復帰させようと声をかけてくるのが玉に瑕なのだが…。

「いや、せつかくの誘いだけど止めておく。今日は一人で済ませたい気分なんだ」

「あらら、フラれちゃったね。まあ…今回はこれで引き下がっておこうかな。あんたほどの頑固者を簡単に落とせるとは思っていないから。気長にやるさ」

「すまないな」

「いって、いって。そんじゃーね」

ひらひらと軽く手を振って歩き去る美綴。『颯爽』という言葉がよく似合う背中を少しだけ眺め、桜の目を盗みつつ作った二つ目の弁当と自分の分を持って教室を出る。いくら今日も天気が良いとはいえ、この時期では少し厳しいかもしれないが屋上へと歩を進めた。

『シロウ?どこに行くのですか?』

『結局、朝ご飯もともに食べさせてやれなかったからな…みんな腹減ってるだろ?人目に付かず、ゆっくり食事ができる屋上に向かっているんだ。一応、ある程度の量は作ってきたけど足りなきゃ俺の分も食べていいからさ』

『へえ、土郎の作った飯か……そういや、夜から何も食ってねえな』

『土郎のご飯は美味しいから期待するといいわ。貴方もあんなバカ騒ぎを起こさなきゃ夜食も食べられたし、結界なんか張らないで普通に家の中で寝かせてあげたのに』

『ご飯といえば…お留守番中のアーチャーさんは一人で大丈夫でしょうか…?』

『案外、腹を空かして泣いてるかもしれないね』

『くくっ、そりゃあいい。想像するだけでも笑えるぜ』

『……………ぶっ、くふふ』

空腹で泣いてるアーチャーねえ…見たいような、見たくないような…。そうこうしてるうちに屋上に到着した。風もほとんど無く、降り注ぐ日差しのおかげで充分温かい。厳しい寒さになりにくい冬木の気候のおかげだろう。

「他に人もいないし、来そうにもないし、これなら落ち着いて食事
に専念できそうだな。さて、それじゃあ食べるとしようか」

『食べるのはいいけどね……………先に霊体化を解除しなきゃどうにもならないでしょう?』

「むっ……………すまん。えっと、霊体化させた時と逆の工程をイメージすればいいのか?」

『そっぴいっつと』

「ふう 同調、開始」

意識を切り替え、集中力を高めるために詠唱する。八人のサーヴァントと俺が繋がっているパスはすぐに感じる事ができた。改めて確認してみるが、やはりセイバーとのパスだけが妙な感じになっているのが気になるな…。それと朝は意識する暇がなかったが、魔力の通り道となり、そのものを生み出すために必要となる魔術回路を作り直したわけじゃないのに、どうして回路が通ってるんだろ…。

浮かんだ疑問はひとまず置いて、先に霊体化させる時とは逆に締めたパスを緩め、流れていく魔力量を増やす。細くなっていた流れが元の太さを取り戻した感覚があり、無事に霊体化を解除できたことが分かった。

「さすが士郎。無事に霊体化の解除ができたみたいだね」

「やっぱり、ちゃんと身体があるほうが私は好きですー」

「これが士郎の作った弁当か？こりゃまた、なかなか美味そうじゃねえか」

実体化した身体を確認するように軽く動かすバサカ。キャスターの話では、霊体化してる時だところからの位相から得られる情報量が極端に少なくなるらしい。そこら辺からアンリは実体のほうが好きだようだ。まともな現代の食事に触れるのは今回が初めてなランサーは興味深げに弁当箱の中身を眺め、品定めに余念がない。

「あの、シロウ……ポケットから出てもいいですか？」

「ああ。もう、出ても大丈夫だ。ちょっと待ってくれ、今出してやるからな」

ご飯がすぐ近くにあるのに、ポケットの中でじっとしているのが我慢できなくなつたのだろう。急かすような響きを含んだセイバーの声が聞こえてきて思わず苦笑してしまった。静かにポケットの中に手を入れ、温かく柔らかな身体をそつと手で包み込む。ポケットからセイバーを出すと、数時間ぶりの冷たい空気を大きく吸い込んでいた。

「大丈夫か？ やつぱり、苦しかったんじゃないのか？」

「いえ、苦しいなんてことはありませんでした。ただ……あの、せつかくシロウの作つた物を食べるんですから、寝起きでほんやりしたままの頭では失礼かと思つて……」

「セイバー………ありがとな。それだけで、作つた甲斐がある」

外気の冷たさのせいか、はたまた自分の言葉によるものか、白い頬に微かな朱が混じる。思わず、きゅーつと抱きしめたくなつたのは秘密だ。

「みんなが食べやすい大きさに作りたかつたんだけど、桜も一緒だったから普通サイズに作るしかなかったよ。だけど……よっ、と……」

せつかくの弁当なので少し手の込んだ物を作りたかつたのだが、一緒に料理をしていた桜に怪しまれず、小さな英霊でも食べやすい物と考えるとサンドイッチしか思い付かなかつた。おにぎりも考えたんだけど、夜食で食べさせているので却下。昨夜の騒ぎで食べていないランサーには申し訳ないが、また別の機会ということ。弁当と一緒に持参してきたペティナイフで小さく切り分ければ完成となる。

「これでよし。量は充分に作ってきたから奪い合って喧嘩しないように。それじゃ、食べようか」

Interlude

『アーチャー 昼ごはん編』

先の見えない闇の中を歩き続けるような思考を続け、気付けばすっかり昼時になつていた。英霊とは読んで字のごとく『霊』であるがゆえ、食事や睡眠を必要としないはずなのだが……

『なぜ腹が減るんだ……』

かつて、戦場を渡り歩いてきた時にはまともな食事にありつけず何日も空腹に耐えねばならなかった。自分の食料を譲り、僅かな水だけで過ごしたこともある。空腹には耐性があるので大した問題ではないのだが、どうも釈然としない。

『考えてみれば今朝もランサーに起こされるまで眠ってしまった。たし、何だというのだ、この身体は……むっ？』

奇妙奇天烈と言うほかない現状に頭を抱えていると、霊体化が解かれて実体に戻った。危機的な感じが流れてこないのも、霊体化しなくてもいい状況になっただけだろう。

「だからといって、私のほうまで実体化させてどうするのだ…たわけめ」

屋根の上で見張り続けても変化や異常らしきものは全く見つからな

いので、一度家の中に戻ってみることにする。出がけにランサーと小次郎が進言したこともあり、中庭に面した引き戸のひとつが自由に開閉できるようになっている。防犯の心配はキャスターが結界を張ることで解決したらしい。

今となつては鮮明に思い出すことも困難な古い記憶を呼び覚まそうとする空気。汚れ、歪み、墮ち、その果てに『英雄』などという唾棄すべき存在へと行き着いてしまったのに……それでも、俺の身体はここを家だと認識してしまうらしい。

『ほらあ！早くお姉ちゃんのためにご飯を作りなさい！！』

『、ゲームに負けたんだから罰として今日こそ一緒にお風呂入ってもらうからね！』

『 問おう。貴方が、私の か？』

『 の手は温かくて、安心します』

『 貴方が助かって、本当に良かった』

『 そんな、どうして……貴方が、泣いているのですか』

『 だって、貴方は……この戦いを終わらせるために、戦うと決めたのだから』

『 貴方が、私の鞘だったのですね 』

『 最後に、ひとつだけ伝えないと。 、貴方を、愛している』

脳裏に浮かんでは消えて行く微かな情景。それは時の流れと激烈な日々削られ、忘却に色褪せ、鮮やかさを失ったかけがえのない日々の記憶。されど、失われることだけは決してない想い出。

「もう、思い出すことも止めていたのにな……まだ、これだけ残っていたのか……」

ふと居間のほうに目をやると、ラップをかけられた皿がテーブルの上に残されているように見えた。近づき、卓上に飛び乗ってみる。皿の上には小さく切り分けられたサンドイッチが並び、そばには小さなメモ用紙が残されていた。

「これは一体……」

『腹が減ったら食べるように。皿とかはそのまま残しておいて構わない。このカードは魔力を流せば跡形もなく燃えて無くなるらしい。飛び火とかは心配しなくてもいいってキャスターが言ってたから。』

衛宮士郎』

「……………」

カードに書かれた文章はこんな内容。文字を目で追いながら、ひどく複雑な心境になる。あれだけ深刻に考えていたというのに、下に降りてみればこんな置き土産。どうい感情を表せばいいのか分からないまま、ひとまず食べてみる。

「『食べない』という選択肢もあるが、余計な追及をされるのは面倒だしな……………むっ、塩加減が甘い……コシヨウも利かせすぎだ」

「ちっ、こちらは切り方がまずい。これでは瑞々しさが逃げやすい

ではないか」

「……………完食、してしまった……………」

なぜか、凄まじい敗北感が襲ってきた。気にしては余計何かに負けてしまうような気がするので、さっさと頭を切り替える。あとは書き置きのみメモ用紙を処分するだけ。

「元は普通のメモ用紙のようだが…キャスターが細工したのか」

この姿でも魔力の扱いは無難にできるようなので適当に魔力を流し込んでみると、ジリジリと音を立てて紙が燃え始めた。どんどん小さくなっていき、燃え尽きる瞬間

「ぬあつちい!!?」

ぼん、と一際大きく燃え上がる。炎の向こう側に、ニヤニヤとチエシャ猫のような笑みを浮かべるキャスターの顔が見えた気がした。そして同時に思い出す。どうしようもなく愚かな生涯に、常に関わり続けた眩しいほどの輝きを放つ紅玉のような少女のことを。

『そんなしけた顔してるから喝を入れてやったのよ。感謝しなさいよ?この、バカ士郎』

「そういえば……………彼女もよくこんなことをして笑っていたな。まったく……………本当に、どうしようもなく、おかしい世界に召喚されてしまったものだ」

Interlude out

「にしても美味しいな……これを士郎が作ったのか。男だっつーのに大したもんだ」

「『さんどいつち』といったか、これもなかなか。むっ、セイバー、そのタマゴの物とこちらを交換してくれないか？」

「構いませんよ。私もちょうど小次郎が選んだ物に目をつけていたので。ただ食材を挟み込んだだけだと思いますが、考えを改めないと……やはり、料理とは奥深くなくては」

「夜に食べたおにぎりも美味しかったですけど、これも美味しいです。ところでライダーさん」

「どうしました？」

「みんな特に反応しなかったので今まで気にしないようにしてきましたんですけど……マスク、取ったんですね」

「ええ。小さくなったせいなのかは分かりませんが、私の魔眼が無害になっているので。実は邪魔なんですよね……あのマスク」

「なるほどお。ライダーさん、素顔のほうはずっとずっと綺麗です」

「触れたほうが良いのか分からなかったから黙ってたけど、本当に綺麗よね……まさか、普通に素顔を見れる時がくるとは思わなかったわ」

「瞳など宝玉と称するしかないね。私はクセが強い髪だからな…その滑らかな髪もつらやましく思うよ」

「うっ、うう…そんなにまじまじと見ないでください…。恥ずかしいです…」

うんうんと頷きながらランサーは食べ進め、小次郎とセイバーは時折サンドイッチを交換しながら食べる。アンリ、キャスター、ライダー、バサカも容姿の話に花を咲かせながら楽しげに食事を楽しんでいる。頬を染め、少しでも視線から逃れようと身体を小さく縮める美しき騎乗兵のなんと可愛らしいことか。

「そっぴや…アーチャーのやつ、ちゃんと置いといた分食べたかな」

「書き置きのカードに掛けた魔術が発動したみたいだから食べたと思うわよ？」

「だったら良いんだけど。今日は藤ねえも桜も家に来れないらしいから、夕飯は手の込んだ物を作るよ」

「『藤ねえ』という人は初めて聞くけど？」

「あー、えつと…俺の姉みたいな人だから警戒しなくていい。何かあっても霊体化すれば問題ないだろ」

キャスターの質問でようやく藤ねえのことも思い出したけど、霊体化があるので問題は無い。まあ、藤ねえならば小さなサーヴァントを発見しても『可愛いお人形さんねー!!』くらいで終わらせてしまいたいけど。

「召喚した私たちをあつさり受け入れるくらいだから、ずいぶんと変わった少年だと思っただけど……土郎もずいぶんと慣れてきたね」

「むう…慣れずに、いつまでも騒ぎ立てるよりはいいじゃないか。初めて会った時、悪い奴らだとは思えなかったんだよ」

笑い混じりでちやかすようなバサカに返す。神々しい美しさと威厳を持つ見た目に反し、中身は案外といたずらっ子みtainな部分があるようだ。遊び心の有無も英雄の条件にあるような気がしてならない。

「ん？そろそろ時間も無くなってきたな……みんな、食べ終わったか？」

「おう、キレイに片付いたぜ。量もばっちり、セイバーは少しばかり物足りなさうだけだな」

「美味しくいただけさせてもらった。夕飯のほうも楽しみにさせてもらおうかな」

「物足りないなどと考えていませんよ！！ランサー、邪推しないでもらいたい！」

「へいへい、そういうのは寂しそうに弁当箱を見るのを止めてから言うんだな」

「っ！？見てたん……ごほん、シロウ、夕食も期待してますから」

楽しそうに笑いながらセイバーをからかうランサー。正反対な感じがしてだから大丈夫かと心配になったけど、案外と相性が良いのか

もな…この二人。やれやれと首を振りつつ、笑みを浮かべる小次郎もすっかり馴染んだ様子だ。

「土郎さん、お弁当箱を重ねましたよー。バサカさんとキャスターさんに手伝ってもらいましたけど」

「美味しかったよ。食が進むから余計な肉が付いてしまいそうだけどね」

「デザートが欲しいところですけど…公衆の面前はちょっとだけ恥ずかしいので我慢するとします」

アンリがとことこ歩み寄って後片付け終了の報告をしてくれ、小さな身体には大きすぎる弁当箱をバサカとライダーは軽々と持ち上げて持ってきてくれた。片方は細くくびれたお腹をぶにつと摘まみ、もう片方は僅かに赤面しつつ、意味ありげに俺を見上げてきた。バサカはいいけど、ライダーの視線と言葉がやっぱり不穏だ…。

「それだけ細いんだから少しは付けなさいよ。さて、後片付けも済んだし、そろそろ教室とやらに戻る時間なんですよ？」

「まだ、少し余裕はあるんだけどな。戻る前にキャスターに聞いておきたいことがあってさ」

「聞きたいこと？」

「魔術回路を作り直したわけじゃないのに魔力が供給できてるのって普通なのか？」

「へっ？」

俺の質問を聞いた瞬間、きょとんと目を丸くするとんがり耳の魔術師。こうして見ると、大きくて綺麗な色の瞳だよな……って、そういうことじゃなかった。

「えっと…俺、なんか変なことを聞いたか？」

「士郎は、魔術を扱う時に、そのつど回路を作り直してたの？」

「ああ、爺さん……俺の師匠みたいな人が教えてくれたのは回路の作り方と、強化、投影魔術だけだったからさ。魔術を使うには回路を作らなきゃいけないんだろ？」

俺の言葉を聞いてキヤスターが頭を抱える。おお……こんな仕事もできたんだな。妖艶な雰囲気、容姿を持っているから全く想像できなかった。

「士郎の師匠も予想してなかったでしょうね……いい？魔術回路っていうのはね、一度作ることができれば、次回からは切り替えるだけで使えるようになるのよ。わざわざ一から作るなんて危険な真似を何度もやってたら命が何個あっても足りないわ。よく、今まで生きてられたわね……他の魔術師に感知されるとかの前に、いつ死んでもおかしくなかったわ」

切嗣が死んでから毎夜行ってきた鍛錬を思い返す。何度となく死ぬんじゃないかという場面があったが……キヤスターのような大魔術師でさえ危険と言う工程を五年に渡って続けてきたのか……。自分のことだが、本当に、よく無事でいられたな……。

「士郎が意識していないだけで回路は存在する。ただ、切り替えて

起動させる方法を知らなかっただけ。家に帰って落ち着いたら調べてあげるわ。このまま放っておいたら危険よ」

そう言つてキャスターは黙り込む。ぶつぶつと何事かを呟いているので、帰つてからの予定を立てているのだろう。午後の授業開始が近づいたことを告げる予鈴が鳴り響き、校舎内に慌ただしさが広がる。そろそろ教室に戻らなくてはならないだろう。

「すまん、戻る時間だ。みんな、霊体化させるぞ」

新たな波乱の予感を残しつつ昼休みは終わり、午後の授業が始まる。

「それじゃ、今日の授業はここまで！！ちゃんと復習しないとひどい目に遭わせちゃうんだからね！！特に士郎はしっかり勉強しないとダメよー！みんな、寄り道しないで帰るように！」

「はいはい、分かったよ。藤村せんせい」

生徒よりも遥かに高いテンションで走り去っていく実年齢よりも幼く見える女性。名前は藤村大河、衛宮士郎にとって姉のような人である。こうして一日の授業が終わり、放課後となった。昼休みの時よりも大きな喧騒に包まれ、部活動に向かう者や家路につく者、にわかには混沌とした様相を呈する。

今度はどんな静かなる騒ぎが起きるかと思つたが、午後はみんな大人しかった。ちょうど歴史関係の授業が多くて興味を引かれたのも大きな要因だろう。セイバーだけは満腹の心地よさも手伝つたらしく眠っていたようだけど。

『みんなお疲れ様。道すがら夕飯の材料を買っていくから、少し寄り道していくぞ』

『あーいよ。さすがに疲れちゃった。やっぱり、じっとしてるのは性に合わないな』

『なかなか興味深いところだけど、毎日来るのは遠慮したい所ね』

『キャストと同意見かな。自由に動き回っていいのなら、話は違うけど』

小さな英霊たちが抱いた学校への感想は大体似たものだった。まあ……予想はついてたけどな。明日以降どうするか、また話し合いの場をもつ必要があるそうだ。荷物をまとめ、人の流れに乗るようにして昇降口へと向かう。靴を履き替えて外に歩み出すと、陽が落ちて冷たさを増した空気が身体を包み込んだ。

「さむっ……やっぱり、日が暮れると冷え込んでくるな」

こんなに寒いなら温かい鍋物がいいかもしれない。藤ねえや桜がないと簡単に済ませがちな夕食だが、今夜は小さいながらも八人が同席する。みんなで囲んで楽しく食べられるし、これは名案だろう。

「決めた。今夜は奮発して鍋にしよう」

『鍋……ですか？よく分かりませんが……何やら美味しそうな料理の予感がします』

『さすがに料理の話となるとセイバーさんの反応が素早いですねー』

『実体化したら寒そうですね……寒いのはあまり得意じゃないんですが……』

『くくっ、ライダーは衣装からして寒そうですね。土郎、温めてやってはどうか？ 喜ぶと思っぞ』

時が経つにつれて小次郎がゆるーくなっているような……。いや、固くなるよりはずっと良い傾向なただけどさ。セイバーの期待にも応えなきゃならないし、留守番のアーチャーも退屈してるだろうから早く帰らないと。

「よしっと、それじゃ、家に帰るとしようか」

第四話 学校に行ってみよう。 終幕

第四話 学校に行ってみよう。(後書き)

おちびたちが学校に行きました。

士郎くん強化フラグが立ったような、立ってないような。

美綴さんと藤ねえがちよい出演。

ライダーさんとアンリちゃんはエロ要員。

キャスターさんはセイバーとまた違った美尻。

バサカさんのおっぱいは神。

アーチャー、デレフラグが立った……………のかな？

どンドンゆるーくなっていく小次郎。

どこに向かっていいのか分からない、そんなちびサヴァ。

第五話 夕餉の時間、眠る力の一端を知る刻。(前書き)

絶好調に作者の妄想が反映され、独自解釈や勝手な設定などがふんだんに盛り込まれています。

相変わらず自由気ままに書いているので、温かい心、広い心、仕方ないねという許容の心をもって呼んでいただけると幸いです

第五話 夕餉の時間、眠る力の一端を知る刻。

第五話 夕餉の時間、眠る力の一端を知る刻。

夕暮れの道、家路を急ぐ人々の流れに乗るようにして歩く。本日の夕飯となる材料は両手に持った袋の中、あとは家に向かうのみ。紅の中に薄闇を孕んだ光景に、ふと、相反するような白銀を垣間見たような気がして足を止めた。

「あれ……見間違い、だったのかな……」

「ん？どうしたんだよ？」

「いや、あそこに銀髪の女の子がいたように見えただけ……ランサーは気付かなかったか？」

「見てねえな。小次郎はどうだ？」

「ん？すまん、何の話だ？すれ違った少女を眺め、愛でていたので聞いていなかった」

「お前に聞いた俺がバカだったよ……キヤスターたちも…見てないよな」

「何か言った？またバサカを脱がそうとしたアンリとライダーのお仕置きで忙しいんだけど」

「シロウ……まだ家には着かないのですか？ちょっと、空腹が辛く

なってきました…』

「やっぱり見間違いだっただのかな…。ま、気にしても仕方ないか」
話をまとめると誰も見ていなかったらしい。悲痛さに満ちたセイバ
ーの念話に背中を押され、止まっていた家への歩みを再開した。

「ただいま」

キャスターの結界が効いている家の敷地に入ったので霊体化を解除
しつつ、恐らく家内にいるだろうアーチャーに帰宅を告げる意味も
兼ねて声を出す。実体化した面々を肩、腕、頭などに乗せ、居間へ
と向かった。

「すまん、遅くなった。留守の間変わったことは…って、あれ？」
予想に反して居間に弓兵の姿はなく、食事を乗せておく役目を終え
た皿が鎮座しているだけ。かけておいたラップだけは自力で処分で
きたらしい。

「おかしいな…どこ行っただら」

「反応は敷地の中。何が楽しいのか、屋根の上にいるみたい。下り
てきてるみたいだし、そろそろ」

「逃げ出した、とも思ったか？この身体で出歩いたとて、不利益
しか生み出さないことぐらい私にも判断は可能だ」

結界内ならば個人の居場所も特定できるのだろう。僅かに探るような仕事のあとでキャスターが話し始め、それを途中で遮るようにアーチャーがやって来た。留守中に何かあったのか、今朝見せた頑な態度がほんの少しだけ和らいだように感じる。

「別に逃げ出したなんて思っていないさ。サンドイツチ食べてくれたことの礼と、これから夕飯を作るから今夜はみんなまで食べようってことを伝えたかったんだよ。それと、留守中に何か起こらなかつたかも聞きたくてさ」

「ふん……サンドイツチは味付けや切り方がまだ甘い。基本を徹底しなければ、いずれ他の応用にも悪影響が出てくるだろう。せいぜい気を付けるんだな。私としては極めて不本意だが、この身体が空腹を感じる以上、食事を摂る必要がある。夕食には参加しよう。昨夜のように再び騒動を起こすつもりはない。ランサーが愚かな真似をしでかさなければの話だが。さあ、夕飯を作るにしても準備があるのだ。こうして悠長に話している暇などないはずだろう。私から言うべきことは以上だ」

「……………留守中だが、不審な出来事や異常は何も起きなかった。問題ない」

まくし立てるように話し、最後にぼつりと呟いてからそっぽを向いてしまうアーチャー。呆気にとられ、しばし沈黙してしまったが……どうやら、普通に会話をするくらいは歩み寄りの姿勢を見せてくれたようだ。

「そんなに早口で話さなくても、普通にしてくればいいのに……まあ、のんびり話していられるほど時間の余裕がないのは事実だけだ。それじゃ、さっさと支度を調べて、夕飯にしようか」

みんなをテーブルの上に降ろし、愛用のエプロンを付けながら台所に向かう。今夜は鍋だし、それほど準備に時間を取られることもないだろう。大体、炊飯器にセットしたご飯がちょうどよく炊き上がる頃には食卓も調うかな。

「土郎、少し聞きたいんだけど」

「ん？バサカか…どうした？」

「いや、大したことではないんだけど…食事をするにしても食器の類は必要になるだろう？私たちのサイズでも使える物があるのか気になって」

バサカの言葉でこれまで失念していた基本的な問題点に気付いた。確かに、毎回おにぎりやサンドイッチで済ませるわけにもいかない。そうしなければ食器が必要になるのは当然の流れ…そこで、ふと思いついた。

「言われてみれば…ちょっと待ってくれ、確か土蔵に…」

それは切嗣がまだ生きていた頃の懐かしい記憶。貰ってきたのか拾ってきたのかは知らないが、ある日、どこからか人形遊びのグッズを一揃い持ってきたことがあったのだ。理由を聞いてみたら「誰にも使われずに捨てられるのが忍びなくてねえ…思わず持って帰ってきてちゃったんだ」と困ったように笑っていた。俺が使うことは当然なく、切嗣も結局は持て余してしまったので、そのまま土蔵にしまわれた物。

「俺が捨てた覚えは無いし、藤ねえは土蔵に物を持ち込むことはあ

「つても捨てるなんてありえないし、そのまま残ってるはず。よし、ちよつと待つててくれ」

「何か思い当たる節でも？」

「バサカたちの食器にぴつたりな物があるかもしれないんだ。土蔵に置いてあるだろうから、ちよつと探してくる」

小首をかしげながら問いかけてくるバサカに答えつつ、上着を羽織つて玄関のほうへと向かう。長期間に渡って放置してきたので見つかったとしても状態が心配だが、きちんと包装した上で段ボールに入れた覚えがあるので大丈夫だろう。

「一人では手が足りなくなるだろう。私も手伝うよ。どうせ、やることも無いし」

「あの中って明かりが無かったわよね？なら、私も行くわ。魔術道具で明かりを確保できるから、暗闇を手探りで探し続けるよりはずつと効率が良いでしょう」

「バサカさんとキャスターさんばかりずるいですー。楽しそうなので、私も行きたいです」

「こつ見えて力はあるほうなので、お役に立てると思います。私もお供させてもらえませんか？」

「でも、外は寒いし、俺だけで……」

話の流れに乗るようにしてバサカ、ローブの中からふよふよと浮かぶ光玉を取り出しつつキャスター、冒険に心躍らせる少年のように

瞳を輝かせながらアンリ、とことこ歩み寄り、むんと力こぶを作るような仕草をしつつライダー。合計四人が手伝いを申し出てくれた。日も完全に落ち、外は寒い。断つて一人で行こうと口を開くが

「私たちは自分の意思で手伝いを申し出てるのよ？それを断るほうが失礼に当たると思うけど……賢明なマスターなら、そんな野暮なこと言わないわよね？」

「気遣ってくれる思いは嬉しいが、私たちの好意なのだ。素直を受け入れてくれ」

「一人で探すよりもみんなで見つけたほうが早く見つかって、きっとご飯も楽しく食べられますよー」

「何もしないで待つてるよりも、士郎の手助けがしたいだけです」
こんな風に遮られ、瞳や態度で訴えられてしまうと、もう何も言えなくなってしまう。断りの言葉の代わりに湧き上がってきたのは、温かい嬉しさだった。そして、申し出を受け入れる言葉を口にしようとしてふと考える。これが、本来あるべき『助ける』という行動の在り方なのではないかと。行動のみで示すのも方法のひとつだが、『助けになりたい』という心や思いまで相手に伝え、それが理解され、受け入れられ、初めて相手を『助ける』ことになるのではないか。

「ろっ？　しろっ？　士郎！」

「へっ！？えっ、ああ……すまん、ちょっと考え事してた。みんなの申し出、ありがたく受けさせてもらっよ。さ、肩でも腕でもポケットでも、好きな所に乗ってくれ。さっさと探してこよう」

「全員で行っても仕方ねえし、俺らはここで待つてるぞ。まあ、よろしくやってこいよ」

「どこに行くにも両手に花、いやはや…男子の抱くだろう本懐をあつさりと実現する辺り、本当に大物だな。我が主殿は」

「シロウ……お願いですから、早めに、お願いします……」

「この通り、セイバーの状態がかなり深刻だ。余計なことをせず、目的の物を確保したら早急に食事の準備をしろ」

バサカの声でぼんやりと思考に沈んでいた意識が引き戻された。見れば、毅然、清廉潔白を人型にしたようなセイバーがふにやりと溶け崩れるように倒れている。自分がどういう状態なのかも後回しになるほど空腹に苛まれているのだろう。そのどこか愛らしい姿をもう少し眺めていたかったが、なぜか焦り始めたアーチャーの様子と言葉から不穏なものを感じた。ひとまず、待機を選んだ四人の声を背に受けながら、手伝い組を身体のおちこちに乗せて土蔵へと出発する。

しっかりした照明設備があるわけではなく、物探しの大きな障害となる暗闇が満ちていた土蔵内がキャスターの生み出した数個の光球で明るく照らされた。説明の必要性を感じなかったようでキャスターは何も言わなかったが、恐らく何かの魔術道具の効果だろう。

「よっ、と……えーと、確かこの辺りにしまってたはず……。ライダー、その箱に乗って中を確認してもらえないか？アンリとバ

サカはそっちにある箱を確認してくれると助かる」

「こちらに入っている物は違うようですね。何やら金属類が詰め込まれていますから」

「こっちは布切れがたくさん入ってるだけですー」

「んー……これも違うみたいだね。何かの機械みたい」

大体の目星をつけ、箱を開けたり揺すってみたりして搜索。足場を使わないと下ろせないような高い場所の箱、奥のほうに入り込んでしまっている箱の確認にはバサカたちに活躍してもらおう。薄れた記憶が正しければ、この辺りにあるはずなんだが……。

「キャスターはそれらしい箱を見つけれられたか……って、どうした？」

黙ったままのキャスターに進捗状況を聞こうとして視線を向けると、彼女は土蔵の片隅に積み上げたままのガラクタを見つめて険しい顔をしていた。そのガラクタは土蔵の中にある他のガラクタとは違い、衛宮士郎が常識の範囲外にある理を用いて作り出したもの。己の魔力を代価としてあらゆる物を作り出す『投影魔術』と呼ばれる業を行使した結果。

「士郎……これは、貴方が、魔力を用いて作り出した物に間違いないわね？貴方たちの呼び方でいう投影魔術を使用して作った物」

「あつ、ああ。そうだけど。半人前だから中身がスカスカのガラクタしか作れなくてさ……切嗣、俺の師匠みたいな人にも効率が悪すぎるから強化魔術のほうを練習しろって言われてたんだ。だけど、相性が良いのは投影魔術のほうだったから時々練習してた」

「問題が増えたわね……しかも、大きな問題が……。おかしい状況ではあるけど危険が間近に迫ってるわけでもないし、多少時間をかけて教えるつもりだったけど……早急な対策と教育が必要になったわ……」

俺の話を聞いて独り言を呟きながら思考に没頭してしまったキャスター。詳しく事情を聞きたいところだが、下手に話しかけたら怒鳴られそうな雰囲気なので触れないでおこう……何かあれば声をかけてくるだろうし。

「あつ！士郎さん！これ、探してた物っばいですよー！」

小さな身体には不釣り合いな気迫とを発散するキャスターを刺激しないようにそつと背を向け、探索を再開しているとアンの嬉しそうな声が聞こえてきた。そちらに目を向けると両手を振ってニコニコと笑う銀髪の少女。ちんまりとした姿形には不釣り合いな豊かさで揺れている胸に目がいつてしまいそうになった自分が悲しい。

「どうやら見つかったようです。先に見つけて士郎にご褒美でもねだろうかと思つてたんですが」

「ライダーらしいね。まあ、士郎のことだから『手伝ってくれたから』『大人しく待つてくれたから』とか言つてみんなにご褒美をくれそうだけど」

「それもそうですね」

そんな会話を楽しそうに交わしながら俺の肩と頭に飛び乗ってくる二人。ライダーは左肩がお気に入りらしく、もはや定位置となっている。バサカはその時々によって違い、今回はたまたま頭に乗っか

っただけだろう。

「えーっと……うん、これだ。ありがとな、アンリ。おかげで助かったよ」

「えへへ、嬉しいです」

箱の中を確認すると目立った劣化もなく綺麗な状態。これなら、きちんと洗えば問題なく使える。せめてものお礼にと柔らかく、滑らかなアンリの銀髪を撫でると、はにかむような可愛らしい笑みを浮かべた。

「……………」

「……………」

物欲しげな、不満げな沈黙と雰囲気を感じたのでライダー、バサカの順番でそつと撫でる。頭に乗ったバサカは視界の外なので不安だったが、自分から右肩に下りてきたので問題なく撫でることができた。こうした反応を見ていると本当に小動物を相手にしているようで微笑まじさが強くなるな。

「ごめんなさいね、ちょっと問題が発生してそっちに集中してたわ。目的の物は見つかったみたいね。他の四人が待ちくたびれてるでしょうから早く戻りましょう」

「そうだな。それで、さっきの会話とかその問題とか大丈夫なのか？」

「ある程度考えはまとまったわ。あとは、実情を確認してそれに合

わせた対応をしていだけ。士郎、夕食が終わったら話があります」

「それって……昼間に言ってた魔術回路に関係した話か？」

「ええ。魔術回路もそうだけど、あの投影物を見てさらに問題が発覚したからそちらの話も一緒に」

「分かった。キャスターがそこまで真剣になるってことは、かなり重要な話になるな」

重力制御でもしているのか、ふよふよと飛んでくる小さな美貌の魔術師。羽織った上着の胸ポケットに収まりながら話しているので声音ほど真剣な感じがしないのだが、それを言うと怒られそうなので黙っておく。

埃まみれの箱ごと持っていく必要はないので、食器類のまとまっている袋だけ持ち出す。箱はすでに見つけているので何か必要になったらまた取りに来ればいいだろう。

「よし、じゃあ戻ろうか」

またランサーとアーチャーが喧嘩してるんじゃないかと心配だったが、居間に戻ってみると意外にも和気あいあいとしていた。

「これが日本刀ってやつか。綺麗なもんだ。こんだけ繊細なのに力強さも同居してるとは…面白いな」

「私の刀は特殊だな。本来の日本刀はもっと短く、均衡の取れた美

しさをもっている。貴殿の槍も逸品ではないか…これほどの槍を目にする時がくるとは思わなかった」

長刀を手に取り、角度を変えては興味深げに眺めるランサー。小次郎は代わりに深紅の槍を眺め、瞳を輝かせる。全く共通点の無さそうな二人だが、こうして見ると似た者同士なのかもしれない。

「銘はゲイボルグ、意味は雷の投擲。その槍を用いて放つ技の名称であるとも言われているな。凶暴な海獣二頭を戦わせ、負けた方の骨を用いてボルグ・マク・ブアインが作り出し、幾多の難所を越えて辿り着いた影の国の女王であるスカアハよりクー・フリーンに与えられた魔槍だ」

「ずいぶん詳しいんだな、アーチャー」

「ある事情から刀剣類に関しての来歴は徹底的に知る必要があった。それだけの話だ」

「ちなみに日本刀とは日本固有の製鋼方で生み出された玉鋼を用い、焼きを入れて鍛錬し、冷却するという工程を幾度も行う。その中で軟度、硬度の違う鋼を組み合わせ、幾層にも折り重ね、さらに焼きと鍛錬を加える。加熱の際の温度管理についても極めて繊細な注意が必要となり、最適な温度から急速に冷却を行うことで複数の工程を経て鍛錬された鋼の硬さ、柔軟さ、粘りを余すところなく引き出せる。本当ならばさらに細かな過程があるのだが……全ての要素が絶妙の均衡を保ちつつ融合することによって、曲がらず、折れることもなく、その鋭さから斬鉄すら可能とする刃として完成する」

二人のかたわらに立ち、楽しげに講釈を語りまくるアーチャー。よほど好きなんだろう、放っておけばいつまでも喋り続けそうな勢い

だ。最初は感心したように聞き入っていた二人も途中からは流している。

「あ、アーチャーさんってあんなに話すんですね……もう、何の話なのか分かんなくなってきました……」

「俺は楽しいけどな……昔から剣とか刀とか眺めるの好きだし。その歴史や製法を知るのも好きだぞ」

「おつ、やっと戻ってきたか。土郎、俺もさすがに腹減ってきたぜ。セイバーはさつきからあんな調子だしよ」

「シロウ……私は、もう……駄目かもしれませんが……」

「遅くなってすまない。今すぐ作ってくるからもう少し待っていてくれ。それじゃ、準備が整うまでの間でこの中から各自好きな食器を選んでおいて」

そう言ってテーブルの上に小さな食器などが入った袋とアンリたちを降ろし、愛用のエプロンを着用して台所に向かった。

Interlude

『約束されたマイ食器選び 女の子編』

我が主……ではなくて、土郎は夕食を作るために台所に向かい、私たちは土蔵の中で見つけてきた小さい食器の中から自分たちの物を選ぶことになった。個人的には『我が主』という呼び方のほうがしっくりくるのだが、名前で呼べるという近しさも心地よい。積み上がった食器から良さそうな物を手に取っていくと、どれもこの身体

にあつらえたようにぴったりのサイズ。決め手になるのは描かれた
絵柄の好みか。

「確かにちょうど良いけど……盛り付ける時とかどうするんだろ……？」

まさか食材を切る段階から私たちのサイズに合わせるわけではあるまい。士郎自身も失念しているような気がする。まあ……各自が食べやすい大きさに自分で調節すればいいだろう。

「食器よりも今はご飯のほうが……むっ！？おお……これは獅子ではないですか！あの仔のように非常に愛らし……んんっ、雄々しい顔立ち！私はこれにします」

可愛らしい仔獅子の描かれた茶碗を持ち、瞳を輝かせるセイバー。よほど気に入ったのだろう、空腹でふにゃふにゃになっていたのが嘘のような復活っぷり。思わず『愛らしい』と言いかけ、頬が緩んでしまっている。

「どうかしましたか、バサカ？私の顔に何かついていませんか？」

「何もついてはいないよ。こんな嬉しそうに微笑むセイバー、士郎も見たかっただろうなと思って」

「なっ、なぜシロウの名前がここで出てくるのですか!？」

「さあ？何となく、そう思ったただけだよ」

からかいの意味も込めてそう言つと、面白いように赤面してうるたえる。凜々しさ、気高さは意識的にこの少女が表に出している一面

に過ぎず、本来は純真でとても優しいのだと思う。未だにセイバーの真名は明かされていないが、ひどく重いものに縛られているような気がした。そして、恐らくはアーチャーと士郎も、呪縛のような何かを抱えている。

「何とか、してあげられれば良いんだけどね…」

「バサカはまだ選んでないのですか？種類はたくさんあるようですが、気に入った物が無くなつては意味がないと思いますよ」

「ライダーの言う通り。私も決まったし、あとはバサカとアンリだけみたいよ」

大切そうに両手で茶碗を包み、ライダーが満足げに笑う。描かれているのは二頭の天馬が並んで飛んでいるような絵。天馬である以上本来ならば純白で描かれるべきなのだが、ライダーの髪色と同じ柔らかな色合いの紫になっている。大切な思い出を重ねているのか、その微笑みは僅かに寂しさが混じっていた。ちなみにキャスターの持つ茶碗にはもふもふとした金色の毛の羊が描かれていた。

「むー、こんなにたくさんあると悩みます。これも良さそうだし…あつ、これも。バサカさん、どっちが良いと思いますか？良かったら意見を聞かせてもらいたいです」

そう言つてアンリが差し出してきた茶碗を見比べる。片方は彼女の着ている服と似たような赤黒の模様入り、もう片方には桜の花びらと白く慎ましい印象の花があしらわれていた。この二つならば悩む必要はないと思うけど、そこはアンリの美的感覚というやつなんだろう。

「私はこっちの花が描かれているほうが良いと思っけど」

「そうですか……うん、私はこのお茶碗に決めます！」

「これで残るは私だけか……ん？」

ふと目に留まったのは大小二匹のひよこが仲良く寄り添っている絵が描かれた茶碗。大きいほうは少しだけ赤みがかった色をしていて、雰囲気や顔立ちがどこことなく土郎に似ている。小さいほうは僅かに銀色が混じり、愛嬌たっぷりといった印象が強い。

「これにしよう」

「あら？私からも候補を出そうと思ってたのに。へえ、可愛くていい物を選んだと思うわ」

私の選んだ茶碗を見て、キャスターが意味ありげに微笑む。なぜこれを選んだのか、一目ただけで気付いたらしい。にやり、という擬音が付きそんな笑みがものすごく悔しい。

『約束されたマイ食器選び 男の子編 』

「食器なんざ使いりや何でもいいと思うんだがねえ」

「そう言いつつ、真剣に探している男が目の前にいるんだが。口と行動を統一したほうがいいのではないか？」

「アーチャーもいちいち皮肉を言うのを止めたらどうだ。また騒ぎを起こして制裁されたいのか？」

どうして私が仲裁役として口を挟まなければならないのか、漏れそうになる溜め息を押し殺して茶碗を選ぶ。ランサーは昨夜の一件から喧嘩に発展しそうな発言は少なくなっているのだが、いかんせんアーチャーの口が悪い。呼吸をするように皮肉が出てくるのだから始末に負えん。

「む……」

「まったく… 士郎が帰ってきた時にも『騒動を起こすつもりはない』と言っておきながら、お前がその火種になるような行いをしてどうする」

「くつくつく、小次郎も意外と言う時には言うんだな。でも、構わねえよ。男なんざ、互いに気に入らねえと思っても一度本気でやり合っちまえばあっさり友達になれるもんさ。こいつは口と態度は捻くれてんが、太刀筋の根っこはバカみたいに真っ直ぐだ。結構気に入ってんだよ」

そう言つて少年のように笑うランサーにどう反応したらいいのか考えあぐねているのだろう、初めて戸惑った表情をアーチャーが見せた。まあ、典型的な『喧嘩するほど仲が良い』二人ということか。そついえば今朝、士郎の部屋へと向かう途中、庭先の木の下で二人仲良く寝ていたのを目撃していたんだ。余計な手間をかけさせられたお返しにからかってやろうか。

「私は貴様など……」

「そう照れるなアーチャー。さあ、早く選んでしまわねば夕飯が出来る上がつてしまうぞ。セイバーがこれ以上空腹に耐え切れるとは思

「くつくつく、いやはや二人ともよく似合った器を選んでいる。女子衆も決まったようだし、あとは士郎が夕飯を完成させるだけだな」
私らしくもないが前言を翻そう。こやつらのお守役も存外悪くないかもしれん。

Interlude out

人は間違いを犯す。そして、間違いとは総じて大小の差はあれど何かしらの被害、後悔、喪失などを生み出すものだ。それらは、何らかの方法をもって取り戻せる場合があるだろう、もしくは別のカタチで補完できる場合もあるだろう。しかし、間違いは、時として全てを零からやり直したいと思わせるほどの後悔や喪失を人間に科してしまう。だが……間違いを憎み、完全を求め、過ちを無かったことにするのは少し違う。辛くとも、苦しくとも、間違いに囚われ続けるのではなく

「要するにサンドイッチやおにぎりで分かっていたはずなのに、早く仕上げてしまわなきゃと焦るあまり私たちのサイズを考慮せずに料理を作っちゃった。そういう話なのね？」

「その通りです」

炊き上がったご飯が出番を待つジャーは卓袱台のすぐ近く、カセットトコンロの上ではいい頃合いを告げるように鍋がことごと音を立てている。自分の食器、綺麗に洗った小さなサーヴァントたちの食器も並び、あとは食べ始めるだけという状況で……ちんまりサイズの美女魔術師にお説教されているのだった。

「いいじゃねえかキャスター。ざっくり士郎に取り分けてもらって、それから各自食べやすい大きさにすりゃ問題ないだろ」

「そうですねー。私の影を使えばあつという間です」

「キャスター……シロウに責任はありません。むしろ、早く完成させてくれたのですから感謝すべきだ。食べ頃を逃しては意味がありません、早く食べましょう」

今までも何度か見てきたが、アンリが操る『影』は色々な使い方ができるらしい。伸ばして物を掴み取ったり、刃のように変えて物を切ったり、長さや大きさも自由自在で便利な能力のようだ。そして、かばってくれるのは嬉しいが鍋に視線を釘付けのままだぞセイバー！

「仕方ないわね……。私もお腹空いたし、始めましょうか」

八つの小さな茶碗にご飯を盛り、深めの皿に鍋の中身を移す。その周りに円陣を組むような形で座る八人のサーヴァント。今夜は全員が揃ってるし、騒動になる要素もない。

「そうだな。それじゃ遅くなっただけど食べよう」

「ちょっと……食べ過ぎたかも……」

「バサカさんもですかー……私も動けません……」

「シロウ、とても美味でした。食材を煮るだけだというのに、これ

ほど繊細かつ深い旨味を出せるとは素晴らしいの一言です。これほど満腹になれるのなら、小さいというのも利点ですね」

満足げではあるものの僅かに苦しそうなバサカ、横たわりぽやーつと緩んだ表情のアンリ、鎧の部分を消して瑠璃色のドレスだけになったセイバーも満足そうだ。食べ物には強いこだわりを持っているらしいセイバーがこれだけ言うのだから、今夜のご飯は成功したと言って良いだろう。

「さすが士郎ね。美味しかったわ、ごちそうさま。片付けが必要でしょ？手伝うわ」

「ごちそうさまでした。キャスターだけでは重い物が辛いでしょ。私も手伝いますね」

「ん？休んでいて構わないのに。そういえば、二人ともあまり食べてなかったみたいだけど大丈夫か？」

「私は小食なのよ。あそこで転がってる三人が規格外ってだけの話」

「キャスターと同じ理由です。嗜好する物が違うというのもありますが……」

そう言っただけでキャスターは八人分の小さな茶碗や箸を集めて重ね、ライダーは昼間のように皿を持ち上げて持ってきてくれる。いじらしいというか、とにかく可愛い。小動物や人形が好きなやつが見たら歓喜のあまり卒倒するんじゃないだろうか。

「満足してくれたならいいんだ。ライダーの嗜好って……いや、言いたくないなら構わないけどさ」

「ふふっ、秘密です」

深く澄んだ紫玉の瞳が妖しい輝きを宿し、ぞくぞくと背筋が震えるような流し目が首の辺りに向けられる。小さくて本当に良かった……本来の頭身ならどれだけの威力を発揮していたか、考えるだけで恐ろしい。

「うー……美味かったぞー士郎。にしても、満腹だ……」

「それだけ食べれば満腹にもなるだろうよ。私からすればまだまだ改善すべき点が多いが、まあ及第点としておこう」

「皮肉が出るかと思つて身構えたが、杞憂に終わつて何よりだ。とても美味かった、ごちそうさま」

「お粗末さまでした。改善すべき点……サンドイッチの時も色々と言つてたけど、アーチャーは料理に詳しいのか？」

「む……それなりに、な」

アンリと似たような姿で嬉しい感想を言つてくれるランサー。前者は可愛らしさを感じさせたが、こちらは若干オツサンぽい。切嗣もよく『士郎も美味しくご飯が作れるようになってきたねー』と言いながらこんな感じにゴロゴロしてたな。あの時はイラッとしたけど、こうして思い返すと懐かしさが胸を満たす。

ランサーや小次郎に話しかける時には割と砕けているのに、やはり俺と話すことになるアーチャーの態度が硬くなるんだよな。かく言う俺も、アーチャーと話す時はなぜかぎこちなくなるから一緒に

言えば一緒なんだが。それに、この親近感と反発感が入り混じった形容しがたい気分が何とも。

「指摘があるなら言ってくれと助かる。どうせなら、ちゃんと美味いものを作れるようになりたいし」

「……………考えておく」

むすつとしたままだが、前向きな言葉を聞いたのは進展と考えていいのかな。

夕食の後片付けも終わり、のんびりと過ごして夜更け。サーヴァント全員と共に土蔵の中に来ている。今朝からちよくちよく話に出ていた魔術回路の問題について対策を立てるためである。

「魔術回路という物は一度作ってしまえば確立するわ。本人がどれほど望んだとしても開かれた『路』は消えることなく、閉じているように感じたとしてもその実、使われていないだけに過ぎない。私の推測が正しければ、士郎の魔術回路もそういう物だと思う」

「まずは、士郎の中にどれだけの回路が存在しているのかそれを確認します」

説明を続けながらキャスターは漆黒のローブの中から様々な瓶を取り出し、あらかじめ用意しておいた二つのカップに入った水に中身を次々と混ぜていく。同時に魔力も溶かし込んでいるらしく、ぼんやりと輝きを放ち始めた。

「まずはこっちのカップの液体を飲んでちょうだい。そうしたら、魔術回路を作るのと同じような手順で自分の中を確認してみて」

「分かった。」

同調、開始

「

液体を一息で飲み下し、呪文と共に回路作成の一つ手前、肉体の状態を解析する手順を開始する。ゆっくりと自己の内部に埋没していくと、まずは薄く二本の『路』が自覚できた。衛宮士郎が生成した魔力にキャスターの魔力が混じり込むことにより、今までよりも遙かに自覚しやすくなっているのだらう。何というか、さっきの液体を飲んだことによって身体の中を流れる生命力や魔力に『色』がつき、流れを読みやすくなったような感じだ。

「回路を知覚できたかしら？」

「ああ。今のところ把握できているのは二本、外部に向かって伸びてるパスもはつきりと分かる」

「その回路を起動させるためのスイッチみたいな物があるはずなんだけど、そっちはどうかしら？」

見逃しがたいよう丁寧に回路をチェックしていくと、スイッチというよりは鉄を鍛錬する槌のような、もしくは撃鉄に似たものがあった。がきん、と引き上げてみると回路作成したあのような感覚と共に起動する。

「たぶん、キャスターの言うスイッチってこれのことだよな」

「おっ？流れてくる魔力量が少し増えたみてえだ」

「水が高いところから低いところへと自然と流れていくように、存在していた回路から必要最低限流れていた魔力が意識的な起動によって増加したんでしょうね」

初めての正式な起動を成功させたことで舞い上がりそうな心を押さえ、さらに解析を続ける。回路作成の工程だけでは決して気付けないような場所にも撃鉄が存在し、『路』が通っているようだ。

「キャスター、起動させている回路の他にもいくつかスイッチを見つけた」

「その調子でこれまで気付かなかった回路を全て見つけましょう。それが終わったら起動できないか試してちょうだい。私が共有の魔法を使って再確認したら、次の段階に進むわ」

焦って失敗しては意味がないので、時間をかけて確認していくと二の撃鉄を発見。キャスターの指示でしゃがみ、その小さな手が額に当てられて発動した共有魔法によってさらに十五の撃鉄があることが分かった。

「私の再確認でもこれ以上見つからなかったし、新たに開きそうな回路もなかったから士郎が持っている魔法回路は全部で二十七本ということになるわ。今、起動させている二本を除いて、すぐにでも起動が可能なものは五本。何回か魔力を流して慣らさないと多少の弊害が生じそうなものは七本、残りの十三本に関しては要調整の一言ね。下手に起動させると焼け付いて余計なことになるわ」

とつぶやいたらしい。

俺の魔術回路は普通の神経とは別領域に作られる疑似神経という形ではなく、本来の神経と融合した形になっている。そのため、スイッチの切り替えも上手くできなかったのではないか。先天的にそのような状態だったのか、回路作成を繰り返したことによって生じた事象なのかは分かりかねる。代を重ねた血統でもないのにこれだけの回路を保有しているのは珍しく、回路強度の高さは一目置けるもの。

他にもこれだけの説明があった。いくら才能がなく、正式な師匠がいなかったとはいえ、これだけ自分の状態を把握できていなかったとは…呆れた様子で話し続けるキャスターの心中を考えると申し訳なさで一杯になる。

「それじゃ、次の段階に進みましょうか。もう一つのカップの中身は魔力の急速補充効果があるわ。これを飲めば一気に流れ込む魔力が増え、今まで使っていた二本の回路だけでは足りなくなる。許容量を超えた魔力は行き場を求め、土郎が意識したことによって、身体が自然と開かれた回路への流れを作ってくれる。今夜は、起動可能な五本に流れを引き込んでおしまいにしましょう」

「これを飲んで、流れを作るように集中すればいいのか？」

「その通り」

「よし……同調、開始」

少しだけ緊張したが、さすが神代の大魔術師メディアの指導とでも言えればいいのか、自分でも戸惑うほどにあっさりと回路制御ができた。

「また、供給される魔力が増えましたね。私としては別の方法で士郎から直接いただきたいところですけど」

「なんか色々できそうな感じがしてきましたよー！」

「元気なのは良いことだけど、影を振り回すのはあまり感心しないよアンリ」

俺とキャスターの集中を乱さないように黙っていた面々が話し始め、賑やかさが戻ってくる。今まで停滞し続けていた鍛錬が一気に進み始め、キャスターのおかげで想像もなかったような力を得られる可能性が出てきた。衛宮士郎のユメ、『正義の味方』へ近付けたというのに、バサカたちの楽しげな声が聞こえてきた時のほうが嬉しかった。

「もうこんな時間か…明日もあるし、そろそろ寝ようか」

第五話 夕餉の時間、眠る力的一端を知る刻。終幕

衛宮さん家のちびサーヴァント騒動 ふつかめ 了

第五話 夕餉の時間、眠る力的一端を知る刻。(後書き)

散々放置しておいて、三日ほどの呐喊作業で書き上げました。

うん……ものすごく疲れた…。

ぶっちゃけ、しばらくちびサヴァ休んじゃおうかなと思ったくらい
さw

こつこつ少しずつ書いておくようにすればいいのにね……分かって
いてもできないダメ虎なのです。

ひとまず、楽しんでもらえれば嬉しいです。

第六話 学校にまた行ってみよう、ちびキャス先生と魔術鍛錬。(前書き)

たぶん……ではなく、キャラ崩壊しています。

オリキャラなのかな……それとも性別転換？なキャラが登場します。

虎フリーダム、要するに勝手気ままに書いています。

原作の流れを放り投げ、自由という名の好き勝手に書いています。

作者の未熟さゆえ、ん？と思う部分が多々出てくる……かもしれない。

上記のことを踏まえた上で、広い心と許容の精神を忘れずに読んでください。

第六話 学校にまた行ってみよう、ちびキャス先生と魔術鍛錬。

第六話 学校にまた行ってみよう。ちびキャス先生と魔術鍛錬。

荒々しく吹きすさぶ潮風に濃紺の長衣をなびかせ、断崖に立ちすくむ女。小さく細い背中の中半ばあたりまで伸ばされた淡い青髪が風に乱され、ひどく、疲れた印象を与える。いや 実際、心も身体も疲弊し切っているのだろう。

蒼色であるはず空も海も真紅。流れ出たばかりの血潮に浸されたような、恐ろしく鮮やかでありながら不吉な紅色に染まっている。風に冷やされたのか、世界を染め上げた紅に恐怖を感じたのか、女は両腕で自らを抱き締めた。

『い』

小さく呟いた言葉。それと一緒に頬を流れた涙。どちらも一際強く吹いた風に切り裂かれ、零れ落ちることすら許されない。幾筋も、幾筋も、流れていく涙をそのままに女の瞳はどこか遠くに定められたまま。もう二度と帰れない、それでも帰りたい、大切な場所を見ているのか。

「えり、たい」

繰り返される言葉は懇願でありながら懺悔にも似て。

「かえりたい」

声を聞き届ける者も、涙を拭ってくれる者も、抱き締めて温もりを
与えてくれる者も、居ない。翻弄されるがまま進み続けてきた果て
に残ったのは、烙印のような汚名と後悔、そして、例えようもない
孤独。

「帰りたい　　帰りたい　　あの時に、あの場所に、帰らせて
お願いだから　　帰りたいの　　」

それは、遠い、遠い、昔の話。望まぬ運命に弄ばれ、何もかも失っ
た悲しい王女の話。

「　　むっ……うう、また夢、だな……」

昨日と同じように頬を濡らしていた涙の残滓を拭い取る。詳細な内
容とは言えないが、昨日はセイバーとアーチャー、ついさっきまで
はキャスターに関する夢。ひどく真実味を帯びているように感じた
し、こうして覚醒しても薄れたり消えたりしないから、それぞれの
生前の記憶を夢として垣間見たと考えるのが自然だろう。契約して
パスを繋いだことが関係しているような気がする。

キャスターに聞けば詳しく解説してもらえらるうが、俺自身が望
んだわけではないが過去の記憶を夢で勝手に見てしまったのだ。何
となく、どういう仕組みなのか聞き難くなってしまった。時計を確
認するといつもの起床時間よりも半時ほど早い。

「そう言えば、二日続けて布団で寝るなんて結構久しぶりだ」

たった一人で鍛錬を行っていた時は力尽きたり、失敗しかけたりし

て気を失い、土蔵で朝を迎えることが多かった。キャスターに色々教えてもらうことで格段に鍛錬が進み始めた以外にこんな所で影響が出るとは思わなかった。

「コルキス王女メデア……か」

どうでもいい所に飛んでしまった思考を夢と、キャスターが自ら語った真名の関係に向ける。その伝承は知識のひとつとして多少知っている程度に過ぎなかったが、夢で見た表情、聞いた声を思い出すとどれほどの絶望と悲嘆に苦しんでいたのか実感として襲ってくる。セイバー、アーチャーの夢を見た時も思ったが

「今さらどうしようもないことは分かっている……でも、それでも……目の前で、手を伸ばせば触れられそうな所で、泣いたり苦しんでるなら、何とかしてやりたいと思うんだよね……」

ぼんやりとした頭のまま取り留めもない思考の渦に沈み込んでいると、つい最近、具体的には昨日の朝と同じ感覚がする。首の左側、きつちり頸動脈の真上に温かく湿った何かが触れている感触。

「……………」

「ちゅっ、ちゅっ……んふっ」

皮膚を吸われている感覚を無視して右手を持っていき、柔らかい何かをそっと握る。やたらと色っぽい溜め息が聞こえた気がしたけどそれも無視。

「……………」

引っ張る。

「ん~~~~」

吸い付く力を強めて対抗される。

「……………」

もうちょっと引っ張る。

「ん~~~~~~~~ぷはっ」

息が続かなくなったのだろう、ひとまずは無事に外すことができた。視界の中に右手を持ってくると、その中には寝癖のせいでもやや外側に跳ね気味になった紫髪の娘さん。眠りの残滓で半ばほどしか開いてない紫玉の瞳がまた可愛い。

「おはよ……ございます、土郎……」

「ああ。おはようライダー。あとで寝る時の決まりごとについて話し合おうな」

「……………きまりごと?」

眠気で思考もはっきりしていないのだろう、ぼやんとしたまま小首を傾げるライダーを静かに布団に降ろす。さて、次の問題を解決しなくては。

昨日は何も感じる事がなかった首の右側。今朝は、子犬や子猫に

甘噛みされてるような、こそばゆい感じ。ライダーを降ろした右手で犯人を捕獲する。左側の犯人と違い、こちらは抵抗することなくすんなりと離れた。

「すう……すう……ああ……」はん……どこに、いった……のです……か……」

藤ねえレベルで綺麗な寝言を話す少女。解いた金系の髪がさらりと……揺れない。恐らくは寝てる間に垂らしたよだれが整髪剤の代わりになり固められているんだろう。何となく縦ロール気味のままで、頭頂部でひょこりと揺れるクセ毛は、『寝癖などに屈せぬ!』と言わんばかりにいつも通り。

「ん、ん……ああ、シロウの顔が近くに……シロウ!?!」

ぼんやりと開かれた翡翠色の瞳が俺を視認し、次の瞬間、赤面と共に完全覚醒した。

「おはようセイバー」

「おっ、おはようございますシロウ……ってそうではなくて!!何で私はシロウに掴まれて……しかも、寝顔……!」

「落ち着くんだセイバー。少しだけセイバーの寝相が悪くてさ、布団掛け直してあげようと思ったただけなんだ。別にやましい所はない。まだ寝てる奴らもいるし、少し静かにしてくれると助かる」

「もっ、申し訳ありません……」

ライダーと同様にセイバーも布団に降ろす。さて、ここまでの行動

で右手しか使えなかった原因。左手の指先から伝わってくる慣れ始めてきたけど慣れない感触。身体を起こして視線を向けると、何と形容したらいいのか分からない光景が広がっていた。

「すう……すう……ちゅ、ちゅう……くー……」

薬指に抱き付き、寝息の合間に口づけを施す。ライダー、セイバーと続いて必死に赤面しないよう、動揺しないように努めていた心を崩壊させるその姿。昨日と同じように黒色のクセっ毛が荒ぶっているバサカの仕業だった。もう、恥ずかしいやら照れるやらで爆発寸前。セイバーを注意した手前、簡単に叫び声を上げてしまうわけにもいかない。

すぐ近くには相変わらず赤黒しましまフードを被って丸くなっているアンリ。ただ、その両手に抱えられた見覚えがある濃紺のローブがとても気になる。それはもう、すごく気になる。

「……………ん」

そして静かに布団の一部に包まり、特におかしな点は見当たらないキャスト。しかし、寝返りをした拍子に布団がずれ……

「……………へっ？」

繊細で流れるようなラインの『素肌』の背中と、アンリいわく『素敵な美尻』が惜しげもなく晒される。即刻目を閉じて下を向くべきだと脳裏で誰かが叫んでいるのに、身体が全く反応してくれず、真っ白な頭のみまで完全に停止してしまった。

「……………くしゅっ！……………んー、さむ……………ふとん……………」

素肌が冬の空気に触れていれば冷えるのは当然のこと。冷えれば温もりを求めて多少なりとも意識が覚醒する、それも当然のこと。手の届く範囲で温もりを確保できなければ身体を起こすなり、動かし、動かして範囲を広げようとするのも当然。そうなれば

「どうしたんですか、シロウ？顔が真っ赤ですが、風邪でも引いてしまいましたか？」

「それはいけないですね。昨夜、遅くまで土蔵に居たからでしょうか……」

ギリギリで目線を逸らすことができた。自分でもよく頑張ったと思いたい。目線の先に居たのはセイバーたち。様子のおかしな俺を心配してくれていたらしい。幸いなことに俺がキャスターの裸……を見てしまったことには気付かなかったようだ。

「ん、大丈夫だよ。熱もないし、体調も悪くないから」

しかし……なぜ、あんな状態になっていたんだろう。アンリがローブを抱えていたから脱がせたのか？しかし、キャスターなら寝てても気付きそうだし……謎だ。ただ、何となく、寝てるうちにキャスターが脱ぎ捨ててしまっているような気がする。

「まあ、考えても仕方ないか……そう言えば、ランサーたちは……と」

サーヴァント男性陣は専用布団で未だに睡眠中。気配には敏感なはずだから起きてても不思議はないが、のんびり寝ている所を見るとそうでもないらしい。単純に寝ていても危険を感じないくらいに気を

許し合ってるということかもしれないが。

アーチャーの腹部を枕代わりにして大の字ランサー。微妙な圧迫感から悪夢でも見ているのか、僅かにうなされ気味のアーチャー。二人から少し離れ、髪を解いて横になっている小次郎。あの絶妙な距離の取り方、想像するに何度か嫌な目に遭ってるような感じだな。

「おはよ……しろつ」

「起きたか。おはようバサカ」

「士郎さん、おはようございまふ……って、あれ？キャスターさんのローブ？」

「……………アンリ……………どうして、貴女が、私のローブを持っているのか、説明してもらえるかしら？」

「へっ！？えっ、いや、私は何も知らな……………ほんとうに知らないです……………ああっ、引つ張らないで！足のほうから引きずったら脱げちゃいま……………ああああああ……………」

薄手なほうの布団で身体をぐるぐる巻きにしたキャスターに掴まれ、アンリは布団の中に引きずり込まれていった。これで、俺は裸を見てしまったなんて分かった時には何をされるか……………考えるだけで恐ろしい。

「ん？そろそろ桜が来そうだな。よし、みんな起きてくれー！！」

小さな英雄たちを召喚してから始まった奇妙な生活。三日目も賑やかに始まっていく。

『なあ、士郎。別に霊体化を解かなきゃ騒ぎの起こしようもねえんだし、今日は自由にぶらつかせてくれ』

『ランサーの言う通りだ。学校とやらに何かしらの危険が潜んでいないか偵察ができる。私たちは待っている時間を有効に活用できる。まさに一石二鳥ではないか』

学校に行っている間サーヴァントたちをどうするか。その話題に関しての話し合いをすっかり忘れていたことに気付いたのは弓道部の朝練に向かう桜を見送ってからのことだった。充分な時間もなかった。結局は昨日と同じ、アーチャーは留守番、残りの七人は俺と一緒に学校へ向かうことになり、現在に至る。

『昨日は拠点である士郎の家から離れる初めての外出だったし、警戒のために付きつきりだったけど……そうねえ、簡単な探知しかしていないけど目立った危険も感じられなかったから自由にしているんじゃないかしら』

『三人と四人に分けて、交代で自由行動を取るようにすれば士郎の護りもできるな。正直に言つと、私もちよつと見て回りたい』

『すみません……私は見ての通り霊体化ができないので、シロウの護りだけを担当します。』

『セイバーはそれでいいのか？一人だけ自由に動けないなんて……』

『構いません。このような姿なのでどこまで脅威に対抗できるか分

かりませんが、私はシロウの剣であり、盾ですから。』

そんな風に言い切られてしまつては二の句が継げなくなる。セイバーらしいと言えば確かにセイバーらしいのだが、どうせなら皆と一緒に色々と見てきてほしいのが本当のところ。

『脅威が迫つた時は全員で対抗すればいいだけでしよう。それに、セイバーが自由に動き回れないのはすでに織り込み済みです。交代制にすることで、私たちの見てきたものをセイバーに教えることが可能ですから』

『ライダーさんの言う通りですよ。セイバーさんだけに寂しい思いはさせてあげませんから。それに、キャスターさんも対抗策を考えてくれます！』

『まだ発案段階だけだね。遠からず実現できると思うから楽しみにしててちょうだい』

『ライダー……アンリに、キャスターまで……。感謝しま……。いえ、その、ありがとございます』

音声だけなのが残念になるくらい微笑ましいやり取り。俺があれこれ思い悩まなくても、みんな、セイバーのことを考えているんだ。そろそろ学校も見えてきたので、結論というか決定を出さないとな。

『すまないけど、セイバーはポケットの中で待機。他の六人は三人ずつに分かれて交代で自由行動。授業が終わるチャイムは分かるか？』

『あの鐘みてえな音が鳴るやつだろ？』

『そう。あれが鳴ったら交代で、行動範囲は校舎の中だけ。これでいいか?』

『士郎が言ったことで問題ないと思うわ。私も探索、探知の魔術を常時発動しておくから危険を見逃す可能性は低いはず。どんなに範囲を広げようとしても学校の敷地内が限界っていうのは悔しいけど』

『じゃあ、決まりだ。分かれる三人は各自で話し合って決めてくれ』
賑やかに組分けを始めたサーヴァントたちの声を聞きつつ、玄関へと向かう。驚くような速さでトラックを駆け抜けていく陸上部らしき女生徒を眺め、弓道場がある方向に少しだけ視線を送りながら歩いているとこの時間帯に会うのは珍しい人物の声が聞こえてきた。

「よう、衛宮。相変わらず冴えない顔してるな」

「慎二か。朝練で早く登校してきたのか?」

「察しの悪さも相変わらずだねえ……この僕が朝っぱらから練習するはずないだろ。たまには朝から練習に励む可愛い後輩を『指導』してやるうかと思ってるね」

そう言って口元を笑みの形に歪ませる慎二。この言い方から予想するに今日は美綴が居ないんだろう。あいつが居れば慎二が自分から弓道場に赴くはずがない。

「聞いたぞ。お前の『指導』が原因で何人が弓道部を辞めたらしいじゃないか」

「ちつ……あの女から聞いたんだな。辞めた奴のことなんか知ったことじゃないね。それに衛宮、弓道部を辞めたお前にどうこう言われる筋合いはない。そうだろう?」

「……………ああ、そうだな」

「ふん、朝から気分が悪くなった」

そう言い捨てて足早に去っていく慎二。追いかけてようにも、これ以上俺が関わっては逆効果にしかならないだろうし、慎二の言ったように「辞めた」人間が口を出していいとは思えない。

「士郎……なんだ、あれ?事情はよく知らねえが、とんでもない奴だな」

「なぜでしょう……あの顔、あの言動、自分でも驚くほど不快です」

「名前は間桐慎二。家に来てくれる桜の兄貴だよ。桜も、慎二も、前まで俺が在籍してた弓道部。あんな奴だけど、一応は友達だ」

「友人関係にまで口を挟むのは無粋だけど、士郎、友人は選んだほうがいいと思うよ。アレは、良くない。ちなみに、ライダーの顔がすごいことになってる」

バサカの声が若干震え気味になるとは……どんな状態になっているというのか。これをきっかけにメデューサが誇る最高ランクの魔眼、石化の魔眼が復活するなんてことにならないだろうな。思わぬところで心配事が増えてしまった。

「衛宮ではないか。こんな所で立ち止まってどうかしたのか?」

両手で箱を抱えた一成が話しかけてきた。恐らく生徒会の用事か何かで通りかかったのだろう。

「ああ、一成。おはよう。ついさっきまで慎二とちよっとな」

「むっ、挨拶を忘れるとは……おはよう衛宮。間桐だったか……最近はさらに素行が悪くなって、良い話など皆無といって差し支えない。特に弓道部での後輩に対する態度は目に余る」

「美綴が何人が辞めて参ってると言ってたけど……」

「衛宮も聞いていたか。間桐本人は否定しているが、原因は明らかだ。何とかしたいと常々思っているのだが……まったく、厄介極まる。おっと、朝からこのような話に付き合わせてしまって申し訳ない」

「一成が謝る必要なんか無いさ。それよりもいいのか？その様子だと用事の途中なんだろう？」

「衛宮の言う通りだ。すまん、先に行かせてもらおうとしよう。では、また」

『シロウ、あの人は？』

ポケットの隙間から覗いていたのだろう。セイバーが問いかけてくる。覗いても一向に構わないんだが、セイバーの場合、真っ先にクセ毛が飛び出してしまうから注意してほしい。

『柳洞一成。柳洞寺っていう寺の息子で、生徒会長もやってる。俺

の友達だよ』

『少ししか見ていませんが、見所のある人物ですね。大成しそうな印象を受けました』

最初に会ったのが慎二だったせいもあるかもしれないが、セイバーと始めとした七人には好印象のようだ。一成も清廉潔白人柄だし、もしも話すことになればセイバーと気が合うかもしれないな。

ランサー & 小次郎 & キャスター組。一時間目出発

歯止めをかける役としてバサカと私が分かれることはすぐに決まり、アンリとライダーの熱烈な主張をいなし切れずにバサカは向こうへと連れていかれ、必然的に私はこの組となった。

『それで？どこに行くか決めているのかしら？』

『にしても、この学校には将来に期待ができそうな女が揃ってんな……ん？』

『ほう……あそこの娘御、将来を待たずとも充分に輝いて……どうかしたか？』

『人の話を聞かず何……って、あの子……』

霊体化していれば魔術などで制御しなくとも重力の影響は関係ないので、ふわふわと空中を漂いながら生徒たちがひしめき合っている部屋の中を見ていく。人の質問を聞かず、くだらないことを話していた二人に制裁を加えようとした時、目に留まった少女。

『気付いたか？キャスター』

『ええ。微かにだけど魔力反応を感じたから魔術師が居るかもしれないと思っただけど、ようやく特定できたわ』

長い黒髪を二つにまとめ、優美でありながら怜悧な印象を与える少女。どれほど大人しくしていようと自然と人の目を惹き付ける、上辺だけではない本質的な美しさを持つ稀有な人間。上手く隠しているようだが、これだけの距離まで近づいて感知できないようではキャスター失格になりかねない。

『あの娘、魔術師よ。きちんと血統を重ねた家に生まれ、なおかつ極上の部類に入る素質を秘めてるわね。詳しいところまでは分からないけど』

『俺たちに、士郎に気付いてると思うか？』

『霊体化している英霊を感知するのは難しいわ。探索能力の高いサーヴァントなら可能だけど、人間の魔術師には不可能ね。まして、私たちは弱体化しているのよ。本来の姿よりも遥かに保有している魔力は少ない。はっきり言って無理よ。士郎に関してはどうでしょうね……まだ稼働している回路は少ないし、令呪は私の礼装で隠してるし、大丈夫だとは思っただけど』

『そう言えば……お前、探知の魔術を発動しておくって言ってたよな。向こうは気付いてるんじゃないのか？そいつをすぐに切って、士郎のとこ戻ったほうがいいんじゃないか』

『落ち着け、ランサー。何か怪しい動きをしているようには見えん』

『小次郎の言う通り。探知をする時には魔術師に気付かれない方法でやってるから心配しなくていいわ。危険がないか探るために危険を呼び込む可能性のある方法を使うなんてへマはしないわよ』

何にしても、敵対する可能性が高い相手を先に捕捉できたのは僥倖。これで、取れる可能性が大幅に広がった。本当ならば先手を打って排除してしまうのが理想的なだけけど、士郎がそれを許すとも思えないので警戒と後手の先が取れる案を考えておかないといけないだろう。

『すでに八体のサーヴァントが召喚され、一人のマスターに令呪が集結している異常事態もあるし、何が起こっても不思議はないから改めて警戒を強めないといけないわね……って、何をやってるのかしらっ。』

『いや、良い女になりそうだなーと眺めていただけだ』

『せっかく好みの女子が見つかったので愛でていただけだ』

『……………』

『そんな顔してるとシワが増え…いいだだだだだ！！？？』

『ほう、キャスターのクラスに白兵戦のスキルが備わっていたとは……いやはや、まことに面白い』

ライダー&アンリ&バサカ組。二時間目出発

何があつたのか、ひどく不機嫌なキャスターから報告を受け、交代して出発して僅か数分。土郎の居る教室を出てすぐの辺りで、脱がされかけた。

『はあ……はあ……まったく……私を裸にしようとして、何が、楽しいんだ……』

二度目であり、今回はキャスターの援護も期待できないので全力で迎撃した結果、頭頂部にたんこぶを作つて倒れ伏すライダーとうまくまつたまま痙攣するアンリ。そんな光景が広がることになつてしまった。

『さすがに……踵落としと右ストレートはまづかつたかな……？』

本来の身体、性別ではない状態で召喚されたために、いまいち感覚が馴染んでなかったけど時間の経過と共に解消されてきたらしい。元々が男だったのに、今の状態に馴染むのが正しいとは思えないが……考えないでおこう。

『正常な感覚を取り戻すのはいいんだが……何というか、羞恥心とかまで女のそれになつてしまうのは予想外だった……』

視線を下に向ければ、鍛え上げた分厚い筋肉に覆われた胸板ではなく、簡素な防具に覆われてもなお豊かさがはつきり分かる膨らみ。まさか、この視点で眺める時が来るとは思わなかった。召喚時から薄かった違和感がさらに薄くなり、ほとんど無くなっている。もう一日、二日あれば本来は男だったことのほうに違和感を感じてしまふいそいだ。

『キャスターの言っていた魔術師の少女も実際に確認しておきたい

し、そろそろ動こ……あれ？』

『ふっ、ふふふ……油断しましたね、バサカ。こうして組み固めてしまえば身動きが取れないでしょう。今ですアンリ！』

『考え事をしていたみたいですが、あれだけの時間があれば復活など容易いです。お覚悟っ！！』

『残念だけど、怪力スキル持ちでもライダーと私じゃ、地力が違うよ』

『なっ！？』

きつちりと両脚まで封じるように組み付いていたライダーを振り解き、突っ込んでくるアンリに向けて差し出す。

『アンリちよっ、止ま、はぐうあ！？』

『ああっ！ライダーさ、あっっ！』

腹部に頭突きを受けて崩れ落ちるライダー。それに動揺したアンリの頭に手刀を叩き込んで沈黙させる。自分たちが英霊であり、本来であれば聖杯を巡って殺し合いをしなければならなかったというのに……まったく、何をしてるんだらう。

『まあ、楽しいと言えば楽しいんだけどね。さて……このままじゃ埒が明かないし、魔術師を確認に行つてこようか』

倒れたままの二人を置き去りにするのも気が引けるので連れて行く。ただし、引きずつたままで。実体化していないからほとんど意

味は無いけど、何となく。

ランサー & 小次郎 & キャスター組。三時間目

『それにしても、魔術師の女のことを士郎に教えなくて良かったのか？バサカたちには教えたみたいだが』

『今、ここで教えてもメリットが無いわ。私たちは見つけれられなくても、士郎が動揺して不審な行動を取ってしまったら、向こうに付け入る隙を与えるだけよ。現時点で優先すべきは情報の共有よりも、士郎の安全の確保。家に帰ってから話すことも考えたけど、今後のことを考えると悩みどころね……』

『いつまでも知らせずにおくことは出来まい。それならば、早い段階で知っておいたほうが士郎のためにもなると思うが。魔術師はあるが、今のところ脅威にはなりそうではない。そう伝えれば、問題なかるう。我らを召喚し、すんなりと受け入れた男だぞ？あまり心配しなくともいい』

小次郎の言っていることも一理ある。隠しておくことで一時の間、士郎の安全を確保できたとしても、それが露呈した時に失われるかもしれない信用、代わりに生まれるだろう疑念といった負の要素を考えると、良案とは思えない。

『そうね……今夜も士郎の回路調整と魔術に関する指導をするつもりだし、その時に話してみるわ』

『うし、話は終わったな。そんじゃま、探索の続きをやるうじゃねえか！』

『ランサー……貴方、もつと緊張感を持ちなさいよ……』

『いくら緊張してたって、荒事は起こる時にや起きるもんさ。今からあれこれ思い悩んだって仕方ねえだろ？』

そう言つて楽しそうに笑うランサー。大雑把で適当な男ではあるが、無責任ではない。彼なりの忠義心や義侠心も備えているように感じる。憎めない男、というのが一番しっくりくるだろう。

『……その通りかもね。それで？今回はどこに行くか決めているのかしら？』

『先ほどランサーと話し合い、見つけておいた女子が衣装を変える部屋を……もがもが』

『あー……何でもないぞ？小次郎はその、あれだ、ちょっと調子が悪くて……あだだだだだだ！！？』

『本当のことなのになぜ口を塞ぐの……ぬおおおおお！？』

最初の流れで少しだけこいつらのことを見直した自分が恥ずかしくなり、何とも形容しがたい怒りを込めて、力いっぱい、二人の頭を締め上げる。指よ食い込め、奥深くまで。

ライダー&アンリ&バサカ組。四時間目出発

何人もの人間が動き回っている音が気になり、そちらに向けて進んできたら広い空間を持つ建物の中に到着する。前の時間で懲りたの

か、二人とも大人しくなっている。しかし、その静かさを素直に受け入れず、何か計画を練ってるのではないかと疑うようになった自分がちよつと悲しい。

『何だか楽しそうなことやってますねー！』

『遊びの一種みたいだね』

人数を二つに分け、あらかじめ備えられていた現代の知識でいうボールを互いにぶつけ合っている。単純に見えるけど、なかなか面白そう。

『……………』

『どうかしたんですか、ライダーさん？』

『いえ、楽しそうなのでやりたいなーと思っただけです。それと今朝、士郎に暴言を吐いていた男が居ましたよね？アレにぶつけてやったらどれほど爽快かと思って』

『えっと……………確か、桜さんのお兄さんだと言っていましたね。名前は忘れちゃいましたけど』

『し……………しん、しん……………そんな感じだったような気がする』

『あー、それっぽいですね。髪型は記憶に残ってるんですけどね。ワカメとかいう海藻に似てたので覚えちゃいました』

『いいですねアンリ。では、アレは今後ワカメと呼称するようにしましょう』

ライダーが浮かべる満面の笑顔から、よほど嫌いなんだと改めて実感。私も、何かあるうと好きにはなれないだろう。あの陰湿さはどうもなくヘラを彷彿とさせる。

『それはそうと、キャスターが言っていた魔術師の件についてはどう思う？』

『私としては脅威となり得る存在ならば早急に排除するのが理想かと。何か起こってからでは遅いですからね。まあ、士郎に嫌われるのは避けたいので行動を起こすつもりはありませんが』

『私は……警戒しておくだけで充分だと思います。正直に言うと誰かと争うのは好きじゃないですから。戦わなきゃならなくなるとしても、最後の一瞬までは何とか争わずに済む方法を探したいです』

二人とも一応は警戒だけで充分だという結論に落ち着いたらしい。キャスターたちの話を聞くと、向こうも同じ意見のようだし、今晚にでも士郎に話して具体的な方針を決めることになるだろう。

『毎日同じ時間に鐘が鳴るらしいから、そろそろだね。また士郎が昼ごはんを用意してくれているらしいよ』

『本当ですか！？それじゃ、早く戻らないといけませんね』

Interlude

『お留守番アーチャー ふつかめ』

キャスターの指導もあり、八人のサーヴァントに繋がる個々のパスをある程度制御できるようになったらしい衛宮士郎。人目に触れな

い私まで霊体化させておかずともいいだろうというキャスターの進言もあり、こうして実体化の状態で行動している。

「だが、この姿では口くなことろができん……」

お茶を入れようとするれば急須を持ち出すことはおろか、ポットからお湯を出すこともままならない。あの男が気付かなかったのだらう汚れを発見して掃除しようにも、道具を扱えない。二進も三進もないとはこのことだ。さらに、『無人である衛宮邸』でテレビを見るわけにもいかない。

「……………不便だ」

屋根に登って警戒を試みたが、カラスに襲われそうになるわ、誰か人が通るたびに反射的に隠れてしまい疲労が積もるばかりなので断念。

「こんなことなら付いて行けば良か……………」

昨日よりもさらに馴染んでしまっている自分に愕然とした。考えてみれば、殺そうとしている相手と普通に会話しているし、用意された布団で眠ってしまったし、未熟さに思わず指摘を入れてしまったが食事も共にしている。

「奴を憎み、己を憎み、待ち続けた果てにこの様か。何かの意思が働いた結果としてこの世界に召喚されたのなら、よほどの性悪だらうな」

どうすればいいのかわからない。衛宮士郎がサーヴァントを召喚するまでは、恐らく俺の知っている世界と同じだったと思う。だが、

召喚が成った時、全てが変わった。もう、俺の知識は役に立たない。戦いを通して決定的に『正義の味方』の道を突き進むはずが、きっかけになる聖杯戦争は起こることも不明。さらに、殺すと決めていたはずの衛宮士郎が、この短期間で変わり始めているように思う。どれほど否定しようとしても、思ってしまう。

「あの衛宮士郎は、私には成らないと、どこかで感じている……だから、どれほど意識しようとしても殺意が薄れるのか……」

「それでは……なぜ、私はこの世界に召喚された……！？衛宮士郎を殺せないのなら……何のために……ッ！！」

知らず強くなっていた声は、静まり返った屋敷の中に消えていった。誰も、答える者はいない。いつだって自分だけで答えを出し、進む道を決めてきたが、初めて、誰かに答えてほしいとそう思った。

Interlude out

『こんな感じでバサカさんの対応が荒くなる一方なんです』

『私とアンリに悪気は無く、純粋な欲求に従って行動しているだけなのにこの対応……セイバーはどう思いますか？』

『脱がそうとしたお前たちが悪いのに、なんで私に非があるように言ってるんだ……』

『わっ、私に聞かれても……しかし、バサカが嫌がっている以上、あまり褒められた行動ではないかと。公衆の面前で脱がされそうになれば抵抗するのは当然だ』

『霊体化しているので私たち以外の誰にも見られませんか？』

『ならば、自分たちが同じことをされたらどう思うのか考えてみなさい』

『……………ちょっと、恥ずかしいかもしれませんね』

『でも、どきどきですー』

『……………』

『無駄だよ、セイバー。この手の話題に関しちゃこの二人に敵わないから。この短期間で痛感してる』

昨日と同じように屋上で昼食を済ませ、午後の授業は全員が揃って待機することになった。午前中に体験してきたことを詳細に報告し合いながら、セイバーにも色々と話をするためらしい。しかし、口火を切ったのがライダーとアンリで、内容がバサカを脱がすことと反撃の苛烈さに対する話とは……………霊体化しているとはいえ、昨日に引き続き何をやってるんだこの二人は。

『セイバーの言う通りだぞ二人とも。バサカは嫌がってるんだから、止めなきゃダメだ』

それに小さくても比類なき美女、美少女揃いなのだ。俺の精神的な負担を軽くするためにもこの二人の暴走はしつかり抑えなくてはならない。召喚した時はこんな行動をするようには見えなかったのに……………解れて馴染んできたと喜べばいいのか、最初の印象が見事に裏切られたと悲しめばいいのか、とても複雑だ。

『嫌がっているようには見えなかったんですけどね……』

『むしろ楽しんでいるように見えました……』

『変なことを言っつな！』

『大丈夫です、バサカ。私が知っている者にも、公衆の面前で裸になるのが好きな者が居ました。私には何が楽しかったのか分かりませんが、人の嗜好はそれぞれだ』

『だから違つと言っているのに……』

諫めようかと思つたものの、バサカの声もどこか楽しげだったので水を差さないでおいた。それぞれ個性的な面々が揃っているの仲良くやっていけるのか心配だったが、上手い具合に噛み合っている。俺だけが聞ける賑やかな話し声に耳を傾けつつ、授業を聞く。

ちなみにランサーと小次郎はキャスターを怒らせ、沈黙させられたらしい。事情を聞いても『わざわざ士郎に話すことじゃないわ』と言われてしまつてはどうしようもない。あとで直接二人に聞いてみるか。

当のキャスターは魔術師としての知識欲に駆られたのか、大人しく授業を聞いているようだ。ある程度の現代知識は召喚時に与えられているらしいが、ただ聞き流し続けるのももつたいたいと感じたのだろう。

『問題は、留守番をしているあいつだな……』

つつがなく授業も終わり、帰り道を歩いていく。一成から備品の修理を頼まれたが、アーチャーを残したままにできなかったし、セイバーのお腹がきゅるるーと可愛らしい音を立てていたので断った。どの備品か聞いておいたので、明日の朝、早くに登校して修理すれば問題ないだろう。朝だけじゃ間に合わないかもしれないし、念のため明日は遅くなるとアーチャーに伝えておこうか……。

「ただいま。すまん、少し遅くなった。足りない材料を買い足してたら……って、あれ？」

居間に行くと、昨日と同じようにアーチャーの姿は無かった。キャスターの方を見ると、何も言わずに天井のほうを指差す。また屋根の上に登っているということか。俺たちが帰ってきたのは分かっているはずだし、小さくなっていても英霊には変わらないので何か危険な目に遭っているとも思えない。

「まあ……そのうち下りてくるかな」

まずは遅くならないうちに夕食を仕上げてしまわないと。藤ねえは仕事が忙しいと言っていたし、桜も何か用事があると言っていたので、今夜もサーヴァントたちとの夕食になる。

賑やかな夕食も終わり、神秘が神秘として最も強さを増す深淵なる夜がやってきた。キャスターを連れて土蔵に入り、昨夜の鍛錬の続きを始める。あらかじめキャスターに言われていた指導。霊体化させるための回路やパスの制御、その時に八人のパスを一括ではなく

一人分ずつ制御することで正しい魔術回路の起動練習にする。本当に効果があるのか不思議に思っていたが、今までに比べて格段に、昨夜に比べてもずつと起動が容易い。

「すごいな……こんな簡単に切り替えられるのか」

「『すごい』と言いたいの私のほうよ。あくまで正しい回路起動手順の練習、少しずつ慣らしていく一環としての行動だったのに、士郎は完璧と言っていくくらいに切り替えをしているわ。恐らく、士郎は自己の精神や身体を制御することに卓越した才能があるのね。これなら、私の予想よりも早く鍛錬を進めていけると思うわ。」

キャスターの協力もあって衛宮士郎が持つ魔術回路の状態が明らかになり、これまでの自己流鍛錬が何だったのかと頭を抱えなくなるような簡単さで新しく五本の回路が使用可能になった。それからというものの、空いた時間を使ってはキャスターの説明を聞いたり、簡単にはあるが調整をもらったりしている。その効果が早くも出始めているようだ。

「それじゃ、今夜は新しく三本の回路を開いてみましょうか。一度に七本全てに魔力を流すことで慣らしてもいいんだけど、事を急いで失敗するのは愚か者のすることだから、分けてやりましょう。回路を開きやすくする薬と魔力の流れを感知しやすくする薬を調合するから、少し待ってもらえるかしら」

むう、と可愛らしく唸りつつ、ローブの中から様々な薬を取り出しては用意しておいた水に溶かし込み、俺に飲ませる薬の調合を進める。二つのカップの間をちょこちょこ行き来する姿は、その真剣さに反して非常に微笑ましい。こんなことを考えていると知られたら、とんでもなく怒られそうだが。

「これで、完成。それじゃ、両方とも飲んでから昨日の夜と同じ手順で回路を起動してみてちょうだい。焦らなくていいから、一本ずつね」

「分かった。同調、開始」

魔術を扱うための集中力を研ぎ澄ませるために呪文を唱える。意識の深くに埋没し、すでに起動している七本の回路を確認。すぐにも起動できそうな回路から三本を選び、がちりと撃鉄を上げて魔力を流し込んだ。

「っ」

生傷に消毒液をかけた時にも似た痛みが一瞬走り、正しく魔力が流れ始めたのを感じる。僅かな違和感もゆっくりと消え、他の七本と同じように馴染んでいく。

「大丈夫？」

「ああ……今まではすんなりと進みすぎてたから、少し驚いただけだ。大丈夫、もう慣れた」

「回路の状態は？焼け付きそうだったり、軋みを上げたりしていない？」

「問題なく起動できたみたいだ。キャスターのおかげだな。残りの四本もすぐに使えそうだけど、どうする？」

「そうね……一郎がいけると判断したのなら、止める必要は無いわ。

ただし、慣れ始めが危険だから慎重にね」

「分かった。改めて、気を引き締める」

一度、大きく深呼吸して集中し直し、一本ずつ確実に起動させていく。その度に流れる魔力が増え、パスを通じてサーヴァントたちに流れていく分も増えていった。供給できている量は最初に比べると桁違いと言ってもいい。これで、だいぶ楽にしてやれるだろう。いくら現界に必要な魔力が本来の姿に比べて格段に減っているとはいえ、潤沢な供給があるに越したことはないと思うし。

「　　っ、はあ、上手くできたと思うけど……何か、問題が起きたりはしてないか？」

「いえ、特に無しね。上々の結果よ。回路も半分開けて扱える魔力も増えたことだし、予定を早めて魔術行使の鍛錬も始めましょうか」

「これが、魔術において基本となる強化魔術の説明よ。ちゃんと理解できた？」

「どんな物にも『隙間』が存在していて、そこに魔力を流し込み埋めることで強化する。流し入れる量が少なければきちんと強化できないし、多すぎれば構成の均衡を壊すことになり破綻する。物それぞれにある『隙間』を正確に把握し、適切な量を浸透させることが成功の鍵。これで合ってるか？」

「よくできました。士郎がこれまで強化を成功させたことが無いのは、この仕組みをしっかり理解して、意識することができなかった

から。感覚だけを頼りにやっていたから失敗していたと考えられるわね。それと、間違った回路起動のせいで安定した魔力を扱えなかったのも原因でしょうね」

なるほど、と頷くことしかできない。キャスターの説明を聞いた後では、かつて切嗣にしてもらった説明が必要最低限のものに過ぎなかったことがよく分かる。恐らく、俺に魔術を習わせたくなかったからではなく、切嗣自身がその説明で理解し、会得していたから同じような説明しかできなかったんだろう。そう言えば、切嗣は誰かに何かを教えるということがとんでもなく下手だったな……。

「どれがいいかしらね……うん、この棒切れがちょうどいいわ。これを強化してみましようか」

キャスターが指し示した二本の鉄パイプを手に取り、ひとつ息を吐いて準備を整える。

「何度も言うけど、重要なのは焦らないこと。確実な成功ができれば、先に進んでもいずれ致命的な停滞を招くことになるのだから」

「 同調、開始 構造解析、基本骨子 説明 構成材質、
説明」

鉄パイプが『鉄パイプ』として存在するための重要な部分、鉄パイプを構成している材質を詳細に解析していく。強化するために魔力を流し込む『隙間』も見逃さないように意識する。

「 構成材質、補強、開始」

把握した『隙間』を埋めるように、均衡を壊さないように、キャスターの言葉を思い出しながらゆっくりと魔力を流し込んでいく。

「全行程、完了。はっ、ふう……これで、どうだ」

これ以上は埋め切れないという所まで魔力を流し入れることに成功し、知らずに止まっていた呼吸を再開して身体の中に溜まっていた空気を入れ替えた。少なくとも、今まで続けてきたような強化対象は破損していない。

「驚いた。まさか、一度目で成功するなんて」

「成功……したのか。それにしても、喜んでいいのか複雑な反応だな」

きよとんとしたキャスターの顔を見るのはこれで何回目だろうか。その表情と言葉に思わず苦笑してしまう。

「ん……そうね、謝るわ。何度か失敗を重ねてから成功するだろうと予想していたのよ。今夜はかなり収穫があつたし、このくらいにしておきましょうか。士郎も疲れたでしょう？」

そう言われて、いつもより一時間ほど長く修行に費やしてしていたことに気付いた。集中する時間が長かったせいか、確かに疲労が溜まっている。

「俺だけじゃなくキャスターも疲れただろ？そう言えば、明日は早めに登校して一成に頼まれた備品修理もやらなきゃいけなかった……。他のみんなはとっくに寝てるだろうし、俺たちも休もうか」

夜はさらに深くなっていく。部屋に戻る途中、濃さを増した闇の中から『何か』に見られているような気がして立ち止まった。

「……………気の、せいかな……………」

第六話 学校にまた行ってみよう。ちびキャス先生と魔術鍛錬。終幕

衛宮さん家のちびサーヴァント騒動 みっかめ 了

第六話 学校にまた行ってみよう、ちびキャス先生と魔術鍛錬。(後書き)

前回から一ヶ月……長くお待たせしました。

そして、文字数も長くなりました。

今までで最長じゃないかな？

なぜか、話を書いたびに長くなっているような気がします。

ちびサヴァたちが止まりません。

書いてるうちに、どんどん好き勝手に動いてしまっ。

いつの間にか虎は引き回されています。

でも、すごく、可愛いです。

元々は神奈須様、神武内様からの借り物キャラクターなのに。

それでも、こやつらが愛おしくてたまらない。

今後、どういう展開にしていくか全くのノープランですが、最後まで書き抜きたいと思っているので、今後ともちびサヴァ達をよろしく願います。

第七話じゃないよ！ただの新年挨拶という建前の悪ふざけだよ！！（前書き）

遅れに遅れた新年の挨拶をちびサヴァ達と虎がお送りしています。

ゲストもちよこつと出てます。

第七話じゃないよ！ただの新年挨拶という建前の悪ふざけだよー！

「「「「「あけまして「「「「

「「「「「おめでとー「「「「

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「

あけましておめでとーございますっ。今日はちびサヴァ八騎を引き連れ、新年の挨拶をしに来た次第さ。

「うちのバカ虎ったら文章と妄想くらいしか能が無くて……こんな感じの年賀状になってしまっごめんなさいね」

「まあ、努力だけは認めてやってくれ。ずいぶんと苦心して転がり回った果ての案だから」

「アチャ虎さんの代わりに私たちが盛り上げちゃいますから楽しんでいってくださいねー！」

ぬう……キャス子とバサカの言葉には一切反論できん……。

「大体にして本来であれば元旦には相手に届かなければならない年賀状を今さら慌てて作ろうという考えが甘い」

うるさいぞアーチャー。

「ほう、年賀状もすっかり作れない分際で私には口答えができ……」

その言葉を言い終わる前に……アンタは八つ裂きになっている。虚
刀流七代目当主、鑢七花…推して参る。奥義 七花八裂ッ!!

「きさっ!?!それは別作品のキャラ……はぐうっ、がっ、おぐっ、
げふっ、ぐふうあっ!?!」

ふう……悪は滅びた。

「勝てば官軍って言葉がよく似合いそうな笑顔だな。何だっけ……
文章模写ってやつか?」

そうそう。便利だろ?

「まあ、どうでもいいけどな。それよりも、いつも虎が世話になっ
てる。まあ、どうしようもないバカだが、仲良くしてやってくれ。
それと……『明けましておめでとう』だな」

「……げほっ、立場を利用して好き勝手やるとは……」

おおっ、もう回復したのか。やるな、アーチャ……ぬあっ!?!

「ちっ……カラドボルグカラドボルグカラドボルグカラドボルグカ
ラドボルグ!!」

あぶなっ!?!ちよっ、小さくても刺さるから!壁とかガリガリ抉っ
てるから!当たったら危な…アッ !!!!!!!

「成敗完了。むっ……挨拶が遅くなってしまったな。拳動不審真性
変態欠陥製品なこいつの相手をさせてしまって申し訳ない。おかし

な真似ばかりやっていると思うが、悪気だけは無い……はずだから大目に見てやってほしい。どうしても我慢ができなくなったら言うてくれ。責任を持って、凄惨な躰をしておこう。では改めて。大変遅くなってしまうが、明けましておめでとうございます。君にとって新年が良い一年になるよう願っている」

「ランサー、アーチャーと挨拶が終わったようなので、次は私の番だな。昨年は創作者殿がずいぶん世話になったようで、剣山と化しているあやつに代わって厚く御礼申し上げます。貴女のおかげで楽しい時間が過ごせたとよく言っていた。変わり者という言葉も甘いような筋金入りだが、今後とも付き合いを続けてやってくれ。我ら共々、よろしく頼む」

きいいいさああああああああ……よくも俺様を無視して

「小次郎、挨拶が済んだなら右に避ける」

「どうか？」

アチャ虎の名において命ずるッ！！全員、女体化し……はうっ！？

「正中線の急所全てにミリ単位の誤差で射撃を叩き込むとは……相変わらず見事な弓捌きだね。あれだけ弓を扱えるのは神代でもそうは居なかった。ああ、男性陣の挨拶が終わったので、先陣を切るのには私、バサカだ。年に一度のイベントだというのに、このような形でしか挨拶することができなくて申し訳ない。最初にも言ったと思うが、アチャ虎が自分の力が及ぶ範囲で何とかしようと考えた結果でね。年賀状としてはどうかと思うが、気持ちだけは汲んでくれるとありがたい」

「ごほん……それでは、明けましておめでとう。私たちがのびのびと活動できるように応援してくれたり、アチャ虎の相手をしてくれたり、昨年は色々と良くしてくれて本当に感謝している。貴方にとつてこの一年が素晴らしい日々になるよう願わせてほしい。今後とも、どうぞよろしく」

「バサカさんの次は私の出番ですねー！先に挨拶した皆さんと同じような内容になってしまふのは残念ですが、昨年はアチャ虎さんと仲良くしてくださつてありがとうございますー。あんなに嬉しそうなアチャ虎さんはなかなか見れませんからね……私たち共々、これからも変わらず仲良くしてくださいね！あつ、忘れてました…明けまして、おめでとつございまひゅー！」

「肝心な所で噛み噛みなアンリに引き続いて、私、ライダーがご挨拶申し上げます。まずは、明けましておめでとうございます。昨年はうちのダメ虎がお世話になりました。土郎の使用済みTシャツを横流ししてくれているので今まで見逃しておきましたが、行動が目に余るようでしたら、釘剣でサクツとお仕置きしますのでお気軽にどうぞ。今年は、昨年よりもさらにバサカを脱がせられるようアンリと頑張りますので、応援よろしく願います」

うう……さすがに復活まで時間はかかったな……アーチャーめ、手加減というものを

「おや、いけない。手が滑ってしまいました」

手が滑っただけで釘剣が股間に向かうはず無いだろうがアッ

……………

「はむはむ……むぐつ、次は私ですか！？すみません、シロウのおせちに夢中ですっかり油断してました……えー、去年は私たちがびサヴァとアチャトラが大変お世話になりました。特にアチャトラは未だに未熟の域にも届かず、色々と迷惑をかけたっばなしだと思えます。ですが、さらに精進を重ねると言っているのです、今後とも仲良くしてもらえると嬉しい。むっ！？アーチャー、それはお餅ではありませんか！ひとまず私の分として十個ほど焼いてもらえませんか？」

「うづくまつて痙攣してるバカ虎は放置しておいてつと。それじゃ、最後は私の挨拶ね。まずは、明けましておめでとうございます。今年もよろしく願います。たくさんお世話になったのに、そのお返しがこんなバカ騒ぎで本当に申し訳ないわ……少しでも喜んでもらえれば良いのだけれど。アチャ虎の努力次第だけど、これからもどんどん活躍できるよう頑張っていくから、今後ともよろしくね」

……あいつらは行ったみたいだな……。

新年最初の挨拶がこんなくだらん騒ぎなのは非常に申し訳ない……。幾らかでも明るい気持ちを提供できれば成功だが、どうだろうか？

上手く成功していることを祈ろう。

大きく環境が変わったり、変わらなかつたり、これまで同様の交流が続けていけるかは分かりませんが、これからも仲良くしていけると嬉しいです。

新年もよろしくお願いします!!

「ん？新年の挨拶でもしてやろうかと来たんだが……誰も居ないじやねえか。まったく、この俺を誰だと思ってやがる……クロコダイルだぞ。他の連中はどこ行った……って、何だ？この紙切れは？」

『忘年会&新年会&二次会、三次会、四次会にみんなで行ってきます。クロコダイルさん用としてバウムクーヘン、生クリーム、缶チューハイ×2、発光ダイオード付きの面白帽子、クラッカー×2、

タンバリン、カスタネット、ラッパ、おにぎり×3を置いていきま
す。ゆっくり楽しんでいってねー!』

「……………(もぐもぐ)」

「……………(1J1J1J)」

「……………(パーパー)」

「……………(しゃんしゃん、かちかち、ぱぱぱ

ぱ、
ぱぱぱ)」

「……………船に、帰るか……………」

第七話じゃないよ！ただの新年挨拶という建前の悪ふざけだよ……（後書き）

あけまして、おめでとうございます。

第七話 湯けむり桃色騒動。魔女二人、始動。(前書き)

悪ふざけではありません。正真正銘、偽り無しのちびサヴァ本編第七話です。

相変わらずのキャラ崩壊、性別転換なキャラ登場、虎フリーダムの勝手気ままな内容になっております。

神の原作とは程遠い独自展開で、作者の未熟さが全面に表れていません。

以上のことを踏まえた上で、広い心と許容の精神をもって読んで下さると非常に助かります。

第七話 湯けむり桃色騒動。魔女二人、始動。

第七話 湯けむり桃色騒動。魔女二人、始動。

昨夜、士郎とキャスターの魔術鍛錬と同時刻、タワー屋上

人間が恐れながらも狂おしい衝動を以て高所を目指す理由。恐らく、その理由を正確に説明できる者は居ないだろう。なぜ人は両の足で踏み締める大地に居ながら、手を伸ばしてもなお届かない高みを目指すのか。

かつて、捕食される側だった人類の祖先が身を守るために高所へと逃げていた記憶、螺旋に刻まれた記憶の名残ゆえ。大地でしか生きていけない己の不自由さを厭う意識を獲得したから。『届かない場所』という未知を既知へと引き降ろしたいから。推測は無限に広がり、結局は何も残らない。

「 って、何をしようもないこと考えてるんだか……。毎晩のようにこんな場所に來てるせいね、きつと」

眼前に広がる闇と、人の営みが生み出す数多くの灯火。天空に広がる星空のように情緒は無くとも、高所から見下ろすこの光景も確かに『星空』と呼べるかもしれない。

「ああ、もう！また変なこと考えてる……これは本格的にダメね。そろそろ引き上げ」

「何を騒いでいるのだ」

どうにも思考が遠坂凜らしくない幻想的な方向へと飛んでしまつこととに頭を抱えていると、やっと聞き慣れてきた声が耳に入ってきた。

「貴女こそ、どこに行つてたのかしら？」

「別に、関係なかつた」

「生憎だけど、関係あるから聞いてるの。どういう状況になつてるのか全く見当が付かない状態なんだから、勝手な行動をしないでと言つたと思つけど……上手く伝わらなかつた？」

「つまりん皮肉を言うな。　　は　　のやりたいことをやる、ただそれだけだ」

本人は普通に話しているつもりなんだろうが、音量が不足気味で吹きすさぶ風に所々かき消されてしまつている。相変わらずな態度が頭にきたけど、ここで言い合いになつても不毛な結果しか残さないのはここ数日の経験で分かり切つているので、大人しく折れておこつ。

「はいはい、そうだつたわね。今夜も特に収穫は無かつたし、もう帰りましようか」

「飽きもせず毎日よくやる。こんなに寒いのに付き合つてやつてるのだから平身低頭して感謝するの……はぐうあつ!？」

分かつていても、感情の爆発を抑え切れなくなるのも人間だと思つ。自分でも驚くほどの速度で抜き撃ちしたガンドは声の主に命中。この手応えは、的確に額を捉えた証拠。

「貴様っ！度重なる不敬、もう許さ あふう！？」

少しだけ照準を修正して額にもう一撃。完璧に沈黙した声の主を回収し、屋上を立ち去る準備を整える。振り返って、いつもと変わらないはずの夜景を視界に収めた。

「一体……何が起きているのかしらね」

誰に向けたものでもない眩きは、どことなく深さ、濃さを増した暗闇へと消えていった。

同時刻、冬木の森深くに佇む古城の一室

「本当に……気に入らないわね。私が、何が起きているのか掴めないなんて……」

虚空をぼんやりと照らす月を眺めても気分は一向に落ち着かない。湧き上がってくるのは戸惑いと不審、そして不安。予定されていた戦争を勝ち抜き、成すべき役目を果たす。それが私に与えられた存在意義であり、そのために今まで在り続けてきた。

「お嬢様、今宵は冷えます。御身体に障りますので、ベッドにお戻りください」

「セラ……バーサーカーは？」

「城の正面にて警護を続けています。目立った動きもありません」

「そう……そうよね。森の監視にも異常は見当たらないのに……くしゅっ！」

いつの間に近付いていたのか、侍従の一人であるセラが私に声をかけてきた。バーサーカーも、森に張り巡らせてある監視魔術の管理も、全て私がやっていることでセラに聞く必要は無い。それでも、拭い切れない不安が口をついて出てしまった。くしゃみと同時に寒気が広がっていく。長時間に渡って立ち尽くしていたわけでもないのに、身体は冷え切っていた。

「いけませんね……さ、早くベッドに。何か温かい飲み物を作ってください。お一人にしてしまって申し訳ありませんが、リーゼリットを呼んでおきますので少しだけお待ちください」

促されるままベッドに入り、急ぎ足で部屋を出ていくセラを見送る。侍従としての役目を完璧に果たしてくれているのだが、どうも肩の力が入り過ぎていて。リズくらいに砕けてもいいと思うんだけど、それを言っても『とんでもない』と一蹴されてしまうので思うだけにしておく。

「はぁ……有力な候補者の誰にも令呪が現れない、英霊の召喚も成功しない、それでも『アレ』は妙な動きをしている……。何だっって言っのよ……」

本来であれば聖杯戦争において私に掴めない事態、知り得ない情報などあるはずがない。だが、今、この瞬間、起こるはずのない状況へと陥っている。答えなど返ってこないと分かっているのに、虚空へと向けて吐露を続けることを止められなかった。

「そう言えば、サーヴァントって風呂とかは必要ないのか？」

小さな英雄たちと生活するようになって四日目。最初こそ戸惑うことが多かった学校への同行もすっかり日常の一部分になり、藤ねえや桜にはれないように行動することも手慣れてきた。久しぶりに揃った三人での夕飯を無事に済ませ、早めに帰宅する二人を見送り、少し遅くなったサーヴァント達との夕飯も終えて穏やかな空気が満ちる夜。食後のお茶を飲んでいる時にふと思いついた。何気ない、今さらのような素朴な疑問。事の発端は、俺こと衛宮士郎が発したこの一言だった。

「言われてみれば急に気になってきたわね。霊体化すれば汚れなんかはリセットできてるみたいだけど……やっぱり、正直な気持ちとしては入りたいわ」

「お風呂ですかー……私は入ってみたいですよー！」

「そうだね。私も興味があるよ」

「……………チャンス、ですね」

「ライダー、何か良からぬことを考えていませんか？」

「いえ、別に」

英霊、サーヴァントとは言え、やはり女性には変わりないのだろう。汚れは無くとも入浴を求める気持ちは強いようだ。今まであまり意識していなかったために言い出す者はいなかったと考えるのが妥当か。

「桜も藤ねえも帰ったし、ばれる心配はしなくていいんだけど……サイズ的な問題があるんだよな。ちょっと待て、どうにかできないか考えるから」

さすがに湯船をそのまま使わせるのは無理な話だし、英霊だから大丈夫だと思うけど溺れる可能性もある。シャワーも備え付けてあるけど、あのサイズだと天変地異レベルの豪雨に直撃されてるようなものだろう。大体にしてシャワーを出したり止めたりすることからして苦労するに違いない。

「うーん……手桶にお湯を入れておけば良いだろうけど、そうすると冷めた時にどうしようもないし……」

湯船の代わりに手桶を使う案は採用。次にクリアすべき問題は、お湯が冷めないようにすること。キャスターならば何かしら良い案を出してくれるだろうけど、あいつらが快適に入浴できる環境くらい頼らずに考え出したい。

「常に新しいお湯を供給できるようにすれば……」

温泉かけ流しのイメージで蛇口から手桶にお湯を流し続ければ温かさが失われることもなく、泡なんかで汚れたとしてもすぐに新しいお湯で満たされることになるだろう。藤ねえが持ち込んで使い道に困っていたホースと幾つかの道具を組み合わせれば、供給の仕組みもすぐに作れる。

「よし、何とかかなりそうだ」

「シロウ、本当に大丈夫なのですか？ 私たちはこのような姿ですし、

湯浴みができなくとも問題はありませぬ。無理しなくとも……」

「安心してくれセイバー。簡単に作れる物ばかりだし、俺としてもみんなの要望は可能な限り叶えてやりたいしな。すぐに用意してくれるから、もうちょっと待っていてくれ」

蛇口にあつらえたようにピッタリのサイズだったホースを適度な長さで切り、工具箱の中に入れていた固定用のクリップで外れないように止める。緩く流れ続けるように水流を調整し、出口部分は手桶の中へ。耐水テープとプラスチックの切り端を簡単に組み合わせて手桶の中に入るための段差を作り、ままごとセットの中から持ってきた赤と青の大きめの器にはそれぞれシャンプー、ボディソープを入れた。最後にお湯が溢れ続ける手桶の側面にU字型に折り曲げた細長いプラスチック片を取り付けて即席のシャワー代わりに。

「とまあ、風呂場の中はこんな感じになっているから。扉は自由に入りにできるくらいに開けてあるし、脱衣所側のほうには小さなタオルを五枚置いておいたからそれで身体や髪を拭いてくれ」
急ごしらえの簡素な物ばかりだが、何とかなるだろう。しかし、あくまで応急の対策に過ぎないので今後のためにもしつかりした物を作る必要がある。ちょうど明日は時間も空いているし、土蔵を探せば材料も簡単に揃うだろうから色々試してみるか。

「……まさか本当に入れるよう準備するとは思わなかったわ」

「キャスターには毎晩、魔術の鍛錬に付き合ってもらってるからな。せめてものお礼ってやつだよ」

「私はシロウの剣、盾となるべく付き従っていますが……今のところ役に立てていません……」

「セイバー達はそうだな……この家で一緒に暮らしてくれていることに対するお礼かな」

そう言つてキャスターへの言葉を聞いて無念だと言わんばかりの表情を浮かべ、小さく呟いたセイバーを励ました。俺の言葉の意味がよく分からないのか、不思議そうに小首を傾げている。

「一緒に暮らしていること……ですか？」

「そう。みんなのおかげで毎日賑やかだし、俺も……」

『楽しい』と言いかけ、紅蓮と漆黒の風景を思い出して口を噤んでしまった。サーヴァント達と過ごす時間の中でいつの間にか和らいでいた焦燥感が、急き立てられるような感覚が湧き上がってくる。耳に入ってくるのは穏やかな団欒の音ではなく、唯一の生者である衛宮士郎を責め苛む怨嗟の叫び。肌に触れるのは温かい家の空気ではなく、絡み付いて骨まで焼き焦がすような灼熱の風。温もりを、幸福を、衛宮士郎が享受することは許されないと何度も叫んでくる。

「分かってる……分かってるさ……」

「シロウ？」

「あ、ああ……ごめん、ちょっと考え事。明日は時間もあるし、毎日の入浴にも対応できるようなしっかりとした道具を作ろうかなと

思ってた」

「士郎さんは手先が器用ですからねー。どんな凄い物ができるのか
楽しみです」

「アンリが想像しているような立派な物は作れないだろうけどな。
少なくとも、今よりは良くできると思う。何か不都合があったら呼
んで……って、キャスターも居るし大丈夫か……。女の子ばかりなの
に俺が入っていくわけにもいかないな」

「……私は、士郎と一緒に入っても構わないと思っていますよ？む
しろ歓迎です」

「変なことを言わないでくれ、ライダー……」

「それじゃ、先に入ろうか」

バサカの声に促され女性陣がとことこ歩いて風呂場へと向かってい
く。五つの小さな背中を見送り、肺の中に沈殿していた重苦しい空
気を吐き出す。

「顔色が悪いな。大丈夫か、士郎？」

「ランサー……すまん、少し……外の空気を吸ってくるよ。セイバ
ー達が出てきたら、入れ替わりで風呂に入っても構わないから」

「私は入らな……」

「せっかく士郎が用意してくれたのだし、ありがたく入らせてもら
うとしようではないか。ランサー、アーチャー、構わんな？」

「なかなか面白そうだし、俺は構わねえぞ。というわけで、こっちで適当に入っておくからゆっくりしてこい」

「……………分かった」

不機嫌そうな顔で断ろうとしたアーチャーの足を左右から踏みつけて封殺する小次郎とランサー。忌々しそうに踏まれた足を眺めつつ、素直に承諾するアーチャーを見ているとなぜか笑みが零れてきた。

「それじゃ、ちょっと行ってくる」

玄関へと歩きながら、ふと五感を苛んでいた紅蓮の記憶が消えていることに気付いた。意識しなくては止まってしまいそうだった呼吸も楽になっている。思い返してみると変化が起きたのはアーチャーの様子を見てからだった。

「そうだ……………あいつが、あんな顔してても、楽しそうだったから」

親近感と反発心が入り混じった妙な感情を抱いてしまつ白髪の男。その名とは違い、ぼろぼろに朽ち果て、それでも硬く鋭くあるうとする剣のような印象を与えるアーチャーが、僅かでも楽しそうにしているのがなぜか嬉しくて

「……………だから、笑ったんだ」

お風呂組（女）

男性ならば一度はその目で見たいと願うだろう夢のような光景が広がっている。艶やかで美しく、壮麗たる神秘が集う場所、それはまさに理想郷と呼ぶのが相応しいだろう。

「とまあ、このように表現するしかないですね」

「ライダーさん？何をぶつぶつ言ってるんですか？」

「いえ、このとんでもない光景を目にした土郎がどのような反応をするか想像してみただけです」

「ちっちゃいですけど、皆さんすごく綺麗ですからねー。土郎さんが見たら卒倒しちゃうかもしれません」

現在私たちが居るのは浴室のひとつ手前、衣装を脱ぐ部屋なのですが、服を脱いで無防備な裸体を晒している皆の凄さと言ったらもう、私が生きていた時代に存在した高飛車なだけの女神たちが嫉妬のあまり発狂死しそうな代物。

「バカなこと言っていないで貴女たちも早く脱いだら？入るか分からないけどランサー達も居るし、土郎の番も残ってるんだから」

丁寧に畳んだ濃紺のローブをぱんと叩き、少し呆れたようにこちらを見るのはキャスター。艶のある滑らかな肌と柔らかさと張りが見事に調和した身体、母性を感じさせる豊かな双丘と桃色の先端が素晴らしい。振り返り、浴室へと歩いていく時に揺れるお尻も涎が垂れそうなもの。アンリが『美尻』と称しただけのことがある。

「あまり、じろじろと見ないでくれないか……その、かなり恥ずかしい」

さくさくと鎧を外し、全裸になったものの私とアンリの視線を敏感に感じ取ったらしく、肝心の部分を両手で隠してしまうバサカ。奇跡としか言いようがない緻密にして最高の均衡をもって完成された肢体、女性らしい柔らかさを失わずに鍛え上げられたしなやかな身体。そして、この言葉を使うのはあまり好きではないが、森羅万象の神々に愛された果てに与えられたとしか思えない双丘とお尻。キヤスター以上に豊かでありながら、壮麗な美しさを誇る。

「……………これは、凄い、としか言えませんね」

「……………ライダーさん、私、何だかすごく感動してます」

「ああ、もう！見るなって言ってるのに！！」

「あつ、逃げちゃいました」

ひたすらその美しさに目を奪われていると、ついに耐え切れなくなったバサカは浴室へと走り込んでいった。ただ、走ることで揺れる胸とお尻が見れたのでこちらとしては思わぬ幸運。

「堪能しましたね、アンリ」

「素晴らしかったですー。お風呂に入ってみたいと賛成して良かったです」

「では、私たちも脱いでお風呂に向かうとしましょうか」

「そうしましょー……………って、誰か忘れてるような」

「あつ、あのようにたぶたぶと……ゆさゆさと……わっ、わたしは……！わたしはっ……！」

瑠璃色のドレスを半分以上脱いだ状態で崩れ落ちるように膝をつき、自分の胸に両手を当てるセイバーの姿がそこにあつた。その姿を見て、石像の陰で自分の胸元を見ては溜め息を吐いていた二人の姉を思い出したのは秘密。

「せつ、セイバーさん？ 私たちもお風呂に向かいますし、キャストーさん達も待つてるでしょうからお先にどうぞ」

「そうですね……後に待つ者たち、先に行った者たちを待たせるのは良くない。勝ち目のない勝負と分かっているにも、引けない戦は確かに存在する！」

「戦どころは関係ないと思いますが」

「参る……！」

派手にドレスを脱ぎ散らかし、浴室に向けて走っていくセイバー。確かに豊かさとは無縁の身体つきではあるものの、繊細で優美な身体ラインや素晴らしい均衡は目を瞠るものがある。

「セイバーさんの身体……綺麗でしたね」

「ええ、『綺麗』という言葉がこれほどぴったりと当て嵌まるのも非常に稀有かと。では、私たちも向かいましょうか」

「ふわぁ、ライダーさんの身体も素敵ですね！ぼんきゅっぼんを体現してますー……！ちょっと待ってください、私も今脱ぎますから……」

…あれ？引つかかって取れな……んっ、んん〜！」

「落ち着きなさい、アンリ。さあ、手伝ってあげますから」

赤黒しましまのパーカーを脱いだアンリの身体は非常に女の子らしいというか、どこもかしこもふにふにと柔らかそう。特にキャスターより大きめな双丘は同性である私ですら触りたいと思わせるような魔性を放っている。

「大きいサイズの服の下にとんでもない代物を隠していましたね、アンリ」

「へっ！？えっ、あっ、照れます……」

淡い紅色に染まった頬を両手で包みながら浴室へ向けて歩いていくアンリに続きながら、胸の大きさを整理してみると、バサカ、アンリ、キャスターと私が同じくらい、そしてセイバーといった順番だろうか。

「急ごしらえにしちゃ、しっかりしてるわ。さすが士郎、と言ったところかしら」

「気持ちいいですーう」

「さすがに深さまでは調節できなかったみたいだけど充分すぎるね。本当に気持ちいい……」

「すみません、セイバー。髪を洗うのを手伝わせてしまって」

「いえ、英霊になる前も、英霊になった後も、同性の髪に触れる機会など無かったのでなかなか楽しい」

目に泡が入ってしまったわないよう注意しつつ、シャンプーを手に取っては髪に擦り込む。一番髪が長く、量もある私が最初に洗い始め、手伝いを申し出てくれたセイバーと協力しながら洗い上げていく。

「ん、これで洗えましたね。それでは泡を流すのでライダー、こちらへ」

溢れ続けるお湯が滝のように流れ落ちるよう細工された部分に頭を向け、髪を濯ぐ。こうして誰かに髪を洗ってもらうのはどれくらいぶりだろうか。姉様たちにしてもらったのが最後だから、もう数え切れないほど前のことになる。

「ふふっ、殺し合いを始めるんじゃないかってくらいに睨み合った時もあったけど、すっかり仲良しじゃない」

「良いことじゃないか。こうして見ているとライダーが姉で、セイバーが妹と言ったところかな。まったく、微笑ましい限りだよ」

「妹ですか……まあ、慣れているというか、悪い気はしません」

「……私が姉……喜んでいいのか、少し複雑です。ああ、お返しにセイバーの髪を洗わせてくれませんか？」

「そうですね……お願いできますか？」

お湯の滝で髪や身体を濡らし、そう言ってくるりと背中を向けてく

れたセイバー。シャンプーを手に取り、透き通るように白くて細い肩の辺りまで伸ばされた柔らかな金髪へと擦り込んで泡立てる。

「力加減は大丈夫ですか？」

「ええ、問題ないかと」

どこか心地良さげなセイバーの声を聞き、姉様たちの髪を洗った時に『いたたたたつ！髪を全部引っこ抜くつもり！？この馬鹿力！』などと叱られたことを思い出して、痛みと共に温かい気持ちが入り込んできた。慎重に、慎重に、指を絡めて洗い続ける。

「それにしてもお湯にも泡にも負けませんね、このクセ毛は」

「一度も負けたことがないのが密かな自慢です。ん、洗えたようなので流してきますね」

再び滝のほうへと歩いていったセイバーを見送り、立ち上がる前に水分を含んでずっしりと重くなった髪をまとめて絞る。髪を踏まないように気を付けつつ、段差を上って浴槽代わりの手桶の中へと身体を沈める。土郎の配慮だろう、柔らかい素材に覆われた縁の部分に頭を乗せ、手足を伸ばした。

「……はあ、落ち着きます……水は良いですね。この感触、すっかり忘れていました」

「ライダーさん……すごく、綺麗です」

水中から手を持ち上げ、指を伝い落ちる雫をそっと唇に当てていると、上気した頬をさらに赤らめたアンリが陶然と呟く。気付くとキ

ヤスターとバサカも目を丸くしたまま固まっていた。

「どっ、どうかしましたか……?」

「アンリの言葉通りだよ。今のライダーは本当に、どこまでも純粹に綺麗としか言えない」

「自分じゃ分からないだろうけど、今の貴女はとんでもなく妖艶なのよ。ただ艶があるだけじゃなくて、清冽でありながら妖艶。ランサー達なら耐えられるでしょうけど、土郎が見たら一瞬で落ちるわ。同性でも十人いれば九人がダメね」

そう言っただけで二人。どちらも度外れた美しい容姿をしているので、誉められるほどに何とも言えない気分になってしまう。

「まあ、当然と言えば当然でしょうね。土郎から色々聞き出したけど、メデューサは元々大地の女神だし、良くも悪くもその象徴となっている蛇は水を司っている。大地と水、巡り巡る円環の関係なもの……美しさが増すのは自然なことよ」

「ライダーさんは女神だったんですか!？」

「ずいぶんと……前の話になりますけどね」

「すみません、お待たせしました」

「さて、セイバーが終わってきたなら私が洗ってこようかな」

セイバーがするりとお湯の中に滑り込み、代わるようにバサカが出ていく。クセが強くてあちこちに跳ね気味だった黒髪も、お湯に濡

れてつやつやとした素直な流れを見せていた。そして、ゆさりと揺れる圧倒的な……。

「あっ、バサカさん、ご一緒させてくださいー！」

「アンリ……急ぐと転ぶわよ？もう、それじゃ私も行くところかしらね」
身体の一部が凄まじい質量を誇る三人が揃っている光景は妙に壮大というか、荘厳に見えてくるから不思議な話。入る前はあれだけ落ち込んだり奮い立ったりと忙しかったセイバーもどこか感心したように眺めている。

「あうー、きもちいいですー」

「ほらほら、頭を動かさない。ちゃんと目を閉じておきなさいね」

「何でこんなに泡立つんだろ……？」

手際良く髪や身体を洗い終わったキャスターに背中を預け、わしゃわしゃと髪を洗ってもらっているアンリ。母性溢れる微笑みを浮かべているキャスター、目を瞑りながらも幸せそうに笑うアンリの組み合わせは、さながら仲睦まじい親子のようだった。バサカは乱雑とも言える手つきで長い黒髪を洗っているのだが、髪質が関係しているのか凄まじい泡立ちでもふもふとした真つ白なたてがみと化している。

「ライダー」

「何ですか、セイバー？」

「……………私は、聖杯を得るために英霊となった身です。聖杯をもつて望みを叶えるため、そのただけに存在し続けている。ここに召喚され、シロウや皆と過ごす時間は……良いものです。しかし、聖杯戦争が起こらず、奇妙な事態に陥っていると知り、私は密かに失望していた。聖杯が手に入る望みが無いのならこの世界に留まる必要も無いとまで、どこかで考えていました。いえ、違いますね……望みを叶えられないのに、楽しみや、幸福や、温もりが満ちるこの世界に居てはならないと思っていた。ですが」

「……………」

「ですが、今、ここに居ることができて良かったと少しだけ思っています。聖杯をこの手に掴めない無念は変わりませんが、キャスタ―とアンリが、いえ……英霊である皆が争わずに、幸せに笑う世界ならば、それはきつと何物にも代えがたい価値だと思つ」

そう言つてすぐそこに居るキャスター達を、僅かに哀しみを宿した危ういほどに透明な瞳で見つめるセイバー。浮かんだ淡く儂い笑みが、脳裏に刻み込まれた二人の姉の、何よりも愛おしく大切だった姉様たちの笑みと重なり、気付けば彼女の細く折れそうな身体を抱き締めていた。

「らっ、ライダー!？」

「……………貴女も、ここに居ます。セイバー、貴女は気付いていないかもしれませんが、随分と楽しそうに笑っていますよ。貴女が聖杯を得てでも叶えたい望みが何なのか、私は知りませんが……そう簡単に居なくならせはしませんから。聞かずとも、他の六人も同意見でしょうし、何より士郎が許すはずないじゃないですか」

「しかし……」

「貴女がここに居る意味はある。まだ見つけられていないだけで、きつとある。そして、誰かの幸せを願うだけじゃなく、貴女自身の幸せを求めてもいい。どれほど後悔しても戻らないものは戻らず、変わらぬものは変わらないのですから。私が言いたいのはこれだけです」

「私は……私はっ……!!」

『じゃあね。さようなら、可愛いメデューサ。最後だから口を滑らせてしまうけど、憧れていたのは、私たちの方だったのよ?』

たとえ、永劫という概念すら消え果てる時間が流れ去っていったとしても、決して忘れはしない声と言葉。最後の言葉は、セイバーに向けたと同時に自らへと返る言葉でもあった。

聖杯ならば、この過ちを正すことができるかもしれない。しかし、私はそれを望むことは決して無い。素直ではなく、いじわるばかりで、それでも、誰よりも私を愛してくれた姉様たちが『これでもいいのよ』と瞳だけで優しく語りかけてくれた覚悟を、その想いをふみにじってしまいそうだから。

「
」

解いた髪に隠され表情は見えずとも、身体の震えと苦しげな声から容易に想像することができた。この小さな背中にどれほどの重さを背負っているのか。先の言葉通り、余計なことは言わず、ただ、セイバーの身体を抱き締め続ける。

「あー！ライダーさんがセイバーさんに抱き付いてますよ！」

「あらまあ、仲が良くなったのは結構なことだけど、そんなところまで進んでしまうとは思わなかったわ」

「だからといって私に抱き付いてこないでくれないか、アンリ」

「ダメですか……？」

「……………少しだけだからね。あと、変なところを触らないように」

私たちが話している間に洗い終わったのだろう、キャスターたちが入ってくる。セイバーといえばどう反応したら良いのか狼狽するばかりで未だに私の腕の中。見れば、アンリが私たちと同じような体勢でバサカにくっ付いていた。

「離れたほうが良いですか？」

「……………いえ、構いません。アンリたちもやっていますから」

耳まで真っ赤にして小さく呟いたセイバーを見て、温かな気持ちがいっぱいになる。きっと、今の私はアンリの髪を洗っていたキャスターと同じような表情を浮かべているに違いない。

「そう言えば、一度だけこういう時がありましたね」

水浴びをしていた時に、たった一度だけ姉様たちが背中から抱き締めてくれたあの温もり。言葉を交わすことは無かったけれど、二人もきつと

「こんな風に微笑んでいたでしょう」

「ライダー？」

「いえ、ただの独り言です。気にしないでください」

お風呂組（女） 終了

お風呂組（男）

「さーで、入つか！！」

「別に隠せとは言わんが、わざわざ腰に手を当てて胸を張るんじゃない……」

「あー？なんだ、自信がねえのか？くつくつく、そう恥ずかしがんなよ」

「うるさい」

いち早く素っ裸になり、アーチャーを茶化しては楽しそうに笑うランサー。束ねていた長い髪も解き、その引き締まった細身ゆえ背中側から見れば女に見えなくもない。仏頂面のまま衣装を脱ぎ、アーチャーは溜め息を吐いている。その全身は幾度となく、気が遠くなるほどの鍛錬を経て作り上げられた鋼の筋肉に覆われている。まさに『戦う』ための身体だ。

「ふむ、私は着物を脱ぐのに時間がかかりそうだ。二人とも先に入

っついて構わんぞ?」

「そんじゃま、先に行つてるとするか。って、アーチャー、お前も脱ぎ終わつてんなら行くぞ」

「ええい!自分で歩けるから腕を回してくるな!引つ張るな、首が締まつ!?!」

必死に何かを張り詰めさせようとしているアーチャーと、恐らくはそれを知つた上で引つ張り回しているランサー。彼なりの気遣いというか、優しさなんだろう。片や頑なであるうとするくせに、それを無碍にできず結局は付き合っている。まったく、どちらも素直ではない上に不器用ときた。

「おー、広いなあ!」

「私たちが小さいからな」

「人の感動に水差してんじゃねえ、よつと!」

「わぷつ!?!何をす……がぼがぼ」

「ずいぶんと盛り上がっている。まあ、難しく考えたところでどうなる問題でもない……結局は、当人が解決すべきものか」

陣羽織を脱ぎ、着物を脱ぎ、結い上げていた髪を解く。浴室の中に進んでいくと温かな湯気が身体を包み込んできた。どこか懐かしい木の香りが混じつた匂い。どうせなら静かに楽しみたいものだったが、先客二人がぎゃーぎゃーと騒ぐので台無しになっている。

「沈め返してんじゃねえよ！このやるーが！！」

「先にやったのは貴様だろう！」

「てめえが一言多いからだ！！」

私の位置からではよく見えないが、盛大に湯が零れている様子と聞こえてくる声から察するに、盛り上がりも最高潮といったところかわざわざ仲裁に行くのも面倒なので、先に洗ってしまうとしよう。

「ぜえ、ぜえ……ちきしょうめ、なんで風呂入って疲れないといけねえんだ……」

「はあ、はあ、げほっ……知るか、バカ者……」

「……知るも何も、発端を作ったのは自分だろうに……」

暴れるだけ暴れて落ち着きを取り戻したらしい。反響して耳に突き刺さる罵声の浴びせ合いが無くなり、快適な静けさが戻ってくる。ひとまず、湯の流れ落ちる滝で髪と身体を濡らし、土郎が言っていた『しゃんぷー』なる物を手に取って髪に擦り込んでみた。一応知識としては備わっているが、実際に使うのは初めてなので少しばかり緊張する。

「おお……これはなかなか、面白いな」

「あー、小次郎も入ってきて……って、驚かせんなよ。一瞬、女と見間違えちまった」

「お前たちの楽しいげな語らいを邪魔しないよう静かに入ってきただ

けだ。それと、女と見間違えるなど悪い冗談この上ない。頼むから止めてくれ」

もふもふと泡立つ未知の感触を楽しみつつ、ランサーに返答する。とは言え、ランサーが見紛うのも仕方ないように思う。細身とは言え、鋼線を束ね上げたような筋肉が容易く見て取れるランサーと、刀を振る者としては華奢すぎるとよく言われた私では、やはり一目の差が大きいのだろう。

「そりやすまなかった。にしても、小次郎も髪が長いよな。ライダーの次くらいか？」

「そうかもしれない。髪を切るのも億劫なほど、刀を振り続けていた名残だ。まあ、それだけが伸ばし続けた理由でもないのだが……」

「当ててやろうか……女、だろ？」

久しく思い出すことが無かった遠い、遠い記憶を掘り起こす。明けても暮れても刀を握り、ひたすら振っていた頃、世話になっていた寺を度々訪れた美しい女の言葉。

「誰と交わるわけでもなく、ただ刀と向き合い続けていた私に声をかけた女が居た。刀を振るのに邪魔でな、その場で切ろうとした私に『そんな綺麗な髪を切ってしまうのですか？』と話しかけてきたのだ。まあ、つまらん話さ」

「別につまらなくもねえさ。小次郎さえ良ければ、続きを聞かせてくれ」

「まあ、構わんが。……その後も、彼女が寺を訪れるたびに少しだ

け言葉を交わした。身の上話でもなく、他愛もない話ばかり。最初に彼女にかけられた言葉が何となく頭を離れなくてな、髪を伸ばし続けることになった。そして、ある日、私に『今日がここに来れる最後だから』と言って着物一式と陣羽織、髪を束ねる紐を渡し、それから二度と会うことは無かった。戦に巻き込まれたのか、病に倒れたのか、どこぞに嫁いでいったのか、それとも売られていったのか。名も知らず、今となっては顔もよく思い出せん。ただ、彼女の声と手渡された装束が残るのみだ」

どのような顔をしていたのか詳細に思い出すことはできないが、野に咲く小さな花のように、慎ましく温かい笑顔がよく似合う美しい女だった。

「そうか……英霊になってまで残るくらいだ。あの装束、後生大事に使ったんだろ？」

「言うまでもない。こうして思い返してみれば、私は、彼女に惚れていたんだろ？」

「惚れた女からの貰い物、か……お前の話を聞かせてもらったお返しに白状すりゃ、俺が使ってる槍も、まだ見せちゃいねえがルーンの魔術も、女からの貰い物さ」

「それはまた、意外なところに共通点があつたな」

「くくつ、ちげえねえ。黙ったままだが、アーチャーは何か無いのかよ？」

「……………詳しく言う気は無いが、幾つかある」

「奇妙なこともあるものだ。ここに居る三人が皆、英霊になってまで残るほどの女からの貰い物を持っているとは……いやはや、まったく、本当に面白い」

髪や身体の泡を洗い流し、足場を上って手桶の中へと入る。代わりにランサーが出ていき、鼻歌らしきものを歌いながら洗い始めた。アーチャーと言えば、どこから取り出したのか赤い手ぬぐいを額に巻き付けている。

「アーチャー……その手ぬぐいはどこから？」

「ちよつとした裏技だ。気にしないでくれ」

「そうか。ん、お前は洗わんのか？」

「こちらは女性陣と違って人数も少ない。同時に洗い始めて時間短縮を図る必要はあるまい。それに、私はもう少し温まっていたい」

そう言うと、アーチャーは天井へと視線を向ける。会話を切り上げるために視線を逸らしたのかと思ったが違う。もっと遠く、霞んでしまった思い出を見るような瞳だった。

お風呂組（男） 終了

「それじゃあ、今夜の鍛錬を始めるとしましょうか」

「ああ。よろしく頼む」

サーヴァント全員が入浴を済ませたあと、いつものように俺も風呂に入って一日の疲れと汚れを落とし、キャスターと土蔵にきている。落ち着きを取り戻すために一人になろうとしたのだが、アーチャーの様子を見た時点でほとんど平静を取り戻していて、結局は風呂が空いたと念話が届くまで強化魔術の自主鍛錬をしていた。

「まずは現状を再確認しておくわね。今、士郎が使用可能な魔術回路は十四本に達しているわ。元から回路が備わっていて、なおかつ私がサポートしたとは言え、この短期間でこれだけの成果を出せるとは正直思っていなかった。残りは十三本だけど、こちらは少し厄介だから慎重に開いていきましよう。まあ、これだけの回路を正しく使用できるようになったなら魔力量にもかなり余裕が出るわ。そして、魔術のほうだけ……スイッチの切り替えもかなり馴染んだみたいね。強化魔術の成功率、起動から完了までの速度も順調に上がっている」

寒さを緩和するために置いてあるストーブの近くの定位置に座り、俺の正面、目線に高さを合わせるよう積み上げた箱の上にキャスターが乗っている。いつもの状態となり、キャスターの説明に耳を傾けているのだが、身振り手振りで説明をするたびに甘く優しい匂いが漂ってきてどうにも集中しきれない。

「士郎？ちゃんと集中しないと致命的な失敗をすることになるわよ」

「むっ……すまん、その……キャスターから良い匂いがして……」

僅かに眉をひそめ、ぼんやりしてしまった俺を咎めるように見つめる視線に耐えられず、集中を乱した理由を口に出してしまった。

「もう、何だか照れるからそういうことを口に出すのはお止めなさ

いな。思うだけにしておきなさい」

それを聞いた途端に少しだけ頬を赤らめ、腕を組んでそっぽを向いてしまうキャスター。その仕草が妙に可愛らしくて、思わず笑みが零れてしまう。

「ああ、分かった。この短い期間でやれることが一気に増えたとは思っていたけど、きちんと成長できてるんだな。まあ、キャスターには遠く及ばないレベルに過ぎないけどさ」

「私や、私が生きた時代の魔術師と現代の魔術師では比較するだけ無駄よ。手足を動かし、呼吸をするのと同じレベルで魔法に等しい魔術を行使しているのから。それでも、数少ない情報から私が予想する現代の平均的な魔術師に比べると、土郎の自己制御能力、回路強度は群を抜いていると言えるわ。土郎自身の頑張りもあるけれど、キャスターたる私が手伝っているんですもの。成長できないはずが無いわ」

愛弟子を自慢する師匠のように、キャスターはにつこりと笑って胸を張った。その言葉と表情に対する嬉しさが不思議と心に沁みて、ずっと抱えていた形にならない感情をようやく掴むことができた。それは、魔術を使うためのきっかけは教えてくれたが、最期まで俺が魔術を使うことに反対し続けた切嗣への思い。俺は、理想を追いかけるために魔術を学び始めたと同時に、命を救い、『衛宮士郎』という存在を与え、継ぐべき理想を見せてくれた『父親』に、切嗣に誇ってほしかったのかもしれない。

「どうしたの、土郎？泣きそうな顔をしているけど……」

「いや、何でも無いんだ。キャスターの言葉が嬉しかったただけだよ。

「さあ、あまり時間が遅くなると明日に響くし、そろそろ始めよう」

「……………分かったわ。士郎の準備さえ大丈夫なら、始めましょう。強化魔術に関してはこれ以上教えることはないわ。今まで教えたことを反復して精度を高めていくだけ。基本の魔術である以上、応用もかなり利くけれど、自分で編み出していくのが一番の早道ね。だから、次の段階に進みます。三日前、この土蔵にあった物を投影魔術で作ったかどうかを確認したのは覚えているかしら？」

「ああ、ちゃんと覚えてる」

「それじゃ士郎、投影魔術がどんなものか、貴方の知っている範囲で構わないから聞かせてちょうだい」

「えっと……………物の構造、それを成す部品を零から、魔力を使って再現する。要するに、ある物の複製品を魔術を使って作り出すってこと。俺が把握してるのはこんな感じかな」

俺が投影魔術も使えることが分かり、その時に切嗣から教えてもらった知識と、投影魔術を使う中で何となく掴んでいた感覚を合わせてキヤスターの質問に答える。

「その通り。理論上、魔力と対象とする物に対する知識があれば、どんな物でも作ることができる魔術。一応は魔術に分類されているけれど、創造に通ずる性質から魔法に近いとも言えるわ。だけど、投影魔術はとも使えば勝手が悪くて、まともに運用できた魔術師なんて私の知る限りでも片手の指に満たない」

「投影魔術で物を作り上げたとしても、それは結局のところ『魔力』の塊に過ぎない。この世界の中において、『あつてはいけない物』」

『あるはずのない物』という扱いになつてしまふのよ。その結果、間違いを正そうとする世界の修正力が働き、数分と経たずに自壊する。それに、体内から放出された魔力は徐々に拡散していくから、最終的には消滅しか残されていない。それらを防ぐためには、魔力を注ぎ続けて修正力で壊れたところ、拡散した綻びを補修するしかないわ」

「どんな物でも作り出せる万能さを持っていても、それを維持するためにひたすら力を消費しなくてはいけない。確かに、使い勝手の悪いな……それなら、同じだけの魔力を使って強化魔術を行ったほうが効率がいい」

キャスターの説明を引き継いで、俺が結論を口にする。それを聞いて頷いたところを見ると、見当違いにはならなかったようだ。

「ここで、士郎は何か気付かないかしら？」

「気付く……？ 投影で作った物はすぐに消える……あつ！！」

「そう、士郎が投影で作り上げた中身の無い失敗作。本来であればとっくに消滅していなくてはならない物が、此処に存在し続けている。魔力で編まれた紛い物が、完全な『物質』として世界の中に固着しているのよ。私の考えでは、士郎の投影魔術は『投影』でありながら本来の『投影』と一線を画している。研究対象としては垂涎物ね。広く知られるようになれば、数え切れない魔術師がその身体や脳髓を徹底的に切り刻んで調べようと群がってくると思うわ」

「とにかく、投影魔術で作り出した物は他人に見せないほうが賢明よ。さて……注意事項はこれくらいにして、どうして投影が成功しているのに中身が無いのか、原因を究明していきましょうか」

ひどく緊迫した様子で続けてきた説明も一区切りついたらしく、肩の力を抜いてキャスターは大きく息を吐く。話を聞けば聞くほど、俺がどんなに危うい立場にあったか思い知らされる。考えを整理するためだろう、少しだけ考え込む仕草を見せ、俺自身もずっと不思議に思っていた投影魔術が成功しない原因について話し始めた。

「魔術において個々人が持つ属性、相性が重要になるのは知ってるわね？合わない魔術をいくら使おうとしても決して成功することはない。このことから考えると、士郎と投影魔術の相性は問題ないわ。強化よりも先に投影を行使していたって話を聞くと、むしろ投影が最も相性が良い。恐らく、欠けているのは士郎が持っている属性との適合。今までも何度か投影を使ってきたと言ってたけど、その中で一番良いと思えた物は無かったかしら？」

その言葉で真つ先に思い付いたのは一振りの剣。強化魔術が上手くいかず、投影を使おうと集中するたびにぼんやりと脳裏に浮かんでいた黄金色の美しい西洋剣のこと。なぜ、そんな物が浮かんでくるのか理解できず、いつしか深く考えることもなくなっていた。

「良いと思った投影は無かったけど、投影をする時だけは、いつも黄金色の剣を思い浮かんでくる。曖昧にぼやけていて詳細は掴めないけど、凄く綺麗で力強い、黄金色の剣」

「剣、ね……。魔術を使う時には自己の内に深く埋没すると思うけれど、それは通常では意識しないような領域に踏み込んでいくことと同義と言えるわ。そこで浮かんでくるのが剣のイメージということとは、それが士郎にとって重要な意味を持つてると考えるのが自然ね」

「剣……剣を、投影……」

今まで考えたこともなかったこと。それは、言葉にした瞬間、意識した瞬間、がきりと歯車が噛み合うように、衛宮士郎の内へと嵌まり込んだ。

「その顔を見ると、何か掴めたみたいね？」

「……………ん、ああ、キャスターのおかげで何となく。たぶん、剣の投影なら……いけるような気がする」

成長していく息子を眺める母親のような、どこか母性を感じさせる瞳で俺を見るキャスター。そう言えば、彼女の真名であるメディアはイアソンとの間に子供をもうけていた。諸説が存在しているが、結局は子供たちを失ってしまったのだが。小さな身体でちよこちよこと動き回ってる姿を見てみると忘れがちになってしまっけど、彼女が様々な運命と策略に翻弄され続けた悲劇の王女メディアであることに変わりはないのだ。

「せっかくだし、今やってみるといっつもあるけど？使える回路の本数も増えて魔力量の余裕もある今の士郎なら、大きな失敗もしいと思うわ」

「そっだな……まだ時間もあるし、試しにやってみるか……」

投影魔術の実行をすすめるキャスターの声で頭を切り替え、ゆっくりと呼吸を重ねて回路を起動させるための意識を作り上げていく。確実に工程を進めるようにすればその感覚は身体に染み込み、自然と起動速度も速くなると説明を受けているので決して焦らない。

「すう はあ 同調、開始」

使用可能になっていく十三個の撃鉄をイメージし、順番に引き起こしていく。次にイメージするのは作り出す対象となる物。しかし、いつも浮かんでくる黄金色の剣はぼんやりと曖昧なままで難しそうだ。

「あの剣なら」

サーヴァントたちを召喚した夜に起きた騒ぎ、あの時にアーチャーが使っていた黒と白の双剣。ランサーの使っていた深紅の槍にも目を引かれたが、なぜか、あの双剣のほうが気になっていた。記憶から浮かんでくる元の大きさや詳細な形状、材質、構造。

「とう、えい 『投影』 開始」

ばちばちと火花を走らせ、脳内に浮かんだ十三の回路を魔力が疾走する。完成していた双剣のイメージに重ね合わせるように材質が複製され、構造と形状を復元し、真っ白なキャンバスに自らの色彩を描き込むように、『世界』の中へと二刀一対の剣を創り出した。

「驚いた……それ、アーチャーが持ってた武器じゃない……。英霊の装備を投影するとは思わなかったわ……」

「すまん、俺も本当にできるとは思ってた……」

驚愕しているキャスターと、両手に現れた双剣を握ったまま同じように驚愕している俺。根拠もなく『成功できる』と感じていたけど、こうして実物を目にすると思じられないといった感情が先に立つ。

「でも……」

「どうかした？」

「何か足りない。これじゃ、すぐに……」

最後まで言い終わらないうちに双剣に罅が入り、硝子が割れるような澄んだ音を立てて粉々に砕け散った。

「どういふことかしら……私が見る限り、完璧に成功していたように見えたのに……」

「『完璧』じゃないから砕け消えたんだ。形だけを再現するんじゃない、もっと根本的な部分から丁寧に構築していかないと……っ！？」

僅かに靄がかかったような頭で呟いていると、唐突に痛みが走る。キヤスターの言う通り、いきなり英霊の装備を投影したのが悪かったのか、少なからず負担がかかってしまっているらしい。すぐさま身体の内部を解析してみると、急激な魔力の流れから生じた衝撃によって僅かではあるが回路に損傷が見つかった。

「少し、顔色が悪いわね……まったく、無茶すぎよ。回路調整と開放、正しい魔力の流れの確立を済ませておいて正解だったわ……先にこんな無茶をやらかしていたら、どんな事態に陥っていたか」

「一通り確認してみたけど、大したことなかったから平気だよ。心配かけてすまん、キヤスターのおかげで助かったな」

「その様子なら、本当に大したことなかったみたいね。でも、念の

ため今夜はこれくらいで終わりにしましょう。成果としては充分よ」

じつと俺の顔を見てからキャスターは胸を撫で下ろす。投影に関して重要な感覚を掴みかけているので正直に言うつもりだったが、感覚の整理と理解をして、次に投影を使う時のイメージを構築しておくほうがより確実だろう。キャスターの影響なのか、先を見越した思考も少しだけ身に付いてきたように思う。部屋に戻るため立ち上がり、キャスターを肩に乗せた時、ふと疑問が浮かんできた。

「そう言えば、ちょっと気になってることがあるんだけど…」

「何かしら？」

「今のキャスターたちって小さくなって弱体化してるんだよね？その結果として現界に必要な魔力も極端に少なくなり、俺でも八人のサーヴァントと契約を交わしている」

「その通りよ。前に説明した時から、状況は変わってないわ」

「魔術回路が増えたことで俺からの魔力供給量も増えてるんだっから、必要以上になって余った魔力はどこに行ってるのかなと思ってさ。俺のほうに戻ってきてるような感じもなくて不思議なんだよ」

「……………あら？」

現界のために余さず全て使われているとも考えたが、それだと回路が増えるまでの説明がつかないし、俺には気付かないこともキャスターならば何か理解していると思ってるの質問。そんな俺の言葉を聞き、唇に指を当て、むーと考え込んで、神代の大魔術師は不思議そうな顔で俺を見返してきた。どうやら、キャスターの知識、思考力

をもってしても分からなかったらしい。

「全く意識していなかったけれど、確かに士郎の言う通りだわ……。士郎に召喚された時に流れ込んできていた魔力量と比べると倍以上は供給されているのに、余剰分が感じられない……。士郎のほうで絞ってはいいのね？」

「ああ。使える回路の本数と共に増加した生成量は、そのまま供給に回してる。そっちのほうが良いかなと思って、特に何も言っていなかったけどさ」

「私のほうでパスを確認してみたけど…特に異常は感じられないわね。どういうことかしら……。んー、ダメね…分からないわ…。仕方ない、警戒だけは怠らないようにしましょう」

ひとしきり考えても原因が分からないので、要観察という結論に落ち着いた。キヤスターが確認しても異常を見つけれなかったのだから俺がやっても無駄かもしれないが、あとで確認してみるか…。

「一体どうなってるんだろっな」

「問題が起きそうな感じはまったく無いけど、気になるわね」

「「うーん……」」

第七話 湯けむり桃色騒動。魔女二人、始動。終幕

衛宮さん家のちびサーヴァント騒動 よっかめ了

第七話 湯けむり桃色騒動。魔女二人、始動。（後書き）

第六話から一ヶ月。

前回は一ヶ月空いてしまいましたよね……確か。

申し訳ありませんえええん!!!!

こんなに待たせてしまって本当に申し訳ないですうううう!!!!

ようやく、ようやく完成して公開まで漕ぎつけることができました。

精魂込めて書いたので、楽しんでもらえれば幸いです。

いやー……それにしても、話が進みませんね。

それに、ただでさえも登場人物が多くててんでこ舞いなのに、赤い
うっかりと白い小悪魔まで出しちゃったという。

ふふっ、我ながら死亡フラグを乱立させまくり。

さあ……刻一刻と変化していくちびサヴァ達の心境や関係、呪詛に
も似た理想と新たな変化の中で揺れ動く土郎、動き始めた真正の魔
女二人。

これから物語はどう加速していくのか!?

私にも分かりません!!

第八話 宝石の魔女と金色の英雄王（前書き）

ちびサヴァ本編の第八話になります。

相変わらずのキャラ崩壊、性別転換なキャラ登場、さらには独自のキャラまで登場させる虎フリーダムな内容になっています。

原作とは程遠い、独自色の強い物語になっているので、それを了承していただけ

方のみ先へ進んでください。

広い心と許容の精神をもって受け入れてくださると、非常にありがたいです。

第八話 宝石の魔女と金色の英雄王

第八話 宝石の魔術師と金色の英雄王

遡ること四日前、遠坂邸

静まり返った室内に響き渡る規則的な音。代々受け継いできた古く、大きな柱時計が時を刻む音だけが、凍りついたように静謐な空気を僅かに乱していた。空虚な寂しさを湛えるこの広い屋敷で一人過ごすことに慣れてはいるが、こんな風にひどく静かな夜は少しだけ、心細くなる時がある。しかし、今夜は成功させなければならぬ大仕事を控えているので、精神安定の邪魔となる余計な感情を取り払わなければならない。

「一時はどうなるかと思っただけどね……。全ての用意が十全に整っているとは言えないけどこれ以上待っていてもしょうがない。やるしかないわね」

改めて右手の甲へと視線を落とす。そこには薄く、ほとんど治りかけた痣のようなものが浮かんでいる。それは強大な力を持つ英霊を従え、聖杯を巡る闘争へ参加するための資格にして武器、手綱である令呪の兆し。第四回聖杯戦争の参加者だった父が残した資料によると、もっとはつきり浮かび上がるはずだが、いくら見つめていても痣が濃くなる気配は無かった。

「かなり早い段階で優先的に兆しが現れるって書いてあったのに、結局、昨日の朝になるまで浮かんでこなかったし……。どこかにぶつけたのかと勘違いするくらいの薄い存在感だし……。全然話と違うのよね」

「それに、他の参加者が英霊を召喚して動き出したって情報も入ってこないし、うるさく連絡してくると思ってた綺礼も妙に静か……気になる……」

魔術というものは秘匿されることで神秘性を増し、その効力も増していく。つまり、否が応にも隠蔽全般に精通せざるを得ない魔術師が本気で動いているのなら、情報が入らないとしても不思議ではない。特に、情報量が戦いの有利さに繋がり、さらには英霊同士の優劣をも埋めることがあるのだ。敗北と死が直結する聖杯戦争に参加しようとする者ならばことさら念入りに隠蔽工作を行いつつ行動していると考えるべきだろう。

「綺礼も動きを掴み切れていないとすれば、かなり厄介な相手が揃いそうね……確実に召喚を成功させられる媒介物を入手できなかったのは痛いけど、やっぱり今夜決行にして正解か」

時計に目を向けると零時まで半時ほど。召喚陣の準備はすでに完了しているが、遠坂凜の力が最高潮に達する午前二時に達するまで再確認や最終調整を行っておくのがいいだろう。何しろ、自らの剣であり盾となる英霊を召喚する一度きりの機会だ。最強にして最良の英霊を従えるためにも失敗は許されない。

「よし、行くうー！」

ぱしつと両頬をひと叩きして立ち上がる。歩き慣れた廊下を進み、遠坂家が代々積み上げてきた魔術研鑽の歴史が保存してある地下工房へと向かった。発見されないように偽装が施された扉の前に立ち、魔術による施錠と重厚な鍵による施錠を解除する。煉瓦造りの通路に入り、扉を閉める瞬間、妙な魔力の気配を感じたような気がして

ふと立ち止まる。

「あれ……？んー、とっておきの宝石を使って召喚陣を作ったせいかしら……はあ、そう言えばこの先の金策についても考えなきゃならなかった……頭痛い」

扉が閉まる重々しい音が、頭の中を満たす赤字のもたらす頭痛を深くさせるようだった。知らぬうちに顰めていた眉に触れ、軽く揉みほぐす。深く呼吸を繰り返して頭と身体に溜まった澱を消し、改めて気を入れ直した。

「ふう……いくわよ、遠坂凜」

波のように満ちては引いていく魔力の揺らぎ。それは心臓の鼓動のようであり、絶えず揺らめき続ける命の灯火のようでもあった。揺れに合わせてゆったりと呼吸を重ねる。徐々に、徐々に波の大きさが増していき、遠坂凜の力が最高潮に達する刻限が迫っていることを知らせてきた。すう、と熱さと冷たさが入り混じった大気で肺を満たし、理を外れた存在への呼び声を紡ぎ出す。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シユ
バインオーグ」

石畳の上に何本も、何本も引かれた不思議な輝きを湛える紅線。一定の規則性を持ち、明確な目的と意志をもって引かれている紅線が形作るのは、見る者の魂を取り込んでしまうような幽玄の美しさを持つ幾何学的な模様。それは入口であり出口、道であり扉。部屋の中に染み渡った声に反応するように、高純度の魔力が大量に込めら

れた宝石を液状化させて作り上げた召喚陣がぼんやりと光を放ち始める。

「降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

召喚を成立させる呪文の一節が響くたびに『陣』が放つ光の強さが増す。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

鳴動する魔力の高まりが大気をかき乱し、室内にも関わらず風が吹く。

「
Anfang^{アニアング}

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ」

呼ぶ。必ず呼び出す。何者にも屈さず、何者をも打ち倒す私の剣にして盾を。

「誓いを此処に。我は常世総ての善となる者、我は常世総ての悪を敷く者」

極限の漆黒に包まれた場所に一筋だけ引かれた真っ白な道、そこを何処までも何処までも走り進み、果ての果てに居る何かを掴み取るために手を伸ばすイメージ。

「 汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ …… ！」

ありつたけの声を出して召喚呪文を完成させる最後の一句を叫び、伸ばした手が光の塊を掴んで胸の中へと引き寄せるイメージが完成すると同時に目を開く。見えたのは、部屋を丸ごと吹き飛ばすように荒れ狂う風、真紅に染まった地下工房、私の身体を取り巻く魔力で形成された召喚陣の力場。次の瞬間、世界そのものが消し飛んだと錯覚するような凄まじい閃光で視界が真っ白になった。

「 …… つ、成功……… した……… ? 」

何度かまばたきを繰り返す間に少しずつ色彩、風景を取り戻していく瞳。あれだけ吹き荒れていた風は完全に止み、光も嘘のように消えている。石畳の床に描いてあった召喚陣すら跡形もなくなっていた。しかし、周囲を見回しても何も変化がない。強いて言うなら、片付け忘れていた書類が散らばっているくらい。

「 失敗……… ? でも、確かに手応えは……… 」

「 すう …… すう …… すう …… 」

「 …… へっ? 」

どこからか聞こえてきた小さな呼吸音。その穏やかさ、規則正しさから察するに寝息と考えて間違いはないだろう。ふと、胸に当てたままの両手から自分のものとは違う温もりが伝わってくることに気付いた。どうやら、無意識のうちに脳裏に浮かんだイメージ通りに身体を動かしていたらしい。ゆっくりと視線を落とし、両手の中を見ると

「んっ、む……朝か？ここはどこだ？ずいぶんと貧相で陰気な場所だが……ん？貴様は誰だ？」

「……………」

「何を呆けている。我が^{おれ}が問い掛けているのだから、早く答えんか」

光を吸い込み、何倍にも増幅して放つ深く鮮やかな本物の黄金色をした長い髪。何か特別なこだわりでもあるのか、前髪を立ちあげて後ろへと流している。理想的な美しく小さな卵型の顔、傷一つない絹のような肌、淡い桃色の唇と高く通った鼻筋、長く豊かな睫毛に彩られた大きな紅玉の瞳。素晴らしい職人が生涯をかけて作り上げた極上の人形すら霞んでしまうような絶世の美少女が、私の両手の上にちょこんと座り、こちらを不満気に見つめている。

「……………貴女は、英霊……よね？」

「ようやく口を開いたと思えば質問を返してくるとは……瞶がなっていないようだ。まったく……仕方がない、我は確かに英霊だ。英雄王ギルガメッシュ、神すら捻じ伏せ、全てに君臨する者の名だ」
呆然とするあまり質問に質問を返してしまった私の言動が気に入らなかつたのだらう、小さな美少女は整った眉をしかめ溜め息を吐く。そうして、さらに私を混乱に突き落とすことを言い放った。いつそ、卒倒でもしてやろうか……。

「……………それで、もう一度確認するけど、貴女は英霊に違い

ないのね？」

遠坂の魔術の歴史が詰め込まれた地下工房を『薄暗くて辛気臭い』
と一言で切り捨て、私にもっと上等な場所に連れていくよう偉そう
にのたまった手乗りサイズの美少女。事態が飲み込めずに呆然とし
ていた私は指図されるままに居間へと連れていき、ソファに置いた
一番上等なクッションの上に手乗り美少女を降ろし、そこでようや
く我に返ったのだった。

「確かに英霊だ。何なら、私の財宝をもつてこの家を吹き飛ばし、
証明としても一向に構わん」

ふかふかのクッションが気に入ったのだろう。満足そうに笑いなが
ら割と素直に答えてきた。しかし、聖杯戦争で英霊を召喚する時
は全ての力、能力が完全再現されるはず。このように手乗りサイズ、
感じる力は上等とはいえ、かなり強めの使い魔と言える程度とい
うのはあまりにもおかしい。おまけにギルガメッシュと言えば、古代
メソポタミア、シュメール初期王朝の時代にウルクを統べ、世界に
散らばっていたあらゆる財宝を蒐集し、その比類するもの無き力か
ら『人類最古の英雄王』として数々の神話に名を残すとしてもない
英雄。

「それが女の子……しかも手乗りサイズ……私が悪いの！？知らない
うちに大ポカやらかしたの！？」

「ぎゃーぎゃー騒ぐな。女になろうが、小さくなるのが我が英雄王
であることに変わりはない。おたおた騒ぎ惑うのは有象無象のする
こと、我を召喚した者ならば相応の振る舞いをしろ」

「自分の異変なのに、ずいぶんな落ち着きようね……」

「慌てたところで解決するとも思えん。まあ……多少、不便ではあるだろうがな。それよりも貴様、我に名を聞いておいて自分は名乗らんとはどういう見だ？」

さすがと言うべきか、大雑把というべきか、自分が手乗りサイズに小さくなっていることや本来の性別と違っていることを全く意に介していない。それとも、現在の状況に関して

多少なりとも情報を持っていると考えるべきか。あれこれと考えているうちに段々と険悪な表情へと変わってきたので、改めて自己紹介をしておく。

「そうね。確かに、自分が名乗る前に名前を聞くのは礼儀に反していたわ。私の名前は遠坂凜。ここ、冬木市の管理者である遠坂家の現当主よ。そして、聖杯戦争に参加すべく貴女を召喚したマスター。令呪もここにあるわ」

「ふむ……我に対して臆すことなく、自らの過ちも受け入れるか。面白い……見たところ、稀有な資質の持ち主のようでもある。良からう、遠坂凜、お前を我のマスターとして認める」

手乗りサイズの美少女……ギルガメッシュは物の良し悪しを鑑定するよに目を細めながら私を眺め、僅かに口端を歪めて笑う。気障つたらしく、嫌悪感すら与えかねない笑い方だが、彼女の笑みは凄絶なまでに艶めかしく、ざわざわと背筋に震えが走ってしまった。

「それじゃ、自己紹介も済んだことだし、現在の状況について分かっている限りの情報を整理しましょうか」

「面倒だ。我は眠い」

「……………重要なことだから、協力してくれないかしら……………」

「我はお前……………いや、凜をマスターと認めたが、私の行動を妨げることまで許した覚えはない。早く寢床の用意をせん……………ふあ、あふ……………せんか」

切り替えた気分を一撃で叩き壊す言葉が放たれ、それをきっかけに今までの偉そうな言動の数々が思い出され、怒りが急激に充填され、臨界点を突破する寸前、小さく可愛らしいあくびで全てが霧散してしまった。言葉を続けてごまかそうとしたらしいが、いささか無理がある。真っ白な頬は薄紅色に染まり、内心で渦巻いているだろう恥ずかしさを如実に伝えてくる。仕方がない、情報の整理や事態の把握は私だけで行うとしよう。

「分かったわ。ここだと冷えるから、私の部屋に行きましょう。そのクッションと身体にかける物があれば良いでしょ？」

「む……………我が愛用した寢台には遠く及ばんが、まあ、良しとする
あとで色々と言句を言われるのも頭にくるし、厚手で上等なハンカチを何枚か重ねて使わせれば問題ないだろう。生意気で偉そうで、癩に障るサーヴァントだと思っていたのに、先ほどの可愛い仕草は反則だ。」

「……………何だっというのよ、この状況……………」

すでに目の開き具合が半分ほどになり、クッションの上でうつらうつらと前後に揺れているギルガメッシュ。溜め息と共に、頭痛も起こってきそつだ。考えることは山ほどあるが、時間もかなり遅い。

まずは睡眠を取って万全の状態に戻してから行動を開始してもいいだろう。

『宝石の魔女と金色の英雄王 いちにちめ 了』

視界を埋め尽くす黄金色の光。それも当然。壁から床、柱、天井、あらゆる物が黄金で作られ、希少な宝石が惜しげも無くあしらわれているのだから。最高の職人たちが命じられるまま、潤沢に与えられる素晴らしい材料の数々を元に精魂込めて意匠を施した宮殿。そこにある全てがただ一人、天空にて万物を司どる神々すら圧倒し、全てを意のままにする絶対の王たる一人の男を満足させるために存在している。宮殿の中心、豪華絢爛の一語に尽きる玉座に腰かけ、男は傲岸不遜に笑う。彼の前で顔を上げる者は一人も居ない。家臣も、民草も、ただ跪いて頭を垂れるだけ。日々、世界中から都へと運び込まれる財宝の数々。比喻ではなく、世界の全ては彼のためだけに存在した。

「我が名を語り継げ、永久に刻みつける。我は英雄王、我が名はギルガメツシュ!!!」

讚美の声が轟く。だが、そこに心の底から彼を思い、案ずる者は誰一人居ない。彼もそれを知っている。王とは孤高の者であり、霸道を進む己の後ろに付き従う者はあれど、その隣を歩む者は必要ないとするのが彼の信条。万人が耐えられずに投げ出すだろう深い孤独を当然のように受け入れ、鼻で笑うその強靱な精神こそが王の証。しかし、彼は気付かない。気付くことができない。その何者をも寄せ付けぬその強さゆえ。どれほど讚えられようと、どれほど富と名声を積み上げようと、微かに積もっていく『寂しさ』という澱。

彼は、世界を手中に収めていた。

彼が持たぬ物は無く、彼に手に入れられない物も無かった。

だが、彼が持たぬ『者』がただひとつだけある。

志を共にする者、言葉を交わすだけで楽しみを共有できる者、酒を酌み交わして笑うことができる者、損得利害に関係なく力になってくれる者、一言で括ってしまえば『友人』と呼べる者が彼には居なかった。

傲慢な言葉も、傍若無人な振る舞いも、不遜な笑みも、溢れんばかりに蒐集し続ける財宝の数々も、小さな小さな孤独を感じないための鎧。

彼は、何者を寄せ付けぬ絶対の王。寂しさに気付かず、孤高のまま覇道を歩み続ける。

見慣れた天井は曖昧にぼやけていて、目を開いた拍子に溢れた涙が一筋だけ流れていった。

「名前も一致してるし……生前の記憶、の一部分を夢として見たのね……」

時計を見るといつもの起床時間よりも三十分ほど早い。涙の残滓を拭いながら一人では広すぎるベッドに置かれたクッションの上を見ると、それはもうあどけない寝顔をした小さな美少女が居る。寝て

いる間に崩れたのか、はたまた眠る時には下ろすと決めているのか、上げられていた前髪が額にかかっている。夢で見た男と一応は同一人物ということになるのだが、あまり信じられないのが正直な気持ち。しかし、眠りから覚める寸前に見た光景、寝台に戻らず玉座に座りながら眠っている男の寝顔と通じる部分があった。

「やっぱり、本人つてことか……ん、今日は寝覚めも良いし、早いけど動くとしますか」

ギルガメッシュを起こさないよう静かにベッドを出る。部屋の中はパジャマ一枚でも動ける程度には温まっているが、廊下や居間のほうは冬の朝らしい冷気が満ちていることだろう。厚手のカーディガンを羽織り、暖房を入れるために居間へと向かう。目的を果たしたあとは欠かせない日課のひとつである一杯の牛乳を飲み干し、寝ている間に浮かんだ汗や染み付いた体臭を落とすために浴室へと足を向けた。

すぐ近くで人間が動く気配がして僅かに目が覚める。その気配が遠ざかっていった後、ゆっくりと身体を起こした。視線を巡らせてみれば栄華を誇った我が宮殿とは程遠い質素な部屋。しかし、決して貧相ではなく、どれもが選り抜かれた一級品であることに違いはない。

「なかなか面白い女のところを召喚されたのだったな……」

美しいだけの女ならば数限りなく目にしてきた。しかし、『遠坂凜』と名乗った女は違う。宝石で飾り立てねば輝くこともできぬ有象無象ではなく、自身が持つ資質そのものが宝石として光り輝く稀有な

人間。さらにはその資質に驕ることなく、自らの力でどこまでも磨き抜いていけるさらに稀有な人間だ。それに感覚からの推測に過ぎないが、あの女……凜は恐らくは召喚の際に触媒を使っていない。この英雄王を触媒も使わず、闇雲に手を突っ込むような召喚で呼び寄せたのだ。

「それにこの身体……私の目と知識をもつても何が起きているか掴めんとは……久しぶりに興味をそそられる」

視線を落として身体を見てみれば、呼吸のたびにふるふると揺れる豊かな双丘があり、四肢は女特有のほっそりとした柔らかなもの。肌もキメが細かく、触れるたびに自分のものではないような感触を伝えてくる。そして当然のことだが最も如実に変化を突きつけてくるもの。幾人もの女を抱き、狂わせてきた『男』が跡形もなく消え去り、それはもう綺麗なものへと変わっている。

「まさか、気の赴くままに蹂躪し弄んできた女になる日が来るとはな。どのような姿形になったとしても英雄王たる我に変わりはないが、これはいささか変わり過ぎだろうに……」

眠る時に魔力へと還元して消しておいた鎧一式を顕現させ、身に纏う。すっかり目も覚めた。召喚された時に聖杯よりこの時代の知識は与えられているが、世界は私の所有物。実際にこの目で検分し、相応しいもの、相応しくないものを選別しなくてはなるまい。

シャワーを浴び終わり、身支度を整えてから簡単な朝食と昼食用の弁当を作る。食事を始めようとした時にふとギルガメッシュのことが気にかかった。サーヴァントに食事は必要ないはずだが、昨夜の

言動から推測する性格、性質から考えるに放置しておくのは得策ではない。いくら歴史に名を残す英雄王とは言えへりくだる気は全く無いが、私だけが黙って食事を取るのもあまり気分が良いものではない。

「一応、食べるかどうかだけ聞いておこうかな」

自室の前まで戻ってみると何やら声が聞こえてくる。どうやら目を覚ましているらしい。何となく耳を澄ませてみると

『くっ、この……たかが扉の分際で英雄王の行く手を阻むか!!このっ!ふんっ!』

どうやらドアを開けるために孤軍奮闘しているらしい。声の様子からすると、ドアノブに向けてぴよんぴよんとジャンプしているような感じだ。あの小ささでは届くはずなのだが、意地があるのか諦めようとしなない。イタズラ心がむくむくと湧き上がり、もう少し放置しておきたい欲求が浮かんできると、サーヴァントが持つ宝具や武装のことに思い至って止めることにした。手乗りサイズになっているのだから武装の威力に関しても相応に小さくなっていると考えるのが自然だ。しかし、本来の力であれば近代兵器を遙かに超える威力を秘めたものがほとんどのはず。どんなに弱まっているとしても、木製のドア一枚を破壊できないとは考えられない。癩癩を起こして家を壊されてはたまったもんじゃない。

「……はあ……ギルガメッシュ?起きてるなら入るわよ?」

「っ!?!ざっしゅ……いや、ます……むっ、凜か!ちょっと待て、我が良いと言うまでは入るんじゃない!」

「はいはい。もういいかしら？」

「いいぞ、入れ」

部屋に入ると僅かに息を乱したギルガメッシュがクッションの上で澄まし顔。からかってやりたい悪戯心が疼いてくるが、登校時間までそれほど余裕があるというわけでもないの、さつさと用件を済ませてしまおう。

「一応、あなたの分も朝ごはんを用意するつもりだけど……食べる？」

「むっ……私の舌を満足させられるだけの食事が用意できるはずもなからう。いら……」

小憎たらしい言葉を続けようとした時、きゅるるーなんて可愛い音が豪華な鎧の中から聞こえてきた。偉そうだった態度はすっかり鳴りを潜め、バツの悪そうな表情で目を泳がせている。

「確かに、あなたが満足するような豪華な食事は無いわよ。それが気に入らないなら食べなくても私は一向に構わないし、好きにすればいいわ。食べるか、食べないかを聞きに来ただけだから目的も果たしたし」

「ならば、さつさと行けばよからう！我は要らんとやっている！！」

本来の私ならとくにぶち切れて殴り飛ばしているか、何も言わずに身を翻しているだろう。しかし、不思議と腹立たしさは感じなかった。その意地を張った言葉、表情が、どこか幼い頃の私を彷彿とさせたからかもしれない。父を亡くし、母と離れ、血を分けた妹と

も関係が断たれてしまった十年前。たった一人で遠坂を背負っていた重圧、孤独の寂しさに潰されないよう、意識的に強い態度をとっていた頃の自分と。

「……分かった。それじゃ私は行くけど、気が向いたら下りてくればいいわ。ここは開けておくから」

階段を降りながら心の中で自嘲する。意識的に強い態度をとっていると云うなら、今だってそうではないか。ギルガメッシュと私は自分では気付けない深い部分が似通っているのかもしれない。慣れてしまった一人きりの食卓につき、妙に味気ない食事を始めた。

「……ん？」

カップを満たしていた牛乳を飲み干してテーブルに置いた時、視界の隅にちらりと映った小さな金色。そちらに目を向けるとソファの陰からはみ出している美しい金髪があった。思わず、笑みが浮かんでしまう。隠れているつもりなのか、自分から出ていけないのでわざと見せているのか。どちらにしる可愛いことに変わりはない。

「髪が隠れてないわよ」

そう声に出すと金髪はびくつと跳ねてからソファの陰にしっかりと引っ込んでいった。あまりに可愛いので意地悪してしまった。こほん、と咳払いをしてから改めて声を掛け直す。

「ごはん、冷めちゃうと美味しくないから早く食べて。ちゃんと食べやすいように小さく切り分けておいたから」

自分でも驚くほど優しい声が出てしまった。まるで、年の離れた小

さな妹に接するみたいに。今ではよそよそしく話すのが精一杯、姉として家族として何ひとつしてやれなかった本当の妹にも、こんな風に声をかけられたら……。

「……私も、食べていいのか……？」

少しだけ顔を覗かせ、ぼつりと零すギルガメッシュ。暗くなりかけた思考を元に戻し、返事をする。

「当たり前じゃない、これはあなたの分なんだから。来るのがちよつと遅くて私はあらかた食べちゃったけど、まだ残ってるし一緒に食べましょ」

「う、む……どつ、同席を許してやろう！我と食卓を共にできる榮譽をしっかりと噛み締めるのだな！」

開き直ったように偉そうな言動を復活させ、とことこ歩いてくる小さく可愛らしい英雄王。テーブルの上に乗せるため、しゃがんで手を差し出す。どんなに暖房をつけても寒々しさが消えることがなかった部屋が、今朝はほっこりと温かい。

「まったく……ちよつと可愛げあるなと思えば……！」

『常に優雅たれ』という遠坂家の家訓とは程遠い、荒れる感情をそのまま吐露する独り言。学校へと向かう通学路にはまだ人氣がなく、そのおかげでこうして独り言を零せているわけのだが。原因はここにいない美少女英雄王。サーヴァントがちびっこい姿になり、本来の性別まで変化という正常な聖杯戦争とは言えない異常事態のた

め、私は可能な限り一緒にいることを提案したのだ。

「当然の要求だっていうのに……！！！」

分かりやすく、丁寧に、説得力を失わないように説明した。しかし、ギルガメッシュの返答はたった一言。『面倒だからイヤ』とぼつさり切り捨てられたのだ。頬を少しだけ膨らませ、もくもくと小さな口を動かしてごはんを食べる姿を思い出し、怒りを収めようとした。しかし、気付けば、笑顔と共にありつたあの魔力を込めてガンドをぶちかましていた。そのまま家を出て現在に至る。

「勢いで出てきちゃったけど大丈夫かしら……まあ、パスはしつかり繋がってるし何かあれば分かるか。それに、できれば使いたくないけど令呪って切り札もあるし」

学校が近付き、徐々に人も多くなってくる。音量は抑えているので聞かれる心配は少ないがリスクは可能な限り下げておく必要があるし、遠坂凜が独り言など学校の人間に見られるわけにはいかない。気分を切り替えていると、同様の制服に身を包んだ少年少女の中でも目立つ赤色の髪が視界に入る。この穂群原学園でも割と名の知られた生徒。あらゆる問題に首を突っ込み、一切の例外なく困った人間に手を差し伸べる風変わりな少年。彼の名前は衛宮士郎。

「……………」

同年代の少年たちに比べると少しだけ小柄な体躯、しかし比較にならないほど強い印象を与える背中からいつもと僅かに違う気配というか、雰囲気を感じて立ち止まってしまふ。しかし、それは掴む間もなく消えてしまい、遠ざかっていく背中はいつもの通りだった。

「まったく！我に対してあのような暴挙を働きおつて！！我が財によつて死罪に処すのが本来であるものの、食事を用意した功績に免じて許してやったのだ！」

恐らくは赤くなっているだろう額を押さえ、クッションの上でマスターである凜に向けて悪態を吐く。同行しろと言われたので断つたらいきなり魔術の一撃。身に付けている鎧を始めとした各種防御用宝具の効果でほとんど無効化できたものの、やはり本来の状態に比べると弱体化が甚だしい。まだ、ひりひりとした痛みが取れない。

「ああ、腹が立つ！！このような陰気臭いところに居ても埒が明かん！出掛ける！我は私の望むまま、出掛けるぞ！『王の財宝』！！」

鍵剣を持ち、ぱちりと指を鳴らす。背後の空間に歪みが生じ、生前に蒐集した膨大な財宝が保存されているバビロニアの宝物庫と繋がった。そこから引き出す財宝は三つ。突き刺した場所を自由にすり抜けられるようになる宝剣、持ち主の意に沿って空を飛ぶ魔法の絨毯、持ち主の姿を隠す強力な認識阻害効果を持った外套。

「ふん、たかだか扉に錠をかけた程度で私の行動を妨げようなど。我が財を使えば容易く突破できるわ、たわけ者め！！」

外套を纏い、扉に剣を突き立ててすり抜け、外へ出ると同時に絨毯に乗る。ふわりと舞い上がって行き先も決めずに飛び始めた。

「む……宝物庫の財宝も私のサイズに合わせて縮んでいるのか……まあ、いい。元のサイズで出てこられても困るしな」

「雑多な物が溢れるばかりでくだらん世界に成り下がったものだ……
…我が愛でるべき価値あるものなど一握りもない。しかし……いや、
それこそ、くだらん感傷だ……」

小さな子供が母親と楽しげに話し、老婆が数人寄り集まって何事か話す。老若男女が入り混じって暮らす街並み。道行く人間が浮かべる笑顔を見ていると、胸のどこかを微かに痛みが走り抜けていった。バビロニアの民草は、雑種と呼んで省みることがなかった人間たちは、あのような笑みを浮かべることがあつただらうかと。

「にゃー」

「む？なんだ、貴様は？」

「にゃう」

いつの間に近付いていたのか、公園の一角でふよふよと滞空させていた絨毯の近くに猫。身体の大きさから見るに、成年になりたてと叫ぶところか。そこまで考えたところでふと認識障害の外套宝具を纏っていることに思い至る。これは人間は元より、生物全般に効果があるはずだが。

「見えて、いるのか？」

「うにゃん」

「私の財が獣程度に見破られただと……もはや、他の人間どもの目にも見えていたのかっ!？」

「にゃう、にゃう」

「ん？見えておらん？そう言えば、我に気付いた者など皆無だった……ということは、貴様が特別ということになるな。ふむ……獣にしておくには勿体ない」

話しかけると返事をするように鳴き、独り言に対してもしつかりと反応する。ずいぶんと賢い猫のようだ。しかし、その毛並みは薄く汚れており、弱々しさや愛らしさよりも賢さ、不敵さをうかがわせる面構えから見ても飼い猫ではない。うまれつき飛び抜けて感覚が鋭いのだろうが、それにしても宝具の効果すら見破ってみせたのは稀有な資質だ。

「にゃ、にゃー」

「付いてこいと言っているのか？」

「にゃん」

一通り街を見て歩き、すっかり退屈を持って余っていたので戯れに付いていく。木立ちを抜け、薄暗い路地裏を抜け、進んでいくと突然視界が開けた。

「ほう……これが、貴様の財というわけか」

そこに広がっているのは茜色に染まり、全てが極上の紅玉で作られていると錯覚するような街並み。落陽が水平線へと消える寸前、最後に輝き放つ光が生み出した光景だった。雑多な物に満ち溢れ、感情を逆撫でするくだらない虚栄の塊だが、この瞬間だけは愛でるだ

けの価値がある。

「ふん、『刹那の美』を有する財……か」

『ねえ、ギルガメッシュ。君はその一瞬しか美しさ、価値を有することができないものをくだらない感傷だと笑ったよね。だけど、僕は、そんな刹那の美がとても愛おしい。誰の意思にも縛られず、自然の流れの中で放つ一瞬の輝き……それは、永遠に失われない物とは違った尊さを持っていると僕は思う』

ふと脳裏をよぎった記憶。今と同じように鮮やかな紅色を纏った都を眺め、寂しげな笑みを浮かべていた唯一の、友人と呼ぶに値する者が口にした言葉。人間の願いと神の意思によって、目的を果たすためだけに泥から造り出された半人半獣の神造人間、エルキドウがぽつりと零した思い。

「貴様、名は？」

「……にゃ」

目を伏せ、少しだけ間を置いてから鳴き声を出す。予想していた通り、名も無き一匹の野良猫だった。

「ならば、我が……英雄王ギルガメッシュが貴様に名を付けてやる。我が隣を歩むことを唯一許した者、エルキドウの名から取って『エル』と名乗るがいい」

「にゃっ、にゃうー!」

「そう喜ぶな。あくまで私の気まぐれ、戯れにすぎん。私の目を楽

しませるだけの財を見せた褒美と言えなくもないが……。少し、疲れた。帰って寝るとするか」

絨毯の遠坂の家に向けて動かす。ちらりと背後を見ると、自分の寝床にでも帰るつもりなのか別の方向に歩き出そうとしているエル。名残惜しそうな横顔を見て、ふと思いついた言葉を放つ。

「エル、どこに行こうというのだ？ 貴様は我が友の名を冠している。つまりは、我と共にいるのが当然。……その、あれだ……共に、帰るぞ」

「にゃっ！？ にゃー？」

「つべこべ言わずに付いてくればいい。我が許したのだ、英雄王たる私の許しの他に必要なものなど無い」

「……にゃー！」

茜色に染まる道を並んで進んでいく。身の内では僅かに疼いていた小さな痛みが、いつのまにか消えていた。代わりに生まれる小さな温かさ。遠い昔、エルキドウと酒を酌み交わしながら話していた時に感じた温かさと少しだけ似ている気がした。

「ただいまつと。さて、考えておいた今後の予定を話さないかね……ギルのことだから簡単には首を縦に振らないでしょうけど」

玄関を通り、応接間へと向かう。名前が長いので、ちょっと勝手かなと思っただが名前を略してしまうことは昼休みに決定済み。

「ギル、話があるんだけど……って、あれ？まさか……！！」

予想に反して豪華な金色の姿はそこに無く、がらんとした空間が広がっているだけ。そこで勝手に出歩いている可能性によろやく思い至った。小さな身体と弱体化している力なのでおかしな真似はできないだろうと思いついていたけど甘い見通しだった。

「ちっ……パスを辿って居場所の目星を……へっ？」

ギルとの間に繋がっているパスを辿ってみると反応はこの家の二階、私の部屋にあった。慌てて見に行ってみると、部屋に置きっぱなしだったお気に入りクッションの上ですやすやと眠るギルが居た。よほど深く寝入っているのだろう、あれだけ大きな足音を立てたというのに目覚める気配すらない。

「はあ……驚かせないでよね……でも、大人しくしてたみたいで」

「にゃー」

「うん、にゃー……にゃー……？」

「にゃうっ！！」

言葉の途中で聞こえた愛らしい鳴き声に驚愕して叫んでしまう。すると、まるで咎めるように鋭く、抑えた鳴き声を出されてしまった。床に視線を落とすと、まるでギルに仕える忠実な臣下のようにおすわりをしたまま動かない猫が居た。

「なんで猫が私の部屋に……」

遠坂の屋敷には侵入者を防ぎ、徹底的に撃退するための結界が何重にも施されており、傍から見ると何も分からないが要塞と化している。野良猫、野良犬、野生のカラス、人間も寄せ付けることがなく、幽霊屋敷とまで呼ばれることもあるくらいだ。遠坂が脈々と伝えてきた魔術知識の全てが収められているから当然の警備ではあるのだが。

「あれ……ちゃんと鍵はかけていったわよね……」

「エルは我が連れてきたのだ。今日から共に過ごすことにした」

「あんた外に出たの！？どうやって!？」

「我はありとあらゆる宝具の原典を所有している。宝具は攻撃に使う武具、護りに使う防具だけではなく、ここに張り巡らされている結界を無効化し、すり抜けることに役立つ宝具も揃っている。ん？何を呆けた顔をしているのだ？」

さすがに目が覚めたのか、こしこしと目を擦りながらギルが偉そうな口調で説明する。その姿は一糸纏わぬ素っ裸。小さいのに、小さいくせに、たぶんだぶんと揺れる豊かな胸。ウエスト周りは繊細そのもの。美しいのに色っぽさを押し固めたような身体つき。頭の中で自分と同じ縮尺に変換し、勝手に自滅してしまった。

「……なんで、裸なのよ……」

「貴様は鎧を着たまま眠るといふのか？」

「じゃ」

「うぐっ……」

「端的に言わせてもらっわ。サーヴァントの大きさや力が大幅に変化し、本来の性別まで変わってしまった、聖杯戦争が始まってもおかしくないこの時期に召喚が成功した気配も、マスターが動いているという情報も一切入ってこない。現状を把握して、今後どう動くか決めるためにも情報を集めたいの。一応、情報を握っていそうな奴も知ってるけど、そいつに頼るのはあまりにもリスクが大きいから避けたい。だから、私だけで独自に動く。まずは、夜の街を巡回することにしたから」

「ほう……まあ、せいぜい気張るがいい。ん？エル、ずっとそこに居たのか？」

「じゃっ」

「たわけ、お前も眠っておけと言ったではないか。我の寝首をかける者などおらん。心配せずに眠れ」

「じゃー、じゃっ」

「他人事みたいに流してんじゃないわよ！！小さくなっててもあんたは私のサーヴァントに変わりないの！一緒に行くのよ！！」

「騒がしいぞ、雑種。エルが眠れんたろうが。貴様が口にした理由では、我は動く気にならん。寝直すから黙っているか部屋から出て

行け」

私の言葉を完全に無視して何となく成立しているらしい猫との意思疎通を行い、もそもそと布団代わりの上等なハンカチの中へと潜り始める英雄王。煮えたぎる怒りを必死に抑え、動く気にならない理由を問う。

「……私が提示した理由では説得力が無いってこと？」

「そうだ。当事者である我ですら、どうしてこのような姿になっているのか分からん。だというのに、原因に繋がる宛てもない貴様がぼんやり歩き回った程度で何が分かる？それに、英雄王たる我がこのような有り様で召喚されているのだ。他の雑種が英霊の召喚に成功しているとしても、同じような状態だろう。魔術師などという雑種の中でも一際つまらん雑種が頼るべきサーヴァントがそのような状態になっていれば、陣地に引きこもって息を潜めてこそこそ動き回るのが関の山。貴様のように情報を集めようと息巻いて、阿呆のように外へと突っ込んでいくわけではない」

「まあ……地虫のようにひっそりと這い回る輩よりも、お前の思い切りの良さは評価に値するがな。私の言葉は以上だ。あとは好きにし……へぐう！！？」

正論だった。それはもう、ぐうの音も出ないくらいに強力な正論。私が腹を立てるなどお門違いも甚だしい、説得力に満ち満ちた正論しかし、『正論』というものは例外なく感情を逆撫でするものだ。それが『こんなことも分らないの？』と言わんばかり……否、『こんなことも分らないお前に説明してやるから感謝しろ』という響きで口にされたらどうだろう。結論は簡単だ。これ以上ないくらいに、ブチ切れる。寝ている時は鎧を付けない。つまりは、身を護

る宝具も全て消しているか、必要最低限しか残していない。ならば、全力で練り上げた魔力を丁寧、丁寧に圧縮してぶちかますガンドならば、極限まで薄くなっているギルの護りを容易く突破できる。結果は上々、会心の一撃を顔面に受け、ギルは完全に沈黙した。

「まあ……私だけなら、万が一怪しまれても誤魔化しようがあるか。ギルと一緒に居たら一発で戦争参加者だって分かつちゃうけど。今夜は……私だけで、ざっと歩いてみますか」

『宝石の魔女と金色の英雄王 ふつかめ 了』

「うーん……妙な視線とか気配を感じるような……」

「おっ？あんたが深刻な顔を見せるなんて、明日は嵐になるね」

「ちょっととした表情の変化も読み取れるくらい、普段から私を気にかけてくれているのね。美綴さんに同性愛の気があったなんて思わなかったわ。付き合い方、少し考えようかしら」

「そうくるとは思わなかった。あいにくだけど、女同士のラブロマンスよりも男女の恋煩いの話が好みなんだ。これでも青春真っ盛りの健康な女だからさ」

挨拶代わりに軽口の応酬。ぼんやりと窓の外へと向けていた視線を教室に戻すと、含み笑いの表情すらからりとした明るい印象を与える声の主が立っていた。弓道部の部長にして様々な武道をたしなむ女傑、そして遠坂凜が猫を被らずに接することができる友人であり好敵手、美綴綾子だ。

「それで？何か用があつたんじゃないの？」

「あたしが遠坂に話しかける時は必ず用事があるってわけじゃないよ。単純に、悩んでるっぽい好敵手が気になつて話しかけただけ」

内心を隠す術は人並み以上に心得ているつもりだったが油断してしまつたらしい。遠坂の血筋に宿る呪いにも似た宿命、うっかりのせいで。緊張感を持つていなくてはならないと分かっているのに、どうにも気が抜けてしまう。危機的な空気が一切感じられず、ギルが私の言いつけを無視してエルと共にふらふらと動き回ってるせいかもしれない。どれだけ言つても無駄だし、対策は講じているようなので好きにさせておこう

「……はあ……」

「あたしの前で無防備に溜め息を吐くつてことは、相当参ってるみたいだね。弱り目を突いて潰すのは戦の常道だけど、仕方ない。今日は見逃してやろう」

「その温情、ありがたくて泣いてしまひそうよ。それより、部活に行く時間じゃないの？部長がこんなところで油を売っていると示しが付かないと思うけど」

「ん、それもそうだ。今日も見に来ないのか？」

「遠慮するわ。うるさいのに絡まれてしまつたら手が足が出てしまひそうだから。用事もあるしね」

「そっか。じゃ、あたしは行くよ」

ひらひらと手を振り、歩き去る綾子。歩き方ひとつを取っても好感の持てる真っ直ぐさ。魔術師として生きる道を選んだことに後悔はないが、綾子のように『普通』であることを精一杯楽しむ生き方が眩しく、宝石のように見える時があることも事実。だからこそ、心の贅肉、無駄と分かってても彼女と友人になっってしまったのだろう。

「さて、私も動こうかしら」

授業中、休み時間、昼休みに感じた妙な気配や視線。気のせいかもしれないけど、今はどんなに小さくても手掛かりが欲しい。念のため校舎をひと回りしてから帰るとしよう。

「うーん……やっぱり気のせいだった……？」

結局、なんの手掛かりも得られずに帰宅の途へ。結界を解除し、玄関の鍵を開け、中に入ってからもう一度施錠する。昼間はあちこちと動き回っていたようだが、パスを通して反応を探るとギルガメッシュは帰ってきていた。当然、エルも一緒だろう。

「おっ？凜さん、おかえりなさい。ギルさん、凜さんが帰ってきたっすー」

「はっ？」

見知らぬ女性が屋敷の中に居た。それも、全裸に厚手の毛布を纏っただけの女性が。茶色、白、黒が入り混じった不思議な色合いの髪。その長さは肩口の辺りで、顔つきは非常に整っている。可愛らしさ

凜、帰宅の数時間前

「湯浴みがしたい。エル、お前もそう思わんか？」

「じゃー」

動き回れば相応に汚れが付着する。汚れてしまうと清めたくなるのは当然の欲求。しかし、そのためには何とかしなければならぬ問題があるのも事実だった。

「小さくなるうと女になるうと我は我、英雄王ギルガメッシュというのは変わらん。だが、圧倒的に不便になっていることはいい加減に認めるとするか」

「じゃー」

「この姿では満足に湯浴みもできんとは……ふむ……ん、これは使えるな」

「じゃ？」

クッションの近くに座り、こちらを見上げているエルを見て名案が浮かぶ。宝具のひとつたる『王の財宝』を起動させ、中に収められている宝具の中から目的を果たすための物を選び出す。空間の歪みから出てきたのは水晶を加工して作られた小瓶。

「エル、お前と出会った時に『獣にしておくには勿体ない』と言ったことを覚えているか？」

「じゃ」

「これは幾つもの派生品が存在する変化の霊薬、その原典となる薬だ。人が獣に、獣が人に……また、人が別人に変わるために使われてきた。これを飲んで人へと変化してみる。ああ、心配せずとも元に戻ることは容易い。変化する時は一粒飲んで『変わりたい』と願う、元に戻る時は一粒飲んで『戻りたい』と願うだけでいい。どうだ？」

「にゃう」

「よし、では口を開ける」

「にゃー……にゃっ!？」

素直に口を開けたエルに薬を一粒与える。小瓶の蓋をしっかりと閉め、宝物庫へと戻しておいた。効果はすぐに現れ、エルの身体が淡い光に包まれるとぽん!という気の抜けた音と共に溢れた煙で視界が閉ざされる。それが薄れると、驚いた顔のまましゃがみこむ全裸の女が居た。

「成功したようだな」

「にゃ、あつ、あー……ぎ、るさま?お、ん……んんー、ちゃんと、はなせ、て?」

「今は違和感が先に立っているだろうが、すぐに慣れる。しかし、想像していた容姿とはずいぶん違う。なかなか面白い」

「どこか、おかしい、っすか?」

「いや。男ならば百人が百人、目を奪われるだろう。女ならば嫉妬するだろうな。それだけ美しい女になっている」

「にゃ、っと……ん、おお……ぎるさま、たてたっす！」

尾てい骨の辺りから生えている尻尾をゆらゆらと動かしながら、おそろおそろ立ち上がる。未知の感覚、初めての視点に感動しているのだろう、満面の笑みを浮かべて喜ぶ。話し方も慣れてきたらしい。この霊薬を使うのは初めてだが、さすが原典たる我の財。効果は抜群のようだ。

「では、行くぞ。風呂場の場所はすでに把握している。それと、『様』は付けずとも良い。そう呼ぶのは我に跪く者どもだけ、お前は違うのだからな」

「ん、んー……じゃ、ぎるさんで」

「うむ。我が誘導してやるから、その通りに進め」

風呂場自体に入るのは初めてだが、きちんと整理整頓されているので必要な物を探すのは容易だった。身体を拭くためのタオルなどをエルに指示して準備させ、浴室の中に入る。

「ほう、手狭ではあるがそれなりに良い趣味をしている」

「ひろいつす。なんか、いいにおいもする」

猫は水嫌いなものだがエルはそうでもないらしい。人化の影響たる

うか。指示をよく聞いて、あっという間にシャワーの使い方を覚え、シャンプーなどもあっさりで見つけ出す。鏡の前にちょうど良い台が備え付けられていたのでそこに陣取り、エルの手を借りながら髪や身体を清めていった。

「我が、他人の手を借りる時がくるとはな……む、エル、シャワーを向ける。髪を流す」

「じゃ。このくらいで、いい？」

「うむ」

元の姿だった時とは無縁の長髪を洗うのはいささか手間だったが、そう悪くもない。洗うごとに艶や輝きを取り戻していく過程は見ていて気分が良い。一通り終わったので次はエルの番となる。

「まずは髪を濡らすんだが、耳に水が入らんように注意しろ。それから、水が飛び散って後始末が面倒になるから頭を振ったりするなよ」

「じゃ」

おっかなびつくりやるのかと思いきや、ばっしゃばっしゃと豪快に湯をかぶる。本当に元は猫なのかと疑いたくなるが、素直な上、賢いので手がかからずに済んだ。ずいぶんと汚れていたようで身体を滑り落ちる湯がうっすらと黒い。

「全体が流せたら、次は洗うんだが……量は多めのほうがいいだろう。ああ、違う。シャンプーはこっちのボトルだ。泡が目に入ると沁みて痛いぞ、ちゃんと閉じておけ」

「にやつ、にゃー、にゃん、にゃ」

指示通りに動きつつ、鼻歌らしきものを歌いつつ、楽しそうに髪を洗っている。その姿を見てみるとエルキドウのことが思い出された。森の中で動物と暮らし、人間らしい部分や知識がほとんど無かった奴が少しずつ色々なことを覚え、初めて我だけが使える大浴場に連れて行った時と似ている。エルと違い、とんでもない馬鹿力ではしやぎ回った果てに大浴場が半壊させたのだが。

「結局、殴り合いの喧嘩になったがあれは痛快だった」

「にゃ？」

「ああ、ただ一人の友とこうして風呂に入ったことを思い出したのだ。お前と違って、行儀良くはなかったが」

「ちゃんと、やれてるっすか？」

「うむ。私の予想よりも順調だ。褒めてやろう」

「えへへ、ぎるさんにほめられると、うれしい」

泡が入らないように目を閉じたまま、エルがにっこりと笑う。気恥ずかしくなってしまったので視線を逸らすと、湯気でうつすらと曇った鏡面に映る穏やかに笑みを浮かべた女の顔が目に入った。

「おかしなものだ……まったく、我らしくもない」

ぺたりと鏡に手を付け、常に浮かんでいたはずの森羅万象を睥睨する笑みを取り戻そうとする。しかし、鏡の中の女が浮かべるのは、

どこか寂しげな憂いのある笑み。掴みどころのない感情が苛立たしくなつて鏡を殴りつけようとした時

「ぎるさん、からだ、ひえちゃうっす」

ざあつと身体にかけられる温かなお湯。振り返れば、心配そうに表情を曇らせたエルが居た。指示がなくなるとも自分の判断で洗えたらしい。髪も、身体も比較にならないほど綺麗になっていた。

「む……そう、だな。湯船のほうはどうなってる？」

「おしえられたくらいに、たまつてたから、みずも、とめたっす」

「ん、では温まるとするか」

「
というわけだ」

「わけっす」

「あなたの宝具……『王の財宝』って言つたっけ。綾子……私の友人が言つてた猫型ロボットを思い出すわ」

面倒くさがるギルガメッシュを何とか説き伏せて話を聞き出し、ようやく状況を把握できた。お風呂から上がった後も会話を続け、人化したエルの会話能力はすっかり安定したらしい。妙な語尾は元々ということだ。

「ギルさんが服も見つけてくれたっすけど、どれも合わなかったの

で毛布を借りてたつす」

「分かったわ……確か、お手伝いさんとか母の服が幾らか残ってたはず。それなら着れると思うわ。下着は……仕方ない、明日、新都まで買いに行つてくるわ。その耳や尻尾じゃ迂闊に外も出歩けないでしょ」

猫に戻せというのは簡単だが、どこからどう見ても仲睦まじく過ごしている。そんな二人に野暮なことを言ってしまうほど鈍くはないつもりだ。急な出費となるので懐は痛むが、悪い子ではなさそうだし、一緒に過ごすのも悪くはないだろう。

「ふむ……買い物をするならば、金が必要だろう。出掛けている時にこの宝くじを拾った。幾らか当たっているだろうから確認してみろ」

「どうということ？」

「私の保有するスキルには黄金律が含まれている。要するに我が関われれば、常に大金や価値ある財宝がついてまわるということだ」

そう言つて空間の歪みから取り出したのは一枚の宝くじ。その話が本当ならば、ギルガメッシュは遠坂凜……いや、遠坂家の魔術にとつて最高に相性がいいサーヴァントになる。ちよつと当選番号が発表されるのは今日のようなだ。半信半疑で確認すると

「嘘でしょ……当たってる……」

しかも福沢諭吉さんが百人分。性格には難があるものの、私は本当にとんでもないサーヴァントを召喚してしまったらしい。

「我に金を運用させればもっと効率が……」

「……ギルガメッシュ」

「うん？何だ？」

「私に、協力、してくれないかしら……？」

「よっ、よかるっ」

「ギルさん……こっ、こわいっす……」

一言ずつ区切って、丁寧に頼んだはずなのに恫喝しているような響きになってしまふのはなぜだろうか。あれだけ尊大、傲岸不遜だったギルガメッシュの表情が心なし引き攣っているような気がする。エルの表情もうつすらと恐怖に染まり、かたかたと震えていた。

『宝石の魔女と金色の英雄王 みっかめ 了』

第七話冒頭に続く。

「できるだけ着やすい下着を選んだけど……どうかしら？」

「うー……なんか落ち着かないっす。でも、尻尾が出せるようになってるのはすごいっす」

「落ち着かないのは仕方ないわ。じきに慣れると思うから我慢して。」

別にすぐくはないわよ……穴を開けたただけだもの」

ギルガメツシユから提供された資金を使って服や下着を調達し、簡単な細工を施して尻尾を出せるようにしたのだ。外行きの服は丈の長い物を中心にし、できるだけ尻尾が目立たないような組み合わせにしている。服に合わせ、猫耳を隠すための帽子も購入済み。

「ギルさんは？」

「あなたの衣服を用意する代わりに、ちょっと協力してもらってらわ。等価交換ってやつね」

「とーかこーかん？」

「赤雑種……我に、いつまでこんなことをやらせるつもりだ？」

不機嫌そのものといった表情でギルガメツシユがゆらりと現れた。ここ最近、赤字続きだった遠坂家の財政状態をたった一晩で立て直し、あつという間に黒字へと引つ張り上げ、分刻みで財産を増加させている美しき金ぴか英雄王。

「この金ぴか！赤雑種って誰のことよ！！」

「貴様以外に居るか、たわけ！！そっちこそ我を金ぴか呼ばわりとは何事だ！！」

「私があれば苦労してた財産運用をたった一日で倍々ゲームにして！たまたま拾った宝くじが百万円ってふざげんじゃないわよ！！あんたなんて金ぴかで充分！！」

「凜さんもギルさんもうるさいっすー……はあ、お腹へったっすね」

『宝石の魔女と金色の英雄王 よっかめ 了』

Interlude

『衛宮士郎とちびサヴァズ いつかめ』

「この一撃、手向けと受け取れッ！！！！」

僅か数歩で最高速度まで加速し、その勢いそのまま跳躍、ランサーは全身のバネを存分に使って手に持っていた『武器』を投擲する。その一撃は大気を抉り抜き、セイバーの額に向かって直進する。

「素晴らしい一撃だ、ランサー！しかし、私には通用しない！！」

持って生まれた類い稀なる第六感。戦いを通じてその『直感』をさらに磨き上げ、未来予知に匹敵する域へと到達させたセイバー独自の保有スキル。その前ではいかに強力かつ正確な攻撃も意味を成さない。視認することすら不可能なランサーの一撃を紙一重で見切り、避ける。

「よく避けた、と賞賛すべきだろうが…背後への注意が疎かになっているぞ、セイバー」

突き刺さるべき対象を失い、『武器』は地面に着弾して跳ね上がる。そこに走り込んで跳躍、『武器』を空中で掴み取り、回避体勢のまま固まってしまったセイバーへ向けてアーチャーが投げた。

全ては布石。ランサーの隙が大きい派手な一撃は背後へ走り込むアーチャーから注意を逸らすため。地面に向けて打ち下ろすように攻撃を放ったのは、回避されることを織り込んで次の攻撃に繋げるため。いかに優れた戦闘能力を有していても、行動と行動の間にはどうしてもない一瞬の硬直、隙が生じる。そこを突き、確実に屠るための連携。

「もらった!!」

「私を忘れてもらっては困るよ?」

「なっ!?!ばさ…へぶっ!?!」

しかし、連携は連携によつて打ち破られる。相手の思考、狙いを読み切り、用意されたのは絶対不落の壁にして速攻必死の反撃。セイバーを護るように立ちはだかり、バサカは固く握り締めた右拳を『武器』に叩き込んでアーチャーへと打ち返す。投擲した以上の速度で襲いかかる『武器』に反応し切れず、顔面にぶち当たった一撃でアーチャーは沈黙した。

「くそっ!!」

ランサーの顔に焦燥が浮かんだ。その身体はまだ空中にあり、身動きが取れない。その目前に現れる影。回避行動の硬直から抜けだし、さらに跳ね返った『武器』を掴み取りながらランサーの直近まで跳躍したセイバーだった。

「ランサー、貴方には矢避けの加護がありましたね?ならば、これならどうです」

「ちょ、待て！せい、ばふう！！？」

自分に対して放たれる飛び道具に対して圧倒的なアドバンテージを持つ保有スキル『矢避けの加護』を無効化するためにはどうしたらいいのか。答えは単純、近接戦闘を仕掛ければいい。手に持った武器を投擲せず、握ったままランサーの顔面に叩き込んだ。

「バサカさんにセイバーさんすごいですー！パンチで打ち返すってやつは私にもできますかねー」

「アンリは止めておいたほうが賢明だと思いますよ。拳を当てるところか、何度やっても顔面で受け止めている光景しか想像できないので」

しゅっしゅっつとパンチの素振りしながら話すアンリにライダーが冷静な意見を述べる。おてんばな妹をたしなめる姉といった様子が非常に微笑ましい。

「ダメですよ、ライダーさん。最初から諦めていては何もできな」

「あつ、よそ見していると危ないですよアン…」

「はぐう！？」

ライダーの忠告にしたり顔で反論しようとしたアンリの横顔に突き刺さり、丸く柔らかかな『武器』が明後日の方向へと飛んでいく。セイバーたちが使っている食器が入っていた箱に小さなボールも入っており、俺とキャスターが鍛錬を行っている間に暇を持て余す七人でドッジボールでもやったらどうかと提案したのだ。英霊同士によ

る壮絶なドッジボール合戦が行われているのは道場の中。

「大丈夫ですか？」

「はいー。びつくりしましたけど」

「では、反撃にいきましょう。当たらないように離れていた私たちの所まで飛んできたということは、アーチャーかランサーが調子に乗ったということでしょうから」

「お仕置きですね！がんばっちゃあふうっ!？」

「ああっ!?!?また顔面につ!」

「くつくつく、お前たち二人も見ていて飽きない面白さがある。大丈夫かアンリ?参加していないからといって油断は禁も、ふぐう!?!?」

ライダーたちのやり取りを眺め、ひとしきり楽しそうに笑ったあと案じるように近づいてきた小次郎の横腹にも凄まじいスピードで飛んできたボールが突き刺さった。涼しい顔ばかり見せていた小次郎が驚愕に目を見開き、あのような苦鳴を漏らすところが見られるとは思わなかった。

「これなら、放っておいても大丈夫そうだな」

「ええ。疲れたら勝手に休むでしょう。宝具の投影なんて無茶をした後だし、今夜は残りの回路を開く下準備として、簡単な調整だけにしましょうか」

「む……もう大丈夫だし、少しでも鍛錬を進めたいんだけど」

「休むことも鍛錬のうち。ただでさえ、予想よりも速く回路の開拓が進んでるんだから。これ以上は身体が変化についていけないわ。落ち着かせて、馴染ませる工程も必要よ」

「それも、そうだな……分かった、キャスターに任せる」

すっかりお馴染の光景になってきたキャスターの秘薬作りが終わり、それを飲んだあとは魔術回路の状態診断と調整。長年に渡って放置され、すっかり錆ついている回路へ魔力を流し、少しずつ開いていく。キャスターの判断で後に回しただけあって、一筋縄ではいかない。

「そこまで」

思わず背筋を正したくなるような声に合わせて流していた魔力を遮断する。目を開けると俺の額から手を離して一息つく姿が見えた。慣れてはきたものの、小さくて柔らかいキャスターの手が触れるのはやっぱり恥ずかしい。

「放置されていた期間が長かっただけあって劣化が激しいけど、閉じているわけじゃない。きちんと路は通っているし、魔力も流れる。無理をしないで、今日みたいな工程を続けていけば確実に開くわ」

「そっか。ありがとう、キャスターのおかげで助かってるよ」

「ただし、焦って急激に魔力を流したりしないこと。貴方の場合、

回路と普通の神経が絡み合って融合しているから、回路の損傷がそのまま神経の損傷に繋がるの。幸運に恵まれて、何とか修復できる範囲の運動機能異常。ほとんどの場合、四肢の不随か廃人。少しでも損傷が大きい、もしくは損傷個所が多ければ即死よ」

「分かった、気をつける」

「本当に分かっているのやら……」

疑わしげにキャスターはこちらを見上げる。美しい女はどんな仕草も様になると言うが、絶世の美女ともなると、どんな仕草にも圧倒的な艶や迫力が宿るものだと痛感してばかりだ。今も、どきりと胸が高鳴ってしまい、キャスターに心臓の音が聞こえたのではないかと心配になる。

「ひとまず、アーチャーの双剣を投影したことによる損傷は順調に回復しているわ。魔術行使に問題はないでしょうけど、大事を取って今日はこれで終わりにしましょう」

「そっか……じゃあ、みんなの所に戻るか」

道場に戻って最初に目に映った光景、それを言葉にするなら『死屍累々』がしっくりと当て嵌まるだろう。あまりにも凄惨な光景に俺も、キャスターも言葉を失った。

「あー……疲れたー……」

仰向けに倒れ込んだまま完全に脱力するランサー。どれだけ激しく

動き回ったのか束ねていた髪はほどけてボサボサに乱れ、丸い痕が刻まれた顔からは鼻血が垂れている。

「情けないなランサー。この程度で横たわるとは」

偉そうな口ぶりのアーチャーも鼻血を垂らし、やせ我慢で立っているんだろう。膝がガクガクと笑っている。

「……………！！……………！！」

「だっ、大丈夫か……………？」

うずくまったまま小刻みに震えているのは小次郎だった。その姿勢を見ていると、下腹の辺りを絞り上げられる幻痛を感じて血の気が引いてしまう。恐らく、男として生まれた以上、決して防ぎようがない弱点に攻撃を喰らってしまったのだろう。その隣に寄り添い、バサカが小次郎の腰を叩いている。

「シロウ、鍛錬はもう終わったのですか？」

とことこ歩み寄ってくるセイバーは他の面々に比べると元気そうだが、やっぱり鼻血は垂らしていた。

「セイバー、この惨状は一体……………」

「あう、しろ……………なんで顔を拭くのでふか……………」

すっかり手に乗ることへの抵抗感、遠慮がなくなったセイバーを右手に乗せ、さり気なくティッシュで顔を拭ってやる。

「ああ、ホコリがくっ付いてたからさ。ほら、これで綺麗になった」
「きれっ!？んっ、こほん、かつ、感謝します。これは……その、シロウに教えてもらった遊びが思った以上に白熱した結果というか……」

自分でもやり過ぎたと思っているのか、バツが悪そうに目を逸らす。部屋を出る前からもしかしたらと思っていたが、予想以上の狂乱となったらしい。

「士郎、お疲れ様でした」

「あー、おふかれさまでふいたー。」

ちょうど良い大きさに千切ったティッシュでアンリの顔を拭きつつ、ライダーが労いの言葉をかけてくれた。

「ライダーは怪我しなかったんだな」

「ええ。私は傍観と回避に徹していましたから。止めたほうがいいと忠告したんですが、アンリは参戦してこの通りです」

風呂は鍛錬のあとに入るつもりだったから用意はできているけど、セイバーたちの様子だと夜食を作ったほうがいいかもしれない。健啖家揃いだから、残り物が出る心配はないだろう。

Interlude out

衛宮さん家のちびサーヴァント騒動 いつかめ了

第八話 宝石の魔女と金色の英雄王（後書き）

話数を重ねることに、自重という言葉を放り投げた内容に仕上がっていきますね。

果たして、この話が今後どういう展開を見せていくのか……正直、私にも分かりません。

しかし、自由気ままに書き進め、完結まで走り抜いてみせるということだけは確かです。

何も失う物はないド素人なんだもの……やりたい放題やってやんよ！！

というわけで、ちびサヴァ第八話、楽しんでいただけたら幸いです。

ようやく次回辺りから動きがある……かも。

お楽しみに。

エル可愛いよエル。

第九話 開幕の狼煙。(前書き)

ちびサヴァ本編の第九話です。

相変わらずのキャラ崩壊、性別転換なキャラ登場、さらには独自キヤラの登場、おまけに勝手気ままな物語展開になっています。

原作とは程遠い、独自色の強い内容になっているので、その点を踏まえておくとって下さる方も読むことをオススメします。

広い心と許容の精神をもって受け入れてくださると非常に助かります。

第九話 開幕の狼煙

第九話 開幕の狼煙

十年前 時の流れが存在せぬ闇の中にて

無明の闇に浮かぶ煉獄の光景。私を元にして造られたホムンクルスの身体を容器として保管されている聖杯を奪い合い、幾人もの魔術師が凄惨な闘争を演じた第四次聖杯戦争。

私の記憶にある姿とはずいぶん様変わりしてしまった冬木という街の一角が、禍々しい気配を振りまく漆黒の泥に塗り潰され、次の瞬間、業火によって燃やし尽くされた。

成す術もない人間が焼かれ、苦しみ抜いて絶命していく。我が子を護ろうと我が身を盾にして焼かれる女。その姿を目の当たりにして泣き叫びながら、少しずつ呼吸を止めていく子供。大切な者を救おうと死力を尽くし、救えない己の無力さに慟哭を上げながら死ぬ男。震える身体を互いに抱き締め合い、焰の中へと消える老夫婦。

煉獄、地獄と呼ぶことすら生温い。恐ろしく、悲しく、おぞましい光景だった。

「この光景を作ったのが……私たちだと……？」

「そうさ。何度も言わせんじゃねえよ……冬の聖女サマ。あんたと、クソ真面目に根源なんてバカらしい所を目指す大馬鹿野郎と、『悪の無い世界』なんて頭の沸いたご立派な大義の実現を目指したもう一人の大馬鹿野郎。この三人が、全ての元凶さ」

愉しげな表情で『悪神の成り損ない』と自らを表現した少年が笑う。

「もう一度聞きます。あなたは、何？」

「じゃあ、分かりやすく伝えてやるか。俺の名……世界と人間に刻みつけられちゃった、ありがたい名前はな……『この世全ての悪』……アンリマユだ」

「……そんな、まさか……」

「『ありえない』ってお約束の反応は止めるよ？面白くもねえ。真正銘の本物さ。中身は、ちっぽけな世界に満ちていた悪を押し付けられてぶち殺されたフツーの人間だが。くつ、くく……悪神が聞いて呆れるよなあ！自らの悪性を認めたくない人間が、己の善性を守るために生み出した薄汚ねえ身代わりの羊さ。それが、世界を救ったことと同義っつー認識になり、英雄として祭り上げられてる！！最高だよな？面白いだろ？笑えよ、ほら、笑ってみせろよ、聖女サマ」

眩暈がする。ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべ、大仰な仕草を交えて話す少年の姿が霞んでくる。

「おっと、まだ話は済んでねえんだ。起きたばかりだってーのに、眠られちゃ興奮めってやつだろ。ほら、目覚まし代わりだ」

気障つたらしい仕草で少年が指を鳴らした瞬間、膨大な情報が脳に直接叩き込まれた。

「っ！？あつ、ぎっい……」

情け容赦なしに流れ込んでくる情報の波に圧迫され、『自分』を形作る重要な部分までも壊れてしまいそうになる。無秩序、無作為にフラッシュバックする情報を必死で制御し、何とかやり過ごした。

「　　つ、　　はあ、はっ、ふう……」

「へえ……さすがは、聖杯儀式の礎になった女だけある。あれで壊れないとはね」

「これは……一体、どういうことですか……!？」

「その記憶の通りさ。これでも聖杯の一部だからな。あんたが暢気に寝ていた間に起きたこと、これからあの世界が辿る可能性をまとめて頭ん中に送ってやったのさ。いちいち口で説明すんのは面倒だしな」

そう言つて少年……アンリマユはくい、と背後に浮かぶ紅黒の光景を指差した。

「可能性世界の記憶を他人に見せる!？そんなことできるはず……」

「叩き込んでやった記憶にあるだろ？俺はアンリマユであると同時に、根源に通じる『道』を開き、万能の願望機として機能する聖杯の一部でもあるんだよ。同じように、聖杯の一部と化しているあなたの記憶を弄くることなんざわけねえ」

「……私が大聖杯になった後に起こった出来事、幾多もの可能性の世界を私に見せて、どうしようというの」

「ようやく目が覚めたみてえだな。話が進めやすく助かるぜ。本題はここからだ」

にやり、と笑ってアンリマユが一度だけ手を叩く。乾いた音が響き渡ると、一瞬で周囲の光景が変わった。

闇だけの世界から、荘厳な色彩、精緻な構図によって織り成される息を飲むような幻想の世界へ。

「ステンドグラス……？」

「ようこそ。『冬の聖女』ユステイーツァ・フォン・アインツベルン。ここは、アンリマユであってアンリマユではない、とうに名前も無くなっちゃったちっぽけな男が夢見た世界の名残」

「綺麗、ね……」

「死ぬ間際まで……いや、死んだ後まで残り続ける厄介な光さ。こいつがあるから、俺は、いつまでたっても悪神の成り損ないのままだ」

そう言って、ステンドグラスの中心で優しい微笑みを浮かべる聖女をアンリマユは一瞥する。瞳には暖かさが宿り、言葉には愛おしむような響きが籠もっていた。

「さて、俺の話はどうでもいい。あんたには、俺の計画に協力してもらおう。先に言っとくが、拒否の選択肢は用意されていないからな」

「計画、とやらの内容も聞かされないうちに協力を迫られるとはね……どうして消えたはずの『私』がここに居るのか、未だに事態を

把握できていないのに酷な話だとは思わない？」

「あんたの都合なんざ知ったことか。俺の計画にはあんたが必要、それだけだ。断るなら、もう一度死んでもらう」

アンリマユが右手を振ると、ひどく歪な形をした短剣のような凶器が現れた。目に宿る殺意は本物、私が協力を拒んだ瞬間に首か身体を切り裂いて致命傷を与えるだろう。ずっと昔に死んでいる私だから、『殺す』という表現が正しいかは分からないが。

「あなたの計画は、何のためにあるの……？それだけ、聞かせてちょうだい」

「なに、簡単なことさ。あんたと、俺がこうして話している場所……『聖杯』なんて馬鹿げたもんをブチ壊すんだよ」

正気を疑うような言葉。彼自身が聖杯の一部である以上、それは自殺にも等しい行為なのだが、なんの躊躇いもなく言い放った。『どうやって』と疑問が湧くよりも前に、目の前で不敵な笑みを浮かべるアンリマユならば『壊す』と言った以上、必ず壊すだろうと確信にも似た思いが湧く。

「最終的な目標は聖杯の破壊。だが、零れ落ちた魔力を満たすための小聖杯を壊すんじゃ意味がない……根源に繋がる大本、大聖杯から根こそぎ壊す」

「くくっ、』どうして』ってツラだな。それじゃあ、俺の口から直々に説明してやるつか。まず、あんたの目の前でガキの姿で話している俺は……』アンリマユ』なんだが、純粋な悪神であるところの』この世全ての悪』ってわけじゃない」

破壊の対象が冬木で行われる聖杯戦争の根幹を担う大聖杯と聞いて頭が真つ白になっているところに、さらなる混乱をもたらす一言が投じられる。返答どころではなく、情報を整理するだけで手一杯。そんな私の顔を見て、アンリマユが笑みを深くした。

「さつきも言ったと思うが、俺自身はちつぽけな人間だ。英霊になつて幾らか強化されちゃいるが、まともな殴り合いじゃ並みの英霊にすら太刀打ちできない。だが、小さくとも『世界』に溢れるあらゆる悪意を背負ったことよつてある性質が備わつちまつた。それはな……アンリマユに触れた全ての概念を『悪』に染め侵す絶対の悪性さ。どんな聖人君子だろうと、清廉潔白な奴だろうと、『神』に分類される存在だろうと一切の例外はない。触れた者は『悪』に染まつて狂うか、狂う前に死ぬ」

「まあ、とは言つても貧弱な英霊にや変わりない。これまでも、これからもそうあるはずだった。しかし……ここで、最悪の偶然が起こつた」

アンリマユが一息置いた瞬間、その『最悪の偶然』に思い至つた。彼が『此処』で話していること、彼の目的が聖杯を壊すことから推測すれば簡単に結論を導き出せる。

「聖杯、ね……」

「御名答。人間が思いつく限りの事象を実現させ、根源への到達すら可能にする極上にして極大の純粋な魔力、それによつて満たされるはずの聖杯。問題は、そこに俺が混じり込んだこと。俺が背負わ

されちまった『悪となるべし』ってありがたい願いを、真つ先に聖杯が受諾しちまったんだよ。おまけに、どんな願いも『ヒトを殺す』ことで叶えるなんて傍迷惑な方向性まで宿す始末。今となつちゃ、この聖杯の役目は一つきりだ」

完成形を知り尽くしたパズルを組み立てていくように、嫌な考えがまとまった。どこか、やりきれなさを感じさせる表情で言葉を切ったアンリマユの代わりに、私が言葉を紡ぐ。

「完璧な『悪神』としての姿と力を与え、世界に貴方を……いえ、書物に記されたままの『この世全ての悪』を生み落とすこと。ありとあらゆる悪性を肯定し、善の要素を持った全ての概念と存在に敵対し、生命という生命を侵して殺す。人々が夢想した、ある意味で理想的な絶対悪として貴方を育て上げる……」

「またもや御名答、だ」

絶望的な気分になる。無限と呼ぶに相応しい魔力を湛える聖杯が、その力を全て究極の悪を育てるために使っているのだ。目の前で笑う少年とは全くの別物、古の神々すら容易に絶殺する悪神が生まれることになるだろう。

「なんて……最悪……」

「そうさ。俺を召喚したクソジジイも、聖杯儀式の仕組みを完成させたあんたらも予想しなかった最悪だよ。だが、これは行き着くところまで事態が行き着いちゃった場合の話だ。まだ、打つ手は残されてる」

「その打つ手が、大聖杯の破壊ということね……。けど、私にでき

ることがあるの？大聖杯を動かすための魔術回路になった私の意識が復活したところで、他には何も変わっていないのでしょ……？」

「俺とあんたがやるのは、生きてる奴らの手助けさ。表舞台から退場した死人には、それが一番相応しい役目だからな。記憶を探ってみるよ、一人居るだろう？聖杯なんか要らないと言い捨て、大きすぎる理想を抱えてスタボロになりながら走り抜くと決めた、どうしようもねえ大馬鹿野郎が」

強い決意を宿した瞳、燃え盛る火焰にも似た赤髪、吹きすさぶ風を切り裂いていく剣のような両腕。そして……固い信念を背負った鋼の背中。右手に黄金色の長剣、左手に漆黒の短剣を握り、左腕に真紅の布を巻き付けた少年の名は

「衛宮、士郎」

「成り損ないの状態だったとは言え、悪神の性質すら捻じ曲げちゃうほど筋金の入った正義バカだ。あいつなら必ず、全てを終わらせる」

「だけど、聖杯を壊したら……」

「ああ、俺たちは消える。そもそも、『万能の願望機』なんてカビ臭え代物がいつまでも残っていることがおかしいんだ。何もかも、一切合切まとめてブチ壊すための計画さ。くくっ、皮肉だなあ聖女サマ。聖杯を作るための犠牲となったあんたが、今度は壊すための犠牲になるんだからよ」

「……大聖杯を破壊するなんて、そんなこと……できるはずがないわ……。まして、彼 衛宮士郎は、魔術師とは言え、並外れた実

力を持っているわけでもない人間に過ぎないでしょう!? 私たちが作った聖杯儀式が、そんなことを起こすはず……あうっ!？」

欠片も残すことなく消えたはずの私の意識がこうして復活し、告げられたのは到底信じられない真実の数々と目的。真っ先に口から零れたのは、混乱と弱音だった。それを聞いた瞬間、アンリマユは無言で私に近付き、喉元を掴みながら押し倒した。目の前には、憎々しげに歪み、私を睨みつける刺青だらけの幼い少年の顔。彼が初めて見せる、人間らしい表情だった。

「いい加減にしろよ、聖女サマ。あんたたちが始めたことごとくなつたんだと、懇切丁寧に言っただろうが……!! もう一人、腐れジジイが残ってるが……何とかできるのはあんだ! あんたがやらずに、他の誰がやる!? 覚悟を決めるよ。あんたと俺にはな……諦めて力なく泣きながら消えるか、大笑いして『ざまあみろ』って叫びながら消えるか、二つの道しか用意されてねえんだよ」

「私、協力すれば……大聖杯を、聖杯儀式に関わる全てを壊すことができるのね……?」

「ああ」

「壊すしか、方法は残されていない?」

「その通り」

「私たちが消えれば……記憶にある子供たちの、未来は守られる?」

「少なくとも、生きてる奴らが『明るい未来』とやらを切り開く可能性が広がる」

「そう……。分かったわ、協力しましょう。すでに一度滅んだ身、それに……。彼らと共に作り上げた聖杯が、本来の目的とかけ離れた物になっているのなら……。壊すのは作り上げた者の責務でしょうか」

葛藤や戸惑いが無いわけではない。アンリマユが別の目的のために私を利用しようとしている可能性も捨てきれない。しかし、私は協力を決めた。叩き込まれた記憶の中にある凄惨な光景の数々、聖杯を求めたがゆえに道を踏み外した者たちの姿を見たから。それも理由のひとつにある。だが、最も大きいのは……。私と共に聖杯儀式を作り上げた二人の男、彼らのユメが汚され、正反対の結果を生み出そうとしているのが我慢ならなかったから。

『あらゆる悪を根絶して、誰もが幸福に生きる良き世界を』

己の利益、魔術研鑽だけに執着する魔術師とは思えないユメを掲げた男。馬鹿馬鹿しいと鼻で笑いながらも、真剣にその実現について話していたもう一人の男。彼らの想いは、一族の悲願を達成するための部品として育てられた私の心に火を灯した。私は、彼らの語るユメを綺麗だと感じ、それを叶えてあげたかった。大聖杯の礎としてこの身を捧げる時も恐れはなく、これで二人のユメが実現するのだと喜びすら感じていた。今も思い出せる。意識が途切れる瞬間に見た、彼らが流した一筋の涙と、耳に届いた『すまない、ありがとう』の言葉を。

「今さら、私が何をしたところで結局は自己満足に過ぎないのは分かっている。それでも」

「聖女さま、なんて呼ばれ方と外見から弱々しい温室育ちを想像し

てたが……そんなツラもできんだな。くくっ、あのガキも成長できりゃ大化け間違いなしってことか」

「えっ？」

「いや、ただの独り言だ。晴れて協力関係の成立が決まったわけだが、握手でもしとくか？」

冗談めかした口調で言いながら少年……アンリマユが右手を差し出す。最初から握手などしてこないだろうと予想しての行動に違い。ならば、私を取る行動はひとつだけ。

「成り損ないとはいえ、経典にまで名前が載っている悪神と握手ができるなんて光栄ね。よろしく、アンリマユ」

びっしりと刺青が施された彼の右手は、想像よりもずっと温かい。私の行動がよほど意外だったのか、目を丸くしている。皮肉げに歪められていた表情からは想像もできないほど、きよとんとした顔は可愛らしいものだった。

現在

「……………はあ……………」

溜め息と共に大きな疲労感が湧き上がってくる。時刻はすでに午前二時を回り、どうしてもやらなければならないことを抱えている者、良からぬことを企んでいる者、深夜徘徊が趣味の者などを除けば誰もが寝静まっている時間。一人で物思いに耽った後、気が付けばあ

の男や他のサーヴァントたちが寝ている部屋まで戻ってきている自分に腹を立てていた。しかし、別の場所に行くのも余計に腹立たしいので障子を開けて中に入った。二時間ほど前にやっていたバカ騒ぎの疲れが目蓋を閉じさせようとゆっくり重圧をかけている。

「さて……む？」

敷布団に上がり、ぼふぼふとランサーと小次郎が転がって寝息を立てている近くまで歩く。そこで妙な気配に気が付いた。常夜灯によつてぼんやりと照らされている部屋に視線を巡らせると、あちらこちらに五つの影。

寝相が悪いという次元ではない、明らかに不自然な位置に寝転がるセイバー。小僧……衛宮士郎の布団に頭だけ突っ込んだ状態で固まっているバサカ。よじ登っている途中で力尽きたのか、微動だにしないまま掛け布団の上からずると滑り落ちてくるキャスター。開き直ったように堂々と小僧の首筋に向けて登っていくライダー。私と小僧を交互に見ながら、わたわたと狼狽するアンリ。

「あつ、あーちゃーさ……！？」

「何をしているんだお前たちは……」

なるほど、こうやって皆が寝静まった深夜に動いていたというわけだ。健気というか、涙ぐましい無駄な努力というか。今まで気付かなかったのは、彼女たちがすでに移動を終えたあと戻ってきていたからだろう。

「まあ、何をするのも勝手だから私は何も言わんが……」

これ以上刺激すると何をされるか分からないので、さっさと眠ることにする。横になった途端にこちらへと転がってくるランサーを蹴り返し、目を閉じた。ふと、薄れていた遠い思い出が蘇る。

『 はいつも一人で苦しそうに眠ってるから、今夜は私が添い寝してあげるわよ。断ったら酷い目に遭わせるし、変なことをしようとしても酷い目に遭わせるからね』

『 人が穏やかな安息を得られる数少ない時は、眠っている間なのでそうです。しかし、貴方は違う。眠りの安息すら、捨てているのですね……良いでしょう、苦しみ喘ぐ子羊を癒すのもまた私の務め。』

、今夜は私を抱いて眠りなさい』

鮮やかに輝く女と、慎ましく淡い色彩の女。どこか似通った部分のある二人にかけられた言葉。どちらも、素直じゃないくせに根は甘すぎるほどに優しいのだ。今の『俺』を見たならば、彼女たちは何と云うだろう。眠気に濁った頭で取り留めのない思考を続けていたが、次第に静かな眠りの海に沈んでいった。

『 殺 血 肉 喰 飲 憎 』

意識が黒くて紅い、ぐちゃぐちゃと入り混じった渦に飲み込まれ、引き千切られ擦り潰されて溶け沈んでいく。頭を埋め尽くすのは誰かの叫び。殺せ、殺せ、血と肉を喰らえ、飲み干せと罅割れた声が満ちる。

『 やめて、わたしは、こんなことしたくない 』

バラバラに引き裂かれた死体が見える。気が付けば、両手が血に塗られていた。これは誰の手だろう。見覚えのある手が、死体をさらに細かく解体していく。それはまるで、遊んでいるようだ。ふと、口の中と喉を甘美な感触が通り抜けていった。ぞわぞわと、快感の波が走る。血だ。濃厚な香りを振りまく、紅い血を飲めば、もっともつと気持ち良くなる。殺して、引き裂いて、飲み喰らえば、素晴らしい快感が得られる。嫌悪感も、罪悪感も、後悔も、あっさりと消えた。

？

ねっとりとした輝きを放つ血溜まりに何かの影が映っている。生乾きのどす黒い血に染まった長い髪。微かに、紫色の部分が見えた。これが元の色だったのだろうか。白かった肌の下を、蛇のような何かがみちみちと這いずり回り、その度に激しく隆起する。真っ黒な眼球の中心で、紅い瞳孔が蠢く。心の底から楽しいのだろう、口は三日月状に裂け、笑みのカタチを作っていた。だというのに、両目からは血の涙を流している。よく分からない。これは何だろう。これは誰だろう。

『 サ ドウ サ！ メドウ サ！！』

だれかの、こえが、きこえる。きれいな、こえ。

『 『メドゥーサ！！！！』』

少しだけはつきりとした意識で、声が聞こえた方向に目を向けると、可憐な少女が二人居た。双子なのだろうか、とてもよく似ている。そっくりだ。しかし、不思議なことに二人を容易く区別できる。泣いていた。震えながら、怖れながら、それでも彼女たちではない誰

かのために泣いていた。誰のために泣いているのだろう。ちくりと、微かな痛みが走った。

『ごめんなさいね……貴女は、私たちを護るために、そうなってしまったの……』

『ごめんなさいね……貴女なら、きっと大丈夫だと思って……私たちは、その優しさに甘えてしまった……』

そうだ、二人を、護りたくて戦っていた。二人に笑顔でいてほしくて、ずっと、一緒に居たくて、だから戦った。戦い、続けた。なのに……いつからか、殺すために戦っていた。どうして、こんなに大切なことを忘れて

『ごめんなさいね、メドウーサ……貴女を、護ってあげられなかった』

『こんなにも大切な妹を、愛しい妹を……私たちは、姉として、三人きりの家族として、護ってあげられなかった』

ねえ、さま　姉様　ステンノ姉様、エウリュアレ姉様　！！

真っ黒な泥の中に沈んでいた意識が鮮明さを取り戻し、何よりも大切な二人の姉の名を叫ぶ。だが、声を伝えるべき器官はとくに別なものへと変わり果て、おぞましい『聲』を響かせただけ。どれだけ足掻いても、動かせる脚や腕は無い。身体も無い。あるのは、絡み合った無数の大蛇で織り成される、巨大すぎる化物の姿。二人の姿がどんどん近付いてくる。

否、私が二人に近付いている。喰らい尽くすために、飲み干すため

に、その存在を徹底的に犯し尽くすために。

どうして！？私は、思い出したのに！！姉様！姉様っ！！

叫びは届かず、二人の姉は震える声を必死に抑えて、歌うように言葉が続けた。その一言、一言が突き刺さる。心が、意識が、切り刻まれていく。

『……貴女は私たちを護った。けれど、私たちを護ったメドゥーサはもう居ない。なら　護られていた私たちも、同じように居なくなりましょう』

それは最期の言葉。

『……うわ、もう目の前か……。じゃあね。さようなら、可愛いメドゥーサ。最後だから口を滑らせてしまっけど　憧れていたのは、私たちの方だったのよ？』

二人の、最愛の姉たちが残す……最期の、言葉。それは未来永劫、この身を焼き続ける贖うことのできぬ罪の象徴。同時に、決して失えない最後の、宝物。

「　　つ、はぁ……」

セイバー、アーチャー、キャスターの過去を垣間見る夢を見てきて、一旦は落ち着いたのだが今朝はライダーの過去。どこか、客観的な視点だった最初の三人に比べ、ライダーの過去に関する夢は本人の意識と混じり合うような感覚、視点だった。流れた涙を拭い、すっ

かり定位置となつた俺の左首筋で眠るライダーにそつと手を伸ばし、起こさないように、綺麗な紫色の髪を撫でる。

「自分の手で、大切な人を殺す　か」

その咎がどれだけ重く、美しき紫髪の騎乗兵を縛り付けているのか。決して、余人には理解できるものではないだろう。こうして繋がったパスを通じて過去を垣間見たとて、それは変わらない。しかし、呟いた一言は思った以上の重さをもつて、心にのしかかってきた。俺の目指す理想　『正義の味方』にも迫られる選択肢であるからだ。自己にとつて何よりも大切な存在が、数多くの他者にとつて致命的に有害なものであった時……片方を救えば、片方を手にかけてなければならぬとした時……『正義の味方』がどうするのか。

「　正義の、味方　」

切嗣に救われた日から十年、ただひたすらに追いつけてきた理想が、陽炎のように曖昧でゆらゆらと掴み所のないものに思えてくる。

誰もが幸福であるようにと戦い続け、護ろうとしたものに離反され、最後は己の成し得たもの全ての消失と改変を求めた少女

誰をも救いたいと理想を胸に戦い続け、血に塗れる中で抱いたはずの理想を失い、絶望しか見えなくなった青年

運命に弄ばれ、大切な人たちも故郷も、自分の人生すらも失い続け、重い罪と後悔に苛まれたまま汚辱の二つ名を抱え続ける女

かけがえのない二人の姉を護り続けるために誰をも殺し、血を浴び続け、何よりも大切に尊かったはずの最初の願いを裏切った女

思う。彼女たちの願い、彼の理想はそのまま『正義の味方』の縮図なのではないかと。誰を護り、誰を救い、誰の命を取り零してしまふのか。なぜ護りたいと思ったのか、なぜ救いたいと願ったのか……なぜ、なぜ、なぜ、なぜ。浮かび始めた疑問が際限なく頭の中を満たし、ゆっくりと押し潰していくような鈍痛を生み出す。考えることがなかった。否、考えようとしなかった、衛宮士郎の抱える理想の鍍金が剥がれようとしている。

「つ、ぐつ はあ、っあ……」

救わなければならぬ。この身を捧げて、血の一滴、肉の一片まで失うことになるうとも命が尽きるまでただひたすらに。一人でも多く、救わなければならぬ。それが……あの地獄のような紅蓮の世界で、誰も彼をも見捨てて生き残った衛宮士郎に許された唯一の贖罪なのだから。しかし、それは本当なのか？俺が誰かを救いたいと願うのは 衛宮士郎が理想を追い続けるのは もっと

「……『じいさんの夢は 俺が、ちゃんと形にしてやつから』か……じいさん、俺……ちゃんと、『正義の味方』を目指せるよな……。みんなを救える、誰も見捨てない、『正義の味方』を……」

切嗣に救われ、衛宮士郎の名と共に新たな命を与えられた日から十年。初めて、迷いを口に出した。答える者は誰もいない。目指し続ける理想の名を繰り返し口にしても、響いた声が溶けていく空気のように虚ろなままだった。

「はあ……」

澀み切った嫌な熱を溜め息と一緒に吐き出す。ふと視線を巡らせる
と、サーヴァント女性陣はそれぞれの定位置で眠っており、男性陣
も敷布団の上で思い思いに眠っていた。最初こそ、決してこの部屋
に寄り付こうとしなかったアーチャーもランサーたちと共に布団で
寝るようになっていた。

「たぶん、みんなが眠ってから戻ってきてるんだろうな」

悪態をつきながら、渋々といった表情でそつと部屋に戻ってくる姿
を想像すると少しだけ笑えてくる。ふと、いつもと様子が違うよう
に感じたので注意して見ると

「泣い、てる……？」

顔の見えないサーヴァント男性陣は分からないが、セイバーを始め
とした女性陣はみな眠りながら涙を零していた。考えられる理由は
そう多くない。恐らくは、パスを通じて見たライダーの過去の夢が、
他のサーヴァントにも流れたのではないだろうか。キャスターは『
ありえないのに』と困惑するかもしれないが、八騎ものサーヴァン
トとパスを繋いでいる状態なのだ。何が起きてても不思議ではない。
涙を拭ってやりたいが、起こしてしまわないか心配だったのでそつ
としておく。

「ん……そう言えば、今朝は久しぶりに桜が来るんだっけ。先に用
意しとかないとな……」

「らいつ、ひぐつ、うう……らいだーさっ、あうううう……」

「アンリ、そんなに泣いていると可愛らしい顔がもつたいないですよ？ 私なんかのために、それだけ泣いてくれるのは嬉しいですが…
…アンリは笑っている方が良い」

「『なんか』なんて、悲しいこと、ひつく、うつ、言っちゃ……いやですうう……」

「アンリ……」

みんなを起こしたのはいいのだが、それからが大変だった。夢を見たアンリが目覚めると同時にライダーに抱きついたまま号泣してしまい、それを宥めるために全員で慌てふためく事態に陥った。特に俺を含めた男性陣は完全に役立たず。寝起きにも関わらず焦りまくったせいも、小次郎は束ねた髪先端をアンリに持たせようとするとランサーは何か役立つルーンがないかと独り言を言い始め、アーチャーは『冷静になれ冷静になれ』と連呼していた。俺もただ狼狽するしかできなかった。しかし、キャスターとライダーは落ち着いたもので、アンリを抱き寄せながら髪を撫でる。そのお陰だろう、アンリも少しずつ泣き止んできていた。

「本当に優しい子ね、アンリは。大丈夫よ、ライダーはちゃんとここに居るでしょう？ だから、安心なさい」

「でも、ライダーさんのお姉さんたちが……」

「ええ。確かに、あれは私にとって辛い記憶です……忘れることは決していない。ですが、アンリ、貴女が抱えてしまう必要はないんですよ。ありがとう、この涙で充分です」

ちなみにバサカとセイバーは混乱の極致にあつた俺たちを制圧し、

大人しくさせるために行動している。畳んだ布団の上に仁王立ちした二人の前で、男は四人揃って正座中。

「まったく……混乱してしまうのは分かりますが、おかしい行動を取る必要はないでしょう……。どんな時でも冷静さを失ってはいけない。特にシロウ！貴方はマスターなのだから、なおさら注意しなくては！」

「この四人が慌てふためく珍しい姿を見れたし、私は楽しかったけどね」

完全にお説教モードへと突入し、セイバーが痛いところをビシビシと突いてきた。バサカは特に気にしてないのか、大慌てする俺たちの姿を思い出して楽しそうに笑っている。やられっぱなしなのも悔しいので反撃。

「バサカだって泣いてたじゃないか。俺はちゃんと見たぞ？」

「セイバーも泣いてたな。槍に誓ってもいい、絶対に泣いてた」

「奇遇であるな。私も二人が涙を拭うところを見ているのだ。そら、目が赤くなっているぞ？」

「涙を流すと人体の構造上、鼻腔の方にも流れてしまう。二人とも、鼻をかむならティッシュはそこだ」

「「うっ……」」

時計に目をやると桜がやって来る時間までほとんど猶予がない。まだ部屋なので、仮に桜が到着しても霊体化させる余裕は充分にあるが、早めに行動しておいて損はないだろう。

「そろそろ桜が来る頃だし、霊体化させるからな」

ちようどアンリも泣き止んだので、滞りなく手順を踏むことができた。怪しまれないようにサーヴァント用の布団は押入れにしまい込み、さつさと制服と鞆を準備して居間に向かう。暖房のスイッチを入れ、予約の時間通りに炊き上がったご飯の様子を確かめ、朝食の材料を準備していると玄関の開く音と軽い足音が聞こえてきた。

「あつ、先輩、おはようございます」

「おはよう、桜。ごめんな、起きるのがちょっと遅くて暖房を点けたばかりなんだ。じきに温まると思うけど、寒くないか？」

「いえ！このくらい、へっちゃらです！こちらに来るのは久しぶりですから、張り切ってお手伝いしちゃいますね」

にこりと柔らかな笑みを浮かべ、専用のエプロンを身に付けながら桜が隣に立つ。数日ぶりにいつもの形へと戻っただけなのに、落ち着かない。桜が動き回るたびに香ってくる、甘い匂いのせいかな。ふと横に視線を向ければ、しばらく家に来れないと言った数日前が嘘のように明るい表情。心なしか、安堵の感情も混じっているような

「先輩？」

「あつ、ああ、どうかしたか？」

「今朝の献立はどうするのかなと思って」

桜と朝食のメニューについて話し合いつつ、家に来れない間にあったことなども幾らか話す。その表情を見る限り、問題が起きていたような印象は受けなかった。家に来れなくなるというのも急な話だったので、慎二が何か囁んでいるのではと気にかかっていたが、直接聞くのは憚られた。

「よしつと、これで完成だな。藤ねえは……」

「あっ、藤村先生なら弓道部関連の話し合いがあるからまっすぐ学校に向かったと思います」

「そう言えば……ちょっと前にそんな話をしてたような……まったく、忘れてた俺も悪いけど、ちゃんと教えてくれてもいいのに」

「ふふつ、藤村先生らしいとも言えますけどね」

軽い雑談を交わしながら食卓を調べ、まずは桜との朝食を始める。セイバーは決死の覚悟で空腹と戦っているんだろうが、もう少し我慢してもらうしかない。俺も桜も食事中はあまり会話をするタイプではないので、慣れ親しんだ静けさと共に箸を進めていく。

「ふう、ごちそうさまでした。桜、食後のお茶飲む？」

「そうしたいところなんですけど……美綴先輩に呼ばれていて、そろそろ学校に行かないといけないんです」

しょんぼりと表情を曇らせてしまった桜をなんとかしてやりたくて、一計を案じる。

「そっか。分かった、それじゃ次の機会を楽しみにしておこうか。そうだな……次は、江戸前屋のたい焼きを用意しとくか」

「ほっ、本当ですか！？ぜひっ、ご一緒します！」

ぱあっと笑顔に戻った桜の様子を見て、自分の判断が間違いではなかったことを知る。確か、明日の夜は藤ねえが来れないって言うてたし、それに合わせてたい焼きを仕入れておくでしょう。藤ねえが一緒だと幾つあっても足りなくなるし。

「ん、早く出ないと間に合わなくなるんじゃないか？」

「そうですね……すみません、お片付けを頼むことになってしまっ
て……」

「いつも桜には世話になってるからな。これくらい何でもない」

「はい！では、いつてきます」

ここに来るといつも上機嫌な桜だが、今朝はいつにも増して機嫌が良い。何か、嬉しいことでもあったんだろうか。なににせよ、笑顔の桜を見られるのは喜ばしいことなので余計な詮索は入れないほうがいいだろう。

「さて、それじゃ」

「シロウ……その、そろそろお腹が……はっ！？」

サーヴァントたちのご飯と言いかけて、ポケットからひょっこり顔

を出したセイバーの言葉と重なってしまった。『しまった!』という表情と共に真っ赤になるセイバーが可愛らしくて、軽く頭を撫でる。

「大丈夫。ちゃんとみんなの分も作ってあるからさ」

「あう、うう……」

待ち切れないほどに期待をしてくれている美しい少女騎士のために、さっさと準備をしよう。まだ時間の余裕があるとは言え、遅刻するわけにはいかないし。

「えーみやつと」

「ん？美綴か。なにか用でもあるのか？」

「はあ……遠坂といい、アンタといい、他人に話しかけられる時は用件ありきなんだな。普通に雑談って考えが真っ先に出てくるもんだと思うんだけどねえ」

「??？」

自分から話しかけておいて頭を抱えてしまった美綴の様子に首を傾げていると、開き直ったようにまた話しかけてきた。

「まあ、用と言えば用なだけどさ。ほら、最近の衛宮つたらいつも一人で昼ご飯を済ませてるみたいだし、弓道場の方で食べないかと誘いに来たんだよ。間桐も連れてきて欲しそうにしてたしさ。さ

つき柳洞と少しだけ話したら、『衛宮のやつ、最近は生徒会室にも近寄らん』って言ってたよ」

「そうだったのか。気を使わせてしまって申し訳ないけど、別に深い理由はないよ」

「ふうん？あたしはてつきり、衛宮にもようやく想い人ができたのかと勘繰ったんだけどね。見当外れだったか」

「なっ！？」

予想外の言葉に動揺してしまった。俺の焦りようがよほど面白かったのだろう、美綴が笑みを深くする。彼女にとってはからかいやすい相手らしく、時折こうして不意を突かれてしまうことがあるのだ。いや、美綴に限らず女性全般に弱いのかもしれない。桜にもからかわれたことがあったし、セイバーたちを召喚してからも似たようなことが……。

「あははっ、うんうん、やっぱり衛宮と話すのは楽しいよ。これで弓道部に復帰してくればもっと楽しいんだけど、そっちはどうも望み薄だしねえ」

「すまないとは思うけど、俺は」

「『戻るつもりはない』でしょ？何度も聞かされてるからね。まあ、時間はまだあるし、せめて私との勝負だけは譲かせてみせるよ。さて、その様子じゃ昼の誘いも乗ってきそうにないね。仕方ない、間桐と二人寂しく食べるとしようか」

いつものように、振り返りながらにこりと笑って美綴が歩き出す。

その表情や背中からは断られたことを悔いる様子は見受けられず、次こそは落としてみせようという気概だけが溢れていた。そう、友人と言える彼女は常に前向きだ。ただ真っ直ぐに前を見据え、自分が後悔しないために胸を張って歩き続ける。叶えるべき、追うべき理想が幽かに見えてしまっている今の俺には、その背中がことさら眩しく見えた。

『シロウ、彼女との勝負とは一体なんのことですか？』

『ああ……俺さ、入学してから少しだけ弓道部に所属してたんだ。毎朝、一人だけで射をしてたんだけど、たまたまそれを美綴に見られてな。一度、正式に勝負したいって言われてるんだけど俺の射はそんな大層なものじゃない。だから、断り続けてるんだよ。ちよつと事情があつて弓道部を辞めた後も、こうして勧誘されてる』

『そうだったんですか。私の見たところ、彼女は相当な使い手だ。そんな彼女がこれほど勝負を熱望する以上、シロウの腕は桁違いということになる』

『士郎の弓、か……ぜひとも見てみたいものだね』

珍しくバサカが話に乗ってくる。理由を考えてすぐに思い至った。バサカの真名はヘラクレス、原因不明で女性化しているがその本質や能力に変わりはない。つまり、あらゆる武器を使いこなし、幾つもの武勲を打ち立て、今世に至るまでその名を轟かせる大英雄の力は不変。彼の有名なヒドラの弓の使い手でもあったことから、弓に關しては興味も大きいのだろう。

『さつきも言っただけど、大層なものじゃないよ。さあ、俺たちも昼食にしよう』

ようやく一日の授業を終え、放校を告げるチャイムの音をかき消すような喧騒が響く。霊体化したままのサーヴァントたちは、数日前に定めた順番に従って校舎を動き回り、セイバーは制服のポケットの中で眠ったり、探検を終えてきた他の面々と話をしたり、時には俺と念話で授業の内容について話す。アーチャーは相変わらずついでこようとしないが、ランサーいわく、拠点になる家の防御に一人は残っているべきだろうと語っていたらしい。俺には想像もできないような高位の魔術礼装を多数用いて、可能な限りの対策を立てているキャスターは不満気だったが。

『どうやら、今日も異常は起こらなかったようね。おかしな反応は一切感知されないし、アーチャーの様子もいたって落ち着いたものよ』

『そっか。じゃあ、早いとこ帰って夕飯にしないと。途中で江戸前屋に寄っていくつもりだから、たい焼きを買っていこう』

『おっ、そりゃ楽しみだな！この前食った味以外にも種類があるんだろ？何事も『初めて』っつーのは面白いもんだ』

『私たちのような過去の英霊は甘い物とあまり縁がありませんからね。実際に口にするのは初めてですが、それほど悪くはありませんでした』

『美味しいですよー！！ランサーさんの言う通り、別の味っていうのも楽しみですー！』

女の子は甘い物好きとはよく聞くものの、英霊まで例外じゃないとは。誰が考えたかは知らないが、過去の英雄たちにまで当て嵌まるとは想像もしていなかっただろうな。念話ではあるものの、賑やかに話を交わしつつ道を歩いていると、ひとつの異変が目にとまった。

今ではすっかり少なくなった公園で遊ぶ子供の姿。しかし、今日はさほど寒くなかったこともあり数人の子供が走り回っている。そのうちの一人が、何か興味を引かれるものでも見つけたのかふらりと道路に歩み出していた。一緒に遊んでいた子供たちの目も、通行人の大人たちの目も届かないまさに『死角』となる位置。唯一、衛宮士郎だけが確認できる位置に立っている。

「……！」

小さな男の子に向かって速度を落とすことなく迫ってくる黒い影を視認した瞬間、考えることもなく走り出していた。頭の中でセイバ―たちの『声』が響いたが、それがどんな言葉だったかも分からない。突き動かされる。すぐそこで危機に晒されている命があるのだ。手が届きそうな場所に、間に合える場所に、その命を取り零すことは決して許されない。

速くだ　もつと速く、もつと速く　そうじゃなきゃ、間に合わない。だが、焦るほどに力が抜けていきそうな錯覚に囚われる。骨も筋肉も壊れるほど力を込めているはずなのに、地面を踏み砕かばかりに両足を叩きつけているのに、どうして、こんなに遅い。もつと、もつと、もつともつともつと　……！！

「　　ッ！！　　！！　　！！！！！！」

男の子の身体に手が届く。しかし、突き飛ばすにも引つ張り込むに

も圧倒的に時間が足りなかった。黒い影、トラックは目前まで迫っていたから。少しでも男の子の生存率を高めようと背中側に隠して正面からトラックと向き合う。強化魔術を発動する暇がない、投影魔術で剣を創り出したとて意味がない。悔しかった。容易く折れ、砕け、粉々に命を散らしてしまっ己の身体が悔しい。だが、同時に少しだけ安堵した。俺の身体が緩衝材の代わりになれば、男の子が生き延びる可能性が高まる。この身体の真後ろではなく。少しだけ斜め後方に立っているのも幸いした。転んでいくらか怪我をしまっかも知れないが、きつと命に別条はないだろ。

ドン、と激しい衝撃が走り、目の前が真っ白に染まった。

『シロウ?』

突然黙り込んでしまった少年の様子を不思議に思い、念話を通して声をかける。しかし、返答はない。妙な胸騒ぎを感じ、最初の決めごとを忘れてポケットから顔を出した。

『どうしたのですか、シロ　　!?!?』

その瞬間、激しい上下の振動と共に景色が視界が動き始めた。突然の出来事にとまどう暇もなく加速が続く。

『セイバー!?!ちっ、一体どうしたってんだ!?!』

『分かりません!突然シロウが走り出してしまっ!』

『あれはっ!?!?』

ランサーの叫びに返答していると、バサカの叫びが重なる。士郎が進む先に目を向けると幼い少年の姿。そして、減速することなく進み続ける鉄塊。召喚の際に与えられる知識から、それが自動車であると判断する。ここに至ってようやく士郎がなんのために走り出し、一切の躊躇もなく加速を続けているのか分かった。あの幼子を救うために、己の身を呈するつもりなのだ。

「いけないっ！シロウ！！無茶ですっ！！」

外では声を出さないという決めごと破り、士郎を制止するために叫ぶがまったく意味を成さない。

『ああっ！ちきしょう！士郎じゃないと霊体化も解除できねえのか！』

『士郎さん！ダメですって！！死んじやいますからあ！！』

『キャスター、なんとか解除できない！？このままじゃ士郎が！』

『なんとかできるならとっくに解除できてるわよ！そもそも、霊体化を解除できたところで今の私たちじゃ盾にもなりはしないわ！！ああもう！止まりなさいって言うてるでしょう！！』

ランサー、アンリ、バサカ、キャスターの声が重なった。そう、私以外のサーヴァントはみな、士郎の側から魔力供給量を増やさないと霊体化の解除ができない。本来ならばサーヴァントとマスターの間に繋がるパスは双方向であり、個別の判断で霊体化を解除する。それができないのだ。この状況で動けるのは私だけ。キャスターの言葉通り、弱体化しているこの身体と能力では士郎を護るための盾

にもならない。それでも、私は。

鎧を魔力に還元し、現界に回さなければならぬ魔力も全て練り上げ、ありったけを両手に集める。激突の瞬間、この魔力噴射をぶつければ衝撃を少しでも緩和できるかもしれない。完璧に受け止め、士郎と彼が護ろうとした幼子を救えれば、例えここで消えてしまうことになっても納得できるような気がする。不思議な感情が胸に満ちた。あれほどまでに執着していた聖杯への渴望が、薄れている。聖杯を得られる可能性がこれで完璧に潰えるというのに、あるのは、士郎たちと過ごした温かく、私にとって不相応なまでに幸福だった時間を惜しむ感情。

『シロウ……すみません……でも、貴方を、死なせるわけにはいかない』

「はっ　あああああああああ……！！！！！！！！」

魔力枯渇によって空っぽになり、冷たさを増していくはずなのに……なぜか、とくん、と心地良い温もりが流れ込んでくるような気がした。

痛みもなく、たった一度の衝撃を感じただけで他に何も無い。痛覚が壊れるほどの重傷を負ってしまったのかと思い、目を開けてみると

「　　っ、え？」

トラックに吹き飛ばされておらず、背後に男の子を庇った体勢のまま

まだだった。掠り傷すらひとつもない。その理由を考えることもできず、呆然としたままの視界を彩る鮮烈な蒼色。落陽を照り返して煌めく白銀。そして、何よりも美しく、目を惹きつける黄金の輝き。小柄さを感じさせない、強い、清廉な背中を見せる少女がそこにいた。

その少女の名前を、俺は、知っている。『この身は貴方の剣であり盾だ』と言ってくれた、誰よりも真っ直ぐで優しく、悲しくなるほどに強い少女。

「セイ、バーなのか……?」

「シロウ……良かった、無事だったんですね。すみません、わたしは……って、へっ?」

振り返った少女はやっぱりセイバーだった。しかし、セイバーじゃないと言ったこともできる。なぜなら、彼女の姿は今まで見慣れていたものではなかったから。

「大きくなってるううううう!!!?!?!?」

『大きくなってるううううう!!!?!?!?』
『?』

そう。ちんまりとした手乗りサイズではなく、しっかりとした本来の大きさに戻っていたのだ。本来の姿に相応しい強大な魔力を纏い、息を飲んでしまうような威圧感も放っていたが、口を開けばちびっこい時と何も変わっていないようで少し安心する。セイバーに受け止められて大破したトラックを背景に、二人で顔を突き合わせたまましばし呆然としていた。

Interlude

「やっと、始まったみてえだな。いや……始まってしまったと言っ
べきか」

「貴方が望んだことでしょうか？」

「まあ、それもそうだけだな。さあて……『向こう側』の奴らも動
き出すだろうし、ここからがが正念場になるぜ、衛宮士郎」

「投げっぱなしにするのは気が引けるけど……」

「可能な限り良い条件を整えてやったんだから、いいだろうが」

「はいはい、そういうことにはしておきましょうか。そう言えば、聞
こつと思つてたことがあるんだけど？」

「ああ？聞きたいこと？」

「どうして彼らを小さい姿にしたの？」

「そりゃ小さい方がかわい……ただの、嫌がらせだ」

「可愛いから小さくしたのね。ふふっ、ここにきて貴方の可愛げを
新しく見つけられるとは思わなかった」

「……そりゃ良かったな」

第九話 開幕の狼煙。(後書き)

自由ですねえ、気ままですねえ。困りました、本当に困りました：
：このままでは原作を愛するファンの方々からカラドボルグを投げ
られてしまいかねない。

えっ？そんなことはない？

徹底的に無視されるだけ？

そうですねえ、当然ですよねえ。

自分はただ面白いと思う物語を書き、少しでも良い文章を書けるよ
うに精進するだけですからね。

頑張りましょう。

ライダーさんとアンリちゃん可愛いよ。

セイバー、変ツ身ツ！！

第十話 書くモノ。(前書き)

ちびサヴァ本編の第十話になります。

相変わらずのキャラ崩壊、性別転換なキャラ登場、さらには独自キヤラの登場、おまけに勝手気ままな展開になっています。

原作とは程遠い、独自色の強い内容になっているので、その点を踏まえて受け入れて下さる方のみ先に進むことをオススメします。

第十話 蠢くモノ。

第十話 蠢くモノ。

Interlude

天窓から降り注ぐ月光に照らされた礼拝堂。寒々しい空間に朗々と聖句が響き渡る。跪いた男が頭を垂れて祈りを捧げるのは磔刑、復活を経て『神』になった男を模して作られた石像。彼が纏うのは神父であることを示す衣装、その上等な仕立てを見れば容易く位の高さを知ることができる。敬虔な信仰者による礼拝が続く。荘厳な姿、静謐な空気、そこは『神の家』と呼ぶに相応しい場所のはずだった。

「おお、迷える哀れな子羊らを救い給え。天にまします我らの神よつてか？きひひひ、信仰を試すために信者を引っ叩かせたり、抵抗すんな犯されるがまま相手を愛しなさいつてのたまう変態サデイスティック野郎が何様だよなあ。くくつ、澄ました面して信者の女とよろしくやつてたくせによお。あんまり隠していると御自慢のイチモツが泣くぜえ？ひやははははっ！！！！」

薄暗がりから響いてきた野卑な声。無機質な空間にどろりと冒瀆的な気配が満ちた。

「……ずいぶんと禍々しい子羊がいたものだ。さて、何用かな？望めば、救いの御手は誰にでも与えられる」

「迷い出た亡者にもか？そりゃあ、寛容な話だ。男のケツに興味があるなら、喜んで捧げちまいてえくらいだ！ひっ、ひひひひっ！！しかあし、だ。カミサマ気取りの変態に掘られるよりも面白えもん

があるから別の機会に回しとくぜ。俺の目的はアンタさ、言峰綺礼」
暗がりから歩み出て　否、這いずり出してきたのは、かるうじて
人間だった頃の原型を留めている肉塊だった。ずるり、ずるりと進
むたびに腐りかけた肉が崩れ落ち、腐汁の混じった血が流れる。『
それ』が幼い子供だったものだど気付ける人間がどれだけいるだろ
うか。

「ああ、これか？ちようどいい『器』が見つからなくてよお、地下
に転がってた喰いかけのエサを一匹を借りてんぜ。いいねえ、この
痛みと絶望感！懐かしい記憶が蘇って、反吐が出るぜえ……くひひ
ほおんと、反吐塗れの汁塗れでいきり立ちまう。っと、喜びすぎ
て目的を忘れちまっちゃ意味がねえ」

「……………」
聞く者に嫌悪感しかもたらさない声音で垂れ流される言葉を受けな
がら、立ち上がった神父は己の胸に手を当てる。貼り付けた仮面の
ような無表情に、微かな熱のようなものが宿った。疑問ならば幾つ
も提示することができるだろう。どうして、名乗ってもいない自分
の名前を知っているのか、素人目に見ても死んでいるのと同然の肉
体でどうして話せるのか、普通の人間ならば相対するだけで気絶、
あるいはショック死するほどの禍々しい気配をどうしてる纏ってい
るのか。だが、そんな疑問など塵芥のように吹き飛ばすほど、神父…
…言峰綺礼と呼ばれた男は、脈動する『心臓』の熱に意識を奪われ
ていた

「へえ……やっぱり、これだけ近付きゃ共鳴もするか。当然だよな
あ……あなたの心臓、それは『特別製』だからよ。きひひっ、いい
ねえ……話が早い。言峰綺礼、お前が涎を垂らして喰いつきそうな

麻痺している。感覚が消えている。通うべき血流が阻害され、神経や筋肉が本来の働きを失いつつあるせいだろう。どうしてこうなったのか考えようにも、極度の疲労で思考を行うはずの頭はぼんやりと霞んだまま。ああ　今夜は　こんなにも

「私の話を聞き流して、ぼんやり夜空を眺めるなんて、ずいぶんと余裕があるのね……『マスター』？」

「しっ、シロウ！お願いですから、これ以上キャスターを怒らせないでください……！！」

現実逃避していた意識を引き戻す二種類の声。視線を向ければ、目の前には何段にも重ねた座布団の上で、腰に両手を当てて怒りを露わにする小さな、小さな美しき神代の大魔術師。正座をする俺の隣には、俺よりも幾分か身長が小さく、深く鮮やかに輝く金髪と翡翠色の目をした美少女……が、同じように正座の姿勢で焦っている。

「キャスター……余裕があるように見えるか……？すまん、セイバ……ちよつと、きつくなってきた……」

「シロウ！気をしっかりと持って！貴方は、このような所で挫けるような人ではないはずだ！！」

なんのことはない。昼間から巨大化、と言うのは語弊があるので……何らかの要因で強大な魔力、戦闘力を誇る『英霊としての本来の姿』に戻っているセイバーと共に、衛宮家の土蔵でキャスターの取り調べを兼ねた説教を受けている。一番長く喋っているのがキャスターというだけで、実のところはキャスター以外の名立たる英雄たちも決して短くない説教をしているのだが。

「勝手に話をしない。まったく……セイバーがとつさに発散する魔力をギリギリまで抑えて、私がありつただけの魔力隠蔽と認識効果がある礼装を使わなきゃ、他の魔術師に気付かれてたかもしれないよ？それに、貴方は普通の人間で、大怪我をすれば普通に死ぬというのに……なんの躊躇いもなく車に突っ込んでいくなんて！無茶無謀を通り越して、ただの愚か者よ……」

本来の姿に戻ったセイバーがトラックを受け止め、俺と子供を護つたあと、すぐさま思考再開したキャスターの的確な指示、セイバーの迅速な判断と移動で何とか家まで帰ってこられたのだ。キャスターいわく、最初の爆発的な魔力の発散は間違いなく感知されただろうが、その大きさと余韻のおかげで対処した後の魔力痕跡は追えなかつただろうとのこと。要するに、目視での尾行がなければ、この家を特定することは不可能に近い。とは言え、運が良かったとしか言えない状況だったと説明された。

「私も同意見です。私……いえ、私たちは今この場で力尽きたとしても『座』に戻るだけだ。しかし、シロウは違う。死ねば、そこまです。貴方は……自分の身体、自分の命をなんだと思ってるのですか！」

「セイバー、それは貴女にも言えることよ。貴女……土郎とあの幼子を護るために、現界に必要な魔力まで根こそぎ放出しようとしていたでしょう？あの場で、消えるつもりだったでしょう？」

「それは……」

あの子を助けようとしたこの身を差し出したことに後悔はない。『正義の味方』を目指す者として、自然な行動だったと思う。だが、考え

てみればひどく独善的な行動でもあった。俺が死ぬことになれば、パスを通じて現界のための魔力供給を受けているセイバーたちも消える。片方を取れば、片方が零れる。俺が追い続ける理想の矛盾、背反する命題と同じ状況だった。そして、セイバーは、己の身を犠牲にすることで俺と子供を救い、なおかつキャスターたちを残し、最小限の被害で食い止めようとした。

頭の中がぐちゃぐちゃと乱れる。セイバーたちのことを考えず、自分の身を危険に晒したこと。気付けば、切嗣から受け継いだ理想をもってキャスターの言う無茶無謀な行動を正当化しようとする自分のこと。トラックを受け止めた直後にセイバーが見せた、自らを省みずに、自分以外の誰かが無事だったことに心の底から安堵する透明すぎる笑み。キャスターが今しがた口にした『消えるつもりだったでしょう?』という言葉。

「ッ」

何をどう言つべきか浮かばず、ただ、己の不甲斐なさを噛み締めることしかできなかった。遙か遠くのほうにありながらも、確固として存在していた理想が、さらに揺らぎ始めている。認めたくはないじいさんから、切嗣から受け継いだ理想が、あんなにも綺麗で尊い理想が、揺らいでしまうなんて認めたくない。だが、『認めたくない』と思うほどに、垣間見たセイバーたちの過去や、小さなサーヴアントたちと共に過ごす中で気付いたことが、より鮮明に浮かび上がる。

「おれ、は」

「あつ……!?!?くう、うっ……」

「セイバー!?!?」

言葉も定まらないままに口を開こうとした時、苦しげなセイバーの
声が耳を打った。すぐさま隣を見ると、胸の辺りを押さえて息を荒
げる姿が目映った。ちびっこい状態から、何らかの原因で本来の
姿に戻ったことが影響しているのだろうか。対策はないかとキャス
ターを見るも、慌てているので恐らく彼女も事態を把握しきれてい
ない。焦燥感で混乱しかけたその時、ふとパスの異変に気付く。

「これは……？」

今までは無かった……いや、隠れていて気付けなかったというほう
が正しいだろうか。俺からセイバーたちへと繋がるパスの一部に妙
な場所ができていた。乗り物で言えば予備の燃料タンク、しかし形
状というか、何となく感じる性質から言うと、拳銃などの予備弾倉
のようなものがある。全部で八箇所。サーヴァント各自に繋がるパ
スにひとつ備え付けられている感じだ。そして、セイバーのものだ
けが、ほとんど空っぽになっている。

「これが、原因か」

これだけ大きな変化になぜ気付けなかったのか……と頭を抱えたく
なるが、まずは苦しむセイバーを何とかするのが先決。そのままパ
スを探ると、霊体化のために魔力供給を絞るのとは違うスイッチの
ようなものがある。俺の魔術回路のスイッチ、『撃鉄』を操作する
のと同じ感覚で切り替えてみると

「んくっ!？」

はあ……一体、なにが……えっ?」

「はっ?」

「おお……」

セイバー、キャスター、俺の順番で声を上げる。隣で苦しげな顔をしていたセイバーは、最初に召喚した時と同じ、ちんまりとした手乗りサイズに戻っていた。戻ると同時に、苦しさも消えたのかきよとんとした表情を浮かべている。さらに、セイバーへと流れていた魔力が極端に余り始め、それが予備弾倉のような場所に流れ始める。なるほど、こつという仕組みになっていたのか。

「……………縮んだあああああああ！！！！？？」

「……………」

驚愕と混乱の極みに達しているサーヴァントたちと反比例するように、どんどん落ち着きを取り戻していく。さて、これをどう説明したもののやら。

「なるほどね……って、納得できるわけないでしょう!!」

「まあ、そうカリカリすんなよキャスター。これで、セイバーに何が起こったのか分かったんだからよ。原因不明じゃなくなっただけ上等だと思っぜ？あんまり怒鳴るとシワが増え…あいだだだっ!？」

「うふふ、どうかしら？貴方はセイバーほどではないと言え、対魔力持ちだから物理攻撃力を強化できる礼装を作ってみたのよ。一時的ではあるけど、最大でAランクの筋力を発揮できるはずなんだけど」

ぎりぎりみしみしとキャスターの指がランサーの頭部に食い込む。まあ、俗に言うアイアンクローという技だ。魔術師に圧倒され、痙攣を始める槍兵というのも情けない話ではあるが……余計なことを言うところらにも火の粉が振りかかりそうなので、ランサーには悪いが黙っておこう。

「士郎さん、その『予備弾倉』ってセイバーさん以外……私たちのパスにも備わってるんですよね？」

「ああ。確認してみたけど、セイバーのが発動したことで全員分がそれぞれ使用可能になってるみたいだ。発動のための手順、条件をきちんと把握しなきゃいけないだろうけど」

「途中でセイバーが苦しみ始めたことや、また小さくなったことから考えると……決して万能というわけではなさそうだね。現界のために必要な魔力が極端に少ない今の状態で余剰した魔力、それが溜められていて、士郎の任意で発動。貯蓄量に依じて、本来の力を取り戻せるか……発動したら予備魔力を使い切るまで停止できないのか、途中で供給を止めることができるのか、再び使用できるまでどれだけの期間が必要なのか、色々考える必要もあるかな」

「そうですね……これで、士郎に危険が迫ったとしても十分な戦力として立ち回ることができるとは思いますが、戦闘行為や宝具使用に耐えられるのか疑問が残ります」

「元の姿、力を取り戻せても一分と経たずに再び弱体化してしまうようではな。生半可な力を持っている時が最も危険であるとも言っている……十分に検討を重ねておくことが肝要だろう」

アンリ、バサカ、ライダー、小次郎と突如発現したこの能力について話す。どの意見も考慮すべき事柄だろう。セイバーは見事にトラックを受け止めたが、英霊としての能力を十全に発揮しての戦闘行為、切り札である宝具の使用となれば話は別。消費される魔力も格段に増加する。最悪、敵と相対してる最中にちび状態に逆戻りということもあり得る。

「キャスターも言ってたけど、下手に発動すればあつという間に感知されて強襲を受けかねないしな。何のためにこんな能力が備わっているのかは分からないけど、みんなの言う通り慎重に考えないと」

闇が蠢く。

夜が静かに狂騒を孕む。

万能の願望機たる聖杯を巡る魔術師同士の闘争は起こらない。

『第五次聖杯戦争』は幕開けを告げることもなく終焉した。

だが、誰もが予期し得なかった幕が上がる。聖杯戦争ではない聖杯戦争。奪い合うのではなく、破壊と死守が対立する闘争。

静かに、確実に、歯車は加速していく。

「っ!!?」

学校からの帰り道、初めて感じる凄まじい魔力反応に驚愕する。距離があるにも関わらず、びりびりと身体の芯まで響くような波動。これだけ強いと魔術回路を一切持たない人間でもはつきりと異変を感じ取れるだろう。

『ギル!!ギルガメツシユ!!聞こえる!?!』

『そう喚き立てるな、ざっ……凜。聞こえている。この反応はサーヴァントだ』

『あんた今どこに居るのよ!』

『エルとケーキバイキングだ』

『なにを勝手な真似を……!!ばれたらどうすんのよ!!!』

『我がそんな失敗をするわけなかるう。我の倉よりとっておきの認識障害宝具を出して使っている。エルなど道行く雑種どもからひっそりなしに声をかけられ、褒めそやされているぞ。まったく、我を差し置いて目立つのは許せんが……まあ、悪い気はせん』

『エルったら可愛いものね……って違う!!あーもう!いいわよ!あんたたちは勝手に楽しんでなさい!!』

無駄な時間を使ってしまった。夕方とはいえ家路を急ぐ人や、夕食の買い出しをする人などが数多く行き交っている。人目を避けるのは難しいので強化魔術を使つての移動はできない。反応のあった場所はそう遠くないので、目立たない程度に走って向かう。

「……反応が……消えた……!?」

道程の半分も進まないうちに魔力反応が消える。霊体化したのか、何らかの対策をとったのだろう。しかし、こんなにも早く姿を隠すなら、どうしてあんなに凄まじい魔力の発散したのか……こうなつては追跡も不可能ではあるが、少しでも情報を集めるために現場まで向かう。

「これは……」

反応があつた場所まで到着すると、フロント部分に大きな損傷を受けたトラックが止まり、公園のベンチには小さな子供が寝かされていた。痕跡らしい痕跡はほとんど残されておらず、何があつたのか推測を立てるしかない。誰かが通報したのかパトカーや救急車が集まり、その音に足を止める野次馬の中に紛れつつ、思考を巡らせていく。

魔力の衝突はなく、あくまで種類だけの反応。そして、何も衝突物が無い場所で止まつたトラック。明らかに第三者の手でベンチに寝かされたと分かる子供。にわかには信じられないが、トラックの前に飛び出したあの子を救うために、サーヴァントの力を使ったという推測が成り立つ。

『トラックを受け止められるだけの力……本来の姿、力を持つサーヴァントを使役しているってことか……。なぜ子供を救つたのか目的がまったく掴めないけど……ひとまず、水面下で魔術師が動いているのは確定。こっちは弱体化しているサーヴァント……どう考えても不利な状況よね。他にも何人が入り込んでいるんだか……ダメね、動くにも推測するにも材料が足りなすぎる』

「綺礼に、カマをかけてみるか……」

しかし、それは後回し。まずやるべきことは……家に帰って、暢気にケーキを食べていたバカ二人の徹底的な躰だ。

「にやにやつ……なんか、ぞわぞわするっす」

「うん？風邪でも引いたか？確か、我の財の中に万病を癒す靈薬があつたはずだ……それをやるから飲むがいい」

「薬っすかー……苦いのは、あまり得意じゃないっす……」

「安心するがいい。どれほど身体に良くて、美味くないものは二流、三流だ。両方を兼ね備え、共に極上を誇らねば我が宝物に名を連ねることはできん」

「にやつ、ギルさんの言うことなら間違いないっす！」

「ふふん、当然であろう」

Interlude out

「魔術関係でとつさの判断ができる私を連れていない場合は使用しない。連れていても、本当に危険が迫った時以外は決して使用しない。有用かどうか判断できないからとにかく使用しない。使わないように。これを念頭に置いた行動すること。これが、結論。士郎、

一番の不安要素は貴方なんだからこの決定をよく心に刻んでおく」と

「よく分かりました」

すっかり乱心したキャスターが落ち着きを取り戻し、この能力をどう扱うか話し合い、一段落したので魔術鍛錬を行うためにキャスターと二人になったのがつい先ほど。他のサーヴァントたちは俺の部屋に向かい、休んでいることだろう。アーチャーがほとんど会話に入ってくることもなく、黙り込んだまま考えをしていたのは気になるが、聞いたところで答えてくれるとは到底思えないので放っておくしかない。今は、この鍛錬に集中するとしてよう。

「それじゃあ、始めましょうか。現在、士郎の魔術回路は十八本までが使用可能になっているわ。残りの九本も細かな調整が必要というだけで、多少のダメージを覚悟の上なら使用に耐えうる状況まできている」

「強化魔術もほぼ完璧に発動できるようになってるしな。実際には使っていないけど、投影魔術のイメージトレーニングも重ねているからこの前よりも精度は高まると思う。発動させてイメージとの誤差を修正していけば、さらに成功率が上がると思う」

「そうね。生成できる魔力もさらに増えているから、今夜は投影を主軸に置いて鍛錬をしましょうか」

「よし、始めるぞ。」

ふう

同調、開始」

何度も何度も繰り返してきた工程をなぞる。精神を集中させ、魔術を扱うための意識へと切り替えながら回路状態を確認していく。焦

らず、丁寧に一本ずつ回路を動かしていき、とっさの事態でも確実に起動できるよう、強く深く身体に馴染ませる。

「魔術回路、起動　　工程確認　　異常なし　　投影、開始

」

そして、本番に向かう。目を閉じ、頭の中に浮かべた『設計図』を確認しながら、より精密に作り上げる。何度も何度も繰り返し精査してきた双剣の設計図。陽剣・干将と陰剣・莫耶……歴史に名を残す名剣のひとつ、二刀一対の夫婦剣。材質、性質を再現するだけでは足りなかった。それだけでは、『完璧』には程遠い。必要なものは、もつと多く存在している。

「理念、歴史、技術の再現も成されなければ……中身のない張り子と同じ……だから、矛盾と修正の影響を受けて崩壊した。つまり、必要なのは　創作理念、構成材質、製作技術、蓄積年月の再現

」

黒白の双剣が生み出されるに至った作り手の理念、そのものを構成する材質、注ぎ込まれた技術、歴史という名の刻み込まれた年月。想像し、理解し、模倣し、余すことなく再現することで失われた存在を再び、矛盾なく『世界の理』の中へと固着させる。

「　全工程、終了　　投影、完了」

前回よりも大きな手応えを感じながら目を開ける。両手にはしっかりとした存在感を放つ双剣が握られていた。

「この前の投影でも充分すぎるほどに驚いたけど……さらに驚くことになるとはね……。完成度が桁違いになってるじゃない」

「でも、この干将莫耶だけだよ。イメージの中でランサーが持つて
る槍、バサカが使っていた斧剣も『設計図』を作ってみたけど……
この双剣ほど上手く投影できそうにない。それに……まだ、何か足
りないような気がする。気のせいかもしれないけどな」

「そつだ、今の投影を見ていてキャスターが気付いたことか無い
か？」

「士郎の投影に関しては、私にアドバイスできることはもう無いわ
ね。最初に教えた属性、相性のことで限界。ここから先は、試行錯
誤を繰り返しながら士郎だけで練り上げていくしかないでしょうね。
貴方と同じ、もしくは似た魔術を使える人間が居るとしたら……何
かしらの参考になるかもしれないけど。そんな魔術師が存在する可
能性はゼロと言っていいわね」

「そつか……よし、まだ魔力量にも余裕がある。すまないけど、も
う少し付き合ってもらえるか？」

「士郎の魔術鍛錬のために、こうして付き添っているのよ？頼む必
要はないわ、マスター」

いたずらっぽく微笑みながら、『マスター』と呼びかけてくる。恐
らくわざとだろう、艶めいた声色を使うのでぞくぞくと妙な気分にな
ってしまった。

窓際に腰かけ、ぼんやりと暗闇を見つめ続ける。開け放った窓から痛みを覚えるほどに冷たい外気が入り込み、薄いパジャマ越しに肌を粟立たせた。だが、この瞬間だけは、穢れ切ったこの身体を少しだけ許せるような気がする。全てを隠したままあの人の傍らに寄り添う罪、その贖いができるような気になる。結局は自己満足、明日も明後日も、あの人の近くに居るための言い訳をしているに過ぎない。

「ずるくて、汚い女ですよね……」

ぼつりと零した言葉は、どこに届くこともなく消えていく。今夜も兄さんは来ない。お爺様からの『鍛錬』の指示もない。私にとっての『日常』が『非日常』へと変わってから一週間になろうとしている。お爺様が熱心に私への『鍛錬』に取り組み、兄さんが執拗に凌辱を繰り返す日々。『聖杯戦争』の始まりが近付くたびに激しさを増していたのだが、ある日を境に『鍛錬』が行われなくなった。そして、私への興味を無くしたように兄さんの凌辱も回数を減らしていき、とうとう見向きもなくなった。

そして、一週間前、お爺様の口から信じられないような言葉が零れた。

『原因は不明だが、此度の聖杯戦争は起こらん。全ての用意は無駄と相成ったわけだが……まあ、良い。元々、此度の聖杯戦争に期待などしておらんかったわけじゃからな。だが、桜よ……お前自身とお前の身に刻んだマキリの魔術は無駄となったわけではない。次代を生み出すための胎盤、次の聖杯戦争を確実に取るための駒を作るためには欠かせん。次の指示があるまで待機するがよい』

解放はされずとも、心身共に殺され続けるような日々が唐突に収ま

ってしまった。それからのことは、本当のことを言うともあまり覚えていない。ただ、温かく満たされた時間を過ごしていたことだけは覚えている。帰ってくるのは、この薄暗く湿った屋敷だが、それでも間桐桜として過ごしてきたこの十年の中で最も幸福な時間だと言える。だが、幸福すぎて、あまりにも幸福すぎて、その代償として遠くない未来にこれまでの何倍もの恐怖と絶望が押し寄せてきそう
で、一人きりになると震えが止まらなくなる。

こうしている今も、寒さのせいではない震えが全身を走っている。何か嫌な予感がする。それに今日の夕方、凄まじいほどの魔力発散を感じしてから、奇妙な熱を孕んだ悪寒が止まらなくなっている。お爺様は蟲を操って情報を集めているようだが、結果は芳しくなかったらしい。もしかしたら、『鍛錬』が再開されるかもしれない。幸福を味わい、束の間ではあれ『普通』の時間に浸ってしまった今、あのおぞましい暗闇に戻ることは恐ろしい。久しく忘れていた、忘れようとしていた恐怖が、大きさを増して心身を苛む。

だが　それよりも　時が経つにつれて大きく、深く、うねるように、滲み犯すように広がっていく火照りが恐ろしい。自分が自分でなくなっていくような、暗い欲望を煽り立てる熱が恐ろしい。どくり、どくりと心臓が脈打つたびに、霞みがかかったような頭に誰かの声が響く。何を言っているのかは分からないけれど、それは、とても魅力的な話で

「　　つ、はあ……はあ、はあ……んっ、冷えすぎ……ちゃった……」

気付くと身体が芯まで冷え切っていた。鏡をみれば蒼白な顔色をしているだろう。もう一度シャワーを浴びたいところだが、夜に部屋を出るのは嫌いだ。ベッドに入れば、眠りに落ちるまでに身体は温

まるはず。ゆっくりと立ち上がる。ぬるりとした違和感を感じて下に目を向けると、腰かけていた窓の棧までべっとりと濡れてしまうほど秘芯が潤っていた。外気に触れることであっという間に冷たくなった下着とパジャマが不快感と共に肌に張りつく。

「はあ……はあ……着替え、なきや……早く、寝ないと、先輩のお家に行けなくなっちゃう……」

『 いい反応してくれんじゃねえか。いきり立ったムスコが収まんねえぜ。ひやははははっ！！今はまだ仕込みが必要だが、よろしく頼むぜえ、ママよお。ひひっ、ひいははははははははははっ！！！！』

どこか遠くて近い場所で 誰かの声と、誰かの笑い声が、聞こえた気がした。

Interlude out

第十話 蠢くモノ。 終幕

衛宮さん家のちびサーヴァント騒動 なのかめ了

第十話 書くモノ。(後書き)

一区切りとなる十話でした。

短いすね。

過去最少の文字数でした。

今後の新展開に向けてのまとめ、布石みたいな話になったなーと思っ
ています。

もっと色々と腕を磨かないといけませんね……伏線の張り方とか、
もっと読みやすい文章の書き方とか、本当に色々。

こんなんじゃ、いつまでたっても上を目指せない。

頑張ります。

今後も作者と共にゆっくりレベルアップしていく……かもしれない
ちびサヴァ、よろしくお願いします。

第十一話 迷いと敗北の中で（前書き）

衛宮さん家のちびサーヴァント騒動、本編の十一話です。

悪ふざけでも、番外でもなく、れっきとした本編です。

原作の良さも、雰囲気も、世界観も、設定も、色々なものを放り投げて自由気まま好き勝手に書かせていただいています。

Fateは原作こそ至高、それに準拠した二次創作じゃないと受け付けない方、あまりにも自由に改変された内容が好きではない方などは閲覧をお勧めしません。

読んでいる途中、『あ、無理かも』となったら即座に中止することを推奨します。

それでも構わん、よきにはからえと言ってしまえるような包容力と許容の精神に溢れる方は土下寝で感謝の気持ちを表しつつ歓迎するので……

ゆっくり読んでいってね！

あっ、いえ、読んでいってください。よろしくお願いします。

第十一話 迷いと敗北の中で

第十一話 迷いと敗北の中で

「 投影開始」

硝子の中に身を浸していると錯覚するほどに張り詰めた冷たい冬の空気。朝と夜の境界、どちらでもあってもどちらでもない曖昧さと、『境界』であるからこそ感じる事ができる独特の空気を揺らし、世界の理を歪める言霊が紡ぐ。きん、と澄んだ音を伴って両手の中に二刀一対の無骨な凶器が生み出された。長い年月を共に戦い続けてきたようにしっくりと馴染む重さ。しっかりと柄を握り締め、脳裏に浮かぶ動きの流れを確認する。

「すう はあ つ、ふっ!!」

深い呼吸のあと、一気に肺を酸素で満たして全身に力を行き渡らせた。僅かに膝を曲げることで作った溜めを利用して、前方に飛び出すための力を爆発させる。その力を余すことなく利用した仮想敵の懐に飛び込む素早い足運び、最短距離の振り抜きから放つ左右同時の薙払い。仮想敵の胴体を両断する一撃のあと、体重を移動させて即座に左方向へと転回し、後方から襲いかかってくる相手に遠心力を存分に乘せた右袈裟斬りを叩き込む。

「くっ……うわっ!？」

しかし、遠心力の加わった剣の重さに耐えられず体軸がぶれて泳いでしまう。イメージ上では完璧にトレースできていた動き 右袈裟斬りに続いて流れるように連携する左剣、莫耶の刺突を放ち損ね、

足を滑らせて転んでしまった。

「やっぱり無理、か……」

自分の身体を斬ってしまったまいよう咄嗟に手放し、地面へと突き刺さった双剣を眺めてため息を吐く。その不思議な感覚が何であるかはつきりと気付くことができたのは昨夜の魔術鍛錬だった。剣を通して流れ込んでくる自分ではない誰かの記憶、経験、情報を読み取り、理解し、会得していく感覚。それらの情報は異質なものでありながら、すんなりと馴染んでいく奇妙なものだった。

投影するたび確実に上がっていく再現精度。陰陽の双剣が辿った歴史を知り、刻み込まれた奇妙な記憶、経験へと深く沈み込んでいくたびに驚かされる。流れ込む情報……長い時間と鍛錬を経てこの双剣に熟練し、特性、長所を最大限に引き出し、短所すら巧みに利用する完成された戦闘技術。

「根拠もなく『再現できる』って思ったけど……これだけ馴染んで動けるとは思わなかった……」

最後は失敗してしまっただが、その原因は予想がつく。恐らく、この身体に決定的に不足しているもの……筋力、柔軟性、骨格の剛性、関節の可動範囲、四肢の長さ、その他細かな要素が原因だろう。あの経験や技術を最大限に発揮するために必要な身体能力が充分ではないのに、無理を通して再現しようとしたから失敗した。

「干将莫耶を作ったのは刀鍛冶。構造や材質、性質の再現に必要な情報が刻み込まれても……その物を利用した経験や技術まで読み取れるはずがない。だから、これは使い手の記憶……この剣に経験や技術が宿るほど熟練していたのは……たぶん、英霊の武装として使

っているアーチャーしかない。これは……アイツが積み上げて、練り上げて、完成させたもの……」

原因そのものはくだらないが、ランサーとの剣舞で見せたあの剣捌き。無骨で、真っ直ぐで、才能ではなく気が遠くなるほどの修練と努力の果てに辿り着いたひとつの極致。凡才を以て天賦の才を打ち破らんと磨き抜いた牙。

「うーん……でも、どうしてアーチャーの技術が俺に馴染むんだ……？俺とアイツじゃ、身体の大きさから何から全く違うつてのに。俺が使ってる投影魔術の特性……なのか？キヤスターに聞けば……って、これ以上頼るのも良くないか……」

ぼつりぼつりと独り言を零しながらも、思考の半分以上はこの『力』をいかにして自分の物とするか、その方法の模索に向けられている。投影魔術と強化魔術だけではない。英霊がその身に刻んだ戦闘技術までも自分の力として使えるかもしれないのだ。理想に向けて進んでいるかも分からない闇雲な鍛錬ではなく、着実に進んでいる実感もある。いつしか、喜びにも似た感情が湧き上がっていた。

しかし、身の内を焦がすような熱が唐突に消える。何ひとつ取り零すことなく、その手で救い、護り抜く『正義の味方』というユメ。止まることはできないと、何も考えることなく『正義の味方』を指した果てに何を得て、何を失うのか。やっと思い至った疑問を前に、強く固く誓ったはずの決意が揺らいでいる。救わなくては、護らなくてはとがむしゃらに追い続けてきたユメの形を見失いつつあるのに、新たな力を得てどこに向かおうと言うのか。

止まってしまった思考の代わりに、記憶の中から浮かんでくる幾つかの光景。誰も彼をも救い、全ての嘆きと悲しみを駆逐する。そんな理想を掲げて戦い、折れて砕けて、全てを失った男の寂しく悲しい笑み。生きていてくれて良かったと、心の底から安堵して笑った男の顔。そして、夢を通して垣間見た英雄たちが歩み、その命をもつて紡ぎ上げた凄絶な歴史。

「見失った わけじゃないだろ」

譲れない、譲りたくないと思うほどに綺麗で、尊い理想。誰もが諦めて、いずれ捨ててしまうその理想を追い続けることが……間違いだなんて思えない。到底叶うはずのない願いだということも、衛宮士郎ごときが抱えて走り続けられるような想いと理じゃないってことも、最初から分かっている。

「分かっているても、抱えると決めただ 綺麗で、尊いユメが誰にも受け継がれずに消えるなんて、我慢できなかつた」

神と呼ばれるに至った者達ですら成し得ない理想を抱き、果てのない道を進み続ける苦難。どれだけの挫折を味わったか、どれだけの悲嘆に涙を零したか、どれだけの絶望に心を引き裂かれたか。それでも、理想を抱いて走ったことで救われた人間は確かに存在する。俺が 他の誰でもない衛宮士郎自身が、そんな理想のおかげで命を繋ぐことができた一人なのだから。

「見失っちゃいない。簡単に見失うような生半可な覚悟で、切嗣の後を継いで『正義の味方』を張り通すと決めただけじゃない そつだろ、衛宮士郎」

座り込んだまま、地面に突き立ったままの干将莫耶を引き抜く。少

しずつ強さを増していく陽光を反射して輝く莫耶を逆手に握り、もう一度地面に突き刺す。对象的に陽光を吸い込み、艶のある漆黒を際立たせる干将を空に向けて構えた。

抱えた理想に矛盾も、間違いも一切無いと断言することはできない。他人から見れば、きっと『現実』から目を逸らした愚か者に見えるだろう。それでも、誰もが苦しまず幸福であるようにと願ったことに後悔はない。志半ばで朽ちていった男の言葉、語られずとも彼の瞳の中に宿っていた理想の輝きを綺麗で尊いと感じたこの思いは……彼と同じ道を歩み、最後の最後まで貫き通すと決めたこの思いは、確かなものとして今も胸に宿っている。

「進もう 『正義の味方』として 』

「この道を選んだことは、間違いじゃないはずだから 』

消えていた熱が戻ってくる。しかし、身を焦がすものではない。これまで感じていたものとは違う、灯火のような熱が身体に宿っている。ほんの少しだけ、曖昧に揺らぐ理想が固まったような気がした。

鋭い刃が空気を裂く独特の音、気配で目が覚める。その発生源の予

想はついているが、現時点におけるヤツの実力に見合わぬ鋭い気配に違和感を覚えたので確認のために中庭へと向かう。まだ薄暗い冬の早朝、一心不乱に剣を振る人影が視界に入った。

『キャスターの全面的な助力を受けているとはいえ……すでに戦闘技術、経験の憑依まで至っているのか……』

上がった体温と外気の温度差ゆえに発生する真つ白な蒸気を全身にまとわせ、二刀一対の双剣を振り続ける少年。ある程度剣の道に通じた者ならば、その動きに目を瞠っただろう。ぎこちなく、荒削りではあるものの、少年がやろうとしている動きは極限まで熟達した者だけが成し得る挙動なのだから。常人ならば天賦の才能に恵まれるか、一時も休むことなく長年に渡って鍛錬を積み上げなければ到達し得ない領域。才能もなく、積み上げた鍛錬もないが……『衛宮士郎』にはそこに踏み入ることを可能にする異能が秘められていた。

『ちつ……状況があまりにも違いすぎる……俺の記憶と知識では、もはや予測も立てられん……』

本来の投影魔術とは一線を画した異質なる投影。世界に固着する極限まで真に迫った贗作を作り上げるだけではない。その物に熟達した使い手の経験や記憶を引き出し、自己に憑依させ、完成された技術を再現する。俺とヤツの関係を考えれば、別人の経験を引き出し憑依させるよりも難易度が下がるのは当然。しかし、そこに至る速度があまりにも速い。

『聖杯戦争が始まらない奇妙な事態であるがゆえ、戦闘も起こらず、ヤツの成長具合もたかが知れていると考えていたが……』

歴史に名を連ねる数々の魔術師の中で、最高峰の実力を兼ね備えた

捧げる。俺に残された、最後の、目的。

「進もう 『正義の味方』として 』

「この道を選んだことは、間違いじゃないはずだから 』

耳に届いた小さな咳きを振り払い、掻き消えようとする憎悪の焰を必死で燃え立たせる。今さら、止まることなどできるはずがない。止めることなど、許されるはずがない。衛宮士郎を殺す。殺さなければ ならない 。

『アーチャーの奴……いつにも増して雰囲気が刺々しいというか、おかしかったよな』

『やっぱり士郎も気付いたか。まあ、あんなだけ分かりやすく殺気、敵意を発散してりゃ気付いて当然だ』

昼休みまで残り三十分ほどとなった午前中最後の授業時間。いつものようにアーチャーを除いた面々を引き連れ、学生の本分を全うしている。ランサーと交わす話の内容は今朝のアーチャーについて。

早朝の鍛錬を終え、桜との朝食を済ませたあとの時間。ここ数日は多少の皮肉は混じるものの、少しずつ会話することも増えていた。しかし、今日は一言だけの返答があればいいほう。あからさまに会話を拒み、態度を固くしていた。

『ふむ……今朝がた、主殿がこっそり寝床を抜け出して庭に向かったのは気付いていたが。その後、しばらくしてアーチャーも出て行ったことが理由にあるのだろうか』

『あー……なんか、そこら辺が理由っぽいな。別に止める理由もなかったから放っておいたが』

『アーチャーが不機嫌になるようなことはしてないけど……普通に鍛錬してただけだし』

しかし、他に思い当たる理由もない以上、俺がやっていた鍛錬を目標撃したことでアーチャーが感情を悪化させた可能性が高い。

「もしかして」

干将莫耶を投影してアーチャーの技術経験を引き出し、再現しようとしていたことが原因だろうか。しかし、それではキャスターにも話していないことをアーチャーは見ただけで看破したということになる。『弓兵』のクラスに該当する者は観察眼が飛び抜けて優れている場合があると教えられたが、それだけじゃないような……。

『ん？思い当たる節でもあんのか？』

『いや、勘違いだったみたいだ。ん……そろそろ授業も終わるみたいだし、今日も屋上で昼飯かな』

『ふあ……ん、んう……シロウ、おなかがすきました……』

『セイバーさんが起きたなら、お昼ご飯の時間確定ですねー』

『ふふっ、ここまで正確な腹時計があるなら時計を持たなくてもいいわね』

『私たちの場合、細かな時間まで知る必要がないからな。そう考えると余計な物を持たなくていいのは便利だ』

『時間が経つたびにきゆるきゆると可愛い音を立て、恥ずかしい思いをする便利さですけどね』

流れるように続くサーヴァントたちの楽しい会話。緩みそうになる頬を右手で擦りつつ、机の上に広げた教科書やノート、ペンを片付ける。気の早い生徒たちが騒ぎ始めたのを溜め息混じりに見やり、先生も授業を締めた。

『よし、それじゃ行こうか』

鞆に入れたままの弁当袋を取り出し、暖房と少年少女の体温で空気の澱んでしまった教室から廊下へと歩み出す。冷たい空気を深く吸い込みながら、購買や食堂に向かう流れに逆らって屋上へと向かった。

昼休みの開始を告げるチャイムの音に合わせ、一斉に生徒たちが動き出す。開け放たれた教室のドアから新鮮で冷たい空気が流れ込み、暖房の熱でぼんやりと曇っていた頭を覚めさせてくれる。サーヴァントが発したと思われる爆発的な魔力の高まり、何者かの手によって衝突事故から救われた幼い子供、これまで完璧に隠していたサーヴァントの存在をあのような形で周知させる行動、その直後に行われた自らの足跡を辿らせないための鮮やかすぎる隠蔽工作。

「どう考えても辻褄が合わない……狙って起こした行動ではないということ……？突発的に行動、冷静になると同時に大慌てで隠蔽しながら撤退したと考えれば……うん、こっちの方がしっくりくる」

あれだけの魔力痕跡を短時間で消し去り、追跡されないよう手を打ったのなら、相手のサーヴァントはキャスターと考えるのが妥当か。しかし、トラックの破壊痕は強引な力技といった印象が強い。マスターである魔術師の方が凄腕とも考えられるが、それなら、初めからあのような行動は起こさないはず。

「はあ……ダメね、どうにも考えがまとまらない。今日は綾子も来ないみたいだし、たまには一人で屋上に行ってみようかしら」

周囲に聞かれないよう充分に注意しながら続けていた独り言を終わらせ、昼食の入った包みを持って席を立つ。いくら寒さが厳しくない地域とはいえ、この季節に屋上を利用する物好きも居ないだろう。偶然だろうが、相手の失敗だろうが、ようやく僅かに掴めた敵の尻尾だ。推理、予想の続きもしいところだし、誰かに見られて余計な詮索をされる前に動くとしよう。

屋上へと続く扉を開けると、予想通り誰もいない。風はほとんど吹いておらず、降り注ぐ陽光の強さもあつて寒さを感じずに済みそうだ。改めて人影、気配がないことを確認し、壁に巡らされたパイプと段差をよじ登って給水パイプの裏側に落ち着く。

同じように登ってこない限りどの位置からも死角になる上、天気の良い日には絶好の日光浴ポイントになる秘密の場所。魔術師でもなく、学園のアイドルでもなく、優等生でもない、ただの遠坂凜として一息つける貴重な場所だ。とは言え、自分の領域にして最高の陣地である自宅ではない以上、必要以上に気を緩めるわけにはいかない。念には念を入れて用意し、常時発動させているとおきの魔力隠蔽礼装の調子確かめる。

「すでに相手が私の存在に気付いている可能性もあるし、気休め程度にしかないけどね……」

「さてと……心配ばかりしても仕方ないし、昼ごはん……!？」

ちび英雄女王とその相方である猫耳美少女の魔手を退けつつ用意した弁当を開け、おかずとご飯を口に入れた瞬間、聞こえてきたのは少年の声と扉の開く音だった。

Interlude out

錆と潤滑油不足のためギシギシと嫌な音を立てる重い扉を開け、屋上へと踏み出す。冷たくはあるものの、陽光に暖められて柔らかくなつた空気が肌を撫でた。

「ん、今日も天気が良くて助かったな。さすがに、校舎の中じゃ危なっかしくて昼飯どころの話じゃないし」

「そうになると、腹ぺこセイバーは晩飯まで耐えなきゃいけねえもんな」

「ふふっ、昼飯まで待つのは辛そうですね。本当、どうなることやら」

「キャスター……ランサー……この昼食、あなたたちの分は残らないと思いなさい」

「……食べるのか」

「食べるんですね」

「食べちゃうんですねー。セイバーさんらしいですー」

「多く食べられるし、仕返しにもなるし一石二鳥ってわけだね」

現界させたサーヴァントたちをいつものようにポケットの中や肩や頭の上に従え、日当たりが良く風当たりの少ない定位置に座る。微笑ましい会話を聞きながら用意した弁当を広げ、アーチャーを除いた七人分の小さな箸を手渡す。さすがに茶碗や湯飲みまでは持つてこれないので、弁当箱からそれぞれ好きなものをつつく形になっている。

「それじゃ食べようか」

「……………いただきます……………」

『ぬあつ！？セイバー！てめえ、さっきの言葉は本気だったのかよ！！』

『おかしなことを言いますね。ランサー、私が言葉を紡ぐ時はいつでもだって本気だ』

『私のクリームコロッケ……』

『ほら、キャスター。私の分が残ってるから半分にしよう』

『キャスターさん！このえびふりゃーおいひいでふよー』

『アンリ、食べながら話すのが行儀が悪いぞ。むっ、士郎……そこ
のういんなーを取ってくれ』

『士郎……ハンバーグを食べたいのですが、大きすぎて口に入りき
らないです。細かくしてくれると助かります。それと、あーん』

某騎乗兵さんの可愛らしいおねだりで多大な精神的ダメージを負いつつ、賑やかな昼食を終えた。夕飯のメニューを話し合ったり、他愛のない会話をしたり、霊体化して校内を見回った時の話を聞いた
りしているとあつという間に昼休みも終わる。授業開始五分前を告
げる予鈴が鳴り、たくさんの生徒がそれぞれの教室へと戻っていく
音が聞こえてきた。

「そろそろ戻るか。次の授業は藤ねえだし、遅れると大変なことに

なるからさ」

「なかなか、ぶっ飛んだ姉ちゃんだもんな」

今までに何度か藤ねえ御乱心の現場を見ているランサーが笑う。とは言え、天真爛漫に見えて他人への気遣いや、思慮の深さ、優しさなんかを兼ね備えているから教師が務まっているんだと思う。いや、そんな藤ねえだからこそ、天職である教師に落ち着いたと言っべきか。

「よし、みんな戻るぞー」

綺麗に空っぽになった弁当箱を包みなおし、パスを調整して霊体化させた。数日前までは工程を確認しながら行っていた作業も一息で済ませられるようになっていた。本体への供給を絞ったことで余裕ができた魔力は『予備弾倉』の方へ回す。時間のあるときに解析を続けたところ、やはり『タンク』ではなく銃器の弾倉に近い性質を持っていた。

ただ魔力を溜め込んでいるのではなく、魔力を高濃度に凝縮したものが幾つも小分けになって保存されていると言えはいいだろうか。保存された凝縮魔力の弾丸を炸裂させることで一気に大量の魔力が流れ込み、ある程度の時間サーヴァント本来の性能を復活させる。

一人の人間が複数のサーヴァントを従え、なおかつ、必要な時にその強大な力を振るわせる。そんな反則技というのも生温い仕組みが衛宮士郎の身体に備わっているらしい。キャスターいわく、発想自体はそれほど突飛なものではないが、どれほどの時間と最高の技術、叡智を結集したとしてもおおよそ実現は望めない機構であるとのこと。

『常軌を逸した投影の件が落ち着いたと思ったら、こんなとんでもないものが出てくるとは思わなかったわね……いよいよ、貴方には常に警戒心を持ってもらわないと。骨の欠片、血の一滴に至るまで腑分けされて、永久に研究材料として弄くり回されたくはないですよっ？』

にっこりと優しい笑みを浮かべ、背筋の凍るようなことを言い放ったキャスターを思い出す。怒らせると怖いのは簡単に想像できるが、サーヴァント女性陣の中でもキャスターがダントツで恐ろしい気がする。

『士郎？何か、とても失礼なことを考えていないかしら』

『いや、そんなことはないぞ、気のせいじゃないか？』

これ以上考え事をしていては余計な墓穴を掘りかねない。授業開始も目前に迫っているので嫌な汗と圧迫感に苛まれながら足早に屋上を後にした。

Interlude

真っ白になって止まったままの思考回路。驚きすぎて声は出ないし、いや、こちらの存在を知られてはともとても困ったことになるというか、声が出なくて良かったというか。どうして彼がマスターになっっているのか分からない上に、というか魔術師だったの！？とそこから驚きたくなるわけで。他のマスターのサーヴァントもちびっこくなくなっている可能性は考慮していたものの七人も同時に従えているなんて予想を遥かに超えたなんて甘いもんじゃなくもう訳が分からない。しかもみんな仲良くお昼ご飯を食べている上、夕飯の献立

を起こした人物が分かった。

近くで眠り込んでいた子供、大破したトラック、公園近くの道路、それぞれは鮮やかな手並みなのに食い違う行動、魔術師らしからぬ行動。

人助けとなれば老若男女、場所、その規模の大きさを問わずに首を突っ込んでまわる穂群原のブラウニー。お人好しの域を超え、変人と囁かれることもある少年。

衛宮士郎。

信じたくはないが、事実を知ったというのに、まだ信じることができないうが……衛宮士郎は、サーヴァントを従えた魔術師であり、聖杯を巡って殺し合わなければならない、戦争の参加者。この手で殺さなければならぬ、恐らくは最初の相手になる。

「少なくとも、向こうはサーヴァントに本来の力を取り戻させる術を持つてる。対して、こっちは弱体化したままのギルガメッシュと戦闘力皆無の猫娘……そもそも、サーヴァントの数からして絶望的な戦力差……。隙があるとしたら、マスターである衛宮士郎自身か……。サーヴァントを出させずに、速攻でケリをつける必要があるわね」

ならば、可能な限り早く仕掛けるべきだろう。つい先ほどまでの会話を聞くに、襲撃の可能性はまったく考えていないと見て間違いない。魔術師が動くのは基本的に人目がない夜間なので、何らかの対策を講じているとしても夕方までは隙がある。

「用心しておいて正解だったわね」

制服の下、両腕や両足、胴体に取り付けておいた革のベルト。整然と並んだ小さなポケットの中には魔力を封入した宝石が入っている。宝石に魔力を宿し、様々な属性の魔術を瞬時に発動させて臨機応変の戦いを展開する遠坂に伝わる魔術、その魔術礼装。

「サーヴァント持ちを一人で倒すってことを考えたら心細いけど……迷って好機を逃すわけにもいかないし」

これで、表の世界と裏の世界を歩き来しながら過ごしてきた遠坂凜の日常は終わるだろう。とっくの昔に覚悟を決めてはいたが、どこか緩んだ甘い部分があった今までと決別する。これは戦争で、命を奪い奪われる殺し合いの場。素人も玄人も、心得のあるなしも関係ない。隙を見せた以上、容赦なく潰すだけだ。

「仕掛けるのは放課後ね。さて、弱体化してるんでしようけどあれだけのサーヴァントを従えている以上、恐らくはキャスタークラスに該当する奴もいるだろうから慎重に準備しないと……。無遅刻無欠席の優等生初めてのサボりの理由がこれとは、ね……」

自嘲しながら攻撃を仕掛けるタイミングを整理する。小さなサーヴァントたちと衛宮士郎の会話に、『放課後に生徒会長直々の頼みで雑用しなくてはならない』といった内容があった。この後には夕飯の時間が遅くなる、お腹が減って耐えられるか分からないといったしょーもない会話が続けていたが、有益な情報だ。

それはつまり、他の生徒たちが居なくなる時間まで衛宮士郎は学校に残り、私は人払いや隠蔽のために用意する術式の数が必要最低限で済む上、攻撃を有利に運ぶための用意をする時間が増えるということ。

「考えもまとまったし、さっさと動きますか」

Interlude out

授業が全て終わり、放課後になってから二時間ほど。少しずつ黒みを帯びてきた夕焼けに染まり、どこか不気味な印象を与える人気の無くなった廊下を工具箱片手に歩く。

『すっかり遅くなっちゃったな』

『本当だね。セイバーは空腹に耐え切れなくなって寝ちゃうし。私も待ちくたびれたよ』

『俺もバサカと同意見だ……。たく、士郎もお人好しだよなあ。友人の頼みとは言え、こんな仕事を引き受けるとはよ』

『現代の知識は基本的なものしか与えられていませんが、本来であれば専門の知識を持った者に依頼する類いの仕事ですよね？』

『ああ、まあ、ライダーの言ってることは間違いじゃないな。だけど、生徒会の予算も限られてるし、機械の修理とかなら昔からやってるし、俺にできる範囲のことなら力を貸してやらないと』

『何はともあれお仕事も無事に終わったことですから、お家に帰ってごはんにしましょー。士郎さんも頑張ったし、あとはゆっくり休むだけです』

まだ残っている生徒が居るかもしれないし、教師も何人が残っていると思われるのでいつものように念話。アンリの言うように無事に頼まれた仕事は終わらせたが、さすがに遅くなりすぎた。これから家に帰って食事の準備をし、夕食と入浴を済ませたらもう寝る時間だろう。今日ばかりは鍛錬に使う時間も少なくなってしまうそうだ。

廊下の突き当たりまで進み、階段を下りるため角を曲がった瞬間。

「こんばんは、衛宮士郎くん」

澄み切った鈴の音を思わせるような、よく通る少女の声が聞こえた。名前を呼ばれた方向へと目を向け、声の主を確かめる。四階へと続く階段の踊り場、燃え落ちる寸前の鮮烈な紅陽を背負い、その名前と同じように凜とした立ち姿を見せる少女がいた。

「こうして言葉を交わすのはこれが初めてかしら？」

にこり、と可憐な微笑みを浮かべながら問いかける。常ならば、日常を過ごす昼間の校舎でなら、今の状況を不思議に思うことはなかっただろう。学園のアイドル、誰もが憧れる遠坂凜に話しかけられたと舞い上がっていてもおかしくはない。

だが、

なぜ、

今、この場所に彼女がいる？

「……………ああ、たぶん、初めてだと思っ」

笑顔も、立ち振る舞いも、全てにおいて完璧。優雅で美しい。だというのに、こんなにも、強い違和感を覚える。ピリピリと全身の毛が総立つような気配、内臓を絞り上げられるような圧迫。

『士郎……用心しろ。こりや殺気だ。あの娘、何かやらかすつもりだぞ。ちっ……緩みすぎてたな……ここまで気付かねえとは……おい、キャスター』

『分かってるわよ……浮かれてた自分のバカさ加減に腹を立てるのは後ね。士郎、彼女が魔術師だというのは前に伝えたわね？恐らくセイバーの一件から尻尾を掴んで、士郎がマスターであることまで辿り着いたのよ』

『早々に潰しにきた、というわけだ。我が主、私を』

『シロウー！向こうはまだ動いていません。早く私を現界させてください』

「初めての会話でこんなことを言うのはとても心苦しいんだけど……ねえ、衛宮くん。貴方には、」

セイバーやバサカの声が聞こえてくる。ランサーとキャスターの焦燥感に満ちた声も聞こえる。ライダー、アンリ、小次郎も俺を護るため、何かを言ってくれている。だというのに、俺の頭と心は、遠坂凜の圧倒的な存在感と凄絶な優美さに、一分の隙もなく囚われて

「死んでもらうわ」

「シロウツ！！！！」

「なっ！？この　！！」

絡みつくように精神と身体を縛っていた無形の力、それを粉々に打ち砕いたのはセイバーの一喝。ビリビリと肌が痺れるような声を叩きつけられた瞬間、全身に活力が戻った。考えるよりも前に脚が動く。倒れ込むように身を翻し、背後の曲がり角に飛び込む。遠坂の苛立った声が聞こえた瞬間、嫌な気配が膨れ上がり、弾けた。

「うわっ！！？」

黒い影のカタマリ。そうとしか呼べないモノが凄まじい勢いで飛来、身を隠した曲がり角や床、壁を削り取って砕いていた。

『ガンド！？くっ、士郎！強化魔術！それと投影！！魔術師の基本戦術は遠距離戦！とにかく間合いを詰めなさい！！』

間髪入れずにキャスターの声。他のみんなは黙ったまま。これだけ切迫した状況の中、自分たちを出すために隙を作らせるわけにはいかない。必死に焦燥感を抑えつけているんだろう。殺されるわけにはいかない。誰も救えず、護れないまま……理想を果たせないまま、死ぬわけにはいかない。

「同調、開始」

がきり、がきり、と撃鉄を上げていく。十八の魔術回路全てを起動。全身に向けて開いた『路』を通って魔力が疾走する。筋肉、骨、腱、神経の隅々に至るまで僅かな隙間もなく魔力を浸透させ、その強度、可動範囲、反応速度、あらゆるスペックを跳ね上げる。

「工程完了、強化成功　次工程、　投影、開始」

強化と投影、初めての同時発動。負荷の大きさを回路が軋む。突き刺すような頭痛が襲ってくる。だが、耐えられないほどではない。引き出す設計図は現状において最も完成度が高く、実戦に耐えうる唯一の武装。二刀一対の夫婦剣。

なぞり、再現する。創造に至った理念、構成に必要な材質、製作に注がれた技術、消滅の瞬間まで蓄積された年月。物自体が失われてしまったとしても、その情報があるならば複製は可能。あとはどこまで真作の在り方、姿形に近付けられるか。再現する自分自身を信じられるか。

「投影、完了」

まだ、誰も救えていない。

まだ、誰も護れていない。

漠然と追いかけてきた理想に、確かな形を見出さなければいけないとようやく気付けたばかり。

そうだ　今まで見ようとしてもしなかった大切なことを気付かせてくれた小さな英雄たち。衛宮士郎が死ねば、彼ら彼女らも消える。何も成すことなく、俺の無様と共に消える。力を貸してくれたことも、身を呈して護ろうとしてくれたことも、それぞれが抱える後悔や苦しみをほんの少しだけ理解したことも、温かな日常を過ごしたことも、無に還る。

「そんなこと、させるわけにはいかないだろ」

ならば、分不相応かもしれないが 衛宮士郎が初めて、この手で
護るものは

「こんな俺に剣を預け、力を貸してくれたみんなだ」

蒼白い火花と共に両手の中へと顕現した双剣。左手に陽剣干将、右手に陰剣莫耶、流れ込んでくる戦闘技術の経験、記憶をこちらから積極的に取り込んでいく。異質な情報は棘となって脳のあちこちを突き刺してくるが、そんな痛みも笑みを含んだサーヴァントたちの声で気にならなくなる。

『窮地で何を考えてるかと思えば…… ったく、とんでもねえマスターだよ』

『英傑を護るとは、いやはや、さすが主殿というか』

『考えてみれば、護るなんて言われるのは生前、死後合わせても初めてかな。本当、とんでもないよ我が主』

『士郎さん！ かつこいいですー！！』

『……………士郎』

『ふふっ、本当にもう、困ったマスターの下に召喚されたものだわ。おまけに、神々がござって自分の物にしようとした女神を見事に落としたみたいだし』

『きゃ、きゃすたー！？ 私は別にそんな……………その……………』

『何を悠長なこと言ってるんですか！シロウ！早く私に例の魔力供給を！相手がサーヴァントを現界させるよりも速く斬り伏せて』

『セイバー、我らが主　衛宮士郎の初陣だよ。慌てず騒がず、見守るうじゃないか』

『バサカの言う通りだぜ。男の初陣を静かに見送り、帰りを信じて待つのがイイ女ってもんさ。つーわけだ、士郎。きつちり、あの跳ねっ返りの嬢ちゃんを大人しくさせてこい』

『……………っ！……………シロウ、負けは許しませんからね。ご武運を』

『あのっ！士郎さん！私たちを護ってくれるのは嬉しいですけど……………その、士郎さん自身も、ちゃんと護ってあげてくださいね！』

こんなにも、こんなにも、言葉が想いが力になるものなのか。きつと、これが、誰かを護るといふことの正しいカタチなのだろう。互いを信じて、頼り合う。

「へえ……………逃げもせず、小さなお友達も出さなかったんだ」

「ああ、逃げる必要もないし、あいつらに信頼してもらってるからな」

階段へと続く曲がり角からゆっくり姿を現し、余裕たっぷりといった様子で言葉を紡ぐ遠坂。

「その剣……どこから出したのか知らないけど、これで確定ね。衛宮くん、貴方は、魔術師であり、サーヴァントを従えたマスター」

「そう言う遠坂もだろ？それよりも……出さないのか？お前のサーヴァント」

「衛宮くんのことだから、私がサーヴァントを出さなければ、貴方も出さない……いえ、性格上出せないでしょう？現に、今だってこうして貴方だけが私と対峙しているわけだし」

くすりと小さく笑みを零し、遠坂が左腕を上げる。指先は拳銃を形取り、その照準は俺の額。

「Bewegen s a l v e ! w i e d e r h o l e n ! !」

遠坂がドイツ語らしき言葉で何かを叫んだ瞬間、袖をまくって露わにしていた白く細い左腕に幾何学模様が浮かび上がる。ひと呼吸も置かず、銃口にあたる人差し指の先から放たれる無数の弾丸。強化した視力をもつてしてもギリギリ視認できるかといった速度で飛来する弾丸を双剣で打ち落とす。

「っ！！」

直撃コースの黒い弾丸だけを見分け、叩き落としていく。だが、どれだけの魔力を込めて撃っているのか一発受け止めるたびに着弾の衝撃で腕が痺れる。このままでは遠からず両腕が使い物にならなくなるかと判断、角度を逸らして弾くスタイルに切り替える。

「くっ、っっ、このっ！！」

連射が速すぎるため弾く角度が甘くなり、頬や首元、身体や腕を掠つていく弾丸が多くなっていく。その時、絶え間なく続いてきた掃射に間が生まれる。魔力切れか、別の戦法に切り替えるつもりなのか、いずれにせよ好機には違いない。

弾いた黒弾が突き刺さったことで壁や天井が砕け、散った粉塵のおかげで視界も悪い。強化した視力はしつかり遠坂の影を捉えている。一気に距離を詰めて組み伏せれば

「えっ？」

塵煙を抜けた先にあつたのは、床から生えた簡易な人形……らしき何か。遠坂の纏っていた赤いコートがそれに着せられ、安易な陽動に引つかかった俺を嘲笑うかのように

「がっ!？」

横腹に突き刺さる衝撃。強化したはずの腹筋、肋骨がぎしりと悲鳴を上げ、衝撃そのものが一切弱まることなく内臓に打ち込まれる。成す術もなく吹き飛ばされ、受身を取ることもできず、二階へと続く階段の踊り場に叩きつけられた。

「うつ……っ、くっ……げ、あ……」

痛みと吐き気で視界が明滅する。呼吸をしたくても、打撃を受けた肺が正常な機能を失っている。早くしないと、早く立ち上がらないと、このまま殺される……。

「少しでも話せるなら、さっさと答えてちょうだい。どうして、サヴァントを出さないの？」

気付けば、すぐかたわらに立ったまま、遠坂が質問をぶつけていた。止めを刺そうと思えばすぐにできるのに、それを先延ばしにするかのような質問。

「どう……して、そんな、こと……」

「答えて」

「聖杯、戦争は……始まらなかった……だから、戦う必要なんて……ないだろ」

「あいつらは、ずっと、戦ってきた……死ぬまで、ずっと。死んでからも……ずっと……そんなの、哀しすぎるから、これ以上、戦わずに済むようにしたい。そう、思っただけだ」

痛みが引いていく。呼吸が正常なリズムを取り戻し、動くための力が行き渡る。何とか身体を起こし、片膝をつき、右腕を遠坂へと伸ばし、握り締めたままの莫耶の切っ先を向けた。

先ほどの攻防で嫌というほど思い知らされた。遠坂と俺じゃ実力に差がありすぎる。サーヴァントの力を借りなくては勝機など見えやしない。黙したままのセイバー達は俺が戦う前からそれを分かっていたはず。それでも、こうして俺に命を預けたまま、信頼してくれている。

「そんなの、貴方の身勝手な同情じゃない。薄汚い自己満足に浸るため、自分の命ばかりか、貴方に命運を託したサーヴァントまで犠牲にするつもりなの？」

「犠牲になんか、しない。あいつらも、俺自身も、護ってみせる。遠坂、今の俺じゃお前には勝てないけど……この命だけは、やるわけにはいかない」

自分でもおかしなことを言ってるのは分かってる。それでも、俺の後ろで見守ってくれている英雄達に、諦めて観念する姿だけは見せたくなかった。

「……………ぶっ、あはは」

「へっ？」

逸らすことなく、冷め切った遠坂の瞳を見つめっていると……唐突に温もりが戻り、楽しげな笑みが浮かんでいた。

「変人って聞いてたけど……衛宮くんってば、本当に変な人なのね」

「やーめた。変な奴だけど、悪いことするようには思えないし、見逃してあげる。思いつきり殴っちゃって悪かったわ。はい、これあげる」

そう言っつて鮮やかに輝く紫水晶とアクアマリンを手渡してくる。大量、とまではいかなくとも決して少なくない量の魔力が凝縮封入されているようだ。

「怪我をさせたお詫びよ。あれだけの手応えだから、何本か肋骨が折れてるだろうし、内臓もかなりダメージを負ってると思う。それには回復の術式が組み込んであるわ。すぐに激しい運動はできないけど、普通に歩けるくらいまでは治癒できる。怪我をした部位に当てるだけで効果があるから。じゃあね、衛宮くん」

流れるように手渡した宝石の説明をし、振り返ることなく歩み去ってしまふ遠坂。後に残されたのは呆然と座り込んだままの俺だけ。

『英雄ばかりか、とんでもなくイイ女になりそうなのまで落とすちまったみてえだな。どう思うよ小次郎』

『まあ、何も言うまい。命のやり取りから芽生える色恋もあるだろうよ』

『何を暢気な……普通に殺されてもおかしくなかった状況だけどね。我が主、怪我は大丈夫？』

『見逃してもらっただけ運が良かったわ……まったくもう……。それにしても、現代の魔術師は接近格闘戦までこなすのね……。あっ、それと士郎。干将莫耶を投影してからやってたとんでもないレベルの剣技、あれがどういふことなのか説明してもらいますからね』

『しっ、ししししし士郎さん！！大丈夫ですかー！！』

『次に会うことがあったらサクリ串刺しにしてやりましょう……。石化させて粉々にしても……。ああ、でも、この姿では復讐もできない……』

『ライダー、怖いと言わないでください。はあ……。怒鳴りつけたところですが……。シロウの命が助かって気が抜けてしまった』

「は、ははは……。気が抜けたのは俺も同じだ……。ちょっと、立てるようになるまで時間がかかるかも」

回復したらしたでキャスターによる厳しい追及が待っているだろうし、パスを通じて異変を察知したらしいアーチャーからも説明を求められるだろうし、夕飯どころじゃないだろう。それに、普段あまり接点がないとは言え、明日からどんな顔をして遠坂と会えばいいのやら。

「ちょっと……気が重くなるな……」

第十一話 迷いと敗北の中で 終幕

衛宮さん家のちびサーヴァント騒動 ようかめ 了

第十一話 迷いと敗北の中で（後書き）

長かった。

とても長かった。

前回の更新から五ヶ月ですよ奥さん。

あの作者死んじやったんじゃない？とか飽きて書くの辞めたんじゃない？とか続けてもしょうがない駄作だものねwwとか囁かれて当然の期間ですよ。

作者自身、どんな話だったか忘れかけてたもの。

再開するって決めて自分で読み直したら、あーばばばばって恥ずかしくなったもの。

また、いつになるか分からない完結に向けて歩き始めることにしました。

文章力、表現力、語彙、センス、そして何よりも速さが足りない残念な作者ではありますが……ひーこら半泣きになりながら腕を磨いていくのでまたの応援、指摘、感想などよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1139o/>

衛宮さん家のちびサーヴァント騒動

2011年9月8日12時24分発行